

コレクティブハウジング
の
実現に合せて

第２期の活動記録
（1996.春～1997.春）

コレクティブハウジング事業推進応援団

１９９７年３月

コレクティブハウジング事業推進応援団

世話人代表

団長：石東直子
／石東・都市環境研究室

小林　郁雄／㈱コー・プラン

上田　耕蔵／神戸協同病院

森栗　茂一／大阪外国語大学

天川　佳美／㈱コー・プラン

吉川健一郎／㈱コー・プラン

中水流ゆき／こうべすまい・まちづくり人材センター

報告書作成：中水流　ゆき

目　　次

・はじめに代えて
「コレクティブハウジング事業推進応援団の活動」　　石東　直子

1．定期公開ミーティングの記録 …… 1
・第１回～第７回の議事録等 …… 2
・第１回～第７回ミーティングの関連資料 …… 44

2．「被災地にコレクティブハウジングを！」 …… 64
「きんもくせい（阪神淡路大震災市民まちづくり支援ネットワーク発行）」掲載記事

3．仮設住宅への出前説明会のための冊子 …… 82
「コレクティブ・シルバーハイツ・グループ募集の手引き」

4．資料編 …… 93
（１）新聞記事の切り抜き …… 94
・コレクティブハウジングの情報のＰＲ
・事業化決定の記事
・第３次一元募集前後の記事
・コレクティブハウジング事業推進応援団の出前説明会等の記事
・コレクティブハウジング入居予定者等の関連記事
・その他の関連記事
（２）県への提言 …… 133
（３）その他 …… 136
・第３次一元募集要綱のコレクティブハウジングの説明等

・結びに代えて
「被災地のコレクティブハウジングのイメージ」　　上田　耕蔵

・コレクティブハウジング事業推進応援団定期ミーティング出席者リスト

・はじめに代えて

「コレクティブハウジング事業推進応援団の活動」

石東　直子

震災後１週間程してから仮設住宅の申し込みが始まった時、わたしは西宮市役所で申し込み用紙の配布を手伝っていました。その時、問われた人にはその書き方の説明をしていました。用紙を取りに来られる人の多くが、背丈が小さくなった、日本の典型的なおじいさん、おばあさんで、申し込み用紙の入居者欄に書かれた名前は、一人や二人でした。その中の一人のおばあさんが「わたしら仮設に当たっても、こおおてよう住まんわ」と、震災の恐怖がまだ抜けず、おびえた様子でつぶやかれました。その姿や声がわたしの脳裏に焼き付いてしまいました。「何とかせなあかん」、「この人たちは誰が支えていくんやろか」と、わたしの母の姿とダブッて強く思いました。これが、わたしをコレクティブハウジングの推進に駆り立てた原点です。

その後、地域を離れて移り住んだ仮設住宅の生活の中で孤独に死んでいくお年寄りや、生きる気力を失ってせっかく生きながらえた貴重な命なのに自ら断ち切ってしまう人が出始めました。今、1997年５月で、「孤独死」と呼ばれる悲劇がもう150名を超えてしまいました。今後、多くの人が仮設住宅から復興公営住宅に移り住むことになりますが、鉄筋コンクリートの復興公営住宅は仮設住宅よりも、もっともっと密閉性が強く、鉄の扉ひとつ閉めると、外部とは全く孤立化してしまいます。ということは今仮設住宅で続出している悲劇が、今後も永遠に続くということになるでしょう。 同じ悲劇を繰り返ないように、安全で安心して住めるような住宅の供給がどうしても必要です。そこで思い出したのが、コレクティブハウジングです。震災の２、３年前に友人の小谷部育子さん（日本女子大教授）にスエーデンのコレクティブハウジングのスライドを見せてもらったことがあり、「そうや、コレクティブハウジングがあるやんか！」と、結び付いたのです。小林郁雄さんに相談して、コレクティブハウジング事業推進応援団をつくることにし、わたしは８月の終わりに、小谷部さんに紹介してもらってスエーデンのコレクティブハウジングを訪ねました。コレクティブハウジング事業推進応援団は９月に第一回公開ミーティングを持ちました。　その後ひと月に一回のミーティングを続け、都市プランナーや建築家、医療や福祉関係者の他に、コレクティブハウジングに関心をもつ多分野の人達が参画し、「コレクティブハウジングとはどんなもん？」ということから、「日本にコレクティブハウジングは成立するのか」、「どうしたらコレクティブハウスを自分たちで建てられるのか」等々、百家争鳴のミーティングを続けました。その記録は、「コレクティブハウジングの実現に向けて」という冊子にまとめ1996年３月に発行しました。これも阪神・淡路ルネサンス基金（ＨＡＲ基金）の活動助成を受けました。

話は少し前後しますが、一般仮設住宅とは少し遅れて建設された地域型仮設住宅がありますが、そこではまさにミニコレクティブハウジングのような生活が展開され始めました。とくに芦屋市呉川町のケア付高齢者・障害者向け地域型仮設住宅を訪ねて、そこでの入居者の生き生きした顔に出会い、日々の生活の相互扶助の話を聞き、これは絶対いけると確

信するに至りました。

そのような様子も含めて、わたしは『きんもくせい（阪神大震災復興市民まちづくり支援ニュース）』に「被災地にコレクティブハウジングを！」と連載をはじめました。これもコレクティブハウジング事業推進応援団の普及活動のひとつですが、『きんもくせい』の終刊までに１２編も書いてしまいました。（64頁～81頁に、転載しています）

一方、神戸市職員の鈴木三郎さん（当時は住宅局住環境整備課長）も復興公営住宅に地域型仮設住宅を発展したようなものが必要だと考えられておられたようです。そこで震災の年の秋に神戸市の中にコレクティブハウジング研究会が設けられ、小林さんとわたしも参画しました。神戸市住宅供給公社、建設省、兵庫県からも参画がありました。

震災一年が過ぎて、復興公営住宅にコレクティブハウジングの事業化が決定され、今、兵庫県営片山ふれあい住宅は1997年の８月から入居が始まります。来年の１月には神戸市営真野ふれあい住宅の入居が始まり、春からは県営の６団地の入居が続きます。事の急展開に少し焦りながら、事業の展開に則して、順次新たな支援活動を続けてきていますが、その活動は大きく分けると、初期活動と復興公営住宅事業化決定後の活動に分けることができます。初期活動としては、情報提供・ＰＲ活動（定期的な公開ミーティング）、復興住宅の事業化に向けての資料提供と計画策定への参画、仮設住宅の住環境改善等です。事業化決定後の活動は、情報活動、仮設住宅を巡っての募集前の出前説明会、入居予定者のための入居前協同居住の学習等のワークショップの企画・運営等です。以下に応援団の活動展開図を示しています。

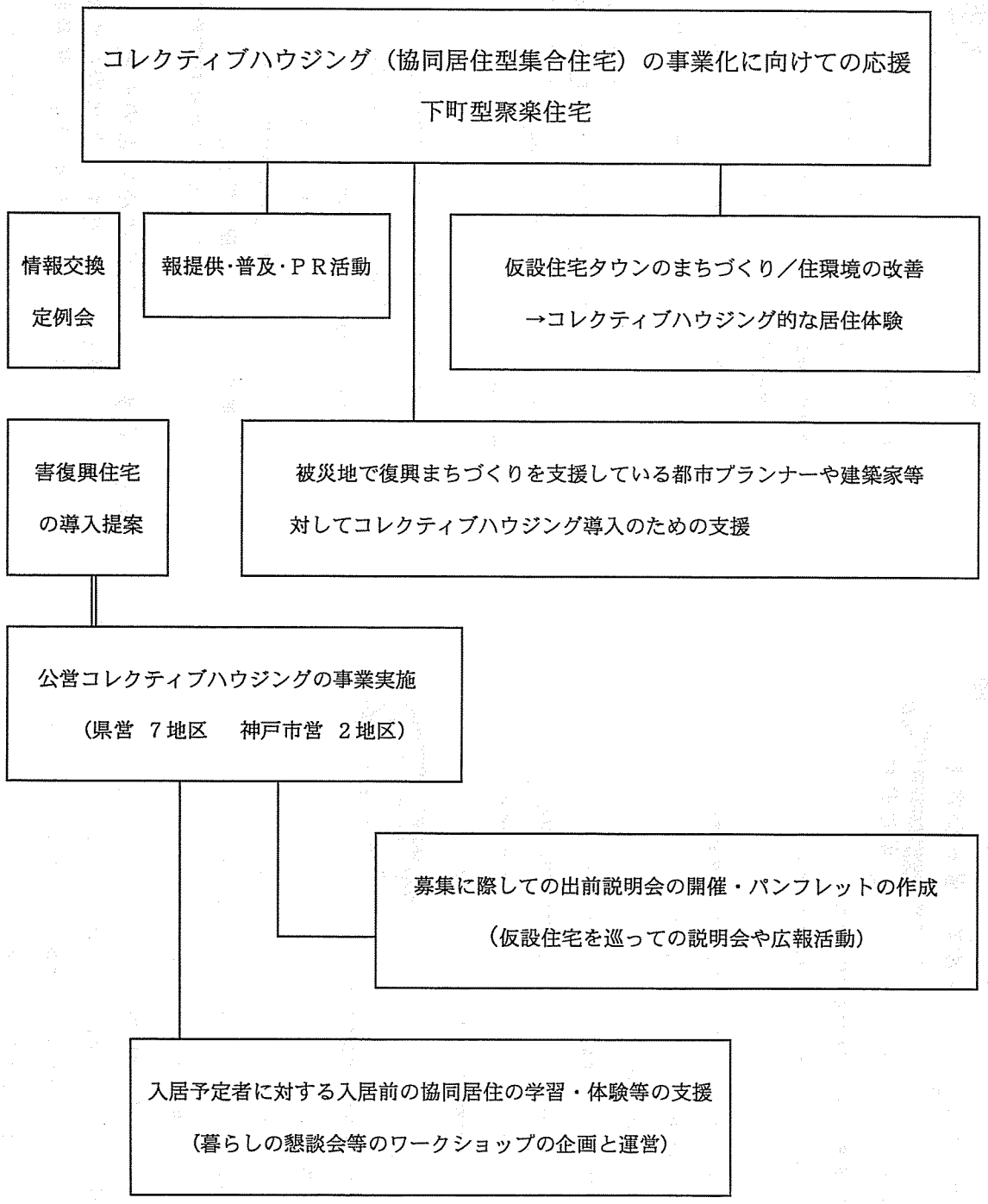
以上のようなわたしたちの活動は、はっきりした見通しがあってここまできたのではなくて、「とにかく、せなあかん！」と思って、走りながら考えて、考えを仲間としゃべりながら筋道を開けてきました。もっとええ方法があったのにとの後悔もしませんが、反省の機会も少ないです。ただ同じ方向を向いている仲間たちと一緒に走っているので、何かあったら支え合えるだろうという強さだけあります。まさに同じライフスタイルを指向する人達のふれあう心からなるコレクティブハウジングのスタイルと同じです。

当冊子「コレクティブハウジングの実現に向けてNO.２」は、上述のコレクティブハウジング事業推進応援団の活動のうち事業化決定後の活動を記録したものですが冊子の発行が遅れたためその後の関連記事等も合わせて集録しています。

なお、応援団のこのような活動に対して阪神・淡路ルネッサンス・ファンド（ＨＡＬ基金）の助成をいただいたことをうれしく思います。ありがとうございました。

1998年初

コレクティブハウジング事業推進応援団の活動展開図



一緒に住もう（コレクティブハウジング）って
こんな住宅、住まい方！！

共に住む

＂コレクティブハウジング＂　とは

＜いつでも誰かに会えるし、いつでもひとりになれる＞

＜ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう＞

という暮らし方の

《 協同居住型集合住宅、下町の長屋暮らしのような集合住宅 》 です。

住宅はほんのちょっぴりコンパクトになりますが、

それぞれが独立した住宅が集まり、

自分の住宅の延長として、協同スペースが組み込まれた集合住宅で、

協同スペースを核に、住人の自主的な、自由な協同活動が展開されます。

《 今までのアパートやマンションではありません。自分の住宅の延長として、
協同の台所・食堂、協同の居間・談話室、多目的室などがあります 》

共に生きる

協同生活のイメージ は……

《 住人が、日常的に、ふれあって住む暮らし》

《 自分の住宅に、閉じこもってしまうのはさびしい…》

《 おいしいおかずができたので、友だちに食べてもらいたい…》

《 たまには、気の合うもんどうしが、食事を作って食べようよ！ 》

《 おしゃべりしながら、仲間と食事つくるのは楽しい！　おいしい！
料理のにがてな人も、おしゃべりがにがてな人も、
仲間にはいって、一緒に作って一緒に食べようよ！ 》

《 そうそう、食事クラブなんか作って、当番制で食事を作ってはどう？ 》

《 ひとりで食事をするより、いろんなもんが食べられるし、
栄養のことも考えるし、食費も安くなるんとちがう？ 》

資料作成：コレクティブハウジング事業推進応援団／団長・石東　直子

集まって暮らす楽しさ

《 夕食後のテレビは、ひとりでみるより、
しゃべりながら、みんなとみるのも、また楽し！ 》

《 編み物やカラオケのサークルをつくれば、楽しみも増えるわネ 》

《 園芸サークルもつくろうよ。歩く会や健康クラブええなー 》

《 趣味室とか談話室ちょっとした畳のスペースがあれば、
子供家族や孫たちが来たとき、ゲストルームにも使えるね 》

《 よその子供と遊ぶのって、刺激を受けるから好きよ！ 》

《 いざと言うとき、頼りになるのは、何と言ってもお隣どうしよ！ 》

……などなど

協同生活のルールはみんなで決めて助け合う

下町の生活では、ゴミ当番とか、自治会での大掃除とか、地域でみんなが
快適に暮らすために、いろんな役目を分担してきました。

コレクティブハウジングでも同じこと

みんなで使う場所が、きもちよく利用できるように、
＂きまり＂はみんなで相談してつくりましょう。

たとえば、協同室の使い方、掃除のルール、
趣味サークルの仲間集めや運営のしかた
いちばん大事な協同室の光熱水道費の分担のしかた　……などなど

《 協同スペース運営委員会と
協同スペース運営管理規約が必要やね！ 》

《 集まって住む安心感と安全性、
集まって暮らすことの楽しさをそだてる
共に住む、共に生きる、相互扶助の暮らし 》

コレクティブハウジング事業推進応援団／事務局
電話　078－842－2311　ファックス　078－842－2203
コー・プラン（小林郁雄　天川佳美　／　石東直子）

1．定期公開ミーティングの記録

	メインテーマ	日　時	場　所	参加者数
第１回	・＜入居トレーニングセンターの計画＞について	1996.10.16(水) 17:00 ～ 19:00	フェニックスプラザ　２階	３７名
第２回	・災害公営住宅でのｺﾚｸﾃｨﾌﾞﾊｳｼﾞﾝｸﾞ事業化等の紹介 ・模擬ｺﾚｸﾃｨﾌﾞﾊｳｼﾞﾝｸﾞお問い合わせセンター開設	1996.11.23(土) 13:00 ～ 15:00	第１回世界鷹取祭特設テントＡ会場	約４０名
第３回	・（擬似）募集についてのお問い合わせセンター開設	1996.12.19(木) 18:00 ～ 20:00	神戸Ｆビル 11 階 ㈱長大内会議室	約３５名
第４回	・（擬似）コレクティブハウジングお問い合わせセンターの開設	1997.1.19（日） 14:00 ～ 16:00	神戸国際展示場 ２号館	約４０名
第５回	・仮設住宅等への巡回説明会の企画	1997.2.12（水） 18.30 ～ 20:30	神戸Ｆビル 11 階 ㈱長大内会議室	約４０名
第６回	・出前説明会の情報交換	1997.3.12（水） 18:30 ～ 20:30	神戸Ｆビル 11 階 ㈱長大内会議室	約３５名
第７回	・コレクティブハウジングの応募状況等情報交換	1997.6.11（水） 18:30 ～ 20:30	神戸Ｆビル 11 階 ㈱長大内会議室	２５名

第２期コレクティブハウジング事業推進応援団 第１回ミーティングのお知らせ

阪神大震災からの再起をめざし、主に公共集合住宅建設に際して、協同居住型住宅であるコレクティブ・ハウジングの導人実現をめざし、新たな日本型・民間型などの検討を通じ、事業推進を応援する集まりであった＜コレクティブ・ハウジング事業推進応援団＞は合計６回のミーティングを重ね、1996年３月「コレクティブハウジングの実現に向けて」という報告書を作成し、その第１期の活動を終結し、以後各自がそれぞれの立場で事業推進にかかわってきました。

これまでの応援団活動（だけではないが）の成果として、災害公営住宅で兵庫県５か所１３１戸、神戸市１か所２９戸が建設されることとなり、早いものでは来年春には入居が始まります。

こうした動きを踏まえて、いよいよコレクティブな住まい方が大きな課題となってきます。そこで協同居住の《人居トレーニングセンターの計画》を検討テーマに、第２期の応援団活動を開始します。

こうした主旨に賛同し応援団に参加してもよい、もう少し詳しい話が聞きたい、面白そうだ等々どのような立場でも結構です。ぜひご参加ください。

◆日時：１９９６年１０月１６日（水）１７：００～１９：００

◆場所：神戸市中央区三宮／大震災復興支援館（フェニックスプラザ）２階多目的室

第２期応援団呼びかけ人
石東直子（応援団長／石東・都市環境研究室）
小林郁雄（コー・プラン）
天川佳美（　〃　）
中水流ゆき（こうべすまい・まちづくり人材センター）

連絡先：
まちづくり設計コー・プラン
〒657　神戸市灘区楠丘町2-5-20
T:078-842-2311 F:078-842-2203
E:PXU15104@niftyserve.or.jp

◇第２期コレクティブハウジング事業推進応援団の世話人になってもいいとお考えの方は是非ご出席ください。どうしても出席できないが世話人になってもいいとお考えの方はご連絡ください。

第２期　コレクティブハウジング事業推進応援団
《入居トレーニングセンターの計画》について　　1996. 10. 16.

応援団事務局

数名で事務局運営

応　援　団

- 各自または各グループが自分が応援できるプログラムを持って参加
- 入居トレーニング メニュー作成のためには多分野のスタッフが必要

事務局スペースの確保

◎ 検 討 項 目

業　務　内　容

トレーニング メニュの開発

経　費　調　達

《期待される出資元》

- 各プロジェクトの事業主体
- コープこうべ
- 大ガス
- いきいき下町推進協議会
- 住宅・都市整備公団
- その他

人　材　確　保

- 人材発掘
- コーディネーターの育成
- コーディネーターの登録

トレーニングセンターの設立

- スペース、備品・設備、経費、人　etc.

先ずは、時間的に差し迫っている下記の２団地の入居トレーニングを試行的に携わってみる（担当してみる）のも一案のようです。

- 兵庫県営片山住宅（神戸市長田区）　６戸。　1997年２月竣工　３月入居
- 神戸市営浜添住宅（神戸市長田区）　29戸。　1997年８月竣工　秋入居

第１回ミーティング（1996.10.16）議事録　・出席者　３７名

■小林氏あいさつ

・災害公営住宅でのコレクティブハウジング事業化の現状

・第２期コレクティブハウジング事業推進応援団発足の主旨

■石東氏あいさつ

・コレクティブハウジングの事業化が進んでいるがハードの面だけでは協同居住の生活はうまく稼働しない。協同居住サポート体制が必要である。

・生活サポートについては市、県も検討しているが、コレクティブハウジング事業推進応援団でも支援していきたい。

・公共が先導して、協同居住のためのトレーニングセンターの設立をしてほしい。

・トレーニングセンターのサポート体制のイメージは「きんもくせい３０号と３１号」に私案として掲載している。（当日配布）

・早い時期に入居者を決定し（少なくとも半年前には）、協同生活の学習、トレーニング、ルールづくりなどが必要と思われる。

・入居前の協同居住トレーニングを楽しくやりながら仲良くなるのは、入居後の協同生活にとってすごく有効である。

・第２期コレクティブ応援団はトレーニングセンターを計画するための活動を展開していきたい。

・応援団は各自が得意分野のプログラムを持って参加するかたちにしたい。

■小谷部育子氏の話

・震災がなければ日本ではまだまだコレクティブは事業化までいかなかっただろうが、震災を機に公営住宅でコレクティブハウジングをやろうとしているのはすばらしい。

・コレクティブの理念は住まう人が主体であり、北欧の事例でもいろいろなバリエーションがある。

・北欧の事例を見ても程度の差があるが食事が核になっていることは共通している。

・共に住まうということの凝縮されたものが食事ではないかと思う。

・食事も食べるだけでなく一緒に作るという行為に喜びがあり食べてもらえる喜びがある。

・若い人や働いている人には生活の合理化というメリットがある。

・日本ではまだまだ食べることにプライバシーを求める感がある。

・入居前のトレーニングの学習効果は大きくワークショップはニーズ開発には有効な手法である。

・こういう応援団があるのはすばらしい。

＜以後フリートーキング＞

小谷部：経費調達はどうなっていますか。

石　東：まだまだこれからです。

中林（ｺｰﾌﾟこうべ）：ふるさと村というところにキャビン棟があります。共同の炊事場等がありトレーニングセンターのモデルとして使えるかもしれない。情報提供です。

山　本：県・市でのソフト的な計画は？

石　東：検討中のようです。今、県では片山町の募集方法等検討中です。

森　栗：ビデオをつくりましょう。サンテレビで制作して番組をつくりましょう。広報を担当します。

小　林：長田区のみなさんの生の声をいれたらどうか。長田の再開発の中でもコレクティブをいれたらよいとの話もある。

森　栗：市場で共同建替の計画があるが入居者がいるかどうかの不安から計画が進まないのでこの制度（コレクティブ等）を付加すると計画が進んでくるのではないか。

石　東：まちのお風呂やさんなどの再建にもコレクティブハウジングを付加するのも一法である。共同建替を計画している人にも普及活動が必要。

石　東：宮西さん、真野での住民の受け取り方等の話をして下さい。

宮　西：私はコレクティブは１０年早いと思っていたが真野につくることになってやらざるを得なくなった。設計が先行してソフトが追いついていない。実際には共同で生活することのイメージをすることが難しい。仮設では否応なしに生活せざるを得ないが、そういう人たちにワークショップに参加してもらっている。絶対コレクティブでないといけないというものにはほど遠く現実的には難しい。ライフスタイルとしてコレクティブに入りたいというより、仮設住宅からの移り住みがしたいということでワークショップに参加している。建物先行の時点での後付けが難しい。一刻も早く入居者を決めてトレーニングをしなければならない。共同で生活するというのはお金が絡んでくる。それらの認識が難しくサポート体制がまだ不充分。日常生活での共同生活の大変さの認識不足。トレーニングを役所がどこまで出来るか。ＬＳＡの任務がどこまで及ぶのか。応援団でサポートせざるを得ないのではないか。私はコーポラティブ住宅に住んでいるが、その理念でも難しい。理念に賛成して応募してくるのは少ないのではないか。生活方法の指導を周りからするのはつらい。募集要綱をはっきりさせて入居者の限定をしないとサポーターもつらいのではないか。

小谷部：全くその通りです。公共での住み方への支援組織は世界中どこにもない。コレクティブは住む側からのニーズで出来ている。資金面等の様々な支援制度はあるが‥‥。ヨーロッパでは資金面でのサポートがなくなっているので現在コレクティブはつくりにくくなっているのが現状。日本での立ち上げの状況は公共先導で特殊であるが潜在的ニーズを掘りおこし実現化していくことが期待される。そういう中でこの応援団は重要である。

石　東：山崎さんの計画されているコレクティブハウジング計画を教えて下さい。

山　崎：賃貸のコレクティブを考えています。個人でつくろうとしています。
大阪の南森町の５２坪の敷地で１階は店舗です。自然食品のレストラン、食料品、保育所＋フリースクール、ホールを中に計画しホールは一般利用可能とします。３階から上はシェアハウス。身障者と健常者の共生生活を目指し、各フロアーに風呂食堂等共同。各フロアごとに食堂があり週１回共同でつくる事、入居者を決めてから入居者でソフト面を決める。８～１２世帯を計画している。屋上にはリラクゼーションスペース、カウンセリングルームを設置。ワークショップを計画中。

男　性：家賃はどうなっていますか。

山　崎：５～６万円までと考えています。

森　栗：トイレの共同に問題がありますね。

小　森：公的なシルバーとコレクティブの組み合わせはめずらしい。公共住宅の場合コレクティブで共同生活費を払わなかったらどうするのか。

石　東：共同部分の光熱費等の問題については難しい問題である。

石　東：特に募集要綱を認識してもらって入居してもらうことが必要。

小　森：どこまで認識しているのかチェックするには限界がある。飲酒の問題やテレビのチャンネルの問題など県ではどのように考えているのか。

県の人：共同部分は自分たちの使用面積になり按分します。共用経費も按分します。しかし収入が違う人が入ってきて家賃も異なり、それが協同生活に問題がでてくるのではないかとも思っている。

宮　西：時期が早すぎるのに公営でコレクティブをやろうとするからにはしっかりしたものがなければグチャグチャになる。ＬＳＡだけでは限界。そろそろ覚悟が必要。

山　崎：南森町のコレクティブでは入居者としてコーディネーターを入れることにしている。

森　栗：トレーニングの前にコーディネーターが必要ですね。

石　東：今回の計画にはシルバーがかかっているのでＬＳＡを派遣できるためコレクティブのコーディネーターもやってもらえたらと思っている。

上　田：地域型仮設で生活援助員さんが活躍されていますので活用できるのではないか。援助員の再就職先としても人材確保の面でもうまいのではないか。

小　林：生活援助員さんのコレクティブのコーディネーターとしての認識の問題もある。

石　東：尼崎ではパートで２年間だけ援助員を募集している。震災で新しい職種が出来ているのでそれを活用していけばいいのではと思う。

宮　西：真野は下町でコレクティブタウンになっていることが特徴。地域で支える仕組みができている。地域の居酒屋が仮設住宅へのお弁当を届けている。

石　東：真野でやったワークショップの様子はどうですか。

斎　藤：入居者が決定していないので大変気を使った点があるが、コレクティブの普及活動にはなった。やはりワークショップの参加者は実際の入居者を対象とした方が良いと思います。

小　森：今、公営住宅に入れようとしている人はコレクティブ対応の人が多数なので、公営住宅をつくるうえで全体的にもこういう対応をしてほしい。何万戸という方のためにお願いしたい。

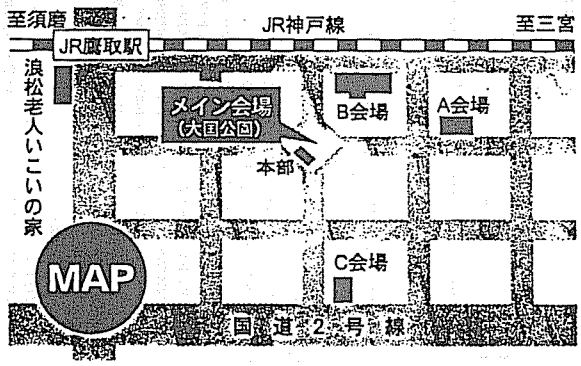
太　田：事業化されようとしているコレクティブと一般公営住宅の中間的住宅を考えている。新長田の地域では従前は９坪程の住宅で、風呂も無かった。これ以上大きな住宅はいらない。銭湯があればいい。このような状況の住宅はないのか。コレクティブもどきで３０㎡くらいの住宅。

下町型聚楽住宅　　961118

第２期コレクティブハウジング事業推進応援団
第２回ミーティングのお知らせ

第２期のコレクティブ・ハウジング事業推進応援団の開始より１ヶ月が経ちました。
このたび、長田区の野田北部地区で開催されます「復興まちづくりまつり／世界鷹取祭」の会場で連続シンポジウムの１つとして、第２回ミーティングを行うことになりました。
下記のとおりです。
よろしくご参加ください。

◆１９９６年１１月２３日（土）１３：００～１５：００
◆神戸市長田区鷹取・野田北部地区／第１回世界鷹取祭、特設テント
（大国公園東の日吉町６丁目Ａ会場）



第２期応援団運営スタッフ
石東直子（応援団長／石東・都市環境研究室）
小林郁雄（コー・プラン）
天川佳美（　〃　）
中水流ゆき（こうべすまい・まちづくり人材センター）

連絡先：まちづくり舘コー・プラン
〒657　神戸市灘区楠丘町2-5-20
T:078-842-2311 F:078-842-2203
E:PXU15104@niftyserve.or.jp

被災されて今まで住んでいたコミュニティから遠く離れている人々も、お祭りの間は地域に帰って来て、地区の中に泊まって再会を喜び、また地震で亡くなった人々のためには鎮魂祭を、これからまちづくりを再建していこうとする人々のためには、まちづくりの新たな展開への祝祭として盛り上げていけたら幸いです。

まちづくり計画が進み、道路や公園が整備されていく中で、これからは個々の建物をはじめ、立体的なまちの景観がどうなるのかが問題となります。まちの景観としても、まちづくりにも大切な街角空間をどうするのか、人間も自然の一部だとの考えからエコロジーとしての自然、即ち緑や水辺をどのように命につないでいくのかが課題となります。そこで街角、緑、水をキーワードとして祭りを盛り上げていきたいと考えています。神戸の復興がどうなっているのか興味ある方は是非祭りに参加し、協力していただきたい。そして大いに祭りを楽しもうではありませんか。それを通して世界中の仲間に被災地の市民の心意気を発信しようではありませんか。

1996年11月

主催：世界鷹取祭実行委員会
〒653 神戸市長田区浪松町2-1-7
浪松老人いこいの家内
Phone・FAX 078-736-2579

建築祭
- 地区将来構想模型展
- 狭小宅地戸建住宅展
- 協調・共同住宅展
- 建築よろず相談会
- これからのすまい展

まちなみ祭
- まちかどトーク&写真展
- せせらぎの川づくり
- まちに緑を(移動いけがき)
- 公園ワークショップ
- ドングリ銀行神戸

コムスティ community stay system

文化祭
- 映像祭
  震災をつづったドキュメント
- 芸能祭
  ベンポスタ子どもサーカス
  伝統の大道芸
  粋なストリートパフォーマンス

コミュニティ祭
- だんじりねり歩き
- 地元商店スタンプラリー
- NEWスポーツ
- まちつくりゲーム

【声　援】
北海道奥尻島／長崎県普賢岳／沖縄／スペイン／イタリア／インドネシア
サンフランシスコ／ロスアンゼルス／ニューヨーク／サハリン／シドニー／北京／天津／台北

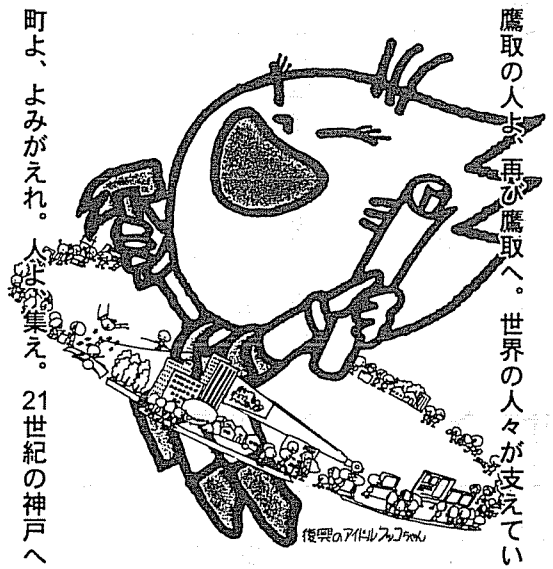
【応　援】
大学ボランティア群(長野大学／早稲田大学／東京経済大学など)／ランドスケープ復興支援会議(阪神グリーンネット)／震災復興実態調査ネットワーク／コレクティブハウジング事業推進応援団／神戸アジアタウン推進協議会／FMわいわい／復興塾／港まち神戸を愛する会／兵庫県被災者復興支援会議／アート・エイド・神戸／阪神・淡路ルネッサンスファンド／日本建築家協会(JIA)近畿支部住宅部会／阪神・淡路まちづくり支援機構／阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク／日本都市計画学会関西支部震災復興特別委員会都市復興部会／ドングリネット神戸／都市環境デザイン会議関西支部／日本造園学会震災関連研究特別委員会／日本建築学会近畿支部環境保全部会／神戸・復興住宅メッセ／神戸市都市整備公社こうべまちづくりセンター／ドリームベージェントin神戸／長野県上田市／北海道美瑛町／富山県砺波市／富山県花卉球根農業協同組合／神戸いきいき下町推進協議会
兵庫県建築士会／兵庫県建築設計監理協会／兵庫県建設業協会／住宅・都市整備公団／兵庫県建築士事務所協会／日本ツーバイフォー建築協会／神戸市住宅供給公社／生活協同組合コープこうべ／プレファブ建築協会関西支部／再開発コーディネーター協会

主催／世界鷹取祭実行委員会

委員長：新野幸次郎　副委員長：Catherine Bauman(サンフランシスコ)
副委員長：浅山　三郎　副委員長：David Mammen(ニューヨーク)
副委員長：神田　裕　副委員長：Kenneth C. Topping(ロサンゼルス)

第1回
復興まちづくりまつり

世界鷹取祭



■とき：11/22(金)～11/24(日)

■ところ：神戸市長田区・大国公園周辺
JR鷹取駅 南東(歩いて3分)

世界鷹取祭実行委員会

タイムスケジュール

11/22(金) 鷹取祭前夜祭
司会　西條遊児
15:00〜

【プログラム】

■メイン会場（大国公園）

- 式典（来賓挨拶、開催宣言、声援披露など）
- 行事（めでたやもちつき、ベンポスタこどもサーカス、焼きそば振舞い、だんじりねり歩き、電飾点灯など）



11/23(土) 10:00〜

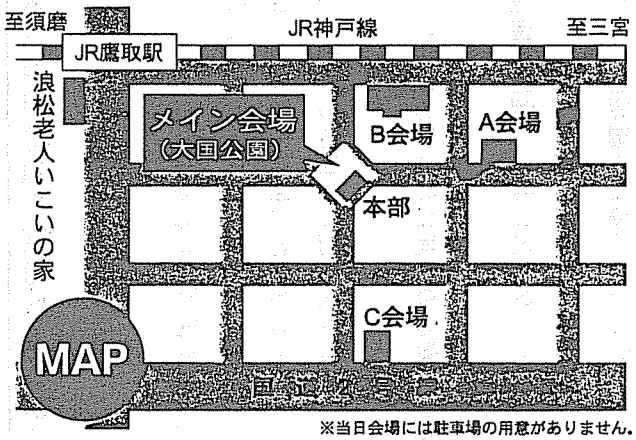
【プログラム】

■メイン会場（大国公園及び周辺道路）

- ベンポスタこどもサーカス
  ①10:00〜10:30
  ②12:30〜13:00
  ③15:00〜15:30
- 大道芸／10:00〜16:00の間随時開催
- 琵琶法師鎮魂コンサート／16:00〜17:00
- NEWスポーツ／10:00〜12:00
  13:00〜15:00
- 屋台出店／11:00〜17:00
- まちかど伝言板／10:00〜18:00

■A会場（日吉町6丁目特設テント）

- 連続シンポジウム
  - コレクティブハウジング応援団——13:00〜15:00
  - 復興塾——15:30〜17:30
  - せせらぎの川シンポジウム——18:00〜20:00
- まちかど写真展／10:00〜18:00



※当日会場には駐車場の用意がありません。
公共の交通機関をご利用ください。

■B会場（海運町2丁目テント）

- まちつくりゲーム／10:00〜18:00
  (24日10:00〜15:00)
- 各種写真展／10:00〜18:00 (24日10:00〜15:00)

■C会場（野田北部集会所）

- 建築展(1階)／10:00〜18:00
  (24日10:00〜15:00)
- 映像祭(2階)／
  ①11:00〜14:00 (23日・24日)
  ②14:30〜17:30 (23日)
  ③18:00〜21:00 (23日)

11/24(日) 10:00〜



【プログラム】

■メイン会場（大国公園及び周辺道路）

- ベンポスタこどもサーカス
  ①10:00〜10:30
  ②12:30〜13:00
- 大道芸／10:00〜15:00
- NEWスポーツ／10:00〜12:00
  13:00〜15:00
- 屋台出店／11:00〜15:00
- まちかど伝言板／10:00〜15:00
- ドングリ銀行神戸／10:00〜15:00

■A会場（日吉町6丁目特設テント）

- よろず相談会／11:00〜13:00
- まちかど写真展／10:00〜15:00
- まちかどトーク／13:00〜15:00

■B会場（海運町2丁目テント）

- 公園ワークショップ／10:00〜13:00
  （雨天:A会場）

■復興スタート宣言（フィナーレ）
16:00〜 メイン会場(大国公園)
●だんじりねり歩き ●だんじり太鼓 ●ベンポスタこどもサーカス ●鏡割り ●こどもたちによる未来へのメッセージ など

第２回ミーティング（1996.11.23）議事録　・出席者 約40名

（第１回世界鷹取祭　連続シンポジウムとして参画）

第Ⅰ部：災害公営住宅でのコレクティブハウジング事業化等の現状の紹介

◇パネルの展示

◇ひょうごコレクティブハウジングについての説明

◇真野コレクティブハウジングについての説明

◇中辻さんの話（高齢者ケアセンターながたの施設長）

・ケアセンターながた（特別養護老人ホーム等）の上部に神戸市のＳＨＰ（シルバーハウジング、４０戸程がある。ＬＳＡ（生活援助員）業務を神戸市から受託している。

・ＳＨＰには、各住戸の他に生活相談・だんらん室（１２帖の和室、台所、トイレ）があるが、余り使われていない。

・入居と同時に、入居者自治会をつくってもらい、その中に生活保健委員会（委員８名と１０数名の参加員）を設けて簡単なケアを互助でやるようにしている。（組織的にしておかないと仲良し以外の人は手助けしてもらいにくい）。

・各入居者には緊急持ち出し箱を（ファンシーケースにお金、健康保険証コピー、身内の連絡先、TELカード等）を備えてもらっている。

・施設が下部にあるということは、安全、安心の保証になっており、ＬＳＡとしてのサービスは通常ほとんどないといっていい。

・コレクティブハウジングとシルバーハウジングの違いは何かを整理する必要がある。

・今、地域型のコレクティブハウジングができないかと検討中である。地域の中で公的サービスでない地域サービスが受けられるようなシステムをつくる。第１期入居者は被災者とするがその後からは、地域の人が入り、地域の共同の福祉の財産として位置づけられるようなものに。

第Ⅱ部：”模擬コレクティブハウジングお問い合わせセンター”開設

（出席者に問い合わせ事項や意見を出してもらい、それについて討議した）

＜主な問い合わせ事項＞

◆私はコンビニでいろいろ買いますので協同で食べるのは嫌だけど、市街地に入りたいから申し込む。協同食事はいや。協同掃除は仕方ないからする。これでも入れますか。

◆コレクティブハウス入居の手続きで、①入居者決定　②建築プランを全員で作る　③建築　④入居、というプロセスで出来ないのですか。

◆ある単位のコレクティブハウジングに、責任者、代表者みたいな人を行政がつくるのか。みんなで選びあうのか。自然にまかせるのか。

◆静かに暮らすのが好きなのでテレビ室やカラオケ室は完全な防音にしていないと入りたくない。

◆食事は作るのが好きな人に有料で作ってもらえるような、或いは教えてもらえるような（有償ボランティア）仕組みも取り入れたらどうか。

◆みんなで草花を育てたり野菜を作ったりするスペースをぜひつくってほしい。

◆気の合わないもの（グループ？）が隣りに来ればどうなるのか。入れ替えはあり得るのか。

◆途中入居の審査は既居住者も加わるのか。

◆今後公営住宅で（賃貸住宅）で、建設改築等で入居者募集を先行して、入居者の希望を考慮した形式で建設改築等を行う予定（考え方）はあるのでしょうか。

◆実際住み始めてみると不都合が多くでてくると思いますが体験施設みたいな仮入居的なシステムは考えておられるでしょうか。

◆一般の市住でも共用部分の管理がよく問題になる。ここの場合は指導員というかワーカーというか住民だけでなくそういう人がいるのでは。やりすぎると老人ホームのなるように思える。

◆今回震災対策としてつくるのなら地元の人を入れるようにしないとコミュニティーがうまくいくのか。寝たきりになるとどう対応できるのか。

◆老人ホーム等では設備のいいところはお金持ちしか入れないようですが、年金生活者であまり経済的に余裕のない人でも入居できるのですか。

◆元気な人に負担が集中しないか。

◆コレクティブハウスの適正規模（戸数）についてはどんな議論があるのか。

◆入居できる条件とその設定に仕方。（生活のルールに関したもの）

◆共同管理に協力的でない人が出てきたらどうするのか。

◆公営住宅が不足しており仮設からの移転も少ない状況にあってどの媒体でどう表すことでコレクティブハウジングの主旨をふまえた入居希望者を集めるのか。選別の基準をどこに設けるのか。

◆入居したときどの程度入居者が主体となっていけるのか。過度の介入をせずその必要もないほどに入居者間で生活していくために当初のサポートの仕方をどうすればいいのか。

◆アドバイザー、コーディネーターの人材はどこから、或いはどう養成されるのか。

◆要介護時の対応はどうするのか。（行き先等）

◆共用スペースでの掃除などはどうするのか。

◆食事の準備は１週間に１度ですめば面倒な人は助かるが反面それを日常的仕事としてきた人にとって食事の準備の機会がなくなると体を動かすことも少なくなると思われる。そのへんの問題はどうするのか。

◆高齢単身者といっても男性と女性で或いは個々人でまちまちだからソフトな面の対応は難しいですね。

◆共同生活の決まりごとなどどうつくるのか。予め入居者が決まっていないとすればしばらくはコーディネータ的な方が一緒に住むのか。

◆家族や友達が泊まりに来てもいいのか。

◆共同居住空間で喫茶店を開きたいが出来るか。（お客さんは同じ住宅の人として）

◆団地で庭づくりが出来るか。

◆他のコレクティブハウジングに住む仲間と情報交流をしたい場合どこに連絡するのか。

◆入居者でお金に困り協同居住の電気代や水道代が払えない人が出てきた場合他に人が肩代わりするのか。

◆入居者だけで運営できるのか。（放置していてもやっていけるものなのか。民間や行政が手助けしないといけないのか。）

◆３６５日１日２食給食のような食事は嫌。でも自分では作りたくない。そんな気ままな人でも暮らせる協同生活ソフトプログラムが必要。

◆片山の６戸の場合男女比は考慮されるのか。男性ばかりだと難しいのでは。

◆ＬＳＡ室はどこも常設ですか。緊急時の連絡方法はどうするのか。

◆コレクティブに理解のある人のWaithngＬistがあればいいのでは。

◆コレクティブ生活に対する理解の有無はチェックされるのか。

＜お問い合わせについてGood　Answerを考えてみよう！＞

食事づくりについて

◆どうしても食事をつくりたくないのなら……

・つくらないかわりにお金を出したらどうか。

・代わりに鍋洗いをします。

・料理の得意な人に有償でつくってもらえばいい。

・お金の代わりにポイント制にしたらどうか。（有償チケット制）

◆共同炊事は危険。

・食事は各家庭の味があり、地方の味があり、好みが違うので共同でつくるのは難しい。

・外部からの提供の方が安全ではないか。

◆食事サークルをつくって共同食事をしたい人だけがする。

・週に１、２回程度の共同食事でもいいのではないか。

◆食事をつくらない人は入居の資格は無しとみる。

◆共同のダイニングキッチンを地域のお好み焼き屋さんなどに出張店舗として来てもらい、食事を提供（もちろん有償）してもらうと同時に共同部分の光熱費を負担してもらう方法がありそう。

人間関係について

◆人間関係が難しいのではないか。

・親子でももめるのに……

・トラブルがあって当然、生きている証拠。

・老人は気ままなので仲の良い人が入るというのが第一条件となる。

◆いろんな世代の人と住みたい、老人ばかりはイヤ。

募集方法について

◆個人応募は認めない方がよい。

・グループ入居でないと成功しない。

・ただの仲良しだけでなく、ルールづくりができる人が入居した方がよい。

◆トレーニングセンターでの研修修了証をつくる。（コレクティブハウジング居住認定証）

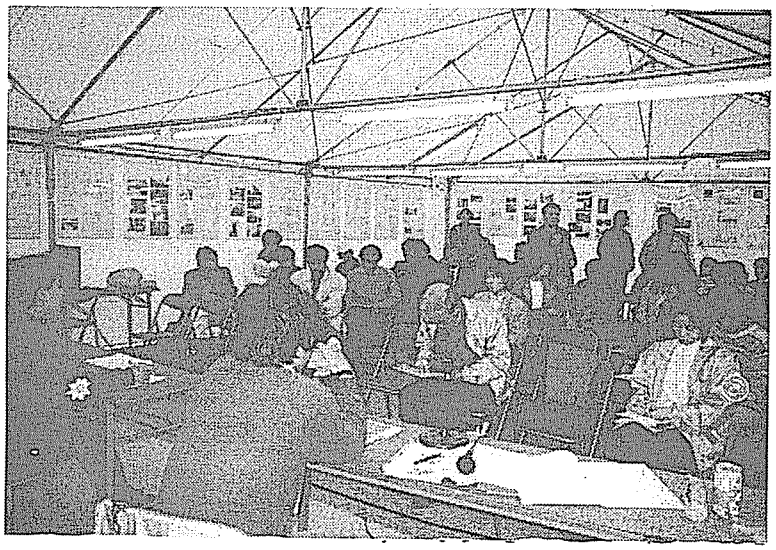
◆うまく協同居住できる人が入居するというのが第一条件

その他

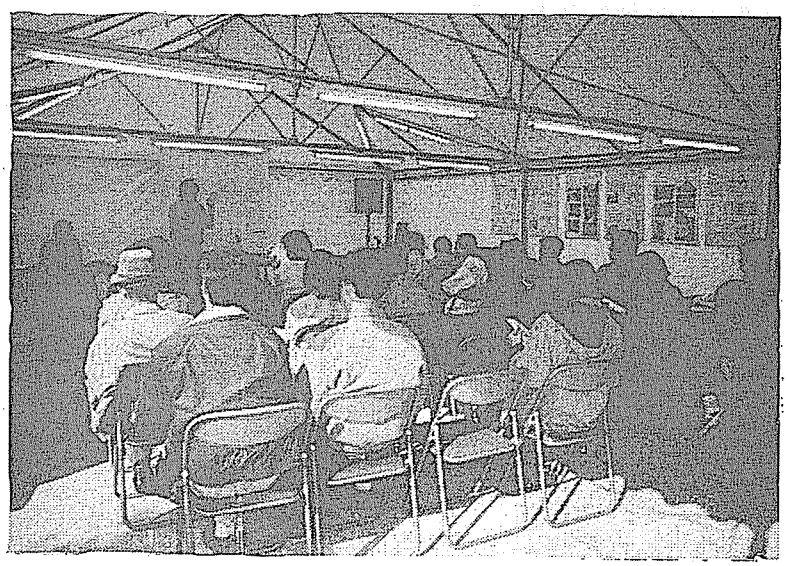
◆片山住宅の１階の２戸部分をトレーニングルーム（入居体験住宅）にするのはどうか。

◆コレクティブハウジングのまわりに水がないのが気にかかる。いざの時誰でも使える防火用水等の計画はないのか。雨水利用の防火水槽などを考えて欲しい。

◎コレクティブハウジング事業推進応援団の連続シンポジウムとパネル展（世界鷹取祭の大テントの中で）1996.11.23







下町型聚楽住宅

961206

第２期コレクティブハウジング事業推進応援団 第３回ミーティングのお知らせ

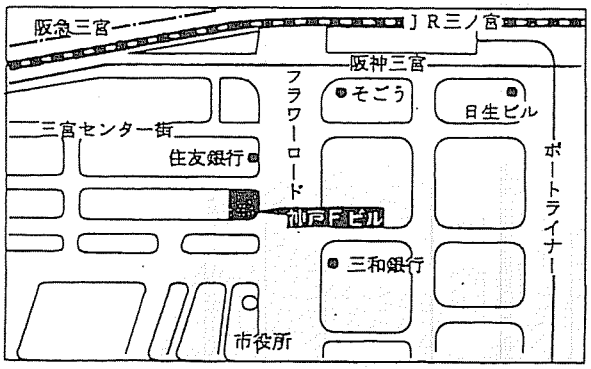
第２期のコレクティブ・ハウジング事業推進応援団の第２回ミーティングは、11月23日に長田区の野田北部地区で開催されました「復興まちづくりまつり／世界鷹取祭」の会場で連続シンポジウムの１つとしてお集まりいただき、「（擬似）コレクティブハウジングについてのお問い合わせセンター開設」というテーマで皆様の意見をお聞きしました。

第３回ミーティングは下記のようにご案内申し上げますので、よろしくお願いいたします。

◆テーマ／「（擬似）募集についてのお問い合わせセンター開設」

◆１９９６年１２月１９日（木）１８：００～２０：００

◆（株）長大会議室にて／神戸市中央区三宮町１丁目３　Ｆビル11階



第２期応援団運営スタッフ
石東直子（応援団長／石東・都市環境研究室）
小林郁雄（コー・プラン）
天川佳美（　〃　）
中水流ゆき（こうべすまい・まちづくり人材センター）

連絡先：まちづくり灘コー・プラン
〒657　神戸市灘区楠丘町2-5-20
T:078-842-2311 F:078-842-2203
E:PXU15104@niftyserve.or.jp

第２期コレクティブハウジング事業推進応援団 第４回ミーティングのお知らせ

第４回ミーティングは、市民とＮＧＯの「防災」国際フォーラムの一環として行います。

第４回のミーティングは次のようなテーマ、内容で行います。ご参加ください。

「（擬似）コレクティブハウジングお問い合わせセンターの開設」

- ２月の竣工を目指して建設中の兵庫県営コレクティブハウジング・片山住宅、もうすぐ着工の神戸市営コレクティブハウジング・真野ふれあい住宅について、募集方法や入居前の協同居住の学習と協働トレーニングなどについての方針
- その他の地域でのコレクティブハウジングの動き
- 仮設住宅でのグループ入居のためのグループ応募の動きなど

以上のような情報をもとに、コレクティブハウジングについて

《（擬似）お問い合わせセンター》を開設し、
その問い合わせ事項について、　意見交換をしながら、
コレクティブハウジングの望ましい入居者サポートシステムの構築

のための検討を続けていきたいと思っています。

○日　時　1997年１月１９日（日）14:00～16:00

○場　所　神戸国際展示場２号館（会場番号３Ｂ）
（地図は同封パンフレットをご覧ください）

第２期応援団運営スタッフ
石東直子（応援団長／石東・都市環境研究室）
小林郁雄（コー・プラン）
天川佳美（　〃　）
中水流ゆき（こうべすまい・まちづくり人材センター）

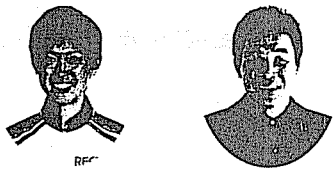
阪神・淡路大震災から2年…

第2回 市民とNGOの「防災」国際フォーラム

くらし再建 道筋ここから

イベント

有森選手・寛平ちゃん トークショー



オリックス・ブルーウェーブの選手を囲んで

ヴィッセル神戸による ミニサッカー教室

1月17日(金)15:00～16:30
場所:真光寺(神戸市兵庫区)
1月18日(土)10:00～17:00
1月19日(日)10:00～16:00
場所:神戸国際展示場2号館
ポートアイランド西駐車場

シンポジウム

市民がつくる 復興計画

居住権、仮設住宅の環境、恒久住宅、住民参加のまちづくり、くらし再建、公的保障、外国人住民、ジェンダー、こども、県外避難者、地域の医療・福祉・保健など、被災地と被災者の意見を基軸に真の復興計画をつくります。

～あなたの将来を 決めるのはあなたです!～

市民文化祭

仮設住民による 作品展・交流会・文化祭

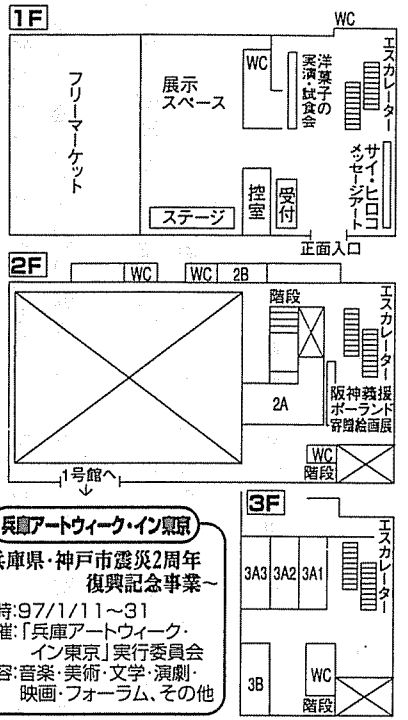
なんもなくなったけど
いろんな人から“心”もうて
強うなったでぇ

入場無料

フォーラム日程表 <国際展示場2号館内>

	1月18日(土) 10 11 12 13 14 15 16 17	1月19日(日) 10 11 12 13 14 15 16
国際展示場2号館 会議室	2A 居住権	子ども(高校生) 子ども(支援者)
	2B 映像"光の島"	公的保障 *おぎゃあPRESENTS ～臍帯血バンクの医療への貢献～
	3A1 *いま、甚大被災地における住民同士の「コミュニケーション」づくりは?	*仮設住宅の検証 環境・農業
	3A2 外国人 NGO/NPO	*仮設住宅の今・これから「どこまでやるのV」 *仮設住宅の今・これから「どこまでやるのV」
	3A3 ジェンダー	地域の医療・保健・福祉 *仮設住宅の今・これから「どこまでやるのV」
	3B まちづくり	県外避難者 *神戸復興塾 *第II期コレクティブハウジング事業推進応援団公開ミーティング
同一階ホール	有森裕子選手・間寛平ちゃんトークショー オープニング ヴィッセル神戸によるミニサッカー教室 メインフォーラム"被災地を結ぶ" ～メキシコ・島原・奥尻島・神戸～	兵庫県外国人学校協議会による楽器演奏と民族舞踊 沖縄舞踊 オリックスブルーウェーブの選手を囲んで メッセージアート・パフォーマンス フィナーレ
	各種展示	各種 仮設住民交流会 展示
	フリーマーケット	フリーマーケット
ロビー	受付 洋菓子の実演・試食会(13:00～14:30)	受付
	サイ・ヒロコさん"メッセージアート"	サイ・ヒロコさん"メッセージアート"
2階	阪神競援ボーランド寄贈絵画展	阪神競援ボーランド寄贈絵画展

会場地図 国際展示場 2号館



兵庫アートウィーク・イン東京
～兵庫県・神戸市震災2周年復興記念事業～
日時:97/1/11～31
主催:「兵庫アートウィーク・イン東京」実行委員会
内容:音楽・美術・文学・演劇・映画・フォーラム、その他

音楽による8000本のロウソク追悼

日時:1月17日(金)15:00～16:30
(16:00点灯予定)
場所:真光寺(神戸市兵庫区)
内容:亡くなられた方々のお名前を記入したロウソクに"命の灯"をともし、ご冥福をお祈りいたします。神戸市仏教連合会が担当し進行いたしますが宗教を越えた形での追悼会です。

震災復興「どんとこい」神戸

○西神仮設住宅市民文化祭支援
1月17日(金) 西神ニュータウン
○震災米倉記念祭
1月18日(土)
経済センターカントリー広場
○震災復興提言
1月19日(日) 神戸国際展示場
主催:神戸市西農業協同組合

"私達も応援しています"支援イベント一覧

【札 幌】
HYOGO AID 95 by ART 札幌展
～阪神・淡路大震災復興支援全国ポスター展～
日時:97/1/14～19 主催:実行委員会
【岡岡(山形)】
阪神・淡路大震災の被災地を応援するフリーマーケット from 鶴岡
日時:97/1/17～18
主催:リサイクルを考える鶴岡市民有志
【石越町(宮城)】
被災地を応援する写真パネル展
日時:97/1/15 主催:宮城県石越町公民館
【新 潟】
忘れないで"神戸"!思い出して"1.17"!!
日時:97/1/15～19 主催:神戸ー新潟"結ふ(YOU)"プロジェクト
【福 島】
第2回市民とNGOの「防災」国際フォーラムを支援するチャリティーフリーマーケット
日時:97/1/18 主催:ハートネットふくしま
【栃 木】
阪神・淡路大震災「追悼の鐘」「追悼の灯火」
日時:97/1/17
主催:とちぎボランティア情報ネットワーク・栃木県仏教会・宇都宮市仏教会
【群 馬】
神戸に糸でんわ
日時:97/1/19 主催:ちびくろ救援ぐるうぷ関東ネット群馬支部
【調布(東京)】
もっと、ずっと、きっと、すきやねん神戸!!
日時:97/1/18～19 主催:実行委員会
【日野(東京)】
わすれない みつめよう一阪神・淡路大震災一
日時:97/1/17
主催:日野阪神・淡路大震災2周年実行委員会・日野ふれあう音楽の会
【神奈川】
防災ギャザリング'97 from かながわ
日時:97/1/15～31 主催:実行委員会
【浜 松】
忘れないで神戸 フリーマーケットとチャリティーコンサート
日時:97/1/15 主催:震災ボランティアネットワーク「いとでんわ」
【長 野】
SUPPORT KOBE(サポート神戸)
被災地神戸の暮らし再建を支援するチャリティーフリーマーケット
日時:97/1/14～15 主催:SUPPORT KOBE(サポート神戸)ながの
【金 沢】
はじめの一歩 From 金沢 パネル展示
日時:97/1/16～25
主催:ダブル金沢
【大 阪】
チャリティーコンサート「夢みることをすいせんします」
日時:97/1/17 主催:実行委員会
【岡 山】
京橋朝市特別企画・阪神大震災被災者支援
～ロウソクによる"鎮魂の灯"～
日時:97/1/17 主催:備前岡山京橋朝市実行委員会
【福 岡】
会いたか! 会いたいねん! from ふくおか
阪神・淡路大震災から2年～くらし再建 道筋これから
「神戸第2回市民とNGOの「防災」国際フォーラム」とつながって……
～被災後、福岡に移って来られた方々とともに～
日時:97/1/17～18
主催:結～ふくおか～(阪神大震災の被災者を支援する会)

このフォーラムは以下の団体の協賛・協力を得て開催することができました。心から感謝をいたします。なお敬称は略させていただきます。
協賛:朝日新聞厚生文化事業団、公益信託神戸まちづくり六甲アイランド基金、神戸新聞厚生事業団、住友海上火災保険株式会社、阪神・淡路コミュニティ基金、兵庫県協同組合連絡協議会(兵庫県生活協同組合連合会・JA兵庫中央会・兵庫県漁業協同組合連合会)、ライオンズクラブ国際協会335-A地区 (50音順)
協力:ヴィッセル神戸、オリックスブルーウェーブ、JA神戸市西、ネスレ日本株式会社、阪神競援ボーランド寄贈絵画展組織委員会、兵庫県外国人学校協議会、兵庫県洋菓子協会、株式会社フェリシモ、毎日新聞神戸支局、吉本興業株式会社 (50音順)

第４回ミーティング（1997.01.19）議事録　・出席者 約40名

（市民とＮＧＯの「防災」国際フォーラム）
場所：ポートアイランド神戸国際展示場

「（疑似）コレクティブハウジングお問い合わせセンター開設」

■石東氏あいさつ

○この１月17日の震災２周年のマスコミの内容は今までと変わってきたようだ。

・住宅再建については、必要戸数、量的な話題から移転先や生活の問題への報道が多かった。

・器としての住宅の再建は必要だが、それだけでいいのか？ 災害公営住宅に移ってからの生活、安心して、安全に、楽しく暮らすためにはどのような準備が必要なのかが問題として取り上げられるようになった。また、現在の仮設住宅は空き住戸が増え、自力再建のできない高齢者の割合がどんどん高くなっており、新たな問題となっている。

○コレクティブ住宅は兵庫県で５地区、神戸市１地区、合計160戸が建設される。

長田区	片山住宅	６戸	２月募集	４月入居予定
真野地区		２９戸	２月募集	秋入居予定

・今回、被災地に限ってグループ入居の応募がなされることになったが、今後一般公営住宅でも広げていくことが望ましい。

・コレクティブハウスが理解されて、応募してもらえるのかどうか不安である。

・応募までの取り組みとしてグループ入居制度やコレクティブハウスにおける住まい方のイメージを知ってもらう機会を設けることが必要だと思っている。

・コレクティブハウスというのがどういうものかを全員が理解し、広めていって欲しい。

■兵庫県住宅管理課　坂井氏

○グループ入居制の採用

・災害公営住宅の第３次一元募集（平成９年度中に完成する7000戸）２月末～３月半ばでは、県営住宅はグループ募集を取り入れる。

・当初は否定的意見が多かったが、既にできた仮設のコミュニティをある程度崩さないためにも、数人から10人ぐらいの友達グループでの申し込みを受け付ける。まず手始めに、２月に募集を開始する長田区片山住宅では６人グループによる申し込みとする。２人など中途半端は受け付けない。しかし、誰かが審査基準（収入）に合わなくて入居できなかった場合には、新たに予備登録者から追加募集する。しかし、この場合住み方に理解があるのかのチェックをするか（実際にはできない）などの問題はまだ未決。

－質疑応答－

①残戸数がグループの人数にあわない中途半端な戸数になった場合にどうするか？
→パズルをしなければならず、技術的に難しい点がある。

②居住者グループに偏りはでないか（男性ばかりとか85歳以上とか）
→でも全部を平等に扱う。

③抽選倍率が不平等にならないか？
→代表者一人が当たれば全員入居できる。特に不公平などは生じないはず。

④家賃をどうするか？
→新公営住宅法になると今までは同じだった家賃が居住者ごとに開きがでる。私はこれだけ払っているのに…という不満がでる心配がある。→根本的には、割り切ってもらわなければ仕方がない。

○ペットの飼育が可能な住宅の募集

・ペットを心の慰めとして飼っている被災者が多いことからペットの持ち込み可能な住棟をつくる。ただし、後の手入れ、ペット用洗い場の設置費用などから考えて一般よりも高い（＋60万ぐらい）金額になるので、上乗せ家賃をどうするか検討中。

－質疑応答－

①ペット用住棟で、グループ申し込みをする場合は全員飼ってなければいけないのか？

②ペットが死んだら退去しなければならないのか？

③ペットの定義は？（蛇は？金魚は？大きさは？→とりあえず大きさはペット用くぐり戸を通れる大きさ）等々

■新長田久二塚６丁目　コレクティブ的な市営賃貸住宅を計画中　森崎氏

・再開発受け皿住宅。14階と７階と５階の３棟からなる。158戸の内、７階と５階をつないだ58戸でコレクティブを考えている。

１階－店舗と駐車場

２階－路地的空間、共用室

14階棟－大きめの集会室

７階棟－２階日照条件のよくない４戸分200㎡を充てた共用室（全面積の６％）

７階と５階の棟には（40～50㎡）の小規模住戸をつくる。

・コの字型プランで両面開放

・共用のＤＫは３グループが別々のメニューをつくれるくらいのスペース、50名ぐらいの椅子、テーブル。談話室兼図書室、集会所以外のスペースとしての趣味室を計画中。

○今後

・まだ準備期間が２年程ある。多人数での調理実習なども含めたトレーニングをしたい。

・メンバーをどう決めるか、トレーニング参加者をどのように集めるか？

・入居するかしないかは二義的なこととして、まずは勉強会としてそのプロセスを大切にし、被災者が集まるきっかけづくり、まちづくりの一環ぐらいの感覚で行いたい。

・この地区は住宅が全焼した人が多いので、分譲も合わせると350世帯ぐらいになるので、スケールメリットがあるはずである。

・コーディネーターとして石東氏に担当してもらう。

○問題

①運営……誰がどう仕切るか（コーディネーター）

②費用……トレーニングするにも材料費がかかり、調理器具等は用意しなければならない。

③グループ入居……コレクティブを理解した上での入居者をどうやって集めるか？

→まずはもっと広報活動が必要であり、「このような活動、住み方」の想定を伝える。

■問題点の討議

○主なお問い合わせ事項（疑似：お問い合わせセンターとして、主席者から問い合わせ事項を書いてもらった）

・新規住民ができあがったコミュニティに入るのは難しいのではないか？

・運営費をいかに安く抑えるかが重要（共用部分の光熱水費やメンテナンス費等）

・ペットの飼い方のトレーニングも必要

・グループ応募の説明会はどのようにするのか、予定は？

・グループ入居は仮設入居者の移動だけに終わって欲しくない。

・地区外の新規住民に対する配慮も検討してほしい。

・協同生活トレーニングに対する県の意見はどうなのか。等々

○意見交換

①共用費の負担の仕方について

・今回のコレクティブにおける一番の問題である。

・公営住宅法の改正により、応能家賃制度が導入されることになるので今までは同じ公営住宅に入居している人の家賃は一定だったのに、隣近所が皆異なった家賃になる。これによって不満が生まれはしないか？

・片山住宅では費用が個人部分（家賃）と共同部分（通常の集合住宅のエレベーター、廊下などの共用部分とコレクティブの協同部分とが含まれる）に分かれる。家賃に加えてさらにコレクティブ部分の光熱水道費等の共用費を払う必要がある。これは応益であるとすると使用時間や利用頻度に個人差がでるためにややこしくなる。

→利用頻度を想定して費用を算出し、各人が一定額を払うことにする。

→応能家賃制度で定額しか払えない人に果たしてその支出が可能か？

②共用費の集金はどうするのか？

→居住者が共用部分の費用を居住者の代表として皆から集金。

→でもこれは普通の市営住宅でもやっている。

→コレクティブ住宅は協同部分の光熱水道費も負担するため、一般公営住宅よりも高くつくことになることを理解してもらう必要がある。

②管理運営について

・様々な条件、想定できることなどを提示し、後は住人間の話し合いで決めればよい。ただし、行政の側は入れ物をつくるだけでなく、それらが決まるまではサポートする。（県の住宅管理課は恒常的にずっとバックアップする必要がある）

・居住者に任せられると言うところまでは供給側でサポートしていく必要がある。また、供給側は考えられる問題をどうしていくのかをある程度決めておいたり、供給側の公と居住者の間にある程度のルールを作っておく必要がある。

③新たな入居者の選定

・コレクティブのく暮らしに合わない人が入ったらどうするのか。思っていたのと違った、というような場合。

→合わない人は抜けられるようにできていなければならない。その人自身のためにも残りの入居者のためにも。しかし、せっかく公営住宅にあたったのだから、抜ける場合は受け皿公営住宅が必要になる。

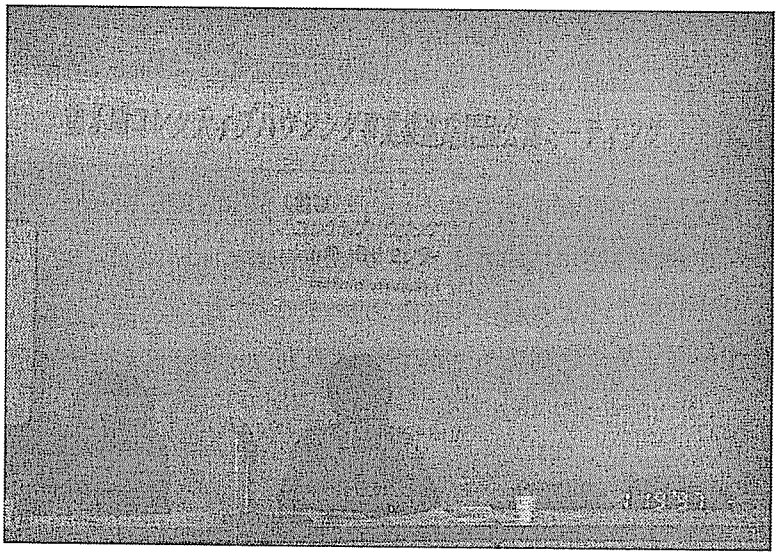
以上の事情を理解してもらえる説明会、パンフレットづくり、テレビ報道など広報がさらに必要。住み方の同意書が必要になるかもしれない。？

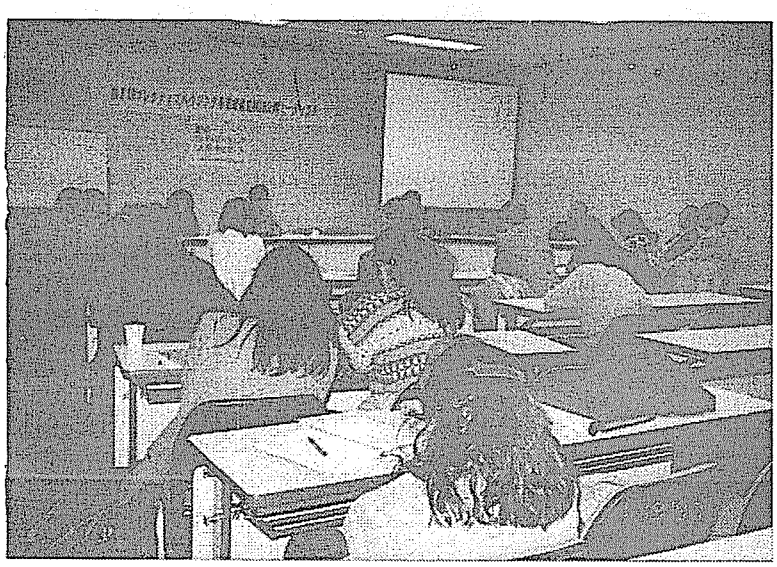
○提案

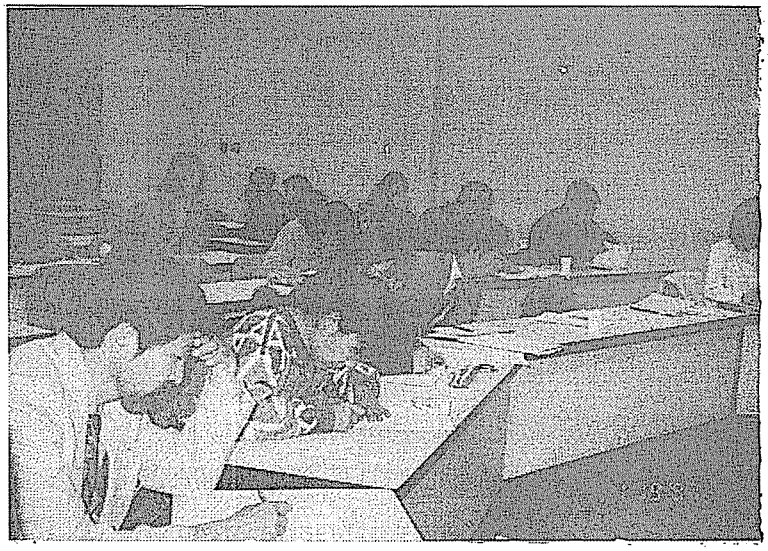
・片山住宅入居者をリーダーとして以降のコレクティブづくりの核になってもらう。

・片山住宅は見学者が多数に上ることが予想されるから入居者に説明が必要だが、いっそのこと体験入居用の実験住宅にしてしまってはどうか。

◎コレクティブハウジング事業推進応援団の公開ミーティング（市民とＮＧＯの「防災」国際フォーラム）1997.1.19







第２期コレクティブハウジング事業推進応援団 第５回ミーティングのお知らせ

寒中 お見舞い申し上げます。

震災２周年の盛りだくさんの報道が終わり、また被災地区の状況が遠ざかろうとしていますが、わたしたちはしっかり見守っていきましょう。

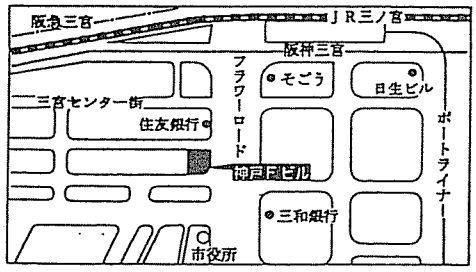
今回の報道の中で、今までと違ってきた視点がひとつあったような気がします。震災後丸２年を経過して、住まい、暮らしを考える時、数合わせの復興住宅だけを供給しても不十分だということが、多くの方面で認識されたようです。特に仮設住宅に住んでおられる高齢者等の問題がクローズアップされ、社会的弱者がこの２年間で身体的にどんどん弱ってきたということ。希望の持てない先の生活で、不安定な精神状況が身体状況をますます弱体化していっているようです。県はコレクティブハウジングさらに追加して100戸程事業化を考えているらしいという報道もありました。

さて、２月２７日から３月１９日まで復興公営住宅の第３次一元募集が始まります。その中で、全国で初めての公営コレクティブハウジング(県営片山ふれあい住宅 ６戸と神戸市営真野ふれあい住宅 29戸)の募集とグループ募集の試みがなされます。グループ募集はコレクティブハウジング以外の一部の公営住宅でも適応されます。

そこで **第５回ミーティングは、コレクティブハウジングやグループ募集等について、分かりやすく説明するために、仮設住宅等への巡回説明会を企画し、具体的スケジュールと巡回者を検討** したいと思っています。 ぜひ ご出席ください。

○日 時 1997年２月12日（水）18：30～20：30

○場 所 神戸Ｆビル 11階(長大内)会議室



第２期応援団運営スタッフ
石東直子（応援団長／石東・都市環境研究室）
小林郁雄（コー・プラン）
天川佳美（ 〃 ）
中水流ゆき（こうべすまい・まちづくり人材センター）

連絡先：まちづくり灘コー・プラン
〒657 神戸市灘区楠丘町2-5-20
T:078-842-2311 F:078-842-2203
E:PXU15104@niftyserve.or.jp

第５回ミーティング（1997.02.12）議事録　・出席者 約40名

■石東氏あいさつ
・片山、真野コレクティブの募集とグループ入居制度が始まります。
・出前説明会等を計画しております。
・コレクティブハウジングは高齢者用ではなく本来、多世代が住む住宅である。
・震災を機に高齢者を中心としていますが真野のコレクティブ住宅は本来の姿になっています。
・（Ａ３のパンフレットを元に）コレクティブの説明。
　・コレクティブの住まい方
　・共同の住まい方のルールをつくる。
　・共に生きる住まい方。
　・従来の日本にない住まい方である。
　・仮設住宅での孤独死などの問題。
　・仮設住宅でできたふれあいのグループを生かしたいとの要望からグループ入居が実現。

■出席者の自己紹介

■出席者の報告等

小　森：県外避難者のへのＰＲ活動が足りない状況である。

斉藤(県)：片山住宅について説明します。玄関を入ったところでみんなに会える。靴を履きかえるとふれあい空間にはいる。共同玄関に入ったところに共用空間がある。共同玄関を入ったところにＬＳＡを配置、共用便所を設置。２階建てにエレベーターを設置。１ＤＫのタイプに和室タイプと洋室タイプがある。ユニットバスは将来介護が必要になったときの為の広さを考慮。洋室はフローリングとした。

小川(県)：（ひょうご復興コレクティブハウジングのパンフを元に説明）片山住宅の場合は６世帯グループとする。あとの４団地の募集方法については検討中。片山の場合60歳以上の単身者世帯で自炊可能な方。（シルバーハウジングの入居者資格と同じ）

小　森：応募状況の倍率等の情報は逐一教えてくれるのか？

○　○：仮説入居者の中にはどんな所であれ入居したい人がいる。

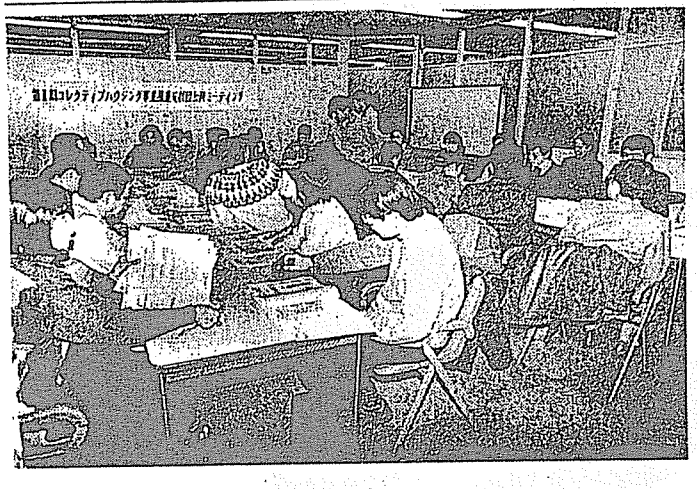
森　栗：コレクティブの理念を理解できる人に入居して欲しい。

県　：ひょうごフェニックスネットで団地別の応募状況を知らせる方法を検討中。

神戸市：リアルタイムでの情報は無理かも知れない。最終時に応募がかたまってしまうと思う。

小　野：応募者にコレクティブハウジングの趣旨がどのくらい理解されているのか客観的にはかる材料がない。

石　東：シルバーハウジング、コレクティブハウジング、グループ入居、それぞれの説明をきちんと別々にする必要がある。



第２期コレクティブ・ハウジング事業推進応援団のミーティング＝神戸市中央区（12日）

神戸新聞 1997.02.14

コレクティブハウス、グループ入居に理解を

仮設住民への説明会始まる

ボランティアの事業応援団

全国で初めて建設される公営コレクティブハウスやグループ入居について、正しく理解してもらおうと、ボランティアらの有志でつくる「第二期コレクティブ・ハウジング事業推進応援団」が十三日、神戸市西区の仮設狩場台第二住宅を皮切りに同制度の説明会を始めた。

ースをもった共同住宅。北欧などで実用化されており、高齢者同士が支え合いながら生きていく超高齢社会への新しい住まい方として期待が高まっている。また、震災後、高齢者は新しい人間関係をつくることがとくに難しいことから、仮設住宅で芽生えたコミュニティーを維持、発展する方法として、グループ入居と併せて検討されてきた。

同応援団は学者や都市プランナーなどが中心となって結成。二十七日から始まる公営住宅の第三次募集では、コレクティブハウス三十五戸や高齢者向け住宅のシルバーハイツに加え、一般公営住宅でもグループ入居が行われ、募集要項の複雑化が予想される。このため、「本当にコレクティブハウスの精神を理解し、共同生活を希望する人が入居できるようにしよう」と、仮設住宅のふれあいセンターなどで制度の説明会を始めた。

説明会前の十二日夜、神戸市中央区でミーティングが行われ、ボランティアなど、約四十人が集まり説明の方法などを検討した。参加者からは「公営住宅に早く移りたいためにコレクティブに申し込むというのでは、逆にコミュニティーを壊すおそれがある」と指摘があり、「共同生活が嫌な人にはやめるように勧めることも大切」などの意見が出た。

同応援団では今後、メンバーらが各仮設住宅を回って、コレクティブハウスなどの説明をしていくという。

超高齢社会への新しい住まい方

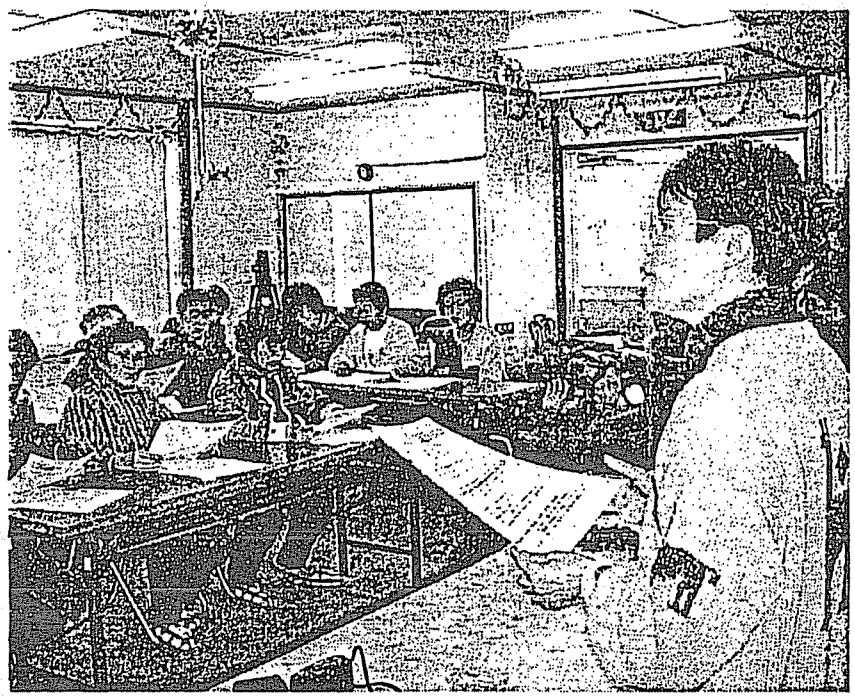
コレクティブハウスは一つ屋根の下に、それぞれの「家」ともいえる個室と大浴場や台所などの共有スペ

入居者募集を前に説明会

初のグループ応募

ボランティア団体 仮設住民ら聴き入る

全国にさきがけて神戸市長田区の二カ所に建築される「公営協同居住型集合住宅」（コレクティブハウジング）の入居者募集（今月二十七日から）を前に、同住宅の実現に向けて活動してきたボランティア団体「コレクティブハウジング事業推進応援団」のメンバーらが十三日、同市西区狩場台の狩場第二仮設住宅のふれあいセンターで、住民を対象にした説明会を行った。仮設住宅で育まれた良好な近所づきあいを大切にした「グループ募集」など初めての試みが盛り込まれているだけに、応募要綱も複雑になっており、住民らは真剣に聴き入っていた。



コレクティブハウジングの入居者募集についての解説をするため、ボランティア団体が開いた説明会＝神戸市西区狩場台の狩場第２仮設住宅ふれあいセンター

コレクティブハウジングは、台所、部屋など個人の独立空間がありながら、炊事場や談話室など他の多住者とふれあうことができる共同スペースがあるのが特徴。住民同士のふれあいの中で、お年寄りの孤独死を防止し、孤立感をやわらげる効果があるとされる。

今月二十七日から始まる災害復興仮設住宅の第三次募集に盛り込まれた神戸市長田区の「県営片山住宅」（六戸）と「神戸市営浜添住宅」（二十九戸）が、コレクティブハウジングとして設置され、入居者募集の対象となる。

今回の募集では、仮設住宅で育まれた近所づきあいを壊さないように、仲の良い住民が複数で申し込む「グループ申し込み」も実施されるため、応募要綱が複雑になっている。このため、同団体が被災地の仮設住宅を回り説明会を行っている。

この日は、説明を聞いたお年寄りらから「何世帯までグループ応募ができるのか」「高齢者などの弱者には有利なのか」などの質問が出た。

講師を務めた石東直子さんは「初めての試みなので、戸惑いがあるかもしれない。出来るだけ多くの仮設住宅を巡回してバックアップしたい」と話した。

産経新聞 1997.02.14

「コレクティブ住宅」知って

推進応援団 無償で説明会

災害復興公営住宅 入居申し込み開始

初回は長田で 参加者、熱心に質問

27日始まった阪神大震災被災者向けの災害復興公営住宅の入居者募集（3次募集）に関連して、今回から実施される仮設住宅などで気の合った仲間同士が同じ住宅に複数で応募できる「グループ募集」や、公営住宅として国内で初めて導入される協同居住型集合住宅「コレクティブハウジング（ふれあい住宅）」などについて被災者に理解を深めてもらおうと、医師、都市プランナーらで作る「コレクティブハウジング事業推進応援団」がこのほど、無償で説明会を始めた。被災者の置かれた状況を理解する専門家のきめ細かな説明に注目が集まっている。

北欧で1980年代に導入されたコレクティブハウジングは、個人生活を前提としながら生活空間の一部を共有して、数家族が共同居住する集合住宅。県、神戸市では、災害復興公営住宅に261戸を建設する。

応援団は、コレクティブハウジングの設計、募集方法などについて県、神戸市と協議を重ねてきた石東直子・石東都市環境研究室長を代表に、長田区で被災者の健康管理、地域型仮設住宅の訪問看護などを行ってきた上田耕蔵・神戸協同病院長らで構成。応募期限の3月中旬までに、仮設住宅など10数カ所で説明会開く予定。

長田区で被災した高齢者、障害者らが住む地域型・仮設住宅「長楽住宅（71戸、50世帯）」のふれあいセンターで21日に行われた1回目の説明会には、お年寄りを中心に約40人が参加。上田院長、石東室長が、県営、市営によって応募条件が異なるグループ募集制度、高齢者向けに建設されるケア付住宅「シルバーハウジング」などについて説明。熱心に耳を傾けていた参加者は、「高齢者ばかりでグループを組まないと、優先順位枠からもれるのか」など、盛んに質問していた。

応援団では、「片山住宅」（長田区、6戸）「真野ふれあい住宅」（同区、29戸）の2カ所のコレクティブハウジング入居者決定後、県、市に協力して居住のルールづくり、擬似体験トレーニングなどについてワークショップを実施する予定。問い合わせは、神戸市住宅局管理課（078・322・5584）。【中尾 卓英】



毎日新聞 1997.02.28

下町型聚楽住宅　　970312

第２期コレクティブハウジング事業推進応援団
第６回ミーティングのお知らせ

梅の香が春をはこんできました。

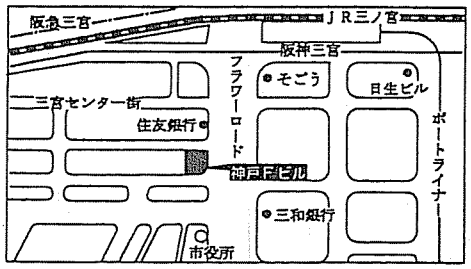
さて、２月２７日から３月１９日まで、災害復興（公営）住宅の第３次一元募集が行われています。その中で、全国で初めての試みの公営コレクティブ・ハウジング（県営片山ふれあい住宅６戸と神戸市営真野ふれあい住宅２９戸）の募集、一般の公営住宅におけるグループ募集およびペットと共に住む住宅の募集が始まりました。

コレクティブ応援団は分かりやすい手引書（上田耕蔵院長作成）をもって、たくさんの賛同者とともに手分けして仮設住宅を巡回して、新しい住まい方の住宅や募集制度などについて説明をしています。“出前説明会”です。

第６回ミーティングは、出前説明会の情報交換とさらに応募締め切りの３月２９日までに向けて引き続き説明会開催のスケジュール、分担について、話し合いたいと思います。

ぜひ、ご出席ください。

○日　時　1997年３月12日（水）18:30～20:30
○場　所　神戸Ｆビル　11階（長大）会議室



第２期応援団運営スタッフ
石東直子（応援団長／石東・都市環境研究室）
小林郁雄（コー・プラン）
天川佳美（　〃　）
中水流ゆき（こうべすまい・まちづくり人材センター）

連絡先：まちづくり㈱コー・プラン
〒657　神戸市灘区楠丘町2-5-20
T:078-842-2311 F:078-842-2203
E:PXU15104@niftyserve.or.jp

第６回ミーティング（1997.03.12）議事録　・出席者 約35名

■石東氏あいさつ
・コレクティブハウジング事業推進応援団の活動について概略説明。
①コレクティブハウジング等についての出前説明会の状況報告。
②今後の予定（募集の締切まで）
③秋の第四次一元募集までに行政にしてもらいたいこと。

■出席者の報告等
松　本：姫路市と加古川市にある仮設住宅を５ヶ所まわった。
３月１日、玉出５０戸、白浜１５０戸の仮設。
３月２日、高砂荒井仮設、米田仮設。
市や県の説明会と同時に説明した。どの場所を選んだら良いかの相談。実際のグループ入居についての問い合わせなし。
３月４日、東加古川仮設。市や県の説明会済み。ボランティアの茶話会のついでに開催。天気の良い日で外出が多く茶話会にも参加者なし。
３月１日の段階で既に応募してしまった人がいた。もう申し込むつもりのない人も多数。保証人がいないので当たっても問題が残るとの意見も。

森　栗：西神を３ヶ所（西神第５、狩場台第２、春日台）
市の説明会にも参加。書類を書き込むための個別相談にのる。コレクティブどころかどこが当たりそうかに終始。以前の勉強会では賛同を得られたがいざとなると個人で申し込む状態。平時に何もしていなければ何にもならない。

小　森：全国１６ヶ所で県外にいる被災者のために説明会を行っている。今回は様子見が多くゼロに近いところもあり、片山住宅は０。グループ入居も０。県外の状況は東と西では公営住宅に対する考え方に違いがある。（西）の人の多くは出身地に帰っていて近くに親戚やお墓がある。神戸に帰ってもいいが今の場所でもいいと思っている。（東）の人は娘が嫁いでいる等の理由で選んでいて、周りに知り合いがあまり無く孤立化が進んでいる。神戸に早く帰りたいとの意向が強い。一律に県外避難者としてくくれない。県外避難者に県の人が直接説明するのは今回が始めて。募集要項が非常にややこしく１００頁をこえる量に言葉が堅いなど不親切極まりない。もっと改善してほしい。

石　東：５ヶ所回りました。元の場所に戻りたい人は元の場所の物件の説明頁しか見ない。既に申し込みをした人の中には失格者に該当する人もいて問題もある。コレクティブ、シルバー、ペット同居の部分については分厚い申込み案内書の中のその頁を見ていない。まずはＰＲが肝心。事前にこれらのことを知ってもらうことが必要。わかりやすい使用説明書が重要だし、新しい試みについては目立つように色紙等で印刷するなどの工夫がいる。大変見にくい。申込書が書きにくくややこしくて申し込みをやめた人がいる。高齢者には申し込みの気力を失わせるような申込書である。
グループ入居は運命共同体となるので、直前にグループ化ができるわけがない。秋までにはこれらのことも含めてやることがたくさんある。中には関心が集まり

コレクティブの説明をしたらもう一度説明会をしてほしいとの要望もあった。１、２回の話し合いでは理解が難しい。

森　栗：３万部刷ったパンフレットが説明会時に届いてなかった。組織的に届ける方策が必要。ボランティアでは無理。世代によって考え方に差がある。５０歳代の女性は興味を持っている。

小　森：説明書に親切さがない。保証人の有無についての説明が行き届いていないのが残念。県外の場所の設定はＹＭＣＡのネットワークを利用した。

松　本：書類不備の人と抽選ではずれた人達への説明や返事はあるのか。

柏　木（県住宅管理課長）：抽選に外れた人には残念でしたの通知をする。書類不備の人には不備の点を説明し、送り返している。必ず連絡は入れている。

小　林：申込用紙を書くのが大変。代わりに代筆するのはいいが収入などプライバシーに関わる点は書きにくい。収入等は税金で調べるとわかるのに、申し込み時にそのようなことが必要なのか。ある程度のファジーさが必要ではないか。

小　森：私も申込書を拡大コピーした。

天　川：返信用のはがきの書き方でどの住所（元の住所か、仮設住宅の住所か）を書けばいいのかわからない人もいる。

上　田：長田の人は長田南部に帰りたいと思っている。ふれあい住宅があるのなら自分はやっていけるかどうかで選んでいる。積極的考えの人は少なかった。入居してから育てていくことが必要か。片山住宅の応募はないのではないか。仮設の共同生活で嫌な思いをした人はまず申し込まない。共同生活でいい思いをした人しか申し込まない。going my wayの人は申し込まない。仮設の中で積極的に活動している人がグループをつくっている。長楽仮設住宅で若い人に聞くと、住宅を選ぶ際に新しいから、３階建できれいから、病院が近いからなどの理由で選んでいた。まずはどの地域に住むかで選んでいる。グループの長についていこうとする高齢者もいる。ついていきたい人の行くところについて行くという選択もある。全くのひとり者のグループは出来にくい。単身者の６人グループは無理。２～３人のグループなら申し込みがあるかもしれない。

石　東：西神の仮設の人で都心の下町から郊外に移り住んだ人は環境の良さを改めて認識した人もいる。西神南地区のシルバーハウジングは人気。立地条件や利便性などを説明することが大切。ちょっとした情報提供がいる。

松　本：加古川の仮設の場合、仮設住宅を加古川に選ぶときから神戸への執着心は薄い。東加古川仮設の場合は仮設敷地に復興住宅をつくってほしいとの運動もおこっている。

石　東：できるだけ長く仮設にいようとする人もいる。

松　本：何処でもいいという人もいるので、場所は何処でもいいという枠があってもいいのではないか。

東　條：仮設にいたい人もいる。申し込まない人は情報不足やどの家に住むかより、どう生きるかがわからない人がいる。とりわけコレクティブなどは生活スタイルのアドバイスが必要。現状は死なないための手当でしかない。
仮設ではお金がなくても生活できるが、恒久住宅では生活するにはお金が必要。生活スタイルを地震で変えられてしまった人にとっては、生きざまを考えることもできない人もいる。

小　林：そういう状況の人は少ない。パーセントは少ない。どのくらいの割合か知りたい。

小　森：仮設によって違う。仮設住宅ごとの申込者状況をデーターとして出してもらえばわかると思う。尼崎などでは高い。申し込み状況を調べると分かるのでは？
仮設でしか住めなくなった人をつくったシステムが悪い。以前は地元で少ないながらでも収入の機会があった。復興住宅に入居してしまうと収入を得るような機会が少ない。何とかして収入の機会をつくることが重要。行政だけでは無理。

浦　上：民生委員、ＬＳＡ、保健婦などそれぞれの人が顔見知りの居住者をつくりひとりひとりの生活実態を知ることが必要。小単位のまとまりごとに。

安　原：神戸市は復興住宅を建てられるところに建てているという感がある。戸数ばかりを気にしているようだ。申込案内書もつくる側の立場だけでつくられているようだ。メーカーのカタログ情報と一緒。住みたい側の情報をたどっていくと住みたい住宅選びができるような申込案内書が必要。

水　谷：仮設の中では精神的ストレスの強い人が多い。精神的に不安定な人が多く、入居説明どころではない人もいる。安い木賃がもう建てられない状況が現実にある。
公的より民間コレクティブをつくってゆけばもっとうまくやれるのではないか。

石　東：コレクティブハウジングのふれあい部分の補助制度が４月１日からできる。（復興基金）

小　森：公的コレクティブでは難しいと思う。参入、脱退の自由の保証が必要。うまくいかない人は次の住宅の斡旋などができないと問題がある。民間コレクティブは自由さが魅力。もう少し流動的なシステムづくりができるといいが。

石　東：入居までの間に半年から１年くらいはルールづくりなどの協同生活のトレーニングがなければ成功しないと言い続けてきた。真野ではそれができる見込み。また、入居後でもこの住まい方に嫌になった人の受け皿住宅が必要。反対に空き家になった住戸への入居の方法にも居住者参画で決めるなどの方法が必要。

松　本：住宅の戸数も問題。片山の場合６戸では……。

石　東：コーポラティブのコレクティブでなければ少し難しい。つくる段階から住まい手が参画できると良い。それが本来のあり方。

小　林：38,000戸の260戸がコレクティブ。１％に満たない状況ではモデル以外のなにものでもない。片山住宅は公募が無しなら考えようはある。公平性という視点のみで公営住宅を建てようとするのはもうダメである。シルバーハウジングでのコレクティブの展開が必要である。

石　東：下町の人は今回ＲＣ造の共同住宅に住むのが初めての人もいる。生活の仕方、アドバイス、フォローが必要。

天　川：仮設住宅の出前説明会に行くのはすでにその仮設でボランティアを続けている人たちと一緒に廻るのが必要。今までの状況を良く知ってる人たちの活動と連携させたい。

森　栗：①３月19日の第３次公募の締切に向けてターゲットを絞って説明会をする。
②入居前の協同居住のおけいこの方法
③おけいこでの楽しさを広報→第４次公募のマーケティングに使う
④仮設まわりのボランティアグループとの連携
地域と関わる住宅にできるようにしたい。

石　東：片山住宅は立地条件にも問題がある。計画の立地条件には、社会的環境条件と物理的環境条件を検討することが必要。

安　原：なぜ６人一組なのか。（片山住宅）

小　森：県外の人は友達がないからコレクティブなら戻って来やすくなっている。ＰＲを県外にもっと広めたい。

中　辻：片山のふれあい住宅の運営をまかされる（シルバーハウジングの生活援助員派遣事業として）予定だが、委託運営の中身が今の状況ではっきりしていない。住み方のかたちが見えない。欠員が出たときには住民が自分たちで選べなければ駄目。共同生活には経済状況の同程度の人の入居が必要。鷹取東で民営のコレクティブハウジングをつくる予定。公営とは違った味を出していきたい。見学させることが必要となる。

1997/ 3/12

ＦＡＸ送付状

まちづくり㈱コー・プラン
小林　郁雄

●下記のとおりＦＡＸ送信させていただきます。

表紙を含めて全　　枚

3　INET GATE　　INT00103　　97/03/10 11:28
　題名：houkoku

Date: Mon, 10 Mar 1997 11:25:50 +0900
From: matsumoto <mat@hjc.himeji-tech.ac.jp>
To: 'コープラン' <PXU15104@niftyserve.or.jp>

播磨地域コレクティブ応援団説明会報告
姫路短期大学　松本　滋　mat@hjc.himeji-tech.ac.jp

姫路市玉手仮設住宅　３／１午前
神戸市による説明会の一部に入れてもらった　参加３０名くらい
シルバーについての相談があっただけ、あとはどこを選ぶべきか相談に乗る
姫路市新白浜仮設住宅　３／１午後
神戸市による説明会の一部に入れてもらった　参加２０名くらい
特に相談なし、すでに当選しているおばあちゃんの相談、どこを選ぶべきか相談に乗る、　高砂市米田仮設住宅　３／２午前
神戸市による説明会の一部に入れてもらった　参加３０名くらい
特に相談なし
高砂市荒井仮設住宅　３／２午前
神戸市による説明会の一部に入れてもらった　参加３０名くらい
特に相談なし、あとはどこを選ぶべきか相談に乗る
東加古川仮設住宅　３／６午前
コープボランティアの茶話会を利用して説明会を企画するが参加者ゼロ。お天気がよくみんな外におでかけ？　ここでは東加古川に復興住宅をという運動が進められている。

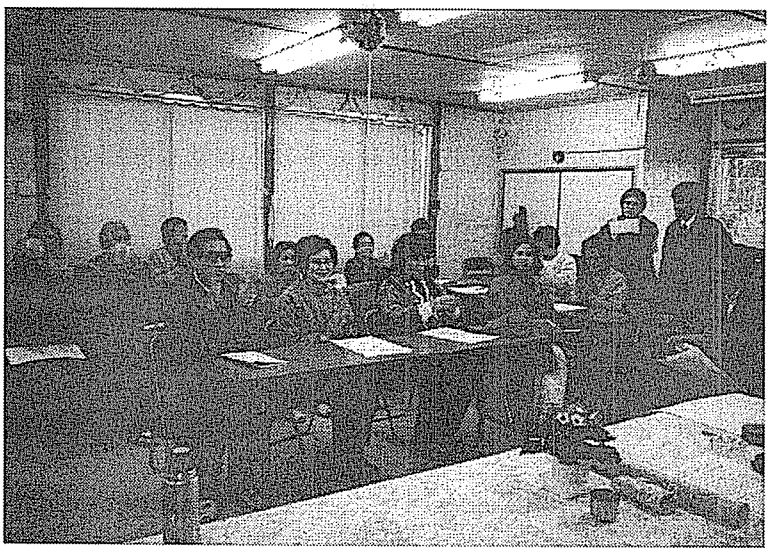
総評：遠隔地仮設住宅ではコレクティフへやグループ入居の声はほとんど聞こえない。１／３は例え確率は低くても自分の要求に合う条件の良い所を探し、１／３はどこでもいいからとにかく早く当たりたいから条件が悪く人の嫌う所を探す、残りの１／３は最後まで仮設住宅に居たいから申し込まない。という感じ。「ここは不便やし風呂もついてへんから誰も申し込まないのでは」というサジェスチョンはやや気が重い。改善されているはずだが、保証人の問題を心配する声もある。何しろ書類も分厚く、説明する職員も専門外のため四苦八苦。
各仮設住宅とも住民同士の仲がむつかしくいろんな声を聞かされる。

◎コレクティブハウジング事業推進応援団の仮設住宅を巡っての“出前説明会”の風景

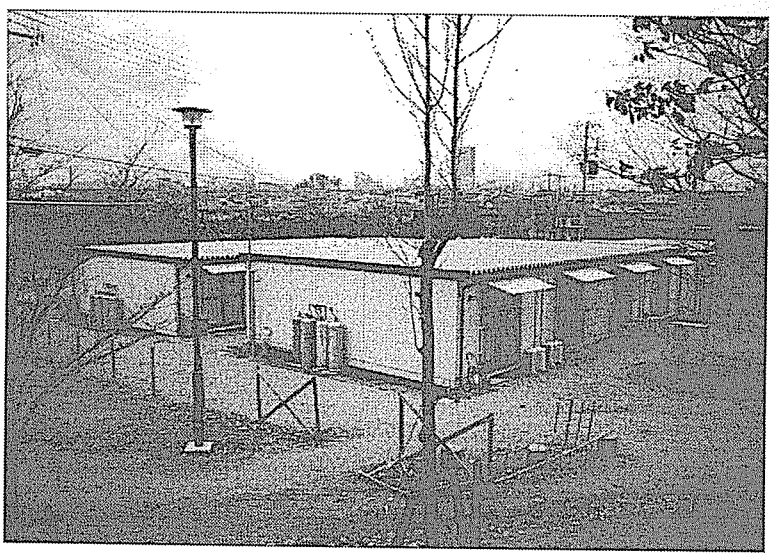


長田区長楽地域型仮設住宅
(1997. 1. 22)

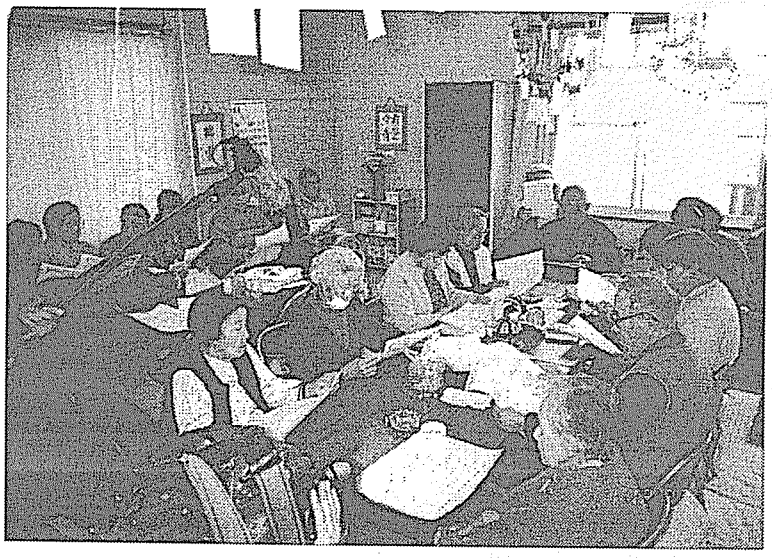


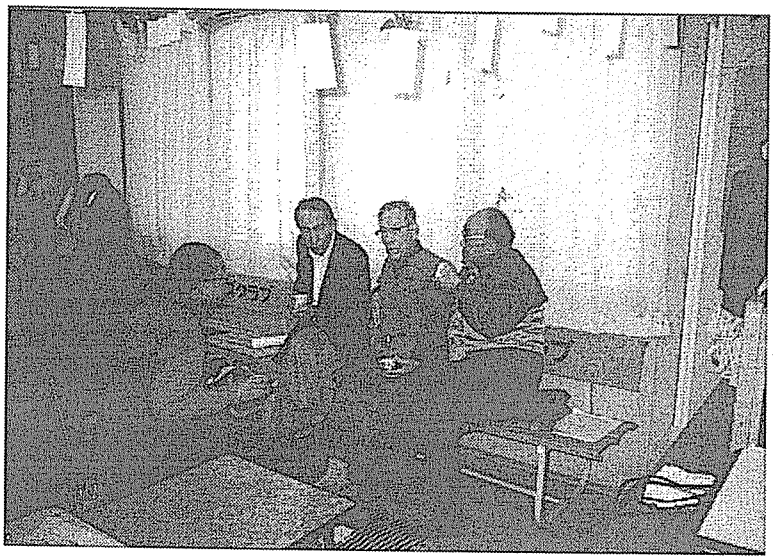


西区狩場台第２仮設住宅
(1997. 2. 13)

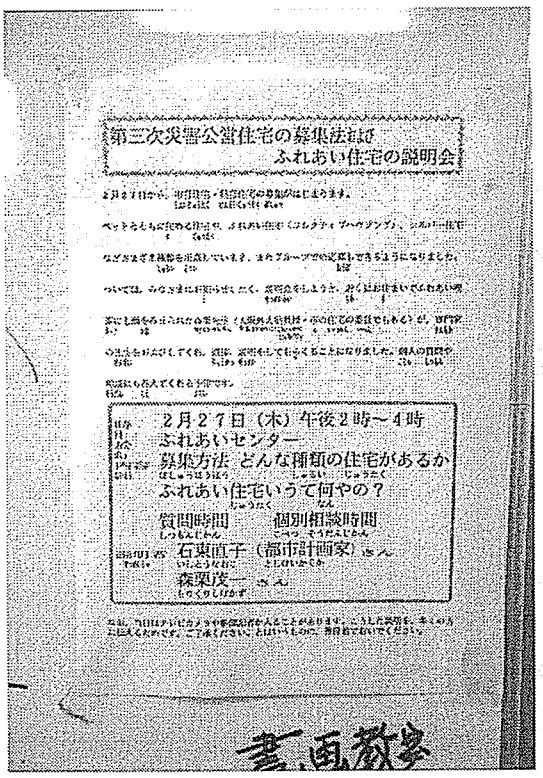


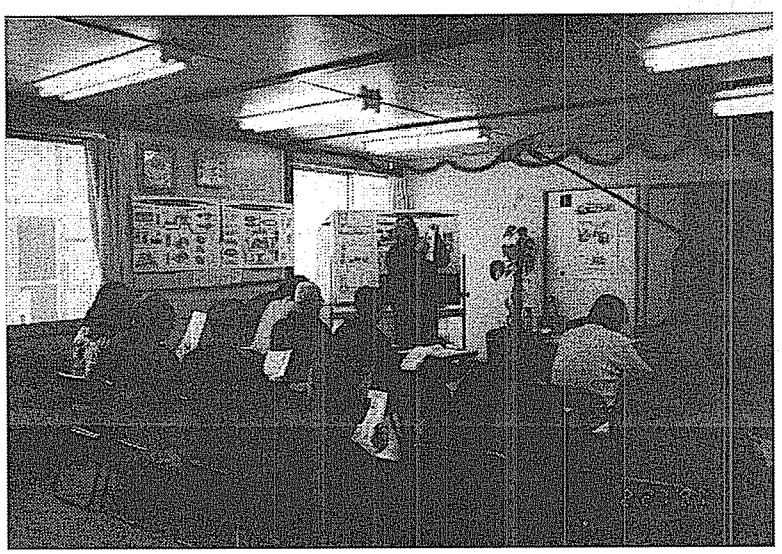
西区西神春日台仮設住宅
(1997. 1. 12)



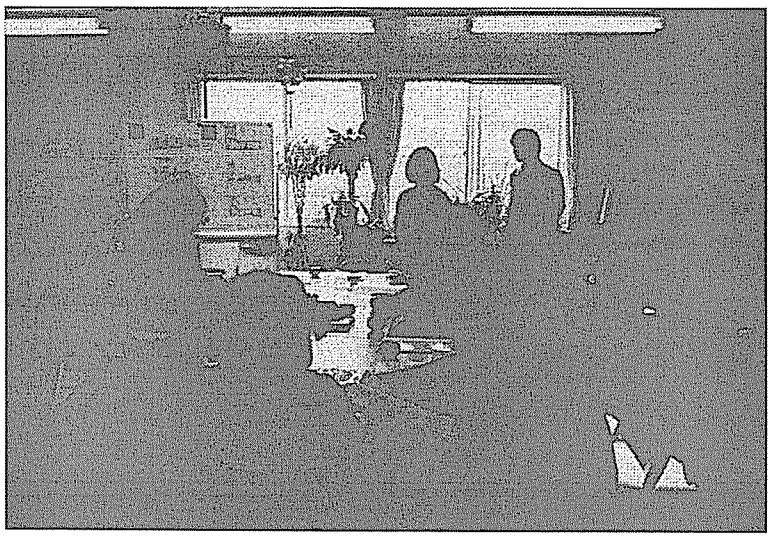


西区西神第５仮設住宅
（1997. 2. 27）



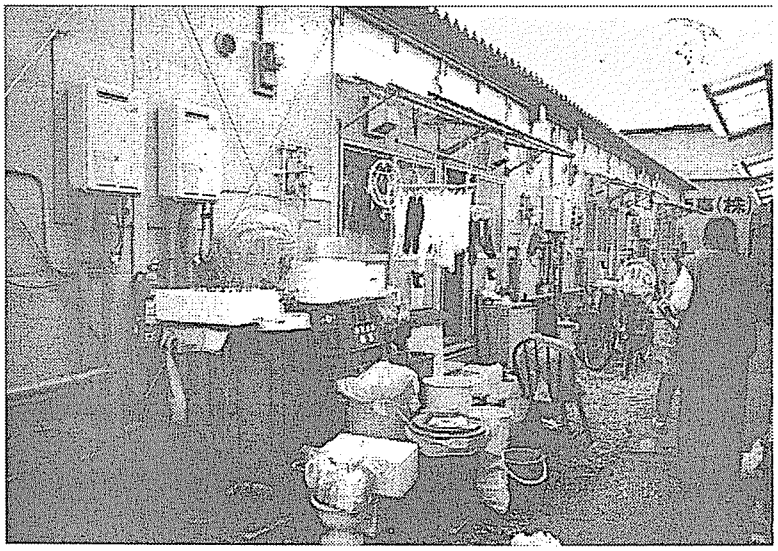




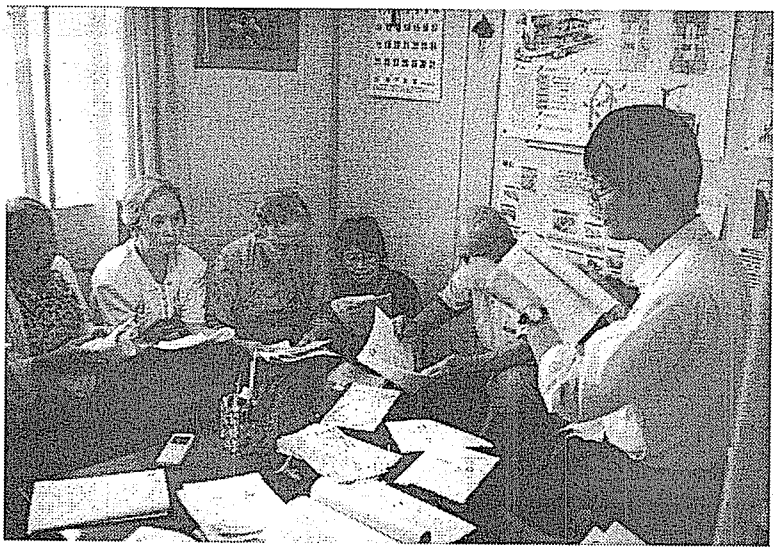


中央区王子南公園地域型仮設住宅　　(1997. 3. 5)





長田区苅藻仮設住宅
(1997. 3. 16)



灘区寿公園地域型仮設住宅
(1997. 5. 15)





灘区寿公園地域型仮設住宅
(1997. 9. 20)

第２期コレクティブハウジング事業推進応援団 第７回ミーティングのお知らせ

紫陽花が雨にうたれ、花々が息づく季節になりました。

しばらくぶりにコレクティブハウジング事業推進応援団の会合を開催します。

先の災害復興住宅第３次一元募集でのコレクティブハウジングの応募状況や、二つのコレクティブハウジング（真野ふれあい住宅と片山ふれあい住宅）のその後の状況展開などについて、情報交換をします。さらに、秋に予定されています県営のコレクティブハウジング（約２２０戸）についてのかかわりなどについて意見交換をしたいです。

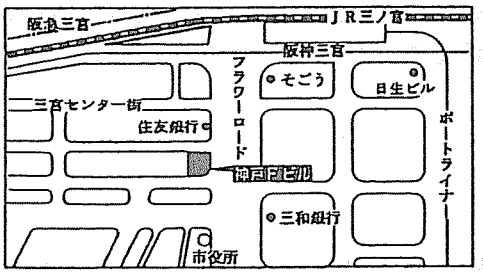
次ぎのような内容を予定しています。

1．神戸市営・真野ふれあい住宅の応募状況と応募者像
2．兵庫県営・片山ふれあい住宅の体験見学会開催状況と入居希望者状況
3．寿公園地域型仮設住宅入居者のコレクティブハウジングの学習
4．真野ふれあい住宅の入居前の協同居住の学習・協働トレーニングのプログラム
5．地域型仮設住宅の生活相談員の報告
6．被災者向けコレクティブハウジング等建設事業補助制度、秋の県営コレクティブハウジングの募集予定など
7．そ　の　他

少しもり沢山ですが、ぜひご出席ください。

○日　時　1997年６月11日（水）18：30～20：30

○場　所　神戸Ｆビル　11階(長大内)会議室



第２期応援団運営スタッフ
石東直子（応援団長／石東・都市環境研究室）
小林郁雄（コー・プラン）
天川佳美（　〃　）
中水流ゆき（こうべすまい・まちづくり人材センター）

連絡先：まちづくり雛コー・プラン
〒657　神戸市灘区楠丘町2-5-20
T:078-842-2311 F:078-842-2203
E:PXU15104@niftyserve.or.jp

第７回ミーティング議事録（1997.06.11）・出席者２５名

■石東氏あいさつ

・資料の説明

１．神戸市営・真野ふれあい住宅の応募状況と応募者像
２．兵庫県営・片山ふれあい住宅の体験見学会開催状況と入居希望者状況
３．寿公園地域型仮設住宅入居者のコレクティブハウジングの学習
４．真野ふれあい住宅の入居前の協同居住の学習・協働トレーニングのプログラム
５．地域型仮設住宅の生活相談員の報告
６．被災者向けコレクティブハウジング等建設事業補助制度、秋の県営コレクティブハウジングの募集予定など

■主な意見

も　り（寿公園地域型仮設住宅の世話役）：独自で資料集めをして居住者と勉強をしている。月に２～３回、皆で話し合っている。コレクティブハウジングでの共益費が5,000円から6,000円というのは仮設の住民には無理。年金生活者には高額な共益費の支払いは無理。片山住宅を見学に行ったが電気調理器具の取り扱いが難しく不安に思っている。協同生活はありがたいが誰かリーダーがいる。

大　西：県営片山住宅が何故あのような（応募者ゼロ）結果になったかは単なる情報不足だけではないのではないか。Ｓ型は、小さいから単身者しか入れないというのはどんなものか。単身入居でなくてもいいのではないか。夫婦や姉妹でも。

小　林：被災者復興支援会議の一員です。県の管理課長に４つの陳情をした。

①秋のコレクティブハウジング募集（220戸）は高齢者向きしかない。真野の場合高齢者向けだけの入居者をみると平均年齢７８歳だった。年齢層のことも考えてどうにかならないか。一般向け住宅との混同はできないか。後期の計画では（尼崎市と宝塚市での県営コレクティブハウジング）一般向け住宅も入っているのに、前期に計画された住宅はシルバーのみというのは危険である。もっと若年層も入れるようにしてほしい。

②片山住宅は秋の募集のＰＲ用モデルに使ったらどうか。

③全ての住宅で、特にシルバーでは、入居前に入居者懇談会の企画をたてたらどうか。

④南芦屋浜の入居前の入居者ワークショップの結果、土いじり、花いじり、ペットを飼いたいなどの希望が出た。このような希望を可能にできないか。

石　東：春の第３次募集時の地域型仮設住宅の住民の受けとめ方、そして秋の募集に対してのご意見をお聞かせ下さい。

坂　本（長楽地域型仮設住宅のＬＳＡ）：第３次募集時の仮設住民の反応は、長楽住宅は長田区の被災者が殆どなので長田に戻りたい、残りたいとの希望が多かったので、真野コレクティブハウジングに申し込むことにした。何回かの説明会（コレクティブハウジング事業推進応援団や上田先生、ＬＳＡの説明）の後、グループ募集を考える中でグループづくりに悩む人も多かった。この仮設住宅で共同部分があ

る生活を経験しているので嫌な思いを受けたことのある人は申込みをしなかった。その他協同生活で良い思いを受けた人でも申込みをしなかった人はコレクティブハウジングの共益費の高さがネックとなった。片山住宅募集に関しては、６人グループは出来なかった。グループの核になるリーダーがいなかった。６人の高齢者ばかりが暮らすのは無理。誰かリーダーがほしいと思っている。行政と、年金すらあたらない人たちにとの間に、共益費の捉え方の差があると感じた。民間住宅は高齢者に貸そうとしない。老人ホームはとても狭き門。その中で住まいを探すのは大変な状況。シルバーハウジングやコレクティブハウジングで「自立できる人」ということで閉め出されたら、高齢者は行くところがない。
コレクティブハウジングに当選した方の反応は、現実になると不安が増大している。不安だらけといってよい。共益費の問題、協同生活の不安、プライバシーの問題等々。共同だから何もかもみんなと同じにしないといけないのかと不安が身近に現実化してきている。５年後１０年後のことを考えると、一般世帯の人も高齢化する問題が出てくる。入居者同志の助け合いに依存されると若年者への負担が大きすぎる。今後、空家が出た時は、高齢者が入居するのではなくできるだけ若い人にも入ってもらうようにしなくては、後々大変なことになる。

中　道（元寿公園地域型仮設住宅のＬＳＡ）：第３次募集に際して寿公園の人は長田区に住む気はないので募集住宅の場所が遠すぎた。地元以外（灘区以外）は外国だという感じをもっている。水道筋あたりは、とても便利。ここを離れられない人がほとんど。

も　り：仮設の１６世帯のうち１世帯しか当選しなかったような状態。シルバーハウジングは倍率が高くて当たらないのに、６０歳以上は自動的にシルバーに申し込むように行政からさせられている。高齢者ばかり集めるな、と言いたい。抽選にはずれた人のショックが大きい。そこで、すぐにコレクティブハウジング応援団に来てもらって、説明会をした。仮設の人に公営住宅の見学をさせているが鉄筋コンクリートの家に住んだことのない人ばかりで住まい方に不安を感じている人がいる。

中　道：灘区には３ヶ所の地域型仮設があるが、大和仮設と高羽仮設はＬＳＡはいるが自治会はなくなってしまった。寿公園仮設だけに自治会がある状態。世話をしていた人が仮設を出ていったりして自治会活動が続かなくなってきている。自治会をどうつくるかが問題。世話役もいなくなっているので。

も　り：共益費とコレクティブハウジングの施設費（備品の整備など）自己負担は無理があるので行政に申し入れを考えている。例えば収入に応じた設定にするとか…。月３～４万円の収入の人に対して6,000円もの共益費支出は無理。しかし、灘区にコレクティブハウジングを増やしてほしい。

石　東：一般の公営住宅の共益費は1,000～2,000円でコレクティブハウジングはそれプラス4,000円程いることになる。

坂　本：ガス代と電気代のどちらが高いのかとよく聞かれる。電磁調理器はやけどの恐れがあり危険。高齢で腕の力が無くなくなった時、重い鉄の鍋が使えなくなる。そこまで考えて設計したのか。

小　林：真野住宅の場合モデルルームを作って、住まい方の練習をする計画があるそうだ。

小　森：片山住宅を希望している人のヒアリングを県の人がどれだけ真剣に聞いているのか、選考方法にも不安がある。６人グループでなければ共益費がもたない。入院などで家にいない時の共益費はどうなるのか。コレクティブハウジングは低所得者のための住居ではないことをはっきりさせた方がいい。そうしなければ本来の適応者を追い出してしまう危険性があるので心配。コレクティブハウジングの適応者の基準がいる。公営住宅の中で適応できるところを探すための転居の自由がほしい。コレクティブハウジングが適応しないと分かった人が出ていくための受皿住宅を用意する。住まい方のルールは住宅ごとの少しずつ違っていてもいいのではないか。さらに、入居後ルールの修正ができるようにも。
県外居住者に対しての説明用に案内ビデオを作ってほしい。現地のサポーターに理解してもらうことが必要。

石　東：東須磨地域型仮設住宅にはコレクティブハウジング応援団が出前説明会に行かなかったのに応募がたくさんあったのには、ＬＳＡの方が理解していることの重大さを感じさせられた。

柴　尾（下中島地域型仮設ＬＳＡ、前東須磨ＬＳＡ）：前からコレクティブハウジングには関心を持ち注目していた。コレクティブハウジングを住宅として位置づけるのか福祉施設として位置づけるのか。ケアハウスは、所得に応じて共益費も安くなっている。

坂　本：コレクティブハウジングを低所得者が望めないのはつらすぎる。もう移り住む住宅がない。

石　東：被災地でのコレクティブハウジングの位置づけを考えると、本来のコレクティブハウジングと、被災地でのコレクティブハウジングの２種必要で、後者は福祉に少し近いサービス提供がいると思う。

坂　本：共益費支出の苦しさを共同居住者の中で言えない悩みを持っている人がいることをわかってほしい。協同居住ができなくなった人たちへの受皿住宅確保してほしい。

柴　尾：真野住宅は周辺地域に社会福祉施設が整っているので場所性がよかった。まちづくりとして社会福祉資源づくりは欠かせない。東須磨仮設は地域型仮設で地元の人が寄っているので、グループはつくりやすく、グループ応募を指導できた。

坂　本：シルバーハウジングよりコレクティブハウジングの方が倍率が低いので、コレクティブハウジングは当たりやすいということだけで申し込む人が出てくる。協同生活不適応のような人も申し込んでいるので不安。

小　林：６戸しかない片山住宅のような場合、ひとりひとりの影響が大きい。

坂　本：片山住宅ではキッチンに調理台が無いのには驚いた。

森　栗：秋に募集の大倉山住宅の３２戸の全部がＳ型（単身用）というのは心配。Ｓ型でも夫婦で申し込みできるようなことを考えたらどうか。

石　東：片山住宅の場合、ひとり暮らし６人グループだけの募集だったから希望者が無かったのであって、２人グループや３人グループでも可能にすれば申し込む人も出たと思う。また急勾配の坂という立地条件や周辺の住宅地が戸建ての大きな家がほとんどという社会的環境条件にも問題があった。片山は下町ではない。
秋の募集に際して応援団ができることはどんなことがあるのか。
第３次は無料でＰＲ（出前説明会や住宅の手引きづくり）してきたが、行政を甘やかした結果となったとも考えている。しっかりしたＰＲは行政がすべきことだったのではないか。

森　栗：何をすべきかというと、このまま募集したら危険であるというシュミレーションを作って行政に訴えること。アブナイ状況を防ぐにはどうしたらよいかを行政に考えさせる機会をつくりたい。

も　り：仮設住宅には行政の情報が全く入ってこない。自分で行政に申し入れ、説明に来てもらっている。

森　栗：入居前の懇談会をもたなかったりコーディネーターを置かないことの危険性を訴えなければ。シュミレーションをして地獄絵を書くのがいい。

も　り：仮設住宅の人は住宅の種類なんて考えていない。重要なのは場所。仮設住宅に取り残されることだけが不安なので、どこでもいいということになる。単身だけの３２戸というのは恐い。応援団がもう説明に来ないということになると、もう頼めるすべが全く無くなる。行政はどこまで継続性をもてるのか。応援団自身が継続性をもてるようにしてほしい。

上　田：今日はＳ型の意味を身にしみて感じた。シルバーだけのコレクティブハウジングなんてシルバーハウジングと同じになってしまう。コレクティブを機能させるには、誰が入居するのかということに関係する。

岡　田：被災地でコレクティブハウジングが実現することに意義がある。被災地の仮設での協同生活を経験したからコレクティブハウジングに住むというのは意義がある。地域型仮設が社会化したといえる。

大　西：公平性の原則をどう打破するのか。大倉山コレクティブハウジングは応募ゼロになる方が危険回避となり、いいと思う。民間コレクティブハウジング助成制度に対して応援団もＰＲに協力したい。

石　東：今日の内容を行政に申し入れましょう。無料のＰＲ活動というのは、責任上にも問題が出てくる。ＮＰＯとして確立できるような体制がいる。

<第１回ミーティング関連資料>

H8.8.6

コレクティブハウジング事業の推進　兵庫県

1　趣旨

今回の震災の被災者は、高齢者が多いことを踏まえ、恒久住宅への入居に関しても、従前地や仮設住宅で形成されたコミュニティを継続できるように、あるいは早期に新たなコミュニティが形成できるよう、災害復興公営住宅においてコレクティブハウジングを取り入れ、単身高齢者等が孤独に陥ることなく、積極的に共同生活の楽しみが得られるような住宅を供給する。

コレクティブハウジングのコンセプトとして、「共同化することによって得られる豊かな生活」、「居住者が共に支えあう安心生活」、「地域サービスとのつながりのある生活」の３つを設定し、共同で使用するコレクティブ共用部を重視した設計とするとともに、住宅管理・コミュニティ運営・福祉サービス等生活のバックアップシステムの整備を進める。

具体的には、以下の団地の災害復興公営住宅等において、県営約 130戸程度、神戸市営30戸のコレクティブハウジングの事業化を図る。

2　コレクティブハウジング事業の計画

団地名	所在地	ｺﾚｸﾃｨﾌﾞ戸数	入居時期	住戸専用（戸当㎡）	ｺﾚｸﾃｨﾌﾞ共用㎡（全体）
東部新都心・脇浜	神戸市中央区脇浜町	４４	10年度下期	35～44㎡	362 ㎡
南本町	〃　〃　南本町	２７	9年度下期	32～43㎡	182 ㎡
岩屋北町	〃　灘区岩屋北町	２２	9年度下期	35～44㎡	105 ㎡
片山町	〃　長田区片山町	6	8年度下期	31 ㎡	56 ㎡
大倉山	〃　中央区下山手通	３２	9年度下期	34～37㎡	222 ㎡
県営計		１３１			
浜添	〃　長田区浜添通	２９	9年度下期	35～55㎡	206㎡
神戸市営計		２９			
合計		１６０			

（注）　コレクティブ・ハウジングとは、個人のプライバシーを確保するための私的な住戸をもちつつ、食事や団らんなど、お互いに支えあう協同生活の場を組み込んだ協同居住型の集合住宅。

<第１回ミーティング関連資料>

記者発表資料
平成８年９月１７日
住宅局住宅部建設課
☎322-5577

コレクティブハウジング（協同居住型集合住宅）基本計画策定について
－ 長田区真野地区の（仮称）浜添住宅 －

１．真野コレクティブハウジング研究会のこれまでの経過

◆ 6/18　第１回研究会
　スライドによる事例紹介
　敷地の周辺状況の整理
　配置パターンの検討（ゾーニング案をもとに）

◆ 7/8　第２回研究会
　基本方針の整理（戸数、入居者の想定、シルバーハウジングの適用等）
　プランの検討（モデル案をもとに）

◎ 8/3　第１回ワークショップ
　「暮らし方イメージ」ワークショップ
　（コレクティブについてのイメージをふくらませる）

◆ 8/13　第３回研究会
　管理運営面の検討（入居者選定、バックアップ等）

◎ 8/17　第２回ワークショップ
　「デザインゲーム」ワークショップ
　（設計案をもとに議論する）

◆ 9/3　第４回研究会
　基本計画案（ワークショップでの意見を整理して作成）の承認

２．研究会委員

①外部委員	宮西　悠司（座長）	（神戸・地域問題研究所）
	松原　一郎	（関西大学社会学部教授）
	延藤　安弘	（名城大学理工学部教授）
	石東　直子	（石東・都市環境研究室）
	奥井　正造	（環境意匠計画・奥井研究室）
②神戸市職員	藤村　邦夫	（保健福祉局総務部計画調整課長）
	林田　博	（保健福祉局高齢福祉部在宅福祉課長）
	山本　朋廣	（住宅局住宅部計画課長）
	遠藤　繁光	（住宅局住宅部建設課長）
	川本　勝太郎	（住宅局住宅部管理課長）

３．今後の展開

・第４回（基本計画案の承認）をもって研究会を一旦終了することとし、実施設計に入る。
　今年11月着工、来年夏完成の予定。
・以後も、研究会第２部として、残る課題（管理運営面等）についての検討を継続する。

4．計画概要

震災時や復興の過程において実感した、隣人との日ごろのつきあいの重要性、世代を越えた相互扶助の必要性、共に暮らすことの安心感と楽しさなどの実現を盛り込んだコレクティブハウジング＝協同居住型集合住宅を、神戸市営災害公営住宅として、長田区真野地区（浜添通３丁目）に建設する。

コレクティブハウジングは、

「いつでも誰かに会えるし、いつでも一人になれる」

「ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう」

という暮らしを実現する“協同居住型集合住宅”で、日常生活の中で自然なかたちで人とふれあうことができる。

浜添住宅の計画は、まちづくり・建築専門家、学識経験者、行政等による「真野コレクティブハウジング研究会」で検討を進めてきたが、建設予定地周辺の住民の参加によるワークショップをもち、協同スペースの内容や具体的な設計について住民参加の計画案を作成した。

コレクティブハウジングは集まって住み合う意味あいが強いだけに、成功させるためには、入居前に入居者の協同居住の学習と協働トレーニングが欠かせない。加えてコレクティブハウジングの本領を発揮させるためには、核となる協同スペースにおいての住み手の希望、提案を計画案に反映させる仕組みづくりも欠かせない。その点において、ワークショップはコレクティブハウジングについて理解してもらい、共に住みこなすための意識を喚起し、また、安心して住みつづけるための運営・管理のあり方を住み手自らが考えていくのに、よい方法である。今回の計画は、公営住宅という点から現時点での入居者の特定はできないが、建設予定地周辺の住民の参加によって、参加者が擬似的に居住者の役を演じてワークショップを行うことによって、さまざまな問題点のあぶり出しができた。さらに、入居者決定後の協同居住の学習と協働トレーニングをワークショップで行う場合のよい参考ともなった。

以下に浜添住宅の計画概要を記す。

◎浜添住宅の計画概要

①新しい住まい方なので、その啓発と普及が必要であり、住み手参加のワークショップによって、計画案を決定した。

②居住者の相互扶助の幅を広げるために、多様な世帯が住み合う集合住宅とする。建設戸数２９戸のうち、２１戸を高齢者世帯、８戸を一般世帯とする。なお、高齢者住宅は生活援助員の派遣があるシルバーハウジングとする。

③真野地区の下町の雰囲気に溶け込んだ建物形態である。３階建て。分節型（連続した大きな塊の建物を避ける）。自然の色。町家風の屋根等。

④下町の長屋的な雰囲気を創出する（震災で消失してしまった下町の再生、平成の下町住宅の再生）。南側廊下と住戸近くのたまり場づくり。戸外への広がり、連続性をもつ住戸プラン（例えば、住戸内の台所と戸外のたまり場への連続性をもつ型）

⑤地元の人々との交流を促す協同スペースのつくり（例えば、協同スペースの地域への開放と、協同スペースの利用の活性化のため地域力の活用がしやすいつくり）。

⑥将来の要介護高齢者のための必要設備等の充足の可能性をもったプラン（例えば、自転車置場に介護入浴のための浴室を設置）。

⑦環境共生と省資源のライフスタイルの推進のための配慮（ソーラーシステム、コンポスト、屋上菜園等）、高齢者の生活の安全性への配慮（緊急通報システム、オール電化システム等）

◎管理運営面等の検討課題

協同居住を順調に稼働させるための管理・運営システムとそのサポート体制の確立が必要であり、引き続き“真野コレクティブハウジング研究会（第２部）”と地元でのワークショップによって検討を進めていく（次回第３回ワークショップは、10月27日 午後2:00～5:00、市営真野住宅集会所にて開催の予定）。主な検討課題を以下に記す。

・入居者決定の方式（例えば、グループ募集、入居者登録制度等）

・入居者決定後の協同生活の学習と協働のトレーニングの実施（コーディネーターやアドバイザーの人材の確保や育成等も含めて）

・協同生活運営住人組織や協同生活ルールづくり、入退居者の決定方法等。

５．その他

公営住宅に限らず、民間住宅を含め、今後の超高齢社会をふまえた新しい居住形態として、協同居住型の住宅（グループホーム）のあり方、福祉との連携方法等についても幅広く調査研究を行っていく。

真野っこガンバル!!

阪神大震災真野地区復興まちづくりニュース

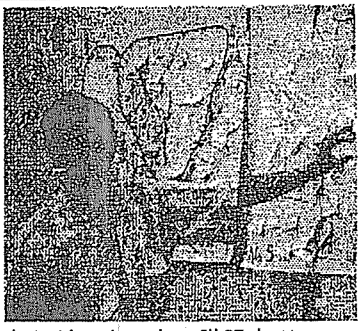
第７６号
平成８年８月１２日月曜日
真野地区
復興・まちづくり事務所
発行者　岸野　賢治
編集長　清水　光久
TEL/FAX 078-671-9834

コレクティブハウジングを考えるワークショップ開かれる!!



八月三日の土曜日に、市営住宅集会所において、真野コレクティブハウジングについてみんなで考えようという会が開かれました。暑い、暑い昼下がりにも関わらず、真野地区にある仮設住宅にお住まいの方や、推進会やふれあいまちづくり協議会協議会の役員の方、行政専門家、学生など七〇人を上回る方々に参加していただきました。

この日はコレクティブハウジングでの、ともに食事をつくったり、食べたり、お風呂に入ったり、洗濯をしたり、という暮らしについてのスライドやおはなしを聞いた後、十名前後で六つのグループに分かれて、コモンキッチン・ダイニング、共同風呂等の大きなテーマ別に「こんな風になったらいいな」という思いや、問題点や解決策を、葉っぱや花の形のカードに記入し、『こんなコレクティブハウジングが出来たらいいなの木』をつくりました。わずか一時間ほどの作業でしたが、まるで桜の木にように花（提案）がいっぱいの木や、たくさんの枝（テーマ）を持つバオバブ風の木ありと、六本それぞれが、それぞれの表情を持つ木に仕上がりました。今回の詳しいまとめは、次の会にお渡しする予定です。



↑ただいま、木の説明中!!

さて、その次回ですが、今度は第一回目の皆さんの意見を受けて、設計者の方がいくつかの設計案を提示します。それらが、ちゃんと一回目の発言をふまえて計画されているのかをチェックし、また「ここはこうした方がもっと良くなるんじゃない」というようなご意見を言ってもらう会にしたいと思ってます。日時は八月十七日（土）三時から六時、会場は第一回目と同じ市営住宅集会所です。

一回目に参加なされた方はもちろん、参加できなかった方も、お誘い合わせの上、是非お越しください。

（斉藤由佳）



↑話しに耳を傾ける参加者の人々

災害復興住宅入居者募集　締切は八月二十日です

災害復興住宅の応募の締切が迫っております。さて、今回は真野地区内で募集している空き家の情報を載せました。左記に表にしていますが、申し込み資格・申し込み方法は、申し込み案内書が神戸市役所・長田区役所等で配布されています。

応募される方は、募集要項をご確認の上、八月二十日までに郵送して下さい。

申込に関する問い合わせ先は

☎〇七八ー七三一ー六九六二

神戸西総合住宅相談所まで

申込住宅記号番号	住宅名	所在地	間取り面積	現行家賃（月額：円）	入居負担（月額：円）	空屋見込戸数
神戸ー１３６	東尻池	東尻池町５丁目	３ＤＫ ６５㎡	42,000 または 57,000	33,000 ～ 54,700	1
神戸ー１３７	真野Ａ	苅藻通４丁目	３ＤＫ ５８㎡	37,000 または 50,000	26,300 ～ 43,600	2 (1)
神戸ー１３８	※ 真野Ｂ	苅藻通４丁目	３ＤＫ ５８㎡	37,000 または 50,000	26,300 ～ 43,600	1

※印のついている住宅は、優先順位に関係なく抽選します。
空家見込戸数欄の（ ）内数字は、応急仮設住居入居者の優先戸数を表示しています。

ひょうご復興コレクティブハウジング―ひょうごふれあい住宅―

■ひょうご復興コレクティブハウジング

コレクティブハウジングとは……

個人のプライバシーを確保するための私的な住戸を持ちつつ、食事や団らんなどお互いに支えあう協同生活の場を組み込んだ協同居住型の集合住宅です。

兵庫県では……

高齢被災者の方を対象として、全国に先駆けて公営住宅に導入します。

シルバーハウジング
LSA（ライフサポートアドバイザー）による相談や、緊急通報システム等のサービスが付帯した住宅

＋

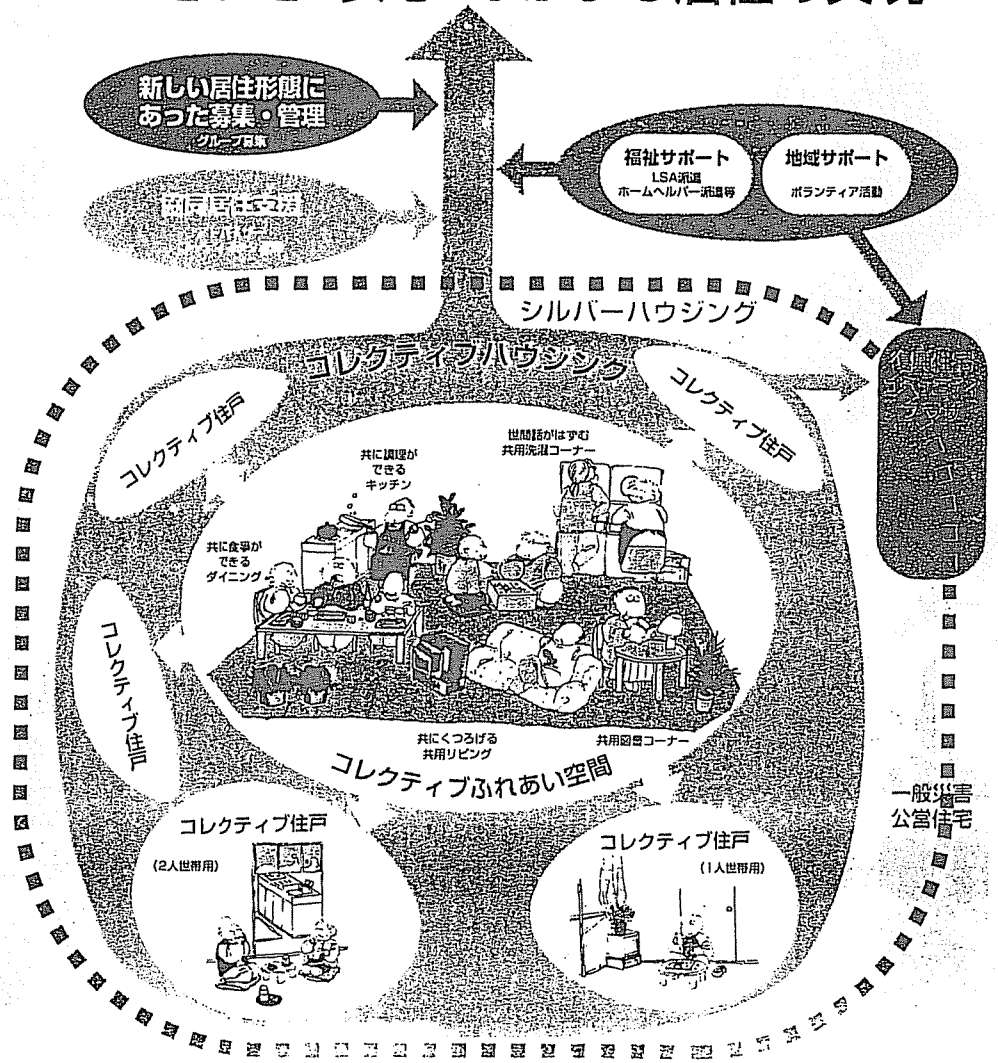
共同利用ふれあい空間
居間・食堂・台所・
図書コーナー・洗濯コーナー等

＝

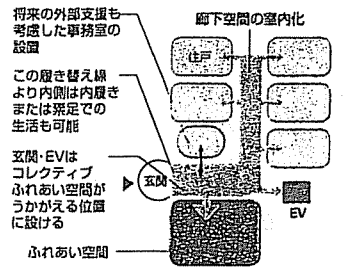
ひょうご復興コレクティブハウジング

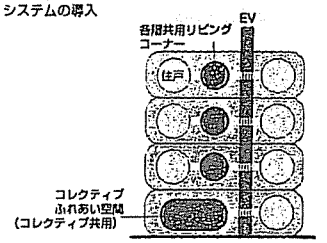


いきいき・安心・なかよし居住の実現

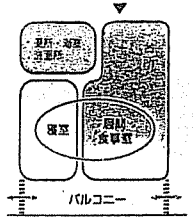


■住宅の構成





■コレクティブ住戸の特徴



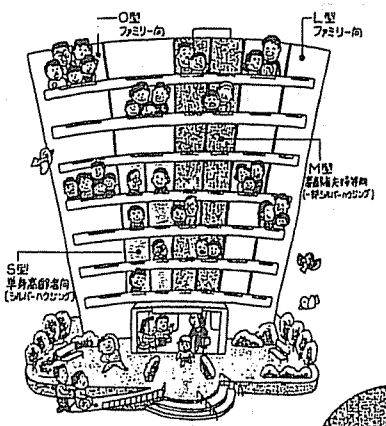
- ●小さいながらも自立した生活ができる住機能を備える
- ●ガラス入の玄関引き戸による廊下空間との交流
- ●建具の引き戸化などの高齢者への配慮
- ●バルコニーは容易な隣戸への避難と交流ができる木戸等とする
- ●将来間仕切壁の移動等により車椅子対応も可能

県営災害復興公営住宅　シルバーハウジング

地震により被災した数多くの高齢者世帯向に、地元市町とも連携して、その生活に配慮した災害復興公営住宅を大量、早急に供給し、高齢者が安全で安心して住み続けられる住宅、福祉のまちづくりを進めます。

S型	約40	1DK	1
M型	50	2DK	2
L型	65	3LDK	2～3
O型	75	3LDK	3～

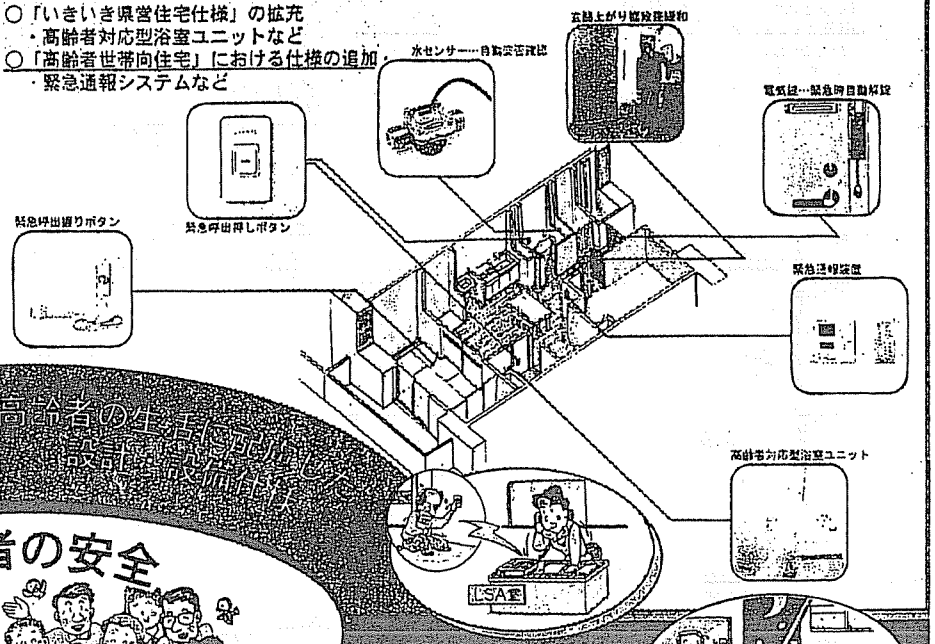
→ 高齢者世帯向住宅
→ 一般世帯向住宅



○世帯人員や年齢構成等に応じた適切な供給

○混住型の住戸配置
・高齢者世帯向住宅の各フロアへの分散、多様な住宅タイプによるフロア構成
・各フロアにおける一般世帯と高齢者世帯との混住による良好なコミュニティ、相互扶助システムの育成

○「いきいき県営住宅仕様」の拡充
・高齢者対応型浴室ユニットなど
○「高齢者世帯向住宅」における仕様の追加
・緊急通報システムなど



高齢者の生活に対応した設計・設備仕様

型別供給

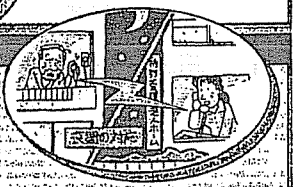
高齢者の安全

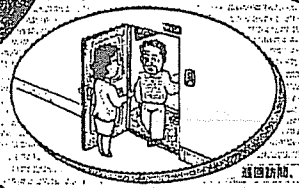
安心居住の確保

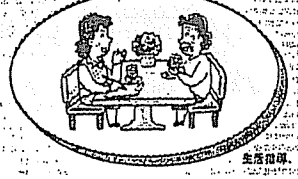
良好なコミュニティの形成

混住モデルコミュニティプラザの整備

保健・医療・福祉との連携

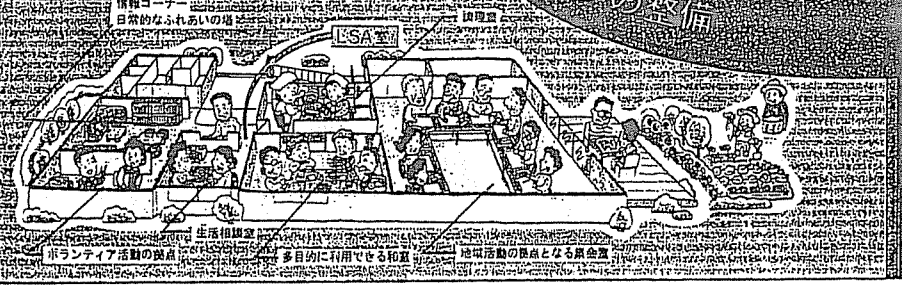






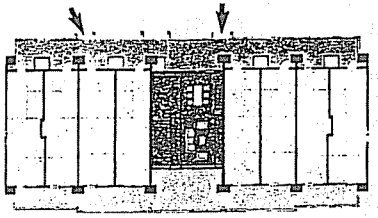
○生活援助員（LSA）の派遣
・緊急時対応
・安否確認
・生活相談　その他

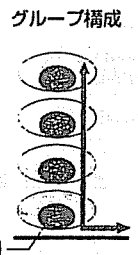
○福祉コミュニティづくりの推進拠点
・ふれあい交流（コンシェルジュ）
・高齢者等生活支援
・ボランティア活動支援等

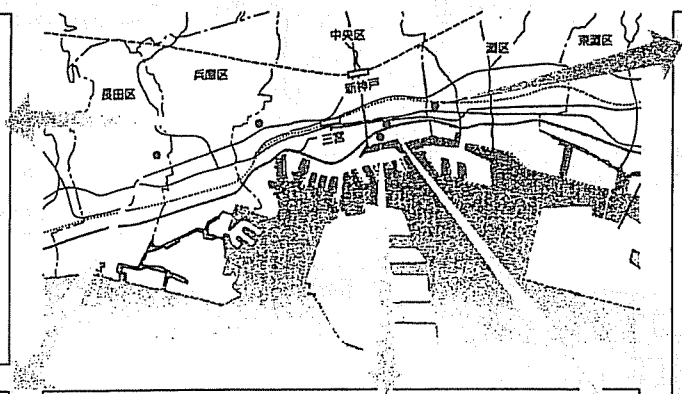


ひょうご復興コレクティブハウジング―ひょうごふれあい住宅 2

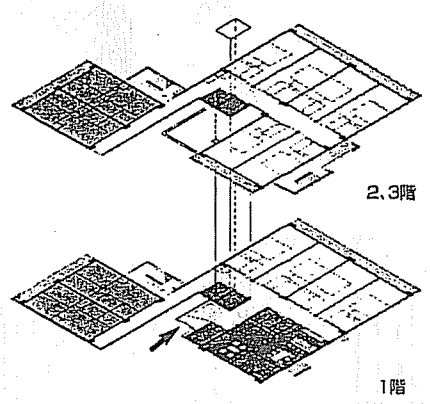
■大倉山住宅 SRC造14階建 32戸（1～4階部分）



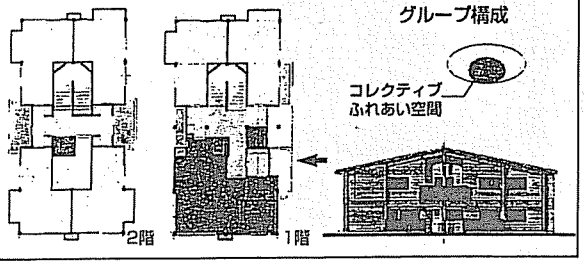




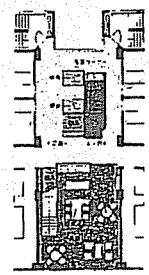
■岩屋北町住宅 RC造3階建 22戸

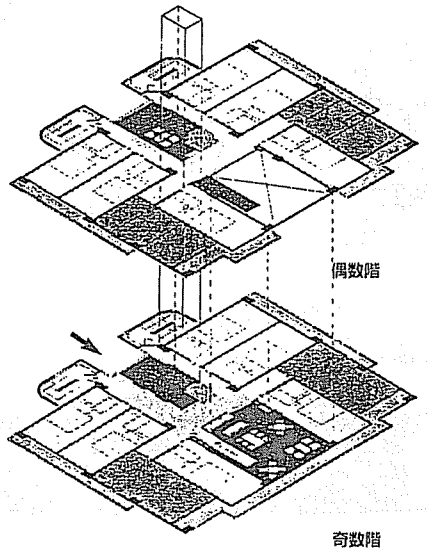


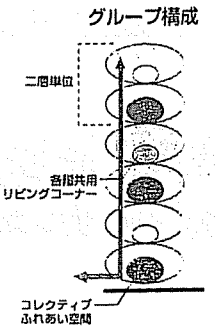
■片山住宅 木質構造2階建 6戸



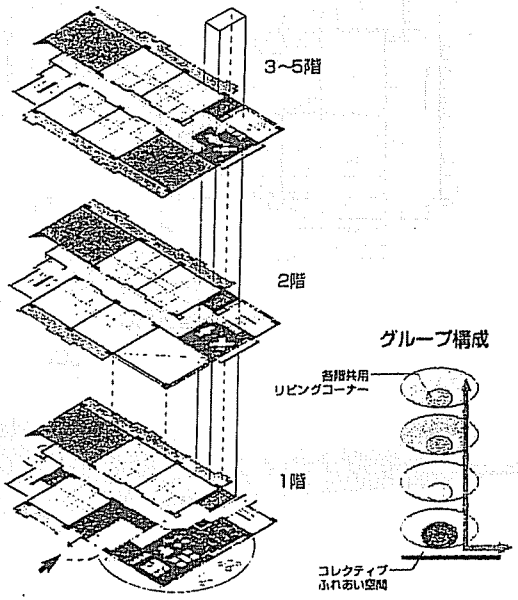
■東部新都心・脇浜住宅 RC造6階建 44戸



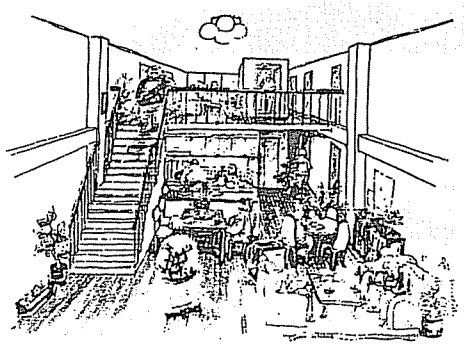




■南本町住宅 RC造5階建 27戸



2層吹抜のコレクティブふれあい空間イメージ



<第３回ミーティング関連資料>

平成８年１１月現在
神戸市住宅局住宅部建設課

シルバーハウジング・プロジェクトについて

1. 建設省・厚生省が，昭和62年度に「ｼﾙﾊﾞｰﾊｳｼﾞﾝｸﾞ･ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ制度」を創設した。
この制度の目的は，住宅施策と福祉施策が密接に連携し，高齢者が地域社会の中で，自立した安全で快適な生活を営むことができるようにハード・ソフト両面にわたり高齢者の生活特性に配慮した住宅を供給することである。

2. 実績

昭和62年度	３０戸	ｼﾙﾊﾞｰﾊｲﾂ菊水	
平成２年度	３８戸	ｼﾙﾊﾞｰﾊｲﾂ長田北	
３年度	３６戸	ｼﾙﾊﾞｰﾊｲﾂ鈴蘭台	
４年度	５０戸	ｼﾙﾊﾞｰﾊｲﾂ六甲ｱｲﾗﾝﾄﾞ，ｼﾙﾊﾞｰﾊｲﾂ日暮	
５年度	４５戸	ｼﾙﾊﾞｰﾊｲﾂ北青木	
６年度	７５戸	大石東第２，ｼﾙﾊﾞｰﾊｲﾂ松風	（計　２７４戸）
７年度	４６戸	松風第４	
	１０４戸	本多聞第７	
	９０戸	灘北第２	
	６０戸	筒井	
８年度	９９戸	ひよどり台第２	
	９９戸	日出第２	
	５０戸	本多聞第８	
	９２戸	玉津北第３	
	１２２戸	湯屋谷	
	２０戸	東尻池第２	
	１１２戸	西神南第２	
	２１戸	浜　添	
	１００戸	脇　浜	
	６８戸	中　道	（災害公営計　１０８３戸）
	１，３５７戸		

3. 特色
(1) 設備
ｱ ｼﾙﾊﾞｰ緊急通報ｼｽﾃﾑ（安否確認ｼｽﾃﾑ，ﾅｰｽｺｰﾙ）　ｲ 団らん室の設置
ｳ 給湯器，ｴﾚﾍﾞｰﾀｰ，手すりの設置　ｴ 玄関扉は上吊式引き戸（灘北第２、筒井住吉）
ｵ 浴槽，流し台の高さを低く設定
(2) 基本サービス　24時間体制でLSA(生活援助員)を配置
ｱ 安否の確認　ｲ 緊急時の対応　ｳ 生活相談　ｴ 各種情報提供等
(3) 選択サービス（有料）
併設・隣接施設(ﾃﾞｲｹｱｾﾝﾀｰ等)の給食・入浴サービス等

4. 震災後の基本方針
仮設住宅入居世帯の約３割が単身高齢世帯であるため，災害公営住宅建設にあたっては，ハード面の整備のみならず，一定の福祉サービスが受けられ，低家賃であるシルバーハウジングの住宅を積極的に供給する。なお，団地内・地域のｺﾐｭﾆﾃｨﾊﾞﾗﾝｽを考慮した配置とする。

(1)	福祉施設併設型 （本多聞第８、日出第２、他）	併設される福祉施設により生活支援ｻｰﾋﾞｽ、緊急時の対応を行う。
(2)	福祉施設隣接型 （松風第３、松風第４）	隣接する福祉施設により生活支援ｻｰﾋﾞｽ、緊急時の対応を行う。
(3)	LSA 派遣常駐型 （灘北第２、西神南第２、他）	昼間は団地内にＬＳＡを派遣し、支援業務を行う。 夜間については民間セキュリティに緊急時の対応を当たらせる。

福祉施設併設型シルバーハウジングについては引き続き保健福祉局との連携を図り適地があれば供給する。ただし整備できる箇所が限定されるため、大量供給が可能な福祉施設近隣接型シルバーハウジングの建設を進めていく。

<第４回ミーティング関連資料>

~~記者発表~~・資料配布				
月／日	担当課（室）	ＴＥＬ	発表者名	その他配布先
2/14（金）	住宅建設課	内線 4756	藤原保幸（斉藤昌之）	なし

コレクティブハウジング~~事業~~の追加について

1　趣旨

今回の震災の被災者には、高齢者が多いことを踏まえ、高齢者等が孤独に陥ることなく、積極的に協同生活の楽しみが得られるよう、県においてはコレクティブハウジングを取り入れた住宅を建設することとし、既に神戸市内の５団地において事業を推進してきたが、この度、阪神間においても住宅・都市整備公団からの買取公営住宅事業として、尼崎市金楽寺団地（仮称）と宝塚市福井団地（〃）の２団地１０１戸をコレクティブハウジング事業として追加することとした。

追加した２団地は、高齢者のみでなく若年の一般世帯にも入居してもらい、子供からお年寄りまで、幅広い年齢層の入居者が協力し合って、豊かなコミュニティを形成することを目標にしている。

これにより、県下のコレクティブハウジング事業は、県営団地が７団地２３２戸、神戸市営団地が１団地２９戸となる。

2　事業（計画）中のコレクティブハウジング

団地名	所在地	コレクティブ戸数	完成時期	住戸タイプ S	M	L	備考
東部新都心・脇浜	神戸市中央区脇浜町	44	10年度下期	32	12	—	全て高齢者向住戸
南本町	〃　〃南本町	27	9年度下期	19	8	—	〃
岩屋北町	〃　灘区岩屋北町	22	9年度下期	16	6	—	〃
片山	〃　長田区片山町	6	8年度下期	6	—	--	〃
大倉山	〃　中央区下山手通	32	9年度下期	32	—	—	〃
金楽寺（追加）	尼崎市金楽寺町	71	9年度下期	32	22	17	Lは一般世帯向住戸
福井（追加）	宝塚市福井町	30	9年度下期	14	9	7	〃
県営計		232		151	57	24	
浜添	神戸市長田区浜添通	29	9年度下期	15	12	2	8戸は一般世帯向住戸
市営計		29		15	12	2	
合計		261		166	69	26	

（注）　コレクティブハウジングとは、各個人のプライバシーを確保した住戸をもちつつ、団らんや食事など、お互いに支えあう協同生活の場を組み込んだ協同居住型の集合住宅

<第７回ミーティング関連資料>

ことぶき新聞

神戸市灘区高徳町３丁目４番地
寿公園仮設住宅・共同編集
１９９７年５月２０日　NO１５

泉村さん、吉田さん、住友さんら三人を運営委員に選出

五月八日、午後二時から「ふれあい談話室」で集会を開催。運営委員の選出、県営片山住宅の見学、協同住宅の説明会の日程確認などおこないました。

「ふれあい談話室」の運営委員については、これまで勤めていただいた宇野さん、森田さん、西村さん、和唐さんのうち、宇野さん、森田さんらが、近く仮設住宅から転居されることになり、改めて選出することにしました。

次期運営委員については、仮設から転居する方もあり、各棟から一名というのがむつかしくなり、それにこだわらないことを確認し、泉村さん、吉田さん、住友さんら三人をえらびました。なお「ふれあい談話室」の運営費の財政については、西村さんがお金を管理し、帳面つけは吉田さんが担当することを決めました。

県営「片山住宅」を見学した一行



片山住宅見学の帰途タクシー代運営費で

コレクティブ県営片山住宅の見学について、十三日に四人、二十日に七人が参加します。区役所が手配したジャンボタクシーで出かけますが、帰りのタクシーについて区役所は「負担できない」ということになり、帰りのタクシー代は運営委員会費から支出することを決めました。

フォーク歌手岡本さん囲んでの集い

５月２６日（月）
午後２時
「ふれあい談話室」

協同住宅を見学

コレクティブハウジング、県営の片山住宅（長田区）を十三日、第一陣の住友さん、水田さん、小出さんをはじめ、区役所の方ら総勢八人が見学してきました。

区役所から手配していただいたジャンボタクシーに乗り、現地に着いたのが午前十時過ぎ。みんなは、北欧産の木材を使ったモダンな建物に目を見張り「百聞は一見に如かず」ということわざのとおり、コレクティブ住宅というのが、高齢者にとって、とても素晴らしい住宅であることを自分の目で確かめました。

神戸協同病院の上田院長、建築技術士の石東さん招き コレクティブ住宅の説明会をひらく

5/15

県の復興住宅計画によると、灘区岩屋にコレクティブ住宅を二十二戸建てることにしています。そこで十五日、神戸協同病院の上田院長をはじめ、建設技術士の石東直子さん、灘区街づくの中井さん、天川さんらを招き、ふれあい談話室で「コレクティブ住宅」の説明会をひらきました。

説明会は、まず上田院長が公営住宅募集のコレクティブ住宅、シルバーハイツ、グループ募集について説明をしました。

グループ募集は、仮設住宅で芽生えたコミュニティをそのまま公営住宅に引き継がれることが望まれ、仮設住宅で知り合った人たちが一緒に移り住める制度であることを説明。二世帯から三世帯がグループで応募するのが一番好ましいと述べました。

シルバーハイツについては、夫婦の場合、いずれかが六十歳以上であればよいが、親子の場合、二人とも六十歳以上でないと入居資格がないことを説明。コレクティブ住宅については、入居者が自然とふれあうように工夫された住まいであることを強調。自分の部屋に「閉じこもってしまう」のでなく、いつでも協同室にいけばみんなとおしゃべりしたり、たまには食事をともに作ったりしながら過ごせる住宅であることなど説明しました。

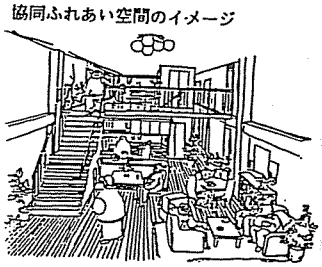
また協同型住宅について、それぞれの住まいは台所、浴室、便所などが備わった独立した住宅で、それに入居者が協同で使うスペース（協同台所・食堂・談話室）があり、入居者同士が自然な形でふれあうことができるように工夫されていると述べました。

協同室の使い方や管理については入居者が相談して決め、ふれあいと助け合いを育てていくことが望まれると語り、協同型住宅はお年寄りばかりを寄せるのは好ましくないと指摘。協同型住宅を各地区ごとにもっと増設させることが必要であることなど力説しました。

説明会に参加した人は「仲間同士で応募できるグループ入居や協同型住宅について知らなかったので、関心もなかった。今日のお話しを聞かしていただき、つぎの募集には、グループ募集や協同型住宅入居も考えます」と語っていました。

なお協同型住宅については灘区に県営はあっても市営がないため、神戸市に「共同住宅を建ててもらうようお願いにいこう」と話し合いました。

協同ふれあい空間のイメージ



ふれあいを育む協同型住宅

災害公営住宅にコレクティブ（協同型）住宅の導入を県に求めてきました都市環境研究室の石東直子さんからは、兵庫県、神戸市の協同型住宅建設計画の内容など述べ、次回の公営住宅募集で協同型住宅が、灘区の岩屋二十二戸、中央区の南本町二十七戸、脇浜四十四戸、大倉山三十二戸など予定されていることを説明しました。

1997年5月25日　　NO 31

仮設の街・通信

神戸市灘区弓木町3−3−21−401
電話078−821−3572
発行人　もりくすを

気になる公営住宅募集
あと何戸数あるのか

公営住宅募集は、どうでしたか。

私が関係している仮設の49世帯のうち、4世帯の方から仮り当選の通知書がきたと報告を受けました。あらためて公営住宅募集のきびしさを痛感しました。

神戸市住宅局は、二月から三月にかけておこなった被災者向けの公営住宅募集状況を発表しました。それによると市営住宅の募集3154戸にたいし、22、642世帯が申込みました。倍率は7・2倍でした。やはり公営住宅への入居は「狭き門」です。気になるのは公営住宅募集があとどれだけ予定されているかです。　神戸市の公営住宅供給三ヶ年計画によると、再建住宅、再開発住宅（4、407戸）をふくめて26、100戸となっています。みなさんが申し込めるのは、公営住宅の新築10、696戸、そのほか公営住宅の空家5、000戸、借り上げ公営住宅6、000戸、計21、600戸となっています。

そのうちこれまで一元募集で、公営住宅新築5、976戸、空家3、435戸が募集済みとなりました。残り戸数は新築で約5、000戸、空家を入れても約7、000戸しかありません。

現在、仮設住宅に23、000世帯が入居。大半の人が公営住宅入居を希望しています。到底足りません。

借り上げ公営住宅6、000戸と言っても民間住宅借り上げが2、000戸、公団からの借り上げが1、000戸、県の3、000戸は公団空家の借り上げであり、市内にはそうありません。市外に集中しています。公営住宅に入居を希望している人たちの需要を満たされるようにはなっていません。やはり公営住宅の絶対数が不足しています。神戸市は、仮設住宅の人や公営住宅入居を希望している被災者に「どうするのか」応えるべきです。



灘区公営住宅新築の供給

団地名	建設戸数	昨年7月 募集済み	今年3月 募集済み
市　営（戸数については、変更の可能性がある）			
新在家南第二	114		114
灘北第二	294	294	
大石東第二	101	102	
新在家南	144		
日出第一	100		
日出第二	178		
計	927	395	114
県　営（戸数については、変更の可能性がある）			
岩屋北	64		
東部日出	286		
計	358		
合　計	1277	残り戸数768戸	

灘区内の公営住宅建設戸数は、市営・県営あわせて8団地1277戸です。そのうちこれまでの募集で509戸。あと残り戸数わずか768戸しかありません。これでは被災者の「もとの地域にもどりたい」という願いはかなえられません。

仮設で育ぐまれたふれあいを生かすコレクティブ住宅

公営住宅は、なかなか当たりませんが、もし入居できるようになったら住人同士の交わりがうまくいくだろうか、すこし心配です。仮設住宅で育ったコミュニティをそのまま公営住宅でも生かされないものか、そう思ったりします。

公営住宅募集では、仮設で育まれたコミュニティをそのまま引き継ぎ仲間同士で応募できるグループ入居や協同型住居のコレクティブハウジングが導入されています。

しかしその内容は詳しく知らされていないため、関心が薄く、わからないのが現状です。そこで寿公園の仮設住宅は15日、神戸共同病院の上田院長や建築技術士の石東直子さんらを招き、公営住宅の「グループ募集」「コレクティブ住宅」の説明会をひらきました。

上田先生のお話によると「グループ募集」については、多くの高齢者が新しく移り住む公営住宅で、知らない人たちの出会いに負担を感じており、仮設住宅で育ったコミュニティをそのまま公営住宅へ継続できることが望まれている。そのため仮設住宅で仲良くなった人たちが一緒に移り住めるよう考えた制度ですと語り、仮設の人がグループで申し込むことになり、他の仮設の方と組んでも差し支えないと説明。「グループ募集」は、人数の多いグループで申し込むより、二人か三人程度のグループで申し込む方がまとまりやすいと述べました。

「シルバーハイツ」については、夫婦の場合、どちらかが60歳以上であれば申し込めるが、親子の場合、両人とも60歳以上でないと申込み資格がないと話していました。

「コレクティブ住宅」については、入居者が自然とふれあえるように工夫された住宅です。自分の部屋に「閉じこもる」のでなく、いつでも協同室にいけばみんなと共にしゃべったり、たまにはいっしょに食事をつくったりして助け合いながら過ごせる住宅ですと述べました。

もっと増やそう「コレクティブ住宅」

兵庫県にたいし災害公営住宅に「コレクティブ住宅」の導入をすすめてきた石東直子さんは、「コレクティブ住宅」について、それぞれの住まいに台所、浴室、便所が備わった独立した住居ですが、それとは別に協同のスペースがあって、食堂、談話室、多目的室など利用して住人同士が触れ合えるよう工夫した集合住宅ですと説明。協同の室の使い方や管理の仕方は入居者が決め、協同室をみんなが一緒になり使うことによって、住人同士が交流して助け合う生活が期待できますと述べました。また神戸市内で建設される県営の「コレクティブ住宅」は、本年度中に灘区岩屋北で22戸、中央区南本町27戸、大倉山32戸、来年度中には東部・脇浜44戸が完成の予定になっていると説明。仮設住宅では「孤独死」がいまも相次いでいます。公営住宅では鉄の扉を一枚閉めると、まったく孤立した状態になり、仮設住宅よりももっと隣人とのふれあいがなくなると指摘。公営住宅に移り住んだあとも仮設住宅での悲劇がくりかえさないため「コレクティブ住宅」が最適であることを強調。こうした住宅はもっと各地域でたくさん建てることが求められていると話していました。

県営コレクティブ片山住宅を見学

今年3月に完成した長田区の「コレクティブ片山住宅」を見てきました。片山住宅は、長田神社の少し東。商店街から20メートルほど急な坂道を登りつめた静かな住宅街に建てられています。

北欧産の木材を使ったモダンな建物で、1DKの6戸。各住まいにそれぞれ浴室、洗面、炊事場、便所があり、ガス設備がなく調理や湯沸かしなどすべて電気を使用。協同空間には、エレベーターやキッチン、談話室、生活援助員の部屋もあります。協同空間の光熱費は入居者全員で負担することになり、県の説明では5千円から6千円ぐらいと話していました。少し負担の大きいのが気になりましたが、殺風景な鉄筋と違い、心の温もりを感じさせる素晴らしい住まいでした。

2．「きんもくせい」掲載記事.

「きんもくせい／阪神大震災復興市民まちづくり支援ニュース／同左ネットワーク発行」

『被災地にコレクティブハウジングを！』

・第３号：震災復興に向けて－私の提案

進みはじめた復興まちづくり…ハードな計画に偏りすぎているのでは

・第14号：生きる気力を取り戻すために高齢者等が共に生きるコレクティブハウスの供給を

・第15号：コレクティブハウジングが根づく確かな芽が育まれつつある

＜芦屋市ケア付き仮設住宅訪問記＞

・第18号：ミニ・コレクティブハウジングの供給が始まっている

＜岡山県サニーハウス鴨方～ひとり暮らし高齢者協同居住～訪問記＞

・第20号：ストックホルムのコレクティブハウジング

＜フェルドクネッペンの夕食をよばれて＞

・第23号：「そんな住宅、理想的や。そやけどわたしら５年も待たれへん！」

＜長田区の一人暮らし高齢者のすまいを考える集い＞

・第26号：「友達は自分でつくれるけど、こんな住まい方は自分でつくられへん」

＜協同居住を軌道に乗せるためのサポート体制＞

・第30号：災害公営住宅でコレクティブハウジングが始動

＜協同居住を軌道に乗せるためのサポート体制＞

・第31号：コレクティブハウジングの協同居住を軌道に乗せるためのサポートシステム

・第38号：災害公営住宅でコレクティブハウジングの建設が始まる！

＜ワークショップ方式で決めた真野地区浜添コレクティブハウジングの計画＞

・第46号：新しい住まい方の受け入れには醸造期間がいる！

＜災害復興住宅第三次一元募集のための出前説明会を巡って＞

・第50号：ふれあいの輪が結びはじめた感動の一日

＜真野ふれあい住宅・入居前の協同居住の学習・体験ワークショップが始まる！＞

■阪神復興に向けて ― 私の提言

○石東・都市環境研究室　石東直子

「進みはじめた復興まちづくり
　　・・・・ハードな計画に偏りすぎているのでは」

被災地域での復興計画が始まっている。「きんもくせい創刊号」にも被災都市でスタートした復興まちづくりの地区名が記されていた。被災地区の人々にとって一刻も速い復興建設は切望されるところであり、それに応えて支援コンサルタント等によるプランづくりが急務として夜を徹して進められている。一方、従来の都市防災計画の予想をはるかに越えた大地震を経験して、新たな視点を考慮した都市防災計画の立案も進められている。いずれもこの機にあって急務のものである。しかしマスコミ等の情報やプランづくりに参画している知人の話から感じるのは、余りにもハードな物づくりのプランに偏りすぎているきらいがあるように思われる。

ここに胸痛むひとつのデータがある。この度の震災で犠牲になった 5,300人を越える死亡者の５２％が６０歳以上の高齢者である。この数値は激震地区が神戸・芦屋・西宮に至る各市の下町を総なめにしたことから当然の結果の数値として現れたものである。高齢者は心身状況が弱化しているので多くの死亡者が出たというものではない。予想を越える大地震だったから不可抗力だったと言えるものではない。都市の下町には、今からもう３０年以上も前になるわが国の高度経済成長期に建てられた安普請の過小な木造アパートや文化住宅が老朽化したまま多く残っていた。そこには、ひとり暮らしのお年寄りや、老夫婦が住み続けている。お年寄りたちは階段の上がり降りが堪えるので一階の部屋に住んでいる人が多い。それらの住宅が全壊し一階に寝ていた人が犠牲になった。高齢者をはじめとする社会的弱者の安全な暮らしが保証されていなかったのである。

西宮市内の建物被害状況調査で現地に出ると、住宅地図では木賃アパートや文化住宅として記されているが、建物全体がぐしゃぐしゃに押し潰されて従前の様子が分からない状態にまで倒壊してしまった住宅が多くあった。その瓦礫の山のそばにそこで亡くなった人たちへのお花が供えられている場面をしばしば目にした。涙が噴き出る調査であった。このような住宅を含め被災した住宅は 143,000戸に及び、避難者は３０万人にものぼる（2/16朝）。まずは住宅再建が緊急課題である。どこに、どんな住宅を、どんな手法で建設して行くのか、新たな発想が必要であり、今までのまちづくりとは大きく視点が異なるはずである。恐怖を体験した人達が長い時間はかかるけど心を癒されて行くような暖かさ、安心、やすらぎの仕掛けを内在した復興プランであってほしい。そのためには急いでハードを重視したプランは描けないはずである。市民福祉の視点を中心におき、地元商店街や市場の復興にも小規模単位であってもできるかぎり地域に住んでいた人達の住宅を付設したり、一気に完成図を目指さないで、段階的に復興建設していくようなプランも望まれる。そして今までハードなまちづくりに関与することが少なかった役所の福祉部局や市民生活部局、お医者さんたちももっとまちづくりに積極的に大きな口出しをしてほしい。アイデアを提供してほしい。避難生活の中で芽生えた共に生きる、共に支えあって生活するというライフスタイルが、育っていくような仕掛けをもつ生活環境が整備される絶好の機会にしたい。

例えば、数軒単位の共同建設や、今行政が建設している応急仮設住宅ではなくて、３年か５年位住めるような住水準を備えた一時的住宅も建設し、その後の状況に応じて用途を変えたり、更に住水準を高めていけるような住宅の建設はできないだろうか。２７㎡ワンパターンの応急仮設住宅に入居が決まったお年寄りの中には一人で住むのが不安だと言っていた人もいた。ひとり暮らしのお年寄りや老夫婦が仲間同士集まって住めるような住宅が市場のそばにでもできないだろうか。お昼ご飯は市場で働く人達も一緒にできるような食堂があれば楽しいだろう。

弱者に集中して多くの死亡者が出たのは誰の責任だとは今、言及したくないが、私たちまちづくりの専門家も含めてそれに対応する側に責任のすべてがかかっていたと思う。予想を越える大きな天災だったというが、社会的弱者に対しては人災とも言える側面も大きい。　（2月１６日記）

「きんもくせい」第３号　'95. 3. 3

阪神大震災復興市民まちづくり支援ニュース

きんもくせい

1995年8月17日
第14号

発行:阪神大震災復興
市民まちづくり支援
ネットワーク事務局

■生きる気力を取り戻すために、高齢者等が共に生きるコレクティブハウスの供給を（その1）

石東・都市環境研究室　石東 直子

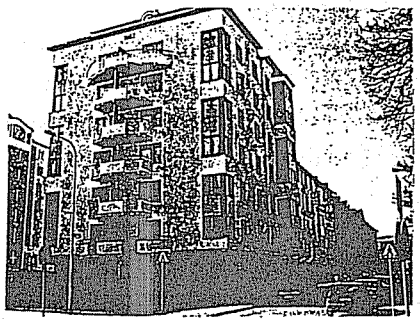
大震災から半年が経った。一瞬の偶然で生きながらえた貴重な命なのに、その後の仮設住宅の生活で孤独に死んでいく一人暮しのお年寄りが後を断たたない。生きる気力を失って自ら貴重な命を断ち切ってしまう人も出ている。せっかく生きながらえた人達の命を大切にし、生きる気力を呼び戻すのが、無念にも命を奪われて逝った6,000名以上もの人達への供養でもある。

<毎日新聞によると1995年7月15日現在で、仮設住宅での孤独死は8名、自殺者は26名。自殺者の7割近くが55歳以上の中高年者であるが、それらの人数はさらに多いという情報もある。また、震災による直接被害の死者と関連死の人の合計は6,038名である>。

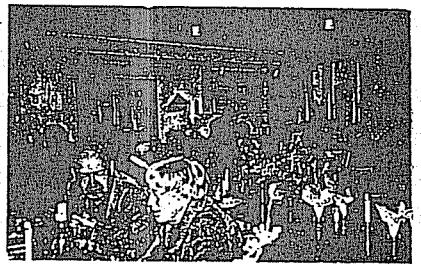
被災した下町に住む人達の多くは他所へ移り住んでは生活できない居住地限定階層である。特に高齢者は長年住み慣れた地域から切り離されては生きていけない。高齢者が生きる気力を取り戻せるような住宅の供給が必要である。仮設住宅の建設は入居者と立地場所、住戸形式のミスマッチという決定的な問題を持ってしまった。仮設住宅の入居者が恒久住宅としての震災復興公営住宅に移り住む時、また二度目のミスマッチを犯さないためにも、仮設住宅供給の問題点をしっかりと把握する必要がある。既に周知のことであるが、主たる問題点をあげると、高齢者は長年住み慣れた地域から切り離されて住めないということ。住戸の供給とともに日常生活に必要な居住環境条件の供給が求められる要件としてあるということ（例えば、身近な日常品商店、医院、銀行、郵便局、交通駅等）。しかし、市街地での用地確保の難しさから、多くの仮設住宅はこれらの点が配慮されず、遠隔地に大量建設された。住戸形式の問題では、今まで下町の長屋やアパートに住んでいた人達は狭小で老朽した住まいであったが、近隣の人達との触れ合いがあった。地域で育まれて生活が成り立っていた。それがバス、トイレつきの2Kの仮設住宅に移り、居住水準は上がったようにみえるが、隣同士の人の触れ合いは失われた。高齢者、障害者、母子家庭等の優先入居を採ったのに、居住者に対応した最低限のバリアフリーも配慮されていない。トイレへの段差が30センチもあり、浴室の手摺りもない。出入口に軒の庇もない。恐怖を体験した後では、ひとりで住むのが不安である。怖いと訴えている人も少なくない。

今後、多くの人が仮設住宅から恒久公営住宅に移り住むことになる。その時また、同じミスマッチを繰り返さないために、コレクティブハウスの供給を提案したい。生きる気力が失せて将来の生活に不安をもつ高齢者等は、とにかく毎日の人との触れ合いとおしゃべりが必要である。

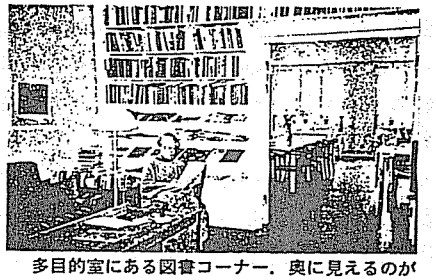
●海外のコレクティブハウスの例
ーフェルドクネッペン（スウェーデン）



施設の外観．ストックホルムの旧市街地に立地する



コモンダイニング



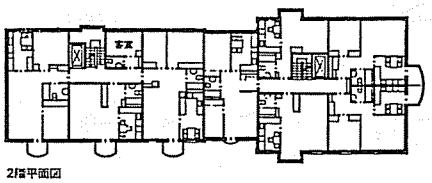
多目的室にある図書コーナー．奥に見えるのがコモンダイニング

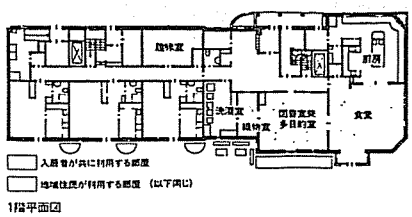
名　称：コレクティブハウス・フェルドクネッペン
戸　数：43戸（36～76m²）
規　模：地下1階、地上7階
共用室：食堂、厨房、多目的室、ランドリー、木工室、サウナ、写真暗室、ルーフテラス、ゲストルーム、事務室
入居年度：1993年
所有形態：賃貸
運営主体：居住者組合フェルドクネッペン

（1面より）

コレクティブハウスとはコ・ハウジングとも呼ばれる協同居住型集合住宅で、北欧諸国ではあらゆる世代を対象に、住宅政策の中に位置づけられて供給されており、高齢者用のコレクティブハウスもある。数世帯から20世帯位が集まって、共に生きる集合住宅での住まい方である。各々の世帯は居室とトイレ、浴室（またはシャワー）、キッチンを持ち、住宅としての個人の自由とプライバシーの確立はなされているが、共同の大きな台所、食堂、居間、応接室、洗濯室、浴室等々がある。生活の共同化とそれに必要な機能とスペースの共有化である。生活の共同化(例えば食事等の家事の分担）の程度は、居住者同士の取り決めでさまざまなパターンがあるが、それぞれ独立した住戸で暮らしながら、コモンルームを核に共同生活が展開されることにより、安全性、一緒に住む楽しさ、心理的な安心感が生まれることのメリットがあげられている。

高齢者等は住み慣れた地域に戻って気心知れた人同士が一緒に住めるのが一番いい。ひとり暮しには８帖程度の居室にトイレ、浴室(またはシャワー)、キチネットとたっぷりめの押し入れを、二人、三人世帯は２居室を持ち、後は上述したようなコモンルームがあればいい。最低限の共同生活のルールを供給主体が示し、後は居住者相互で助け合いながら生活していくルールを作っていく。元気な人、体力的に弱い人、それぞれ得意の分野を分担して、生活を営むようなルールが必要である。





＊写真、図面は小谷部育子氏（日本女子大学助教授）より提供

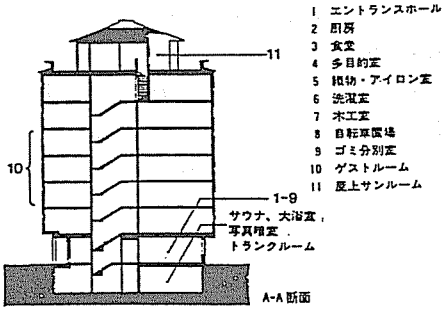
見知らぬ人同士が住みはじめても大丈夫。共同生活スタイルの特定目的の住宅ということで募ればいいだろう。もちろん高齢者に絞る必要はない。多世代の家族が集まって住み、世代間交流があれば、生活はより楽しい。

神戸市が復興のシンボル事業と位置づけた「神戸市東部新都心」は高齢化社会に配慮したモデル都市として期待されている。然らばコレクティブハウスの導入は不可欠のはずである。

公的住宅での供給だけでなく、特定優良賃貸住宅制度の特目住宅での供給も考えられるし、民間でのシニアコレクティブハウスのグループ建設も可能性はある。今、震災を体験して、共に生きるという気運も高まっている。下町に人を呼び戻すためには、まず商店街や市場の復旧が必要であり、その際にも小規模単位のコレクティブハウスが建設できるような公的助成制度を創設してほしい。日常生活に必要な施設がセットで供給されれば、生きる気力は取り戻せる。

実現までにはクリアしなければならない検討項目が幾つもあるが、仮設住宅での悲劇を繰り返してはならない。

具体的なモデルは、北欧のコレクティブハウスに止まらず、お隣の中国で古くから続く伝統的民家、客家の集住体の住宅（円楼や方形住宅等）、わが国のグループホームの住宅形式にもそのアイデアとイメージを見ることができる。　　＜1995年７月17日 記＞



■ケミカルシューズ産業の復興を考える
・報告者:北野正一(神献)、業界の方等
・８月24日(木)18:00～20:30
・長田区役所7階大会議室、参加料無料
・主催：長田の良さを生かした街づくり懇談会
・連絡先:621-3875(三谷)、794-6161(北野)

■ お地蔵さんの調査隊募集
地蔵を下町コミュニティの象徴と捕らえ、この調査を復興の手掛かりとする。
・調査要領:23日11:00JR新長田駅北に集合
申込方法：はがきに住所、氏名、勤務先(学部・学年)、電話番号記入。〒651-22 神戸市西区狩場台1-10-4森栗茂一さんまで。20日必着。

■ネットワーク事務局より
◎第８回東部市街地連絡会
1. 共同建替え助成要領等について
2. 復興市民まちづくり地区別取組み
－六甲道駅地区:平山、住吉地区:重村
８月22日(火)18:30～　神戸富士ﾊﾞﾝｸﾋﾞﾙ
◎第８回西部市街地連絡会（毎月第3水曜）
９月６日(水)18:30～　神戸富士ﾊﾞﾝｸﾋﾞﾙ

◎「復興市民まちづくりvol. 2」編集作業進む
「復興市民まちづくりvol. 2」を９月上旬に出版する運びとなりました。
前回は18種のニュース（内訳関連5種）を収録しましたが、今回は31種(同5種)に一気に増加しています。これは、主には区画整理区域内でのまちづくり協議会がこの３ヶ月の間に多く発足したことによるものです。
本書は大手書店等で販売しますが、団体、グループ等で何十冊かまとめたご予約をされる方は早めに(8月末まで)事務局までご連絡ください。今後も、事務局では継続的に各地の復興市民まちづくりの情報入手に努めて行きたいと考えています。また、定期的にまちづくりニュース等を事務局までお送りください。

■連絡先:阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク事務局
〒657 神戸市灘区楠丘町2-5-20
まちづくり(株)コー・プラン
TEL. 078-842-2311 FAX. 078-842-2203
担当：天川 佳美・中井 豊

〒657 神戸市灘区六甲台町1
神戸大学工学部建設学科
TEL. 078-803-1029 FAX. 078-803-1029
担当：児玉 善郎

■ コレクティブハウジングが根づく確かな芽が育まれつつある（その2）

＜ 芦屋市ケア付き仮設住宅訪問記 ＞

石東 直子（石東・都市環境研究室）

「今、この仕事をしていて、本当に楽しいんよ」と、のっけからに市川禮子さんは言う。

7月末の炎天下、芦屋市呉川町のケア付き仮設住宅を訪ねた。ここ呉川町には8棟（95戸）の仮設住宅が軒を接して建てられている。その一角の3棟がケア付き仮設住宅で、平屋建ての1棟に14人(14居室)が共に住まうコレクティブハウジングである。わが国ではケアを必要とする人たちが共に生活する場をグループホームと呼び、福祉施策にもり込まれた施設だが、北欧諸国のコレクティブハウジング（多世代の多様な家族が集まって住む共同住宅）の親戚みたいなものである。

（芦屋市では呉川町の3棟と高浜町の1棟のケア付き仮設住宅の運営を、「尼崎喜楽苑」の市川禮子苑長に委嘱している）。

1居室は16m²の広さで、6帖(和室と洋室があり選べる）にトイレと洗面スペース、押し入れ、ゆったりした入口スペースである。それに14人の共同生活のためのダイニングキッチン（約45m²)、2つの浴室と職員詰所がある。

一人に一室なので二人世帯の場合は二室が使える。居住者の多くが住宅が全壊し、長時間倒壊家屋の下に埋もれていた人たちで、極限の恐怖を体験している。中には、1938年の阪神大水害と第2次大戦をも体験している人もあり、“わたしの一生は何だったんだろう”と呆然としていたという。入居当初は話を始めると、すぐ涙がふきでてくる人たちばかりで、生きる気力もなく一日中自室に閉じこもりがちの人も多かったそうだ。

市川さんをはじめとするスタッフ13名が、昼間は各棟に1～2人、夜間は4棟で2人になって、24時間勤務している。スタッフの主な仕事は、入浴介助などを必要とする人の手助けで、通常は目配り、気配りでもって話し相手や生活相談にのり、買い物や通院への付き添いなどと、てんてこ舞いである。食事は原則として自炊ということだが、希望者には月、水、金の昼食づくりはボランティアの支援があり、居住者やスタッフも一緒になって食事を作る（居住者は食材の実費を負担する）。夕食は31人が芦屋市福祉公社の配食サービスを利用している。スタッフは、居住者が生きる気力を取り戻すために何をしたらいいか頭を痛めているというが、時間が経つにつれて、気力の蘇りを確実に感じているという。各室に閉じこもりがちだった人が、談話室に出て来て交流することにより、入居当初ひどかった精神障害が落ち着き、ここまで良くなるとは思わなかった程に快方に向かっているという。また、沈みがちの日々を送っていた人が、夕涼みパーティの後、「わたし自分の家を建て直すわ」と言い出し、皆を驚かせたという。刺しゅうの得意な85歳の婦人は見事な作品を仕上げて、額に収め談話室に飾った。市川さんは浴室の前に吊るすゆの暖簾の制作を頼んだ。

わたしが訪れた木曜日は、特別のボランティアが来て、ザルソバ、わらびもち、煮豆の昼食を全員のために用意された。自室で食べる人、食堂でみんなで一緒に食べる人、好き好きである。かいま見た居住者たちの生活の一部であるが、共に住まうという楽しさと安心感、人に対する優しさが育まれているのを感じた。

冒頭に記した市川苑長が開口一番に発した「楽しい」というのは、協同居住の確かな手ごたえを得ることの充実感と自信だと思う。協同居住の確かな手ごたえが日を追うごとに、居住者の生活に現れてくる。居住者の多くは避難所や福祉施設の一時入所、一般仮設住宅、親戚宅などから移ってきたが、ここに入居してみたら案外このような住まい方もいいものだと実感しつつあるという。

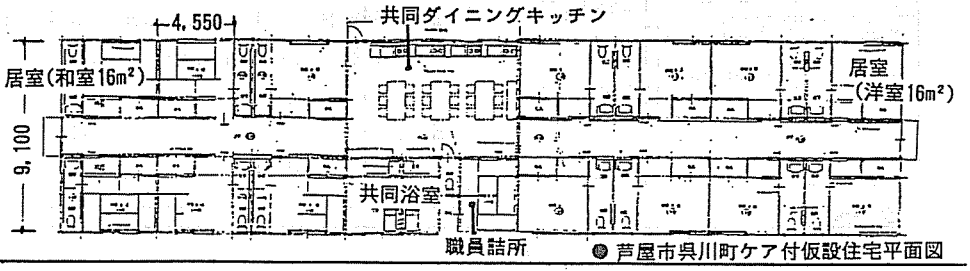
このケアつき仮設住宅の入居対象者は、入浴、炊事、衣服の着替えなどに一部の手助けを必要とする程度の高齢者であるが、一般の仮設住宅も同様な手助けを必要とする人は少なくない。また身体的に元気であっても、生きる気力も失せて途方に暮れている人、将来の生活に不安を持つ人が多い。仮設住宅の中で孤立無援の状態におかれていることが一番つらい。生きる気力を取り戻すには、この共に生きるコレクティブハウジングの住まい方が適しており、日本の土壌にも育まれつつあることが、ここを訪ねて実証された思いである。それぞれ独立した住戸で暮らしながら、コモンルームを核に協同生活を展開していくことは、安全性、共に住む楽しさ、心理的な安心感が生まれる。

わが国にも少し前から北欧のコレクティブハウジングの先進事例が紹介され始め、そのニーズの社会的気運も出てきつつあるが、震災というつらい体験を得て、そのニーズの加速度が増したといえよう。

今、阪神間の復興まちづくりのために、コレクティブハウジングを供給する時が来た！（8／20記）



共同リビングでの昼食



芦屋市呉川町ケア付仮設住宅平面図

「きんもくせい」第15号 '95.9.8

ミニ・コレクティブハウジングの供給が始まっている（その3）

＜岡山県サニーハウス鴨方～ひとりぐらし高齢者協同居住～訪問記＞

石東 直子（石東・都市環境研究室）

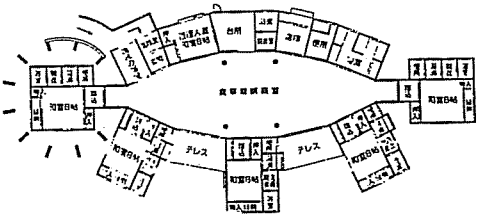
●岡山県は1994年度に「ひとりぐらし老人共同生活支援事業」を創設し、事業を実施する市町村に、施設及び設備、並びに運営に要する費用の補助を行っている。94年度に4地区（入居開始）と95年度に2地区（計画中）が事業化されている。県は事業の背景として、ひとりぐらしの生活は淋しさ、孤独感、急病や事故等の緊急時の不安や、食事、風呂等の家事や、家屋を維持するための労働的、経済的負担が大きい。これらを支援するためにホームヘルパー派遣等の支援事業があるが、加えて、高齢期における生活の仕方の選択肢のひとつとして、地域のふれあいの中で、一つ屋根の下で互いに助け合い共同で自立した生活をすることにより、ひとりぐらしの淋しさや不安、負担の大幅な解消を考えた。大字位の顔見知りの範囲を対象とする。

●共同生活施設の内容は、概ね6人程度の協同居住で、プライバシーが確立した居室と共同スペース（厨房、食堂、談話室、浴室、洗濯室、倉庫等）があり、空家等利用型と小規模ホーム新築型ある。既に入居が始まっている4地区の特色は次のようである。

加茂町は、豪雪地であり、特に冬季における共同生活にメリットがある。料理教室等を実施して、地域の高齢者との交流を図ったり、園芸作物の共同栽培を行う。夜間を中心に共同生活をし、昼間は気ままに自宅と行き来する。

中央町は、旧村の中心地で、役場支所、駐在所、郵便局に近接し、診療所と一つの建物として整備。両山寺の参拝客等を対象に特産品の生産、販売、観光案内を行う。

川上町は、高齢者福祉のむらづくり事業の一環として取り組み、入居者を地域ぐるみで支援する。生活しやすい楽しい建物（下図）。ゲートボール場や家庭菜園も整備。夜間を中心に共同生活をし、昼間は自宅と行き来する。



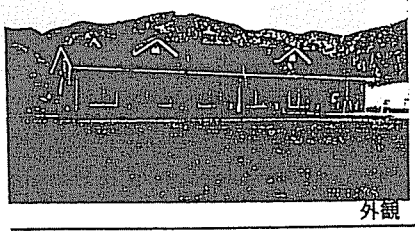
「しあわせ荘」平面図

鴨方町は、都市部におけるひとりぐらし老人に対するモデル施設として整備し、全町を対象とする。地域の高齢者と座談会、ゲートボール等による交流や野菜の共同栽培を行う。

●10月半ばすぎ、サニーハウス鴨方を訪ねた。鴨方町は倉敷市からＪＲ山陽本線で西へ20分、福山市にも近く、両市のベッドタウンとしての性格もあり、人口は2万人強である。建物はレンガ色の平屋（建築面積約360㎡）で、内部は南側に6つの居室が並び、幅広い廊下をはさんで北側に共用スペースがある。居室は25㎡程度で6帖の和室と広縁にキチネット、便所、押入れ、床の間がある。共用スペースは、厨房、台所、畳コーナーをもつ交流室、風呂、洗濯室、倉庫、援助者室、玄関ホールである。一人当たり面積は約60㎡である。女性3人と男性2人が住んでいたが、つい先だって89歳の男性が引っ越して行かれた。高齢のため共同生活の役割分担に負担を感じるようになったという。ここでは一人で食事当番と一週間を通しての掃除当番を分担していたが、一人が引っ越しされた後、食事は各自で作ることにした。数人程度の小規模単位での協同居住の課題であろう。余りにも小人数では共同生活の役割分担に負担がかかり過ぎる。一人での家事分担はしんどい（精神的にも重圧である）。チームでの分担作業であれば、カバーし合えるし、その人のできる役割を分担すればよい。協同居住はある程度の単位規模が必要なようである。午前中は地元の人が生活支援者として、共同生活のアドバイスや相談ごとに対応しており、その運営費は県からの補助がある。共同生活を始めて半年で日が浅く、居住者にはまだ戸惑いがあるように見えたが、玄関ホールに置かれた大きな月下美人の鉢植えがご自慢で、見事に咲いた花の写真をプレゼントしてくださった。玄関の棚の上には住人の手作りの紙細工の花瓶が並んでいる。サニーハウスは全町を対象として公募したため、馴染みのなかった人たちが共同生活を始めたので、まだ共に暮らす楽しさを十分に味わえる程には親密になっていないようだ。また、5人という小規模単位は、長らくひとり暮らしで気ままに暮らしてきた人たちの個性や年齢的な差異がもろに影響し合い、共同生活の楽しさが醸成されるには、もう少し時間がかかりそうだ。夕食後は各自が居室で自由な時間をもち、談話室で皆で過ごす時間は多くないとのことだが、ひとり暮らしで不安だった夜が安心して過ごせることは快適であると言われた。

高齢者は住み慣れた地域で、気心知れた人同士が一緒に住めるのが一番言い。生き生きした生活が再スタートできる。震災地での住宅復興の貴重なモデルがあった。（10月26日　記）

●サニーハウス・鴨方

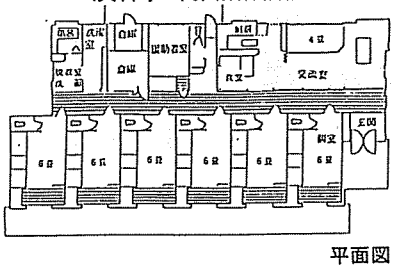


外観



交流室・食堂

（資料等は岡山県保険福祉部提供）



平面図

「きんもくせい」第18号　'95.10.31

ストックホルムのコレクティブ ハウジング

―― フェルドクネッペンの夕食をよばれて ――　（被災地にコレクティブハウジングを！／その４）

石東・都市環境研究室　石東 直子

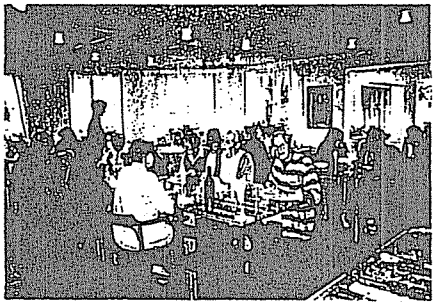
９月ある夕刻、雑誌の写真からのコピーを頼りに、フェルドクネッペンを訪ねた。正確な住所は知らないが、国鉄ストックホルム南駅のすぐそばと聞いていた。友人の小谷部育子さんが親しい住人に、わたしが訪ねていくので夕食も一緒にできるようにと連絡してくれていた。住居を中心に再開発された駅周辺の新市街地と、100年、200年も前の建物が続く旧市街地との接点にそのアパートはあった。１階に豊かな共有スペースを取っているため、連続したアパート群の町並みにアクセントを添えている。入居者は12歳以下の子供と同居していない40歳以上という条件があり、現在の住人51人(43戸)は、40歳から86歳で平均年齢は55歳だそうだ。このうちの何人かはこのプロジェクトの計画段階から参加しており、５年かかって計画をつめ、コーポラティブ形式で建設したコレクティブ　ハウジングである。ここでの生活はそれぞれ独立したアパート(36～76m²の９タイプの住戸）での普通の暮しと、多様な共有スペースでの住人同士の豊かな交流がある。協同居住のメインの義務は６週間に一度巡ってくる５日間（月曜から金曜の夕食）の食事づくりである。数人がチームで食事を作り、住人が一緒に食事をとる。食事当番の義務は負うが、食べる食べないの自由はある。夕食時間は5:30～7:00PMで、私が訪ねた日の夕食人数は32人だった。32枚のスープ皿が用意されて、残っているお皿の枚数でまだ食べに来ていない人数が分かる。食事のクーポン券はまとめて買っておき、食事の都度もってくる。食事の雰囲気が実に楽しい！

三々五々にやってきて、セルフサービスで食事をよそって、好き好きにテーブルに着く。4、5人のグループもあれば、10人以上のグループもある。テーブルごとにおしゃべりに花が咲き、いろんな世代、職業の人たちの情報交換がすすむ。大家族のような雰囲気でもあり、学生食堂のような賑やかさでもある。魅力的な時間である。

Ｅ＆Ｅ夫妻と私のテーブルには今週の食事当番の一人がいて、本日のスープの作り方、食材の買い出しのことなど話してくれた。今日のメニューはとても味のいいスープがメインディシュで、じゃがいも、ラディシュ、青野菜などが入ったポタージュ風の濃いスープで、大きなスープ皿が用意された。それに滋養のありそうなブツブツした乾パン(クネッケボード)とバターが２種。チーズを削って好きなだけ挟む。デザートは食パンの上にリンゴを乗せて焼いたものとコーヒー。ワインやビールは各自で持参。Ｅ夫人は私のために赤ワインを1本抱えて食堂に降りた。テーブルには捨て難いすてきな空き瓶を利用して、冷たい水が用意されている。

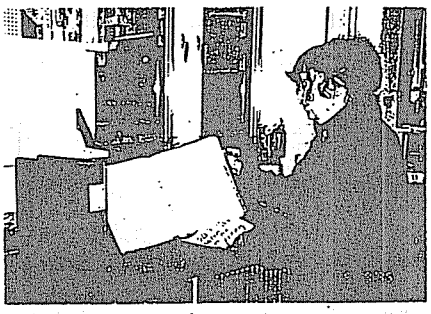
食事中、私のテーブルでは、珍客の私のために、ここの生活の様子をいろいろ聞かせてくれた。食事当番の彼女は建築家で、スウェーデンでのコレクティブの推進にさまざまな活動を展開してきた。スウェーデンのコレクティブはデンマークから学び、自分たち流のルール等を検討したという。コレクテイブでは住人の年齢層のミックスがとても大事で、それが協同居住の無理のない運営、共同生活の楽しさを生みだすという。私がが震災復興住宅にコレクティブの提案をしていることを話すと、日本独自の生活文化に合ったコレクティブの検討がとても重要であるとアドバイスされた。

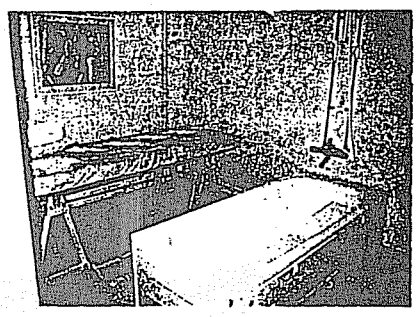
食事がすむと、各自で食器を厨房に続くカウンターまで運び、また三々五々にひきあげて行く。まだ話し込んでいるグループもある。Ｅさんは７時からメインテナンスグループのミーティングがあるので早めに引きあげ、７名が屋上のサンルームで会合を始めた。廊下や階段、共用のトイレ等の共有スペースの掃除、植木や庭の手入れ等は本来管理会社がやるのだが、居住者組合（住人の自治組織）が住宅供給公社から請け負って行うことで、家賃の一部として払った管理費をペイバックさ



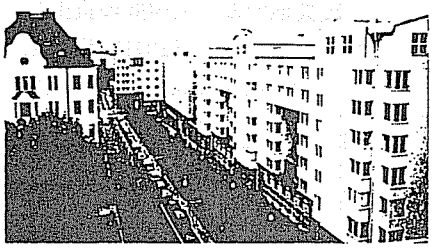
共同ダイニングでの食事

厨房におかれているレシピ集





共同浴室.浴槽の周辺には介護スペースが十分にとられている



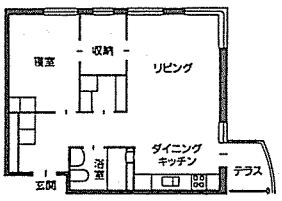
フェルドクネッペンの屋上から見たストックホルムの街なみ

れる。それで共同生活に必要なものを買い替えたり住人同士の活動資金に当てるという。E夫人は7時半から来週の食事当番のミーティングがある。8～9人が1チームで食事作りと後片付けの共同作業をするが、それぞれができる範囲で作業をやればよく、高齢で調理作業が少ししんどい人は軽い作業を分担する。食事チームが決めた週間メニューは、1週間前に掲示される。住人の中に著名な栄養学の元プロがいて、15人単位、20人単位でレシピを書き上げておいてくれるという。厨房にはぶ厚いレシピのファイルが何冊も置かれていた。

共同のリビング、洗濯室、アイロン室も食堂のそばにあり、自然な形で出会いの場となり、住人たちのコミュニケーションがとれる。趣味室やサウナ等の豊かな共有スペースもあり、さまざまな人たちが一緒に暮らし、共同生活のルールは自分たちで決めていく。

日常的なコミュニケーションを通して相互扶助が育まれ、安全で安心した生活が保障される。自分たちで決めた共同生活のルールによって、自由とプライバシーが守られる。私にとっても憧れのライフスタイルであるが、震災後の復興住宅供給にぜひ取り入れてほしい。後を経たない仮設住宅での孤独死を防ぎ、被災者の不安、孤独を忘れることができる。悩みや心配事も語り合うことによって糸口が見つかり、生きる気力が取り戻せる。

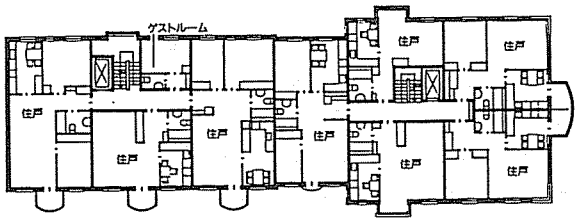
共に住まう、共に生きる、相互扶助のライフスタイルは、安全で、安心して、共に生きることの楽しさがあると確信した、フェルドクネッペンでのひとときであった。　　(11月20日記)



代表的な1住戸平面図(55.5㎡)

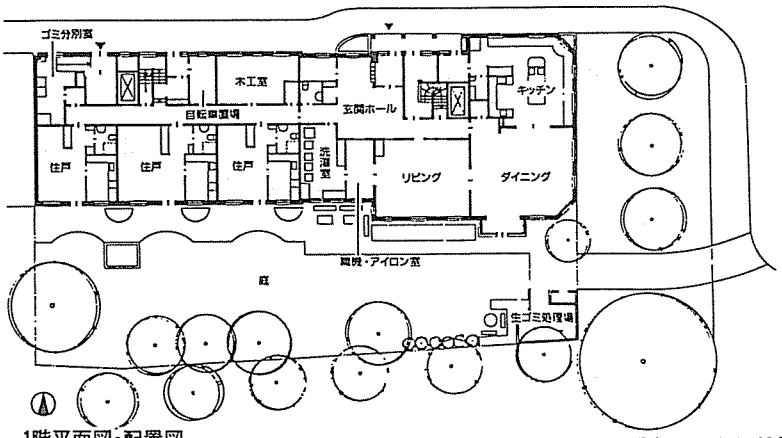


フェルドクネッペンの外観



基準階平面図(住戸標準プラン)

フェルドクネッペンの建築概要は、「きんもくせい」14号(8月17日)参照



1階平面図・配置図

図面資料は「TOTO通信」1995. 9-10月号

■「市民語り部キャラバン隊」の活動　－被災体験を神戸から全国へ－

「防災を語る会」は、震災1周年を迎えるにあたり、来年の1月13日～14日にかけて、被災地神戸の市民30人が被災経験と復興の教訓を直接東京都民に語りかける「市民語り部キャラバン」の活動を計画しています。

東京の受け入れ先は墨田区と中野区で、墨田区での活動は右のとおり。

このあとの「防災を語る会」計画としては、神戸市長田区で「震災を語り継ぐ夜－朝まで長田」(1/16, 22:00~1/17 6:00) 等を予定しています。

＜市民語り部キャラバンのプログラム＞

- 第1部：講演会　'95. 1/13　13:00～14:40　　於：曳船文化センター（東京都墨田区）
  - 救助ドキュメント：古市定雄（鷹取消防団）
    ・・・・３００人を救助した経験
  - メイントーク：室崎益輝（防災学者）
    ・・・・神戸の震災を総括し、快適な街・家・暮らしのあり方を提案
- 第2部：ワークショップ　　15:00～17:30
  - コーナー1：住宅　・コーナー2：生活　・コーナー3：街
  - コーナー4：防災コミュニティ、防災ボランティア　・コーナー5：医療・福祉
  - → ・市民防災学事始（まとめ）
  - ロビー展示、ＶＴＲ放映

＊「市民語り部キャラバン隊」幹事：大津俊雄(シティコード研究所)、三谷 真(関西大学)、森栗茂一(大阪外大)

■「そんな住宅、理想的や。そやけどわたしら５年も待たれへん!」

―長田区のひとり暮らし高齢者のすまいを考える集い―　（被災地にコレクティブハウジングを！／その５）

コレクティブハウジング事業推進応援団　石東　直子

１２月半ば、長田区二葉老人いこいの家で、仮設住宅に住むお年寄りの“ひとり暮らし高齢者のすまいを考える集い”が久二塚６まちづくり協議会・住宅部会によってもたれた。出席者は地震前まで長田区久二塚地区の借家に住み続けてきた人たちで、72歳～85歳までの女性11名と地区の世話役の方々である。以下にその日の話を再現してみよう。聞き手は森崎、太田、小林、石東である。

＊

◊「コレクティブハウジングという聞き馴れへん言葉やけど、みんなで集まって住もうという住宅についてＰＲにきました。自分の住宅は小さいけど台所やお便所もついていて、共同の大きめの台所、食堂や談話室、お風呂などがあるという共同住宅で、住む人がみんなで共同部分を使って、管理していくという住まい方です。」

◊「そういう住宅ええけど、入れてもらえるんかな。理想的や。」

◊「動けるもんがして、助け合う生活、これからは相互扶助せなあかん。」

◊「それ建つのにどれ位かかるん、5年もかかるんやったらわたしら待たれへん。」

◊「２年位やったら待っとけるかなあ。」

◊「たとえば廊下を広げて椅子なんか置く。そこをみんなで掃除できるか。」

◊「自分ができる間はやる。できんようになったらどうしたらええんやろか。」

◊「町内の友愛の人が手伝いにきてくれるよ。」

◊「当番制にしたらええ。」

◊「できる人とできへん人もいるので、文句が出るのとちがう。」

◊「これまでのような日本的なグチグチ言うたらあかん。」

◊「この地震から人間切りかえなあかん。」

◊「仮設住宅のお風呂はこわい。高いので入りにくい。」

◊「銭湯の方がええ。人と知り合える。」

◊「そんな住まい方やったら気分悪うなっても、誰かにすぐ分かってもらえる。」

◊「地震の後、西区で老人ホームに入ってた時、そこでは相互扶助が当たり前やった。」

◊「ひとり暮らしいうても、娘がひとりいるというのと、全くひとりというのは違うわな。」

◊「身体が弱いので人に気をつかう。参加したいけど、何もできなかったら人にしてもらう方が多くなって気兼ねする。」

◊「趣味の部屋なんかどう？　使われるかな。」

◊「編みもんなんかはみんなで一緒にもするけど、自室でもやっている。」

◊「長楽の仮設は一棟に24戸入っていて、風呂がひとつしかない。どうしても2つは必要。風呂は大と小があればええ。」

◊「食事をみんなで作って食べるというのは、どう？」

◊「いろんなものを食べられるのでええ。ひとりやと同じもんを何日も食べなあかんし、自分の好きなもんしかつくらへんので、栄養がどうしても片寄る。」

◊「食事を作るのは運動にもなる。」

◊「不経済にならへん。一週間分のメニュー考えたらええねん。」

◊「自分で作ってみんなで持ち寄って食べるというのもええんのとちがう。」

◊「元気な時はいいが、しんどい時は食事を助けてもらえるのが一番ええ。」

◊「男と女と一緒というのは、どう？」

◊「ほら一緒がええ。テレビ見てても考え方がいろいろ聞けてええ。」

◊「釘打ったりする時でも男の人の手がいる時があるわな。」

◊「指導する人がいるやろか？」

◊「身体が不自由になった時リーダーがいる。」

◊「老人はわがまま言う人が多いので、そんな住宅は無理やと思う。」

◊「いやな人は入らんでもええんのとちがう。」

◊「同室型より、そのコレクティブとかいうのがええね。」

◊「家賃は３万円ぐらいしかよう出さんなー。」

＊

晦日とお正月の新聞には、中高年の被災者の自殺や孤独死の記事が多かった。お正月を前にして、孤独に耐えられない被災者は少なくなかっただろう。記事によると、震災後の自殺者は６月以降は仮設住宅居住者が目立っているという。（毎日新聞によると、１月半ばで、自殺者33名、独居死51名、室内で意識不明に陥った人12名。）一日中誰ともふれ合わんと、部屋の中で孤独に過ごすのはあかん。明日への気力がわいてけえへん。

《いつでも誰かと会えるし、いつでもひとりになれる》、《ひとりで食事するよりも、たまには大家族のように集まって食べよう》というコレクティブハウジングが理想的やと思う。

今、仮設住宅に住んでいる人の中には、自力で住宅を確保して移り住む人もいるけど、多くの高齢者や母子世帯などは災害公営住宅の入居を待たざるをえない。そうすると災害公営住宅では、今の仮設住宅よりももっと高齢者や母子世帯などの割合が多くなるだろう。行政としてはいろんな懸念もあると思うけど、とにかくモデル的にコレクティブハウジングの供給を早急にやってみて！長田区のしたたかなおばあちゃんたちの応援があるやん。初期に建てる住宅に実験的にとりくんでみて、問題点があれば修正していけばいい。躊躇していると孤独に耐えきれないで、人知れず亡くなっていく人の記事が、今後何年も何年もの間報じられて胸を締めつけられる日々が続くよ。

被災した人たちは人間が変わった。変わろうとしている。変わって新しい生活を始めようとしている。行政システムも変わってほしい。人々が仲良くしていける地域をつくることが防災である。

《共に住む、共に生きる、共に創る、相互扶助の暮らし》、《集まって住む安全性と安心感、集まって暮らすことの楽しさをもつ住宅》の供給が、待たれている。

昔のように元気な生活をとりもどした下町のニュースを、一日も早く目にしたい。そして、そこから、本格的なコレクティブハウジングが発展していくのを願っています。（１月20日 記）

■「友達は自分でつくれるけど、こんな住まい方は自分でつくられへん」

―協同居住を軌道に乗せるためのサポート体制―

（被災地にコレクティブハウジングを！／その６）

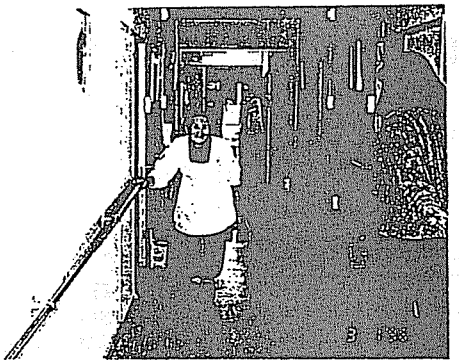
コレクティブハウジング事業推進応援団　石東直子

●「ドアを開ければ誰かがいる。こんな住まい方はほんまにええ。今までは寂しかった。友達は自分でつくれるけど、こんな住宅のこんな住まい方は自分でつくられへん。死ぬ前に幸せつかみたい。こんな住宅を建ててほしい。」尼崎市小田南ケア付き仮設住宅に住むＭさんはつぶやいた。彼女の部屋には沢山の友達が訪ねてくる。私がおじゃました時も友達が帰ったばかり。６帖程の洋室にトイレと洗面スペース、押し入れ、踏み込みスペースで約17㎡。この個室が中廊下をはさんで14室あり、中央に共用スペースをもつ。約80㎡の共用スペースには、台所、食堂兼談話室、風呂と洗濯スペース、援助員室がある。まさにコレクティブハウジングであり、小田南には２棟（14室型と10室型）がある。＜尼崎市にはもう１カ所、三反田ケア付き仮設住宅があり、市は特別養護老人ホーム「喜楽苑」（小田南）と「園田苑」（三反田）に運営を委託している＞。芦屋のケア付き仮設住宅も含め３カ所とも建物形式やケアサービスシステムはほぼ同じであるが、雰囲気は地域性がある。小田南は下町の長屋住まいのような親しみがあり、食堂はat homeで、さすがここは尼崎という気分になる。96歳のＡさんは、ここは尼崎の競艇に出かけるのに都合がええと言う。時には尼崎センタープールにとどまらず、住ノ江ボートまでにも足を伸ばす。町中の小さな協同住まいは交通の便利もよく住みなれた地域なので、つらい震災にあったけど元のライフスタイルを取り戻している。ここには４グループの食事ボランティアの支援があり、ほぼ毎日、昼食か夕食がサポートされる。ボランティアが前もって立てたメニューの食材を買ってきてくれる。入居者は300円程度の実費を払う。食事づくりには入居者も準備や後片付けに加わり、全員が集まって食事をし、時にはそのまま食後の団欒を楽しむ。夫婦ものは自室で食事をする時もある。食堂を使う時は、必要な私物をバスケットに入れて持って来て、また持ち帰る。私物を共用スペースに放置しないという協同居住のルールができている。しかし隣の棟はそうはいっていないとのこと。１カ所ある共同風呂の入浴順番も、今では個々人の生活スタイルが把握できたので、トラブルもなくまあ順調。２、３人で連れもって入ることもある。「今まで旅行に行ったことがない。いっぺん行ってみたい」という入居者のつぶやきを若い援助員が聞き、温泉旅行を企画した。悪戦苦闘の準備があったと聞くが、１泊２日の高原ロッジに６名が参加した。冬に入る前に避難訓練も実施した。火災発生のいろんなケースを想定して、ケースごとの脱出、耳の聞こえない人、目の不自由な人に脱出をどう知らせるのか、屋外と室内との段差が高いので、まず布団を放り出してクッションにし、元気な入居者は相互グループをつくり、大騒ぎをして行った。その結果、防災計画書も作られ、個人は非常袋の準備、各部屋には援助員がすぐ使える位置に消火器を置いてもらうことにした。ここでは、毎日の食事、緊急時の避難、生きがいづくりが大切な課題だという。

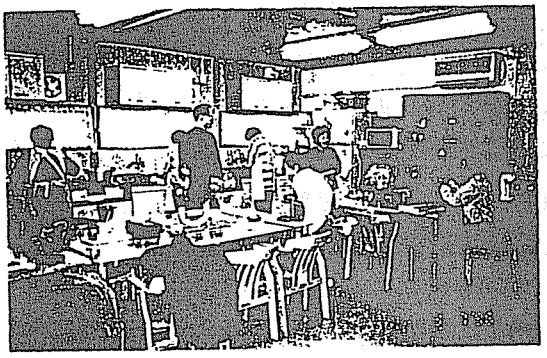
●日常生活にアクセントをつけながら、大家族のように棲み合っている暮らしが、冒頭のＭさんがつぶやいた“こんな住宅でのこんな住まい方”であろう。この棲み合いを育んできたものは何なんだろう。震災後４カ月経って共同スペースをもつ仮設住宅が建てられ、そこに入居しただけというのでは、こんな住まい方は育たなかっただろう。ここには協同居住をつくりあげるしっかりした仕掛けがあった。

コーディネーターと生活援助員と看護婦の３職セットである。

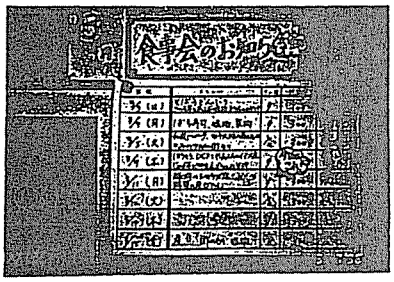
小田南の場合は、コーディネーターにケースワーカーや老人福祉の専門職を経験してこられたベテランの男１名。看護婦は一般病院での看護婦経験のある女１名。生活援助員は20～50歳代の巾広い年齢層で、夜勤のみのパート（３名）も含めて８名程いる。これらのスタッフが24時間体制で、１棟に昼は２～３名、夜は１名配置されている。援助



お湯を沸かしに食堂へ



ボランティア・職員たちによる夕食づくりのスタート



食事ボランティアによるメニュー


空室を利用した団らん室に立派なお雛様が

員は入居者の生活をサポートするための、食事づくりの手助け、買物や通院の付き添い、相談や話相手に応じており、介護福祉士の専門スタッフが多い。その中には調理や家庭料理のプロもいて、ずい分恵まれている。援助員自身の悩みは、“どこまでサポートすればいいのか”ということだと言う。

例えば、ある入居者が体調をくずした時、一時的に手厚いサポートをすると、回復した後も同じサポートを求めてくる。サポートしすぎると、自立した生活ができにくくなるということにもつながる。若い援助員に対しては入居者の要求も多く、援助員は悩んでしまう。看護婦はここでの看護対応だけでなく、外部からの訪問看護や入居者が通院している医療機関とのつながりも必要となり、総合的な医療・看護の知識をフル回転しなければならない。彼女は一時期援助員も兼務していたので、入居者のニーズもよく分かっているというのが恵まれている。コーディネーターは援助員、看護婦と入居者の対応でどんな問題が生じているのかを知り、うまくいくように異なった立場から話をきき、調整していく。入居者同士の協同居住のギクシャクも起きるので、それが大きくならないうちに事前にキャッチして、仲もっていくことも大きな任務となる。ボランティアの調整もする。入居者にとって全てが結果オーライでいくためには、この３職のバランスが必要であり、とくにコーディネーターの任務は大きい。バラバラで入居してきた人たちの状態を知り、その個性を尊重しながら協同生活を育んでくるまでには、多くの試行錯誤があったようで、入居者の個性、生活歴、健康状態、食事の等を把握するため、アンケートをしたり個人生活カルテも作られている。

◉以上のような話をいっぱいしてくれたのは、私の娘のような年代の若い援助員であったが、話を聞くうちに親世代をはるかに越える職業意識と自信と軽やかな行動力をもっているのに感動した。素敵な人材である。

高齢者・障害者を対象としたケア付き住宅では、この３職セットが欠かせないが、元気な自立した人たちのシニア・コレクティブではここまで望むのは現時点では難しいだろう。コーディネーターだけで十分なのか、その対応期間はどれくらい必要なのか、その人材確保は、入居前に協同居住のトレーニングもいるだろう、等々‥‥検討しなければならない。

今、災害復興公営住宅でコレクティブハウジングの供給が始動しょうとしているが、共同スペースをもった住宅の建設というハード面の供給だけでは協同居住は稼働しない。的確なソフトシステムを構築し、その人材確保ができるかどうかが、新しい住まいコレクティブハウジングの成否を決めるだろう。生活歴の異なる人たちの協同生活を個性を大切にしながら築き上げていくということは、わが国ではほとんど未知の分野であるが、協同居住は同じライフスタイルを指向する人たちと専門的立場からのはまった誘導との合作であり、ケア付き仮設住宅から学ぶものは多い。＜続く＞　（３月23日　記）

■ファックスネットワークの皆様からのおたより

「きんもくせい」は、多方面の方々のご支援により、事務局で把握できないほど多くの方にお読みいただいております。今回より、こういった「きんもくせい」の配布にご尽力をいただいている都市計画関係の講座のある大学などを拠点としたファックスネットワークの方々や、「きんもくせいネットワーク」、その他の方々からのお便りを随時ご紹介します。

○建設省建築研究所　藤田　忍さん

FAX(配布)していただいている方々のお名前	建研本研究部、本六研究部の10数名、大村謹二郎、河東義之、和田幸信、木下勇、福川裕一、鈴山悟、日本建築士会連合会(役員、事務局)、ハエみうらドマーク研究会(石田幸彦)
◉「きんもくせい」に“ひとこと”ご寄稿下さい	建築士会連合会おおがた支部会ここでは「復興まちづくりをなるべくそばで支援する」を合言葉に、組織支援、情報支援、財政支援、税金(免除など)支援をやります。復興まちづくりを通じて21世紀の日本のおかたちをお手伝いさせていただくことができると考えているからです。

○阪急電鉄（株）都市開発部　土井　勉さん

FAX(配布)していただいている方々のお名前	河内厚郎、斎藤明、西本慶子、佐藤百合子、愛知和男、山根浩三、角野幸博、高田健二、横山禅也、堀江隆夫、木下直之、倉橋洋樹、日高亮（藏持の友だち）
◉「きんもくせい」に“ひとこと”ご寄稿下さい	最近ふと、自分が復興にかかわることのできる局面が減少してきたような気がしています。そんな時に「きんもくせい」を送っていただくと、いや、まだまだ本番はこれからなのだという気持になり、厳しい話ではございますが励まされます。自治体の財政問題、建築コンプレックスの問題などこれからも多くのハードルがあると思います。少しは役に立てるようになりたいと思います。その際にも「きんもくせい」は私にとって羅針盤の役割があります。これからもよろしくお願いいたします。

（FAXまたは郵送にてお返事を下さい）

阪神大震災復興市民まちづくり支援ニュース

きんもくせい

K I N M O K U S E I

1996年6月30日
第30号
発行:阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク事務局

■災害公営住宅でコレクティブハウジングが始動

―協同居住を軌道に乗せるためのサポート体制―

（被災地にコレクティブハウジングを！／その7）

石東・都市環境研究室　石東　直子

災害公営住宅にコレクティブハウジングが事業化されることになり、神戸市内に県営と市営住宅で数カ所の建設場所が決まり、既に設計が進められている。早いものでは今秋にも着工に入るようだ。コレクティブハウジングのニーズについては、今年2月に県が行った応急仮設住宅入居者調査で、「気心の知れた数世帯が一緒になって協同生活ができるような共同住宅」への希望を聞いているが、11.5%が住みたいと答えている。また「同じ仮設住宅団地の入居者がまとまって入居し、現在のコミュニティを維持できる賃貸住宅」への希望については、17.2%が入居したいと答えている。震災後の避難所や仮設住宅で協同居住を体験し、集まって住むことの良さが再認識されたようだ。震災で消えてしまった下町は、住まいの近くにかかりつけの医院や気軽に外食できる喫茶店や食堂があり、銭湯があり、比較的簡単に内職程度の働き口を見つけることもできた。地域コミュニティでお互いの安否確認や生活支援がなされており、地域が住まいの続きのような機能を充たしており、コレクティブタウン（協同居住の町）といえる状態であった。

災害公営住宅でのコレクティブハウジングは、それぞれの住戸は少しコンパクトになるが、台所、風呂、便所は備わっており、それに共有スペースは入居者が協同で使用し、維持管理していくことになるが、ハードの器ができただけでは、協同居住は稼働しない。順調な協同生活が展開されるためには、協同生活サポートシステムが必要である。どのようなサポートが必要なのかは、各プロジェクトの設計と並行して自治体と設計者がつめているが、私なりのその概略をあげてみる（次号で協同居住の管理・運営とそのプログラムのモデルを掲載予定）。

①入居者までのシステムづくり

（ex. 普及のための啓発活動、入居希望者登録制度、グループ入居の誘導と制度の採用、モデルハウスの設置等）

②入居決定後、入居までの間の協同居住の学習と協働トレーニング

（ex. 協同生活運営のシュミレーション、協働トレーニング〈大量調理やハウスクリーニングの研修等〉、協同生活ルールづくり、協同生活運営規則案づくり等）→最低でも半年位の期間が要る。入居前のトレーニングを通じて居住者が仲良くなることが大切である。

③入居後の協同生活の運営

（ex. 協同生活運営住民組織の設置、協同生活運営規則、協同生活運営チームの設置〈食事グループ、メンテナンスグループ等〉等）

④住宅供給主体と入居者間の契約事項

（ex. 住戸と共同住宅の共同スペースとコレクティブ共有スペースについての3区分の維持管理規則の締結〈個人契約と住人組合との2本だて契約〉、入退居者決定について個人及び住人組合との契約事項等）

このような協同居住運営のためのソフトシステムづくりは、我が国では未知の分野であり、協同居住を軌道に乗せるためのコーディネーターが必要となるが、その人材確保や育成についても開拓を要する。特に公営住宅という硬直した仕組みの中で、新しい住まい方が定着し実践していけるかどうか不安がないわけではないが、21世紀の住まい方のひとつのモデルとして定着させたい。

コレクティブハウジング事業推進応援団の活動の次の展開として、ソフトシステムづくりのために、医師や福祉関係者が中心となって「長田・協同居住支援団（NCCN長田コレクティブケアネットワーク）」と「尼崎で協同居住型住宅を実現させる会」が活動を始めており、そこへ都市プランナーも参画している。また、居住者への啓発活動として、「久二塚6丁目まちづくり協議会・住宅部会」ではコレクティブハウジングについての住民意見交換会の2回目を開いた。



長田区の「久二塚6丁目まちづくり協議会・住宅部会」でのコレクティブハウジングについての意見交流

■コレクティブ ハウジングの協同居住を軌道に乗せるためのサポート システム

（被災地にコレクティブ ハウジングを！／その８）

石東･都市環境研究室　石東 直子

現在、設計が進められている災害公営住宅でのコレクティブハウジングは、それぞれの住戸は少しコンパクトになるが、台所、風呂、便所は備わっており、それに共有スペースとして共同の台所、食堂、談話室、洗濯室等をもったような共同住宅になる。共有スペースは入居者が協同で使用し、維持管理していくことになり、順調な協同生活が展開されるためには、協同生活が軌道に乗るようなサポートが必要であろう。どのようなサポートシステムが必要なのかを、筆者なりに考えてみた。なお、災害公営住宅での対応にのみ限定せずに、一般住宅での展開をも考慮にいれたものとしている。多方面からのご意見をいただき、より現実性のあるものに深めていきたいと思っています。

◆ コレクティブ ハウジングの協同生活サポート システムのプログラム（私案）

公的機関	住宅供給主体	協同生活の運営プログラム ＜住人と住宅供給主体との合作＞
・建設相談窓口の設置（建築、組織、財政、法律等のコンサルティング） ・建設費の補助（特に、共有スペースの補助） ・建物維持管理の代行 ・協同居住の学習と協働のトレーニング機関設置 ・コーディネーターやアドバイザーの養成と人材確保 コーディネーター or アドバイザー の派遣⇨	事業の企画 建物設計等 入居者の確定から入居開始までに相当期間が必要	需要層の開拓（居住希望者の確保） 普及活動の展開　居住希望者登録制度（友の会）　学習会の開催 モデルハウスの設置　etc. 計画に入居予定者の参画があればより望ましい ＜建物建設の開始＞ 入居者募集　理念をはっきり打ち出す ①協同居住型住宅である ②共有スペースは住戸の延長としてある（住戸の付加価値としてではない） 個人募集以外に グループ募集制度の採用 入居者の確定 協同居住の学習と協働のトレーニング A. 協同生活運営のシュミレーション ① ・セルフワーク タイプ　② ・食事当番 ・ワーカーズ コレクティブ タイプ　・掃除当番 ・外部サービス導入 タイプ　・メインテナンス当番 ③ ・協同生活のために何をそろえるか（共同使用の器具、機器等の購入計画） ・多目的室等の共有スペース利用設定 ・個人所有の物品の共同購入　etc. B. 協働のトレーニング ・食事づくり（大量調理）　・ハウスクリーニング　・共有機器の保守、点検 ・緊急時相互対応　・園芸、植栽の手入れ　etc. C. 協同生活運営規則（案）づくり、協同生活ルールづくり、トラブル解決方法づくり D. 入居者による住戸位置の決定 ＜入居開始・協同生活のスタート＞
入居契約の２本立て ⇩ 住人組合と ⇩ 入居者個人と		協同生活の運営 協同生活運営住人組織 ・住人組合（理事会 or 自治会役員会） 協同生活運営規則の設定 ・住人会議（住人全体のハウスミーティング） 協同生活ルールの設定 ・協働運営チームの設定 1年任期のアクティビティ グループ（食材の共同購入、メインテナンス、経理等） 当番制のワーキング チーム ・余暇活動グループ etc.
協同生活運営規則の様式案設定		建物の維持管理　＜建物維持管理規則の締結。管理の３区分＞ 住人個人の管理範囲、（住戸専有部分）　住人組合の管理範囲、（コレクティブ共有部分）　建物所有者or住人組合の管理範囲（廊下やＥＶ等の建物共同部分）
建物維持管理規則の様式設定		
入居希望者登録制度		入退居者にかかる事項　途中入居者の選定には住人組合の参画

■ 災害公営住宅でコレクティブハウジングの建設が始まる！

－ ワークショップ方式で決めた真野地区浜添コレクティブハウジングの計画 －

（被災地にコレクティブハウジングを！／その９）

石東・都市環境研究室　石東　直子

災害公営住宅でコレクティブハウジングの事業化が下表の６地区で進められている。県営片山住宅と市営浜添住宅（共に仮称）はもうすぐ建設が始まり、第１号入居は来春３月の片山住宅である。

◈ワークショップで煮つめた浜添住宅の計画案

浜添住宅の基本計画の策定は神戸市職員と外部委員とからなる「真野コレクティブハウジング研究会（宮西悠司座長）」（以下「研究会」と記す）で検討を重ねてきたが、特筆すべきは地元の仮設住宅入居者やまちづくり協議会の役員等の参画によるワークショップで計画案を決定したことにある。ワークショップの枠組みは次のようである。

・第１回＜暮らし方イメージ＞ワークショップ（８月３日）
「コレクティブハウジングを疑似体験してみよう!」‥‥夢を語り合い、不安を解消する知恵をみんなで出し合う

・第２回＜デザインゲーム＞ワークショップ（８月10日）
「第1回で語り合った夢や提案はどんな形になったかな」‥‥設計者による2つの計画案を確認し、よりよいものにしていく

・第３回＜マネージメント＞ワークショップ（10月27日予定）
「管理・運営と入居者選定等に向けての今後の流れを考えよう」‥‥誰が住むのか、どうやって住むのか

※

「研究会」で延藤安弘委員（名城大学教授）が計画づくりを建設予定地の周辺住民や仮設住宅の人たちによるワークショップ方式でやろうと提案された時、私（石東委員）は声には出さなかったがエッー！と思った。入居者が決定していない段階で、しかも仮設住宅の多くの人はできれば地元の公営住宅に入りたいと熱望しているのに、入居できるのか否かの保証なしでワークショップに参画してもらうのは、あまりにも酷なんではないかと思った。

《コレクティブハウジングは集まって共に住みあう意味が強いだけに、入居後の協同居住をうまく稼働させるためには、入居前の協同居住の学習と協働トレーニングが欠かせない。加えて、コレクティブハウジングの本領を発揮させるためには、核となる共有スペースにおいて住み手の希望、提案を計画案に反映させる仕組みづくりも欠かせない。その点において、ワークショップはコレクティブハウジングを知ってもらい、共に住みこなすための意識を喚起し、また安心して住みつづけられるための運営・管理のあり方を住み手自らが考えていくのによい方法である。》というのは、私の持論でもある。しかし、これはすでに入居者が確定している場合の話である。ワークショップ方式は大賛成だが、不特定多数が使用する公共施設等の計画づくりと、公営住宅といえども特定使用となる住宅での計画、しかも多くの人ができれば当選して入居したいと思っている被災地での状況とではちがうのではないだろうか……。

しかし一方で、行政と専門家が独りよがりで計画策定しているのではないだろうか、コレクティブハウジングのニーズは確かにあるだろうが、わたしたちの思いが本当に受け入れてもらえるのだろうかという不安もないわけではなかった。これに対して延藤さんの意見は次のようであった。

《今回の計画は、公営住宅という点から現時点での入居者の特定はできないが、建設予定地周辺の住民等が疑似的に居住者の役を演じてワークショップをやることは、さまざまな問題のあぶり出しが期待できるとともに、入居者選定後の協同居住の学習と協働トレーニングをワークショップでやる場合のよい参考になる。

また、今回の計画は、災害公営住宅の一環として供給されることから、いくつかの制約は否めない。ワークショップ実施前に以下の点について、専門家と行政の意識を共有する必要がある。

・真野地区に建つとはいえ、原則では入居者は公募形式を取らざるを得ないが、早期の入居者の選定、グループ応募の実現は可能かどうか。

・共有スペースと占有スペースの役割分担がどこまで自由になるのか（例えば、共同風呂を作るとしたときに、住戸はシャワーのみにできるのかどうか）。

・ワークショップをすることによって得られる住み手側の生の声が、どこまで反映されるのか。》

これらについて「研究会」で検討を重ね、ワークショップを実施することにした。それでも私はまだつらい気分で、第１回ワークショップを迎えた。当日の参加者は、真野地区の仮設住宅入居者やまちづくり協議会の役員と住民の方々、それに遠方から自転車に乗って来られた久二塚まちづくり協議会の仮設住宅入居者、延藤研究室のスタッフ、まちづくりプランナーや学生、神戸市職員等々、総勢70名を越えた。

ワークショップが始まってしばらくした頃、

「わしら入れてくれるんやったら、なん

	団地名	コレクティブ戸数	入居時期	住戸専用面積	コレクティブ共用面積
県営	東部新都心・脇浜（中央区）	44	10年度下期	35～44㎡	362㎡
県営	南本町（同上）	27	9年度下期	32～43㎡	182㎡
県営	岩屋北町（灘区）	22	9年度下期	35～44㎡	105㎡
県営	片山町（長田区）	6	8年度下期	31 ㎡	56㎡
県営	大倉山（中央区）	32	9年度下期	34～37㎡	222㎡
市営	浜添（長田区）	29	9年度下期	35～55㎡	206㎡

コレクティブハウジングの事業化団地



第2回ワークショップに参加された94歳のHさん。
「わたしは仮設住宅にはいっていないんやけど、こんな住宅に入れてほしい。この年になってひとり住まいをしていると、周りの人に心配をかけるので。」

ぼでも意見ゆうけど……」
「入れるかどうか分からんのに、こんなん殺生や……」
という声が聞こえた。
　ワークショップが終わる頃、
「まぁ、入れる人は少ないな。全戸が地元優先入居というわけでもないやろうし。入れんかっても、また工場跡地こうてもろて、次にもこんな住宅建ててもらお」
という声が聞こえた。私は心から頭を下げた。
　ワークショップは延藤研究室の周到な準備に負うところがとてもとても大きかった。さらに真野地区の長い歴史をもつ住民主体のまちづくりの土壌があってのものである。

◆浜添住宅の計画・設計概要

①集まって住む楽しさと居住者の相互扶助の幅を広げるために、多様な世帯が住み合う集合住宅とする。建設戸数29戸のうち、21戸を高齢者世帯に、8戸を一般世帯とする。なお、高齢者住宅は生活援助員の派遣があるシルバーハウジングプロジェクトである。
②真野地区の下町の雰囲気に溶け込んだ建物形態とし、3階建て、分節型（連続した大きな塊の建物を避ける）。自然の色。町屋風の屋根等。
③下町の長屋的な雰囲気を創出する（震災で消失してしまった下町の再生、平成の下町住宅の再生）。南側廊下と住戸近くのたまり場づくり（路地の再現）。戸外への広がり、連続性をもつ住戸プラン（例えば、住戸内の台所と戸外のたまり場への連続性をもつ型）。
④地元の人々との交流を促す共有スペースのつくり（例えば、共有スペースの利用の活性化のため、地域からの活用がしやすいつくり）。
⑤将来の要介護高齢者のための必要設備等の充足の可能性をもったプラン（例えば、現在の自転車置場に介護入浴のための浴室を設置）。
⑥環境共生と省資源のライフスタイルの推進のための配慮（ｿｰﾗｰｼｽﾃﾑ、ｺﾝﾎﾟｽﾄ、屋上菜園等）。高齢者の生活の安全性への配慮（緊急通報ｼｽﾃﾑ、ｵｰﾙ電化ｼｽﾃﾑ等）。
⑦敷地面積 1,200㎡。住戸と住戸専用面積（１ＤＫ・35㎡・15戸　２ＤＫ・45㎡・12戸　3DK・55㎡・２戸）。
コレクティブ協同部分の内容－屋内（食堂、厨房、食品庫、談話室、多目的室、便所、倉庫。合計面積 206㎡）。屋外（青空テラス＝立体路地、たまり場、屋上菜園、屋上広場）

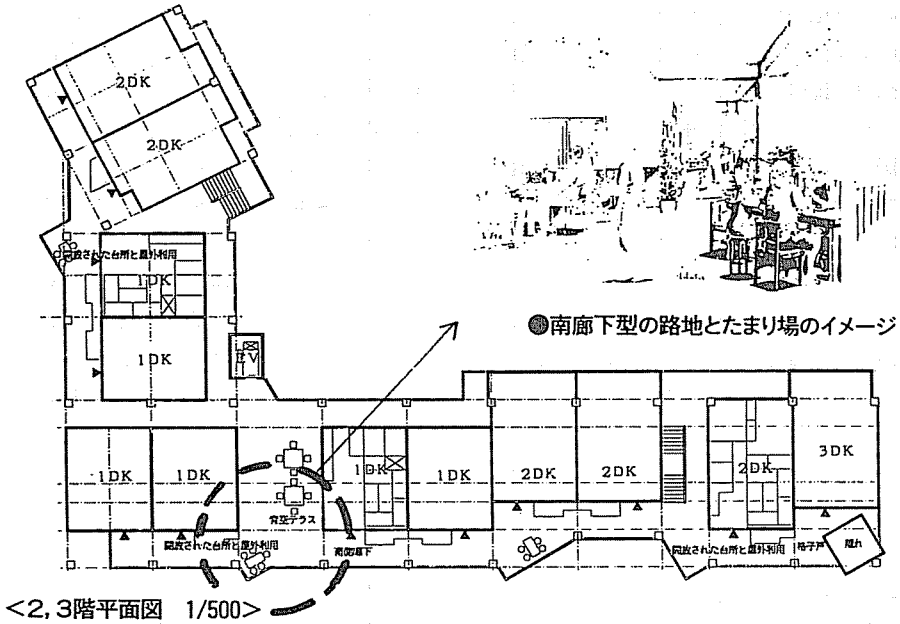
◆入居時までの検討課題

協同居住を順調に稼働させるための管理・運営システムとそのサポート体制の確立が必要であり、引き続き「真野コレクティブハウジング研究会（第２部）」と地元でのワークショップによって検討をすすめていく。その検討の主な内容は次のようなものである。

・入居者決定の方式（例えば、グループ募集、地元優先枠、入居者登録制度等）
・入居者決定後の協同生活の学習と協働のトレーニングの実施とその機関（コーディネーターやアドバイザーの人材確保や育成等も含めて）
・協同生活運営住人組織や協同生活ルールづくり、入退居者の決定方法等。

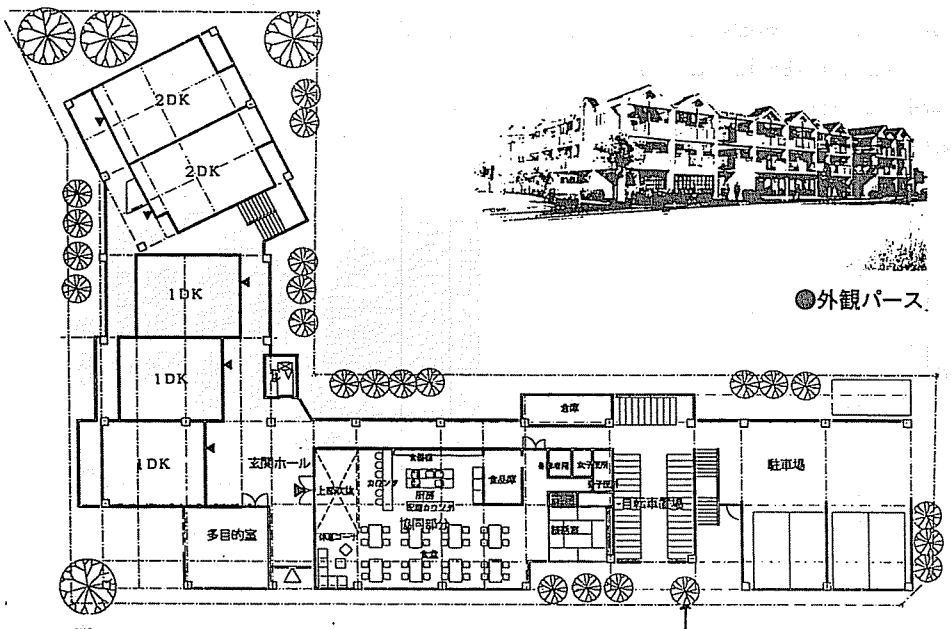
（10月10日記）

注）文中《　》内の文章は延藤さんのワークショッププログラムの枠組みについてのレジュメから引用。



<2,3階平面図　1/500>

◉南廊下型の路地とたまり場のイメージ



<1階平面図　1/500>

◉外観パース

◉コレクティブハウジング
浜添住宅基本計画

■新しい住まい方の受け入れには醸造期間がいる!

～災害復興住宅第三次一元募集のための出前説明会を巡って～

（被災地にコレクティブハウジングを!／その10）

石東・都市環境研究室　石東　直子

今回の復興公営住宅第三次一元募集には新メニューが３つあった。協同居住型集合住宅（コレクティブハウジング）、グループ入居制度、ペットと一緒に住める住宅で、いづれも公営住宅としては全国初の試みである。コレクティブハウジング事業推進応援団は、分かりやすい応募の手引書を作成して（上田耕蔵さん作成）、仮設住宅を巡って出前説明会を行った。

この新メニューの応募状況が一部の住宅を除いて不調だったが、私は不思議なことではないと受け取っているが、行政は秋の第四次一元募集に向けて仕切り直しが必要である。不調に終わった原因について、私の考えを記してみます。

◆新メニューの受け入れには醸造期間がいる!

まず、情報が行き届かなかった。新製品開発の情報を、欲している人に届ける知恵が十分に出されなかった。次に、情報をキャッチして、それを自分の選択肢に入れるには時間が必要である。

コレクテイブハウジングはそれぞれの住宅は台所、浴室、便所が備わった独立した住戸で、それに協同スペース（協同台所、食堂、談話室、多目的室等）があり、日常生活の中で自然な形で住人同士がふれあえる集合住宅である。協同室の使い方や維持管理の仕方は居住者が決めて、協同室を核に協同生活が展開され、下町の長屋的なふれあいと助け合いの生活が期待でる。このような住まい方を自分のライフスタイルとして選択するには少し考える時間がいるだろう。住まい方の意識はとても保守的なもので、募集の直前に新しい住まい方等の情報を知っても、それを自分の住まい方の選択肢として取り込めるものではない。日ごろからこういう生活がしたい、こういう生き方もあるらしいと、自分の問題としてとらえていなければ、新しい住宅が開発されたとしても関心はもてないだろう。情報を自分のものにしていく醸造期間が必要である。

グループ入居制度は、多くの高齢者が新しく移り住む地域の、新しい出会いに大きな負担を感じており、仮設住宅で仲よくなった人たちが一緒に移り住めるようにという暖かい配慮が感じられる制度である。

グループでの応募は、自分の中の醸造だけでなく、他者との共有の醸造も要る。将来の生活を他者と共有するためには、例えば、一緒に草花の手入れをしながら、或いはお茶を飲みながら、話し合える時間が必要だろう。

「こんど公営住宅に移っても、一緒にこんなんできたらええのにねぇ」

「グループ入居制度というのがあるんやて。今度の募集の時、グループで応募してみえへん？」

「ふーん、そんなら○さんも誘うてみよか。」

「△さんはどうやろ？」

というように、グループはできるもんだと思う。このようにしてできたのがほんまもんのグループ入居で、誰かがコーディネイトしてグループ化を図るものではないと思うが、グループをつくって応募するのは、かなりのエネルギーが要るので、場合によってはグループ化のきっかけづくりの適切なコーディネイトが必要だろう。なお高齢者がグループで移ろうという仲良しは２～３人で、４人、５人という大きさではないようだ。それでは数世帯規模のグループはできないのかというと、皆無ではなく、そのグループの中に夫婦世帯か、比較的元気な（やや若い）リーダー格がいれば可能性はありそうだ。今回グループ入居制度の応募は21件あり（真野コレクティブを除く）、17件が２世帯のグループだった。グループ応募が少なかった一因は、グループ入居が可能な住宅が限られていて、その立地や住戸型に人気がなかったということにもありそうだ。

◆真野ふれあい住宅の応募状況

コレクティブハウジングは、協同居住をしたいというライフスタイルの選択なので、居住者参加型の住まいづくりが望まれる。しかし、今回のような復興公営住宅では居住者参加型を採るのはなかなか難しい。神戸市営コレクティブハウジング（真野ふれあい住宅）は地域の関心をもつ人たちがワークショップをやって計画づくりに参画したが、真野地域だからできたということも言えそうだ。居住者参加型住まいづくりに代わるやり方はいくつか考えられるが、県営コレクティブハウジング（片山ふれあい住宅）はその努力をしないで募集をした。片山ふれあい住宅に応募者がなかったのは、入居後の住まい方のイメージが十分に知らされなかったことと、グループ入居の条件（一人暮らし高齢者の６人グループだけの応募）が現実離れしていたことにもよると思う。

真野ふれあい住宅（21戸の高齢者向けと８戸の一般世帯向け）は2.3倍の応募があり、グループ応募は５件である。うち一般世帯向け住宅だけをみると２ＤＫ（６戸）は2.7倍、３ＤＫ（２戸）は6.0倍で、単身世帯と母子世帯の応募が多く、比較的若い世代が多い（応募世帯の全家族人数の年齢構成では30歳以下が32％、30歳台と40歳台で29％）。４月末には入居者が確定し、その後入居までの半年間に協同居住の学習や体験の機会をもち、協同室の維持管理の方法や協同生活のルールづくりが予定されている。

コレクティブハウジングは高齢者に限らず、単親世帯、男女協働世帯、単身世帯や幼児のいる世帯等にとっても、共に住まうことの安全性、安心感、そしてふれあう楽しさをもつ暮らし方で、１事例からだけの分析であるがその需要は潜在的にあると確信した。

（付記）高齢者は元の地域に戻りたいという強い願望があり、住宅入居申込案内書を手にして見るのは地域別の頁で、自分の元いた地域の住宅一覧。新メニューまで目が届かない。新メニューが目につくような工夫がほしい。

（４月18日記）

ふれあいの輪が結びはじめた感動の一日

～真野ふれあい住宅・入居前の協同居住の学習・体験ワークショップが始まる！～

（被災地にコレクテイブハウジングを！/その11）

石東・都市環境研究室　石東 直子

７月１日は感動の一日だった。「やっと、ここまで来た！」という安堵と、「はや、ここまで来たの？」という戸惑いが交差する。

神戸市営コレクテイブハウジング・真野ふれあい住宅の入居予定者たちによる「入居前協同居住の学習・体験の懇談会」がスタートした。

真野ふれあい住宅の入居予定者（28世帯 43人、1住戸未定 ）は次のようである。

高齢者住宅 1DK:　15人 平均年齢78歳
高齢者住宅 2DK: 5世帯 10人 平均年齢67歳
一般住宅 2DK: 6世帯 9人
一般住宅 3DK: 2世帯 9人

10時半から、真野ふれあい住宅協同学習等運営委員会の専門サポーターと学生サポーター（30名弱）で進行の打ち合わせをする。入居予定者の年齢を見ると、後期高齢者が圧倒的に多いので、ワークショップ（以下ＷＳと記す）のプログラムはあるが、参加者の顔を見て臨機応変に対応しようということを確認した。

ＷＳは１時半の開始だが、12時半にはもう一人がみえた。須磨区の仮設住宅からタクシーを利用して来られたとのこと。

１時すぎには数名が到着。お年寄りの到着は早いわ。

主客続々到着。介添えボランティアに連れられた人、歩行車を押しての人、３～４人で連れもっての人、杖をついた人、おめかししていらした人、……すぐに20名ほどになり、会場の前方に並べた椅子が埋まっていく。グループ応募組は固まって座り、個人応募組は後寄りの離れた席を選ばれる。真野ふれあい住宅は５グループの応募があり、４グループ（19世帯）が当選した。あとの10世帯は個人応募である。

来場者の中に数人の顔見知りがいる。コレクテイブハウジング事業推進応援団が仮設住宅へ出前説明会に出かけた時会った人、真野ふれあい住宅の計画づくりＷＳに参加していた人、仮設住宅に花の苗を植えに行った時ご一緒した人たちだ。そのひとりに元気なおばさんがいた。「えっ！当たったの。よかったねー。」と声をかけると、「そう、そう、わたしらみんな当たったんよ。うれしいわー。」と、両手でわたしの手をギュッと握ってきた。そして、自分の椅子の半分を開けて「ここ　座って」と。

入居予定者は３世帯が欠席で25世帯26名、それに40名程のサポーター、神戸市住宅局建設課と管理課の職員、見学者と報道陣等の総出80名ほどでＷＳは開会した。神戸市の若手職員が作成した住宅１階の協同スペースの1/30模型は、なかなかのものである。まず、家主の管理課長のあいさつ。「全国で初めての試みの公営コレクテイブハウジングは入居者の方々がモデルとなるような新しい住まい方を築いてほしい。

そのために入居前懇談会を、来年１月入居までに何回か開きたい。今日のプログラムはサポーターに任せる」ということで、ＷＳ運営委員にバトンが渡された。

続いて、サポーターの紹介、コレクテイブハウジングの説明と進み、コレクテイブハウジングの住まい方イメージを膨らませるためのスライド会に入る。ここまで運営委員主導で進み、少し場の雰囲気に馴れたところで、誕生月順に輪になって座り自己紹介に移る。

輪になって座れるようにサッと椅子を並べかえようとしたが、ちょっと待って！　立ち上がりが困難で移動がスムーズにいかない人、誕生月に関係なく知り合い同士座ってしまう人、トイレにたってなかなか戻って来ない人……。

誕生月と名前の自己紹介は進み、その座順から5グループに別れて、テーブルに移動した。１テーブルは4～6名の主客とほぼ同数のサポーターが座った。

さぁ、ここから本番。

「なんでこの住宅に申し込みはったん？」
「この住宅でどんなことがしたいですか？」
「なにが得意ですか？」
「今、なにか不安に思ってられますか？」

などなど、おおかた孫や子供世代にあたるサポーターから問いかけられ、ひとり一人の思いが語られていく。ふれあいの輪が結ばれはじめる気配を感じる。茶話会記録から何人かの住人像を写してみよう。

・今の仮設住宅から近いので申し込んだ。夕涼みしながらおしゃべりしている。入居してからはあんなこともしたい、こんなこともしたいと考えている。みんなでつくっていきたい。園芸が好き。ペットは嫌い。前からコレクティブに関心があり、自分の住みたいのはこれだと思っていた。計画づくりのワークショップに３回とも参加した。コレクテイブハウジングの顔となる玄関は花いっぱいにしたい。

・みんなで集まってご飯をたべるのが大好き。まっ先にしたいことのひとつ。

・ひとりで入居するが不安はない。協同室でおしゃべりできるのが楽しみ。新しい出会いも楽しみ。同じ仮設の６人の当選者ときた。仲良しで、一緒にラジオ体操もしている。今日のＷＳだけでもみんな集まっておしゃべりできてうれしい。

・馴れた人と住めるのは心強い。震災後息子の家に移ったが周りにしゃべる人がなく、ノイローゼになった。仮設のふれあいセンターでみんなで話し合っていく中で治った。ふれあいセンターでカラオケ、体操、トランプ、おしゃべり等して仲良くなった４人でグループ応募した。



元気に発言する入居予定の畳田さん

２人は足が悪いので支え合ってあげないと。住戸の位置も隣同士になって住めたらいいのに。若い人としゃべると、わたしらも若返る。この輪を広げていきたい。新しいことにも挑戦したい。踊りを習ってみたい。

・震災前、真野に住んでいた。コンピュター関係の事業をやっていたので、電気関係に強いよ。家内は新舞踊をやっていて、すぐに人と打ちとける。

・わたしは大家族で入居しますが、一人で入居されて寂しい人もいらっしゃると思うので、仲良くしたい。話をするのが大好き。夫は草花を育てるのが好き。

・真野ふれあい住宅の生活で、プライバシーがどのように守られるか、老人のケアがどのように行なわれるかを、自ら見てみたいと思ったのが入居の理由。能の謡曲を若い時からやっていた。早起きなので皆に迷惑をかけないように気をつける。地震があったけど、こういう生活に移っていけて夢みたい。

・好き嫌いはない。人見知りしない。真野ふれあい住宅の生活についてはまだよう分からへん。住みながらルールも決めていくのがいい。共益費の払い方は箱を用意して使った人がお金を入れて、他の人の負担を軽くするのもいい。みんなで食事を作りあって食べるのが好き。

・真野ふれあい住宅の近くに住んでいた。どんな住宅か知らなかった。パンフレットを見てもよく分からない。今日のスライドを見てイメージできた。

・心配なことは共益費のこと。5000円位に収まればいい。

・長田が好き。15年くらい住んでいた。テレビで真野ふれあい住宅のこと知った。

・不安は住んでみんと分からん。週３回医者に来てもらっているので、医者が来てくれるとうれしい。土日が寂しい。一緒に住んでる人とリハビリを兼ねた散歩がしたい。

・真野に住んでいて、お菓子の箱を作っていた。去年の秋に夫が亡くなるまで仮設で二人で住んでいた。花が好きなのでふれあい住宅に花を置くとこあるかのか心配。仮設での隣同士と一緒に移れてうれしい。お互い譲りあったら仲良くできると、地震を通じて分かった。不安なことは何もない。

・調理師してたので、仮設でも料理を作って食べてもらっている。ふれあい住宅でもみんなで食べる時は作りますよ。400円や500円出せば、十分おいしいもんができる。３匹の猫を飼っている。犬だって猫だってみんな被災したんだからかわいそう。静かなもんやし、人に迷惑かけんように飼うから何とか一緒に暮らしたい。計画のワークショップに３回とも出た。みんなでいろいろできそうなとこに魅力を感じた。老いも若きも一緒に生活できるのはいいな。大工仕事も得意なのでまかせてください。朝早く須磨の海に釣りにいき、釣ってきた魚を料理したりする。

・ひとりぼっちなので親切にしてくれる人と一緒に住みたい。花を買うのが好き。仮設の人がお風呂に付き添ってくれたりする。その人も一緒にふれあい住宅に当たってん。

・家族みんなで昔から馴染んだ土地に住みたいと思った。心配なのは入居後の決めごとと掃除とか当番のこと。管理人みたいな人がいると助かる。門限はあるんやろか。真野ふれあい住宅は工場の中にあるので、緑をいっぱい育てたい。協同室は図書館みたいに本があり、くつろげるものにしたい。リラックス協同スペースを願う。

・地震で48時間がれきに埋まっていたので足が悪くなり杖をついてる。写真が趣味。長田は自分の庭のようなもので70年間住んでいた。

・体が弱いので、知った人がいるとこに住みたかった。グループで申し込んだ。共益費のことが一番心配。

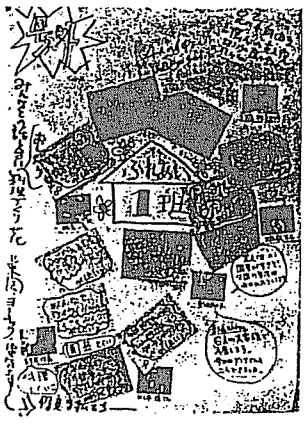
※

誰かと話をしたい、聞いてもらいたいという気持ちがいっぱい詰まったくす玉の紐が一気に引かれたように、話が舞った。後期高齢者が多いということで準備段階で抱いていた不安は吹き飛んだ。茶話会の間に撮影班が一人づづの顔写真をポラロイドとデジタルカメラで撮る。ポラロイド写真はテーブルごとに作る達人新聞に張って、個性的な５枚の壁新聞ができた。それをみんなの前で披露して、これから築く一大家族の顔ぶれを確認し、宴は終わりに近づく。

入居前に集いをもち、心がふれあい、新しい暮らしへの不安を和らげ、希望を育んでいくことのすばらしさを実感した。集団の中に40、50代、60代前半の若い人が混じると、その人数の２倍も３倍もの活気が感じられる。後期高齢者が多いが全体として元気な人が多く、80歳をこえても気力があり、新しい生活に夢を抱いておられる。生活術を身につけた生活達人が揃っており、園芸、料理、大工、歌、踊り、語り部の役者も多く、楽しい協同生活が展開されそう。

多世代が住み合うこと、グループ入居制度を採用したこと、入居前の協同居住の学習・体験等の生活サポート体制をもったこと等々は、これまでの公営住宅供給システムの大きな変革であり、神戸市にエールをおくりたい。コレクテイブハウジング事業推進応援団もここまでくるのに、いくつもの関を越えたような感がある。帰り際、「楽しかった！うれしい！」と、ひとりのおかあさんが抱きついてこられた。もっともっとたくさんの人が今日の笑顔をもてるようコレクテイブハウジングを増やしていきたい。つらい体験をしたんやから、みんな一緒に幸せになろう。そのささやかなサポートをわたしたちはします。（7月8日記）





５グループに分かれた「茶話会」。話し合った結果をみんなで壁新聞にした。

3．仮設住宅への出前説明会のための冊子

（コレクティブハウジング、シルバーハウジング、グループ募集の手引き）

コレクテイブ・ハウジング
シルバーハイツ
グループ募集
について説明します

ふれあい



第２期コレクテイブ・ハウジング事業推進応援団

（作成：上田耕蔵／神戸協同病院・院長）

「シルバー」、「コレクテイブ」、「グループ応募」の見方

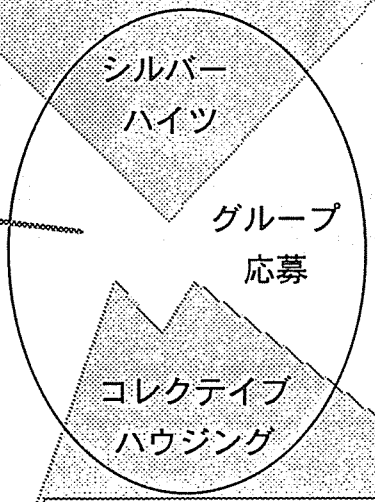
シルバーハウジング（シルバーハイツ）とは、
①緊急通報システムがついており、②生活援助員が緊急時の対応をしてくれる高齢者住宅です。自立した（炊事ができる）生活ができる60才以上の方が対象です。

生活援助員は入居者に対して直接「介護」はしません。

入居者資格は、
①単身者向け：
現に一人で住んでおり、今後も同居する家族がいない人。
②2人世帯向け：
・いずれか一方が60才以上の夫婦のみ
・2人とも60才以上で、民法上の親族関係にある

住宅面積は
①1人世帯は52m²以下、
②2人世帯では59m²以下、
③L型は5人世帯しか申し込めません。

優先順位は
①仮設入居者の枠は、市営では7割、県営では10割です。ただし県営で阪神北部・明石西部の空家と三田・川西の新築は7割です。
②高齢者・障害者の世帯の優先枠は募集戸数の3割です。
③政令月収が20万円未満の世帯が優先されます。
④被災者が最優先されます。



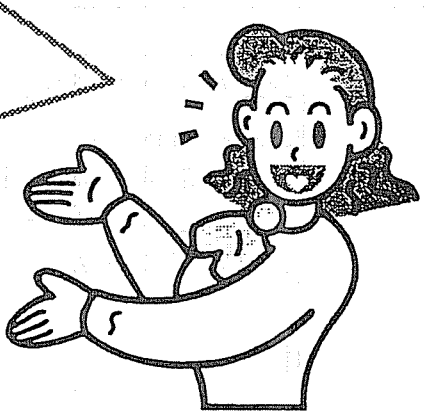
グループ応募
仮設住宅入居者のみ、グループで申し込める住宅があります。

①市営住宅は2～5世帯、県営住宅で2～10世帯で申し込めます。
②グループの代表者の方の申し込み書で抽選します。
③当選したグループ内で、ある方が書類審査で失格した場合、その方のみが失格となります。
④募集戸数に限りがあれば、そのグループの中で抽選して決めます。
⑤グループで申し込んだ場合は、別に個人では申し込めません。

それぞれに独立した住宅と協同室（協同の台所、食堂、談話室など）がある「ふれあい」集合住宅です。

①入居者の「ふれあい」を大切にした住宅です。共にに雑談したり、たまにはいっしょに料理を作って食べよう。
②みんなで協同生活に必要なルールを作ろう。
③協同室の水光熱費などは入居者の負担となります。（月に約4,000～6,000円の見込み）協同室の掃除や簡単な修繕も入居者が協力して行います。
④協同室に使う椅子・電化製品・食器などの備品は入居者の皆さんで購入します。
⑤当選者や補欠者は「ふれあい」住宅のくらし方について、勉強会や体験会に参加してもらいます。参加されないなら、当選資格を取り消される場合があります。

グループ応募について説明しま～す



1 グループは何人まで申し込めますか？

市営住宅は２～５世帯まで、県営住宅は２～10 世帯まで申し込めます。

2 仮設外の人はグループで申し込めるのですか？

仮設外の人はグループでは申し込めません。仮設住民の方だけがグループで申し込めます。

3 グループで申込んだ場合、別に個人でも申込はできますか？

グループで申し込んだ場合は、別に個人で申し込むことはできません。

4 グループ募集は何カ所であるのですか？

神戸市域では、市営住宅で２カ所、県営で６カ所あります。

5 当選後、グループの１人が書類審査で失格した場合、グループ全員が失格となるのですか？

その人だけが失格となります。他の人は大丈夫です。

6 当選したが、グループの世帯数より抽選の残戸数が少ない場合はどうなるのですか？

例えば抽選の残戸数が３戸しかないが、グループの世帯数が５戸の場合は、この５戸のなかからまた抽選して３戸の当選を決めます。２世帯は落選となります。

グループ募集について説明します

7 入居するなら全員でと思っています。１人でも失格の人がでたら、全員入るのを止めます。どうしたらいいでしょう。

申込用紙に「1 世帯の当選でも入居するかどうか」回答する項目があるので、必ず必要欄に○を入れるようにして下さい。

8 グループで申し込む時、高齢者が入っていないとダメなのですか？

ややこしくて申し訳ないのですが、市営住宅では「真野ふれあい住宅」は一般世帯だけのグループでも申し込めます。「北舞子第 4 住宅」ではシルバー世帯が混じっていることが必要です。

県営住宅では「片山ふれあい住宅」は 6 人の単身シルバー世帯のみのグループしか受け付けません。「その他のグループ募集の住宅」では一般世帯のみのグループでも受け付けます。

9 グループは他の仮設の人と組んでもいいのですか？

他の仮設の人とグループを組んでもかまいません。

10 抽選する時に、グループごとの優先順位はあるのでしょうか？

高齢層と若年層と両方がはいれる「真野ふれあい住宅」では、グループごとの優先順位はありません。シルバーハイツでも優先順位はありません。市営の一般住宅でグループ募集をする北舞子第 4 団地（グループ募集枠の 100 戸）についてもグループ内の優先順位はつけません。

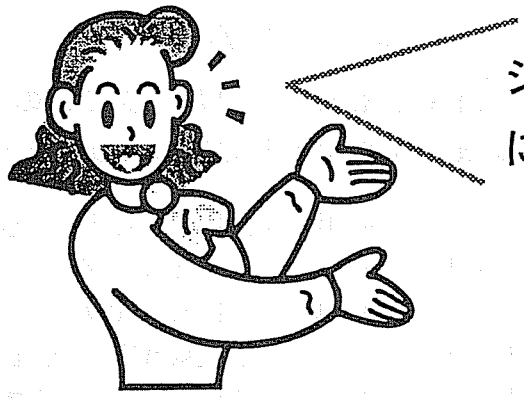
県営住宅ではグループごとに優先順位がつけられます。具体的には、例えば、５世帯のグループでうち４世帯が高齢者であっても、１世帯が 20～50 才台の若い世帯なら、グループの優先順位はその若い世帯の順位となります。

11 コレクテイブでないシルバーハイツでは、グループ募集はないのでしょうか？

残念ながら今回の募集では「コレクテイブでない」シルバーハイツではグループ募集はありません。

12 グループ当選した場合、同じ階に入れるのですか？

建物の号棟、階数は違う場合があります。また申込の部屋の広さも違ってしまう場合があります。



シルバーハイツについて説明します

1 私は 78 才なのですが、妻は 59 才です。私たち夫婦は入居資格はあるでしょうか？

あります。ご夫婦の場合はいずれか一方の方が 60 才以上であればいいのです。

2 私は今年 2 月 28 日に満 60 才になりますが、入居資格はあるでしょうか？

今年の 2 月 27 日現在の満年齢で判断しますので、入居資格はありません。

3 私は 59 才ですが、自分の実親 83 才と二人でくらしていますが、はいれるでしょうか？

夫婦でない場合は、2 人とも 60 才以上で、民法上の親族関係があることが必要です。

4 私たち 2 人はともに 60 才以上ですが、「内縁関係」です。どうなのでしょうか？

内縁関係でも、震災前に「住民票で届けがある」場合は認められるそうです。

5 私の政令月収は 20 万円以上なのですが、入居資格はあるでしょうか？

政令月収が 20 万円以上では入居資格はありません。20 万円未満の方が対象です。ただし「政令月収」の計算は少しややこしいので、行政の住宅相談日には必ず行って自分の政令月収を聞いて下さい。

6 母親（84 才）は寝たきりで、私（61 才）が世話をしていますが、入れるでしょうか？

入居資格はあります。一方の方が寝たきりでも他方の方がお世話をできるなら、入れます。

シルバーハイツについて説明します

7 「民法上の親族関係」とはどの範囲までを言うのですか？

血縁関係がある場合は 6 親等までを言います。つまり親子、兄弟、おいめい、いとこ等です。
義理の関係の場合は 3 親等までです。つまり親子、兄弟、おいめい、までです。

8 生活援助員さんに、自分の買い物を頼んでもよいのでしょうか？

生活援助員さんは、倒れた時などに呼べば来てくれ、家族や病院などに必要な連絡をしてくれます。単なる買い物や掃除は生活援助員さんに頼めません。別にヘルパーさんに来てもらう必要があります。

9 一人暮らしですが、数年後私が寝たきりになった場合は、どうなるのでしょうか？

今の所、寝たきりになった場合は、住宅を出て、特別養護老人ホームなどに移らなければなりません。しかし公的介護保険が整備された段階では毎日ヘルプサービス等を受けて、もう少しの期間、住み続けることができるようになるかもしれません。

10 水道の水もれ、風呂場の排水が悪くなった時に、生活援助員さんに頼めますか？

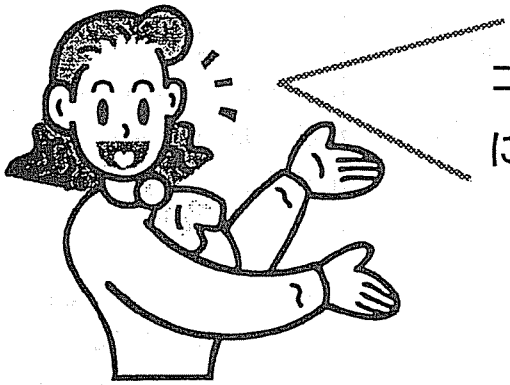
基本的には自分で住宅局に電話して下さい。しかし体が弱くなったりして出来そうにもない時は、替わりに生活援助員さんが連絡をしてくれます。

11 シルバーハイツに入った時に、入居者お互いの紹介はあるのですか？

入居者同志の紹介は自分たちでしていきます。あるいは生活援助員さんが準備してくれるでしょう。

12 シルバーハイツには集会室はあるのですか？　集会室は何に使うのですか？

集会室（生活相談・だんらん室）があり、入居者は自由に使えます。
「だんらん室」は入居者のふれあいの場です。自分の部屋に一日中閉じこもっていると寝たきり・痴呆になりやすいと言われています。ところで全国的にもシルバーハイツの集会室はあまり使われていません。今後は生活援助員さん・ボランテイアなどと相談しながら、「だんらん室」でお茶を飲んだり、みんなで楽しく過ごしましょう。



コレクテイブハウジングについて説明します

1 協同室とはどんな部屋ですか？

各々の住宅から約１割ずつの面積を減らして、これを共用部分に集めてきて作られています。協同の台所、食堂、談話室などのみんなで使う広い部屋です。

2 コレクテイブハウジングとはどんな住宅ですか？

入居者が自然とふれあえるように工夫された住宅です。自分の部屋に「閉じこもる」のではなく、いつでも協同室にいけばみんながいます。共にしゃべったり、たまにはいっしょに食事を作ったりして助け合いながら過ごせます。

3 コレクテイブハウジングには生活援助員がいるのですか？

大半のコレクテイブハウジングはシルバーハイツでもあります。ですから、不意に倒れた時は生活援助員などによる援助を受けることが出来ます。

4 この住宅に入りたいのですが、毎日いっしょに料理をするのは、お互い気が疲れるように思えます。

この住宅の目的は、「毎日いっしょに食事を作る」ことではありません。あくまで共にふれあいながら、住んでいく住宅です。いっしょに食事を作るかどうかは入居者みんなで決めたらよいことです。ただ、協同室の使い方について、みんなでルールを作る必要があります。

コレクテイブハウジングの説明をします

5 この住宅にはいりたいのですが、当番で協同室などの掃除はしたくないのです。役所の方で掃除などの管理はしてもらえないのでしょうか？

協同室の管理は役所はしません。あくまで入居者のみなさんで、協同室の掃除・鍵の管理などについて「ルール」を作って管理していかねばなりません。また協同室の椅子・電化製品・食器などは入居者の皆さんで協力してそろえて下さい。協同室の水光熱費も入居者の負担となります。

6 協同室の水光熱費の負担額は一人当たりいくらぐらいになるのでしょうか？低所得者にはきついのではないでしょうか？

協同室の水光熱費などは1世帯あたり月 4000～6000 円の見込みです。（一般の公営住宅の管理費は2000 円くらいします。）協同室で過ごす時間が多くなれば、自分の部屋の水光熱費は安くなると思われます。しかし全体的には、1 世帯当たりの水光熱費は少し高くなるかもしれません。

7 コレクテイブ住宅に入ったら、いつもお互いに顔をつき合わしていなければならないのですか？

コレクテイブ住宅には、各々に独立した自分の家があり、トイレ・風呂・台所・居間などがついています。個人のプライバシーは守られるわけです。しかも協同室へ行けば、みんなとふれあえます。「いつでも１人になれるし、いつでも誰かと会える」全く新しい公営住宅なのです。

8 近所の知り合いの人もいっしょになって、協同室で食事会などをしてもよいのですか？

協同室の使い方は入居者で決めていきますが、入居者だけでなく、近所の人やボランテイアといっしょに、お茶会・食事会などをしても楽しいと思います。地域の人も気軽に立ち寄れる雰囲気っていいですね。

コレクテイブハウジングの説明をします

9 **申し込みは個人でも出来るのですか？**

「片山ふれあい住宅」は6人のグループの申し込みしか募集しません。その他のコレクテイブハウジングはグループだけでなく、個人ででも申し込みが出来ます。

10 **申し込みは 60 才未満の人でも出来るのですか？**

「真野ふれあい住宅」のみ 60 才未満の若い世帯も申込ができます。しかしその他のコレクテイブハウジングは「シルバーハイツ」の入居資格の人しか申し込めません。

11 **「協同生活」がよく分からないのですが。**

説明だけでは分かりにくいので、仮当選や補欠の方は「ふれあい」住宅の暮らし方について勉強会や体験会に参加してもらいます。（これに参加されない場合は当選資格を取り消される事があります。）

12 **真野ふれあい住宅では、親類同士のグループは組めないと聞きましたが、本当ですか？**

「真野ふれあい住宅」ではシルバー世帯と一般世帯のグループでは親子関係にないことが必要です。一般世帯と一般世帯では親族関係にないことが必要です。

13 **私たちは震災前は夫婦子供３人と親夫婦２人の計５人でいっしょに暮らしていました。震災後は地域型仮設に２世帯に別れて住んでいますが、この２世帯のグループで応募できるでしょうか？**

地域型仮設は狭いためやむなく世帯を分けていますが、公営住宅申込では震災前の世帯構成（罹災証明の世帯構成）で判断されます。よって申込は2世帯のグループでは出来ません。

シルバーハイツとコレクテイブハウジングの団地

シルバーハイツ（市営）

		シルバーハイツ			
		1DK	2DK	合計	一般
筒井	中央区		60	60	143
東尻池第２	長田区	16	4	20	0
松風第４	須磨区	28	18	46	0
ひよどり台第２	北区	69	30	99	0
西神南第２	西区	48		48	45

・ひよどり台第２は「しあわせの村」のすぐ近所にでき、緑が多い環境だ。

・一般世帯と混在するシルバーハイツは筒井と西神南第２である。

・東尻池第２は長田区南部の真野地域にある。「真野ふれあい住宅」のすぐ近所にある。

・松風第４は須磨区南部で鷹取駅より西に８分くらいの JR 線路ぞい南側に出来る。買い物はやや不便かもしれない。

コレクテイブハウジング

真野ふれあい住宅（市営）

コレクテイブ
シルバー世帯＋一般世帯
グループ応募＋１世帯応募

長田区南部の住宅と工場の混在地域。鉄筋コンクリート作り３階建て。協同室は床暖房で快適。屋上には菜園あり。１棟 29 戸。エレベーター有り。電磁調理器のみ。ガスは使えない。97 年 12 月入居予定。

シルバー単身(1DK) 15 戸
シルバー世帯(2DK) ６戸
一般世帯（1～2 人）(2DK) ６戸
一般世帯（３人以上）(3DK) 2 戸

①抽選方法：
・まず３グループを抽選
・次に残りのグループと１世帯の申込書を抽選
②グループ応募は「シルバー世帯のみ」「シルバー世帯＋一般世帯」「一般世帯のみ」の組み合わせ可

片山ふれあい住宅（県営）

コレクテイブ
シルバー単身世帯のみ
６人のグループ応募のみ

長田神社の東側の住宅街にあるが、坂道がややきつい。しゃれた木造２階建て。単身６戸のみ。協同室は吹き抜けでモダン。エレベーター有り。電磁調理器のみ。ガスは使えない。97 年４月入居予定。

シルバー単身（1DK） ６戸
うちわけは洋室４戸、和室２戸

①抽選方法：
・１グループのみ抽選
・当選者で失格者がでた場合は、他のグループから１名のみ抽選。
②６人の中で洋室４人と和室２人を振り分けて申込む

（1）新聞の切り抜き

コレクティブハウジングの情報のＰＲ

院長先生が行く

新しい〝下町暮らし〟

2月末、災害復興公営住宅の第3次入居者募集が始まった。今回から導入された協同居住型集合住宅「コレクティブハウジング」は、国内の公営住宅では初めての試み。長たらしい名前のため難しげに聞こえるが、そこに住んでいる人たち全員が使える共同の広い部屋がある集合住宅だ。

今回で言えば、共同の部屋は台所、食堂、和室から各戸の通路にも特徴がある。南側は広くとってあり、花壇やテーブルが置いてある。北側は、通常の公営住宅のようにバルコニーで区切られていないので、長屋の路地のような具合。住民同士が自然にふれあえるようにしてある。また、若い世帯も入れる。

僕がこんなに詳しいのは、都市計画家や学者らで作る「コレクティブハウジング事業推進応援団」のメンバーだから。震災前、下町の長屋には、ふれあいと助け合いがあった。郊外の仮設へ移った高齢者は朝気を失った。医療だけでは元気のない患者さんを治せない、と僕は実感した。住まいがあり人との交流があって初めて生きている実感が得られ、そこから生まれる生きがいこそが健康の基礎となる。

足りないとはいえ、今後は公営住宅が大量に建設される。従来通りのコンクリートの「箱」では住民、ことに高齢者の閉じこもりや孤独死が心配だ。ふれあいと自治を育てるのがコレクティブ住宅の目的。地域のみんなで「新しい下町暮らし」を見守りたい。

【上田耕蔵・神戸協同病院】

毎日新聞 1997.03.18

復興ネットワ

電話 078・331・
FAX 078・331・

「地域型」仮設住宅の長所

今後に生かそう

医師らのグループ 報告書にまとめる

被災地の高齢者、障害者向けにつくられた地域型仮設住宅の暮らしを検証し、入居者の交流のあり方を今後に生かそうと、医師や都市プランナーでつくる「長田コレクティブケアネットワーク」が、地域型仮設住宅の生活支援員（LSA）を対象にしたアンケートなどを報告書「21世紀高齢者住宅へのヒント」＝写真＝にまとめた。

地域型仮設住宅は、兵庫県内で約千九百戸が建設され、全戸個室で介護員が常駐する「芦屋市型」と、トイレや台所が共同で平屋の「神戸市型」がある。

LSAへのアンケートは五十人に対し一人の割合で配置され、生活相談を受け付ける「神戸市型」が女性だった。

LSAの仕事はやりがいがあるが、「要介護者への対応に限界がある」（七六・五％）、「入居者間にトラブルがある」（七〇・六％）との回答が多かった。一方、四分の三の仮設住宅で、茶話会やクラブ活動など入居者の交流促進を図る試みをしていた。

仕事上で困ることとして「まあまあある」（七六・五％）、「入居者間にトラブルがある」（七〇・六％）との回答が多かった。一方、四分の三の仮設住宅で、茶話会やクラブ活動など入居者の交流促進を図る試みをしていた。

「長田コレクティブケアネットワーク」は、年齢を問わずに複数世帯が入居する「共同居住型集合住宅」のコレクティブハウジングを高齢者のケアに生かそうと、都市プランナーの石東直子さんや神戸協同病院の上田耕蔵院長らがメンバーになっている。報告書では「地域型仮設住宅でふれあいが生まれるなど長所もあった。コレクティブハウジングでは、住環境の整備や訪問看護などケアの充実が見込まれ、地域型仮設住宅の長所も生かしていけるのではないか」と位置づけている。

報告書は五百部作成、一部千円。問い合わせは、神戸協同病院本部（078・641・1651）内の同ネットワークへ。

朝日新聞 1997.03.19

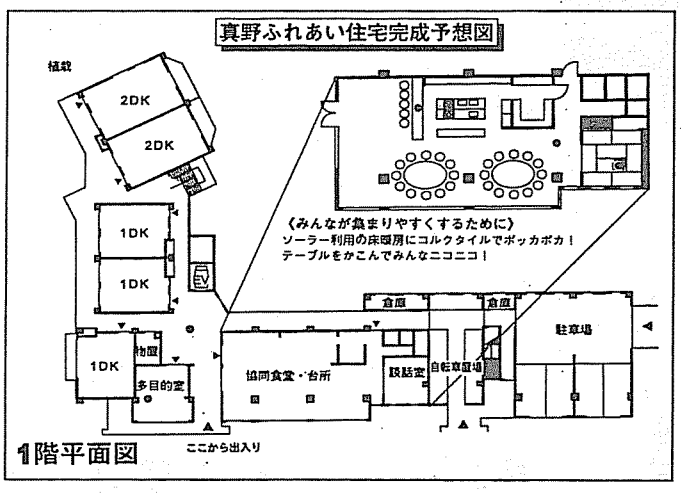
ふれあいの集合住宅

神戸市が復興へ建設

共用空間大切に

福祉的機能にも期待

兵庫県や神戸市は、震災からの復興に向け公営住宅の建設を急いでいるが、一つの選択肢として日本初の「コレクティブ・ハウジング」を提案している。コレクティブ・ハウジングとは、それぞれの住居は台所、浴室、トイレなどを備え独立しているが、その延長に共用スペース（協同の食堂、台所、談話室など）がある集合住宅。被災者が、共用スペースでのふれあいなどを通じて、自然な形で日常生活をおくれる「協同居住型集合住宅」づくりを目指そうという。その第一号として「真野ふれあい住宅」（神戸市市営住宅）が同市長田区に十月に完成する。（大阪支所・渡辺雄一）



仲間と食事／下町情緒も／さびしさ無縁


石東直子さん

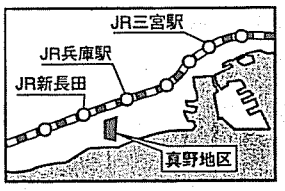
提唱者のまちづくりプランナー・石東直子さん（石東都市環境研究室）によると、コレクティブ・ハウジングは「北欧で一九七〇年代に生まれ、八〇年代から国の住宅政策に取り入れられているが、わが国にはまだない集合住宅のタイプ。共用スペースの水準で理想型、簡易型、超簡易型などある」と言う。

震災後、仮設住宅に住むお年寄りの自殺や孤独死が百四十人近くに達している。コレクティブ・ハウジングは「普通の災害復興住宅では、これら悲惨な事故が繰り返されかねない。住宅供給見直しの中で、日常生活の自然な形の中で、人と人とがふれ合う一つの仕掛けとして採用された」（石東さん）。

その第一号が「真野ふれあい住宅」。神戸市長田区の市有地に建設される。国の被災低所得高齢者向けの「シルバーハウジング・プロジェクト」の一環として分（二十一戸）と、一般被災者（八世帯）も入居できる計画。多世代が一緒に住む本格的なもの。

鉄筋コンクリート造り三階建て。1DK（三十五平方㍍）十五戸、2DK（四十五平方㍍）十二戸、3DK（五十五平方㍍）二戸が建設される。一般の災害復興住宅より、それぞれ五平方㍍間取りが狭くなっているが、この分で一階に集中的に共用のスペースが確保される。居室は段差のないバリアフリーで、二階のバルコニーは隣との仕切りのない続きバルコニー。出会いの広場もある。

石東さんは「震災からの住宅復興の中で取り上げられたが、場所を問わないばかりか、仲間と共に暮らすことにより快適性を見いだしたい人や、生活の安全性と合理性を求める人、下町的生活を求める人、障害者、痴ほう性老人のための福祉施設としてのグループホームにも向く」と言う。



課題はルールづくり

三月十九日に入居募集が締め切られた。一般の震災復興住宅が七・二倍の競争率に対し、コレクティブ・ハウジングの競争率は二・三倍とやや低調だった。石東さんは「今後やらなければならないことがたくさんあるが、入居希望の手を上げた人はそれなりの覚悟ができているのではないか。二・三倍の数字は初の試みでもあり、満足できる。今後の市役所のアフターケアに期待したい」と、成功を願っている。

また、「ハード面はともかく、こうしたコレクティブ・ハウジングだと、入居者募集にいたるまでの啓発活動、説明会、グループ入居への誘導など、事前の準備に加え、入居者決定後も大量調理、ハウスクリーニングなどの『協働トレーニング』、協同生活ルールづくりも必要。少なくみても半年ほどの時間が必要でしょうね。募集、当選、即入居とはならず、募集の事前と事後の周到な準備がかぎ」と話す。

こぼれ話

つでもだれかに会えるし、いつでも一人になれる」「たまには大家族のように集まって食事をしよう」という暮らしを実現する下町感覚の集合住宅でもある。コンパクトであるが、それぞれが独立した住戸（トイレ、風呂、やや小さめの台所など備えている）と、その延長に共用スペース（食堂、団らん室、趣味室、大きめの風呂など）が組み込まれている。共用スペースを核に、自然なかたちでふれあう共同生活を展開する。

コレクティブ・ハウジング（Collective Housing）　協同居住型集合住宅の略で、「いっしょ」を意味するデンマーク語「こぼ」から。

日本農業新聞 1997.04.15



協同居住型集合住宅に尽力

まちづくりプランナー
石東　直子さん
＝大阪府吹田市佐竹台

建築家の仲間と一緒に「事業推進応援団」

先月末から申し込み受け付けが始まった災害復興賃貸住宅の第三次募集では、被災者が複数世帯で申し込むことができる「グループ応募」やペットの飼育可能な住宅など、公営住宅としては全国にさきがけて実施される試みが盛り込まれている。

その中の一つ、コレクティブハウジング（協同居住型集合住宅）の実現に尽力してきたメンバーの一人だ。

「仮設住宅での自殺や孤独死が相次いでいる。外部から閉ざされた鉄の扉が、身寄りのないお年寄りの孤独感を増加させるんです。そんな悲劇はこれ以上続いてはならない」

建築家の仲間と一緒に「事業推進応援団」を結成し、実現化に向けて連日のように大阪・吹田の自宅から被災地にかけつけ、精力的な活動を行ってきた。

コレクティブハウジングとは、個人の独立した空間がありながら、談話室や炊事場などの共同スペースもある住宅のこと。住民らは同じ屋根の下で和気あいあいと生活をする。

「考えたら、長田のような下町って、コレクティブがもともと存在していたのね。みんなが、銭湯や喫茶店に気軽に訪れ、知らない間にお互い安否確認が行なわれてきた」

大阪生まれだが、学生時代のほとんどを神戸で過ごした。大学では、当時女性としては珍しい建築学部を専攻した。長年、街づくりのプランナーとして都市設計のコンサルタントをしてきたプロだ。

今回の募集で、行政側はコレクティブを認可し歩み寄りを見せたが、まだまだ対応に納得がいかない。

「初めての試みなんだから、住民らになじみがないのはあたりまえ。もっともっと行政側はPRしなきゃだめ」

ボランティアを続ける訳は「やっぱり、神戸が好きだから」。

（佐々木正明）

産経新聞 1997.03.16

震災復興提言⑯

コレクティブハウジング（協同居住型集合住宅）の推進を！

まちづくりプランナー・石東・都市環境研究室　石東　直子

震災時や復興の過程において実感した、隣人との日ごろの付き合いの重要性、世代を越えた相互扶助の必要性、共に暮らすことの安心・感と楽しさなどの実現を盛り込んだ、コレクティブハウジングを提案してきた。災害公営住宅で、神戸市内に数カ所が建設されることになった。コレクティブハウジングとは、「いつでも誰かに会えるし、いつでも一人になれる」、「ひとりで食事をするよりは、たまには大家族のように集まって食べよう」という暮らしを実現する〝協同居住型集合住宅〟で、日常生活の中で自然なかたちで人とふれあうことができる。

災害公営住宅でのコレクティブハウジングは、それぞれの住戸は少しコンパクトになるが台所、風呂、便所は備わっており、それに協同スペース（台所、食堂、談話室、洗濯室等）をもったような住宅になる。協同スペースの使い方や維持管理の仕方を居住者が決めて、協同スペースを核に協同生活が展開されていくことになるが、ハードの器ができただけでは、協同居住は稼働しない。協同居住をつくりあげる的確なソフトシステムを構築し、そのために必要な人材確保ができるかどうかが、今後の成否を決めるだろう。コーディネーターの人材確保や育成、入居前の学習や体験（協同居住のトレーニングやルールづくり等）について、公的機関の先導が不可欠である。とくに高齢者のためのコレクティブハウジングではどのようなサポート体制が必要なのかは、芦屋や尼崎などケア付き地域型仮設住宅でのサポート体制に学ぶものが多い。そこでは、コーディネーター、生活援助員、看護婦の三職セットに地域ボランティア（地域福祉力）が加わり、居住者への目配り、気配りと自立生活への支援の手が差しのべられている。

一般仮設住宅で多発している孤独死や震災苦による自殺やアルコール依存症などの悲劇をくりかえさないためにも、今後移り住む公営住宅では、隣人同士が触れ合って暮らす仕掛けをもった住宅がどうしても必要である。

「社会の福祉 第548号」県社協発行 1996.08.10

再生に向けて

インタビュー

協同居住型集合住宅

被災地からモデル発信

コレクティブ・ハウジング推進応援団
石東　直子さん



入居の前からサポート必要

独立した住宅と共有スペースを備え、入居者の協同生活を前提にした「コレクティブ・ハウジング」（協同居住型集合住宅）。兵庫県と神戸市が、被災地で、全国で初めて計画している「コレクティブ・ハウジング事業推進応援団」をつくり研究やPRに努める一方で県や市の計画策定にも携わる都市プランナー石東直子さんに、今後の課題などを聞いた。

―応援団はどんな活動をするのか。

まちづくりプランナーの人たちと昨年七月に発足させた。月一回の情報交換をし、市民に向けてコレクティブ・ハウジングのPRや行政の研究会に資料を提供したりしてきた。住宅の再建相談でも勧めたりしている。

―コレクティブ・ハウジングとは

「いつでもだれかに会えるし、いつでも一人になれる」という住まい方です。具体的にいうと、コンパクトであるが台所やふろ、トイレのある独立した住宅と延長としての共有スペースを備えた住まい。共有部分は自宅の続きですから、維持、管理に責任を持たないといけない。

―今後の課題は

今回の震災は、特に下町に被害が集中した。銭湯や気軽に外食できる喫茶店や食堂があり、近隣で安否を確認できる下町は、いわば「コレクティブタウン」だった。下町の高齢者たちが仮設住宅に移り、孤独死や生きる力がわかないといった問題が出ている。そんな人たちが集まって住める住宅が必要で、被災者にとって非常に大きな意味がある。

―目指すところは

順調な協同生活のためには、グループ入居などが望ましい。そして、入居の前に、協同居住の学習と協働のトレーニングをする必要があると思う。このトレーニングを援助するコーディネーターもいります。入居後は、居住者の自立度によって支援の方法は変わってくる。

二十一世紀の住まい方のひとつのモデルとして定着させたい。昨年九月に先進地北欧のコレクティブ・ハウジングを視察した。食堂はなごやかで一緒に住む楽しさにあふれており、やっぱりこれだって思った。入居者は合理的で安心できる住まい方として選択していた。日本でも、高齢化が進み、ライフスタイルの変化とともに、独居高齢者や高齢者夫婦世帯なども増えてくる。そんな時に、きっと必要とされる。被災地から、新しい住まい方のモデルを発信していきたい。

（聞き手は　網　麻子記者）

メモ　兵庫県は、コレクティブ・ハウジングを神戸市・東部新都心など五団地に、神戸市は、長田区浜添通の一団地に採用する。東部新都心では、県住約二百五十戸の一部に取り入れ、主に高齢者の単身世帯の利用を想定している。全国で初めての取り組みだけに、ハード、ソフトとも模索が続いている。

神戸新聞 1996.09.05

朗報、被災者に共同住宅建設

主婦　大西　さだ子　68（兵庫県西宮市）

先ごろ阪神大震災による仮設の独居老人の孤独死が100人にもなったと報じられていた。その中の3分の1以上が60歳未満の壮年層だとは驚いた。平穏な生活を一瞬にして失い、独りぼっちの仮住居が長く続いたら、老若を問わず計り知れない心労がストレスとなり、孤独死へと人を追い込むのだろうか。1日も早く安心して暮らせる日々が訪れることを心から願っていた。

「敬老の日」に本紙で、全国初の試みとして震災の被害の大きかった神戸に、仮設での隣同士が一緒に暮らせる〝共同居住宅〟建設が予定され、近く着工の運びとなったとの朗報に「やった!!」と1人で拍手を送った。

お互いに助け合い励まし合ってきた仲間が離れずに住めれば、孤独感もなく老後の生活にどんなにか不安が解消されることか。仮設の人たちには来春完成の日が待ち遠しいことだろう。

毎日新聞 1996.09.20

仮設住宅に共同食堂設けては

教員　北阪　英一　55（大阪府河内長野市）

悲惨な阪神大震災も、はや2年をすぎたが、今なおいろいろな問題で、仮設住宅から離れられない人がいる。すでに仮設住宅の住人から、百数十人の孤独死者を出した。仕事も金もなく希望をなくした人たちが孤独に苦しみ、アルコールで寂しさをまぎらわす人も少なくない。

孤独死の人たちの中には、栄養失調が原因でなくなる人も多い。人間は一人では生きていけない証明でもある。

抜本的な解決策としては、政府が仮設住宅の住人に生涯の衣食住を完全に保障することしかない。取りあえず仮設住宅の近くに共同食堂を設けてはどうか。共同食堂の建物は国が建設し、光熱費などの維持費は県が負担する。食事や、仮設住宅の住人の世話はボランティアの人々の手で運営すればどうか。

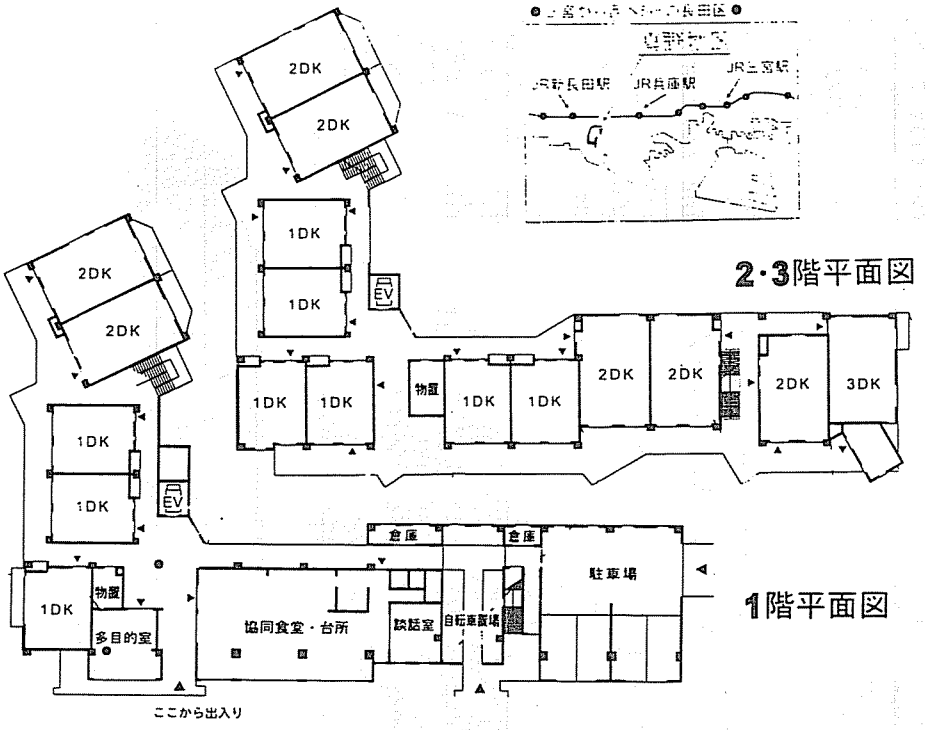
せめて夕食ぐらい、毎日仮設住宅の人々が集まり、いろんなことを話しながら食べれば、少しは孤独感がいやされるのではないか。「はげまし食堂」と名づけたい。

毎日新聞 1997.03.22

被災地にコレクティブハウジングを！

その二　神戸市営コレクティブハウジング“真野ふれあい住宅”

石東直子（石東・都市環境研究室／コレクティブハウジング事業推進応援団長）



春に募集した全国初の公営コレクティブハウジング・真野ふれあい住宅の入居者が確定した。被災地では災害復興公営住宅として、コレクティブハウジングが、神戸市営一地区、兵庫県営七地区が事業化されるが、入居者が確定した第一号である。

真野ふれあい住宅の立地は、震災の被害の大きかった長田区の下町で、住工混在地区にある。地区には日用品店舗、喫茶店、飲食店、銭湯、散髪屋、クリーニング店等の日常生活サポート施設が多く、隣人同士の助け合いやふれあいが豊かで、町全体がコレクティブタウン（協同居住の町）であったが、約二七〇〇戸が焼失、全半壊の被災にあった。

◆　計画にあたっては、真野地区の震災応急仮設住宅の入居者やまちづくり推進会の役員等の擬似入居者参画型ワークショップ方式でつめてきた。このようなワークショップができたのも三十余年に及ぶ住民主体のまちづくりの実績をもつ真野地区だからだと言える。

◆　計画の主旨と概要

①　集まって住む楽しさと居住者の相互扶助の幅を広げるために、多様な世帯が住み合う集合住宅とする。建設戸数は二九戸のうち、二一戸を高齢者世帯に、八戸を一般世帯とする。なお、高齢者住宅はシルバーハウジングプロジェクトである。

②　下町の長屋的な雰囲気を創出する（震災で消失した下町の再生、平成の下町住宅の再生）。南側廊下（続きバルコニー）と住戸近くのたまり場づくり（路地の再現）。戸外への広がり、連続性をもつ住戸プラン（住戸内の台所と外のたまり場への連続性をもつ型）。

③　地元の人々との交流を促す協同スペースのつくり（協同スペースの利用を活性化するように、外からの利用がしやすいつくり）。

④　将来の要介護高齢者のための必要設備等の充足の可能性をもったプラン（例えば、現在の自転車置場を介護入浴室に転用）。

⑤　環境共生や省資源のライフスタイルを推進する配慮（ソーラーシステム、コンポスト、屋上菜園等）。高齢者の生活の安全性への配慮（緊急通報システム、オール電化システム等）。

◆　入居は十一月末の予定なので、それまでの間、協同居住の学習や協働トレーニングを行い、入居者のコミュニティづくりや協同居住のルールづくりの集いをもつ。そのプログラムは真野コレクティブハウジング研究会（市職員と外部専門家で構成）で検討中であるが、私の案を記す。

・第一回　ふれあい住宅での生活イメージを語ろう
・第二回　協同スペースの使い方について語ろう
・第三回　協同生活・協同スペースの運営と管理について考えよう
・第四回　時には大家族のように（電磁調理器の使い方講習や大量調理の実習等）集まって食べよう
・第五回　協同生活の住人運営組織を確定しよう
・第六回　安全で快適な生活のスタートのための実習（緊急時の避難訓練、ハウスクリーニング、協同の機器の点検等）

◆　コレクティブハウジング事業推進応援団は、震災の年の夏に組織し、被災地でのコレクティブハウジングの事業化に向けて、ハード面とソフト面にわたる専門技術の提供や学習・普及活動を無償で支援してきた。しかし、その間にも専門職としての職能の確立のために、非営利市民団体（ＮＰＯ）として有償活動の必要性を主張しつづけてきた。今回の協同居住のトレーニング等の実施にあたっても、有償支援活動という立場を主張している。



◀ 1階、1階には路地のようなつつきバルコニーがあるわが家らしい表情の家々

計画概要　鉄筋コンクリート造3階建
敷地面積1200㎡　　1DK 35㎡ 15戸
2DK 45㎡ 12戸　　3DK 55㎡ 2戸
総戸数　29戸
コレクティブ協同部分の内容－屋内（食堂、厨房、食品庫、多目的室、便所、倉庫、合計面積 206㎡）。
屋外（育空テラス＝立体路地、たまり場、屋上菜園、屋上広場）

平面図・外観パースは、神戸市作成の
“真野ふれあい住宅”パンフレットより

「集住デザインボード４２」
発行：NPO集住デザインハウス

事業化決定の記事

仮設の向こう3軒 一緒に

初の共同住宅

兵庫県 神戸市 グループで募集

兵庫県と神戸市は14日、阪神大震災で被災した高齢者や障害者らを対象とした共同居住型集合住宅「コレクティブ・ハウジング」に、数人のグループ単位で応募できる制度を設けることを決めた。世帯単位の募集が原則だった公営住宅では全国初の試み。仮設住宅は高齢者が4割を占め「気の合った同士が、今後も同じ場所で暮らしたい」との希望が強く、これに応えた。来年初めに予定されている災害復興住宅3次募集から受け付ける。

集合住宅にリビング・ルームなどの共用スペースを設けたコレクティブ・ハウジングは、1970年代に北欧で誕生。助け合いを進めることで孤独感や老後生活の不安が解消される――などが評価されており、兵庫県などが震災後の住宅政策の目玉として、国内で初めて導入する。

震災の被害が大きかった神戸市長田、中央、灘区に6棟計161戸の建設を予定。第1号となる独り暮らしを対象にした長田区片山町の「県営片山住宅」（6戸）は今月末にも着工、来年2月末完成の見通し。木造2階建てで、1階に2戸、2階に4戸（各戸の専有面積31平方㍍）。1階にリビング、ダイニング、キッチンなどの共用スペース（計56平方㍍）がある。

被災高齢者ら対象 来年初め受け付け

グループ応募は、入居希望者が数人で同じ住宅への入居を申し込む。入居者は1人1戸を使用しながら、共用スペースでコミュニティーが維持できる。仮設住宅のお年寄りやボランティアからこれまで「せっかく の住宅が出来ても、バラバラに入居するのではコミュニティーを一から作り直すことになる」などの声があり、県や市が検討を進めてきた。建設省住宅局も「地元自治体、被災者の希望を尊重する。公営住宅法の範囲内で運用可能」と判断した。【中尾 卓英】

住宅問題に詳しい早川和男・神戸大名誉教授の話 グループ入居の試みは一定の評価ができる。しかし、絶対数が足りず、当分の期間残る仮設住宅を利用したり、民間の土地を借り上げるなどしてコレクティブ・ハウジングの戸数を増やす一方、介護の必要な人のために24時間ケア付きでグループで住める公営住宅の導入も検討すべきだ。

毎日新聞 1996.09.15

仮設仲間 ずっとお隣さん

兵庫県 神戸市 グループ単位、応募OK

兵庫県と神戸市は27日、仮設住宅などでコミュニティーをつくった阪神大震災の被災者が、災害復興公営住宅でも隣り合って暮らせるよう、同住宅全戸（3万8600戸）について、グループ単位で応募できる制度を来年2月から実施することを決めた。高齢者を中心に「仮設コミュニティー」の継続を希望する声が強いことを受けたもので、公営住宅でのグループ応募は全国でも初の試みとなる。孤独死などが社会問題化する中、新たな公営住宅のあり方を模索する手段として注目される。

グループ応募できるのは仮設だけでなく、県外などに臨時移住している全被災者が対象。県が今年5月にまとめた仮設入居者アンケートによると「（将来も）気の合った者同士が同じ場所で暮らしたい」と答えたのは2900世帯。今年8月の復興公営住宅2次募集でも、同じ住宅に応募した仲間が落選したため入居を辞退する高齢者が相次ぎ、新たな「恒久住宅」で、見知らぬ隣人との暮らしに不安感を抱く高齢者が多い。

災害復興公営住宅

このため、県は〝コミュニティー単位〟で入居できる共同居住型集合住宅（コレクティブハウジング、160戸）だけでは対応できないと判断。来年2月末に募集を始める同集合住宅第1号「県営片山住宅」（神戸市長田区、6戸）の応募状況などを参考に共同募集戸数などの詳細を決める。

高齢被災者の問題に詳しい上田耕蔵・神戸協同病院長の話 老人ホームなどの施設整備が進まない現状を考えると、高齢者予備軍の市民全体にとっても朗報だ。【中尾 卓英】

毎日新聞 1996.12.28

共同居住型集合住宅

震災被害大きい旧市街地に建設

県、神戸市が被災者向け復興公営住宅として、国内都市部で初めて建設する「コレクティブ・ハウジング」の建設概要が17日、明らかになった。仮設住宅などのコミュニティー維持を目的に、国内で初めて「グループ入居」制度を導入し、来年初めの3次募集から入居募集する。

同ハウジングは、私的住戸と、各戸の専有面積の一部を供出する形でリビング、ダイニングルームなどの共用スペースを設けた共同居住型集合住宅。1970年代に北欧で誕生し、居住者の相互扶助が図られるとともに、孤独感、不安感解消などの効果が評価されている。県と市は、震災後の"住宅政策の目玉"として導入を決めた。

建設されるのは、県営住宅が①「岩屋北町」（灘区、22戸）②「東部新都心・脇浜」（中央区、44戸）③「南本町」（同、27戸）④「大倉山」（同、32戸）⑤「片山」（長田区、6戸）。市営住宅が⑥「浜添一」（同、29戸）の各住宅。いずれも震災で大きな被害を受けた旧市街地に立地する。

県営住宅は、入居対象を在宅介護と施設介護の中間に位置する「自立した生活が可能な」独居高齢者か高齢者世帯に限定。市営住宅は「多様な世帯が住み合って相互扶助を促進する」ことを狙って、一般世帯の入居も可能になる。

「浜添住宅」は、約20年間にわたって住民主体のまちづくりを進めてきた長田区・真野地区の約1200平方㍍の市有地（浜添通3）に、3階建ての住宅を建設し、来夏に完成予定。入居は来年秋になる見込み。

設計上の特徴として、廊下を1戸当たりの良い南側に設置し「下町長屋の路地」をイメージしダイニングルームなどに利用する▽1階部分に設置する駐輪場は、入居者が介護が必要になった場合「介護付き」に転用することが可能▽環境共生、省資源化を図るため、屋上にはソーラーシステム、菜園を設ける――など。

市では建設に当たって、6月から学識経験者を含む「真野コレクティブ・ハウジング研究会」を発足、地元の仮設住宅に住む被災者らを交えて、ワークショップを開くなど基本計画策定に当たった。今後、研究会を継続して開催し、入居者の募集、決定を経て、共用スペースの管理・運営方法、共同居住のルール作りなどを進めることにしている。



国内都市部初の共同居住型集合住宅、コレクティブ・ハウジングとして建設される市営浜添住宅の完成予想図

毎日新聞 1996.09.18

長田・真野地区の高齢者協同居住型集合住宅

南側に廊下 交流の場

市と研究会 建物の基本計画まとまる

下町長屋風で計29戸

高齢者が共同生活をする「コレクティブハウジング」（協同居住型集合住宅）を、神戸市長田区の真野地区に建設する計画で、神戸市と真野コレクティブハウジング研究会（宮西悠司座長、十人）は十七日、建物の基本計画を発表した。公営住宅としては全国で初めて廊下を南側に配置し、太陽の光を楽しみながら交流できる空間を設けるなど、コミュニティースペースの確保に配慮。建物は周辺の下町風情に合わせた三階建ての「下町長屋風」にする。

来年夏の完成めざす

コレクティブハウジングは、入居者が各住戸で独立して生活できる一方、共同の食堂や台所、談話室もあり、入居者が助け合って暮らせる工夫をしている。

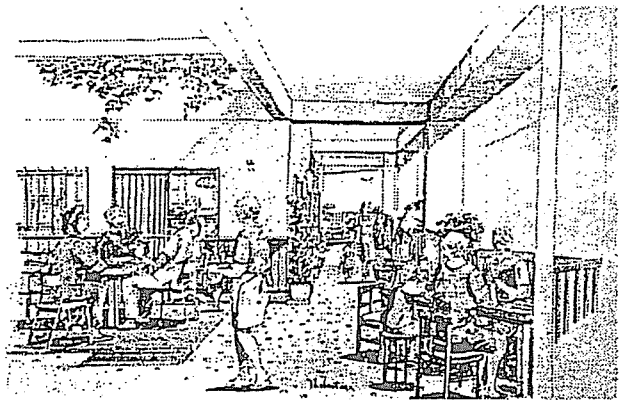
高齢者の孤独死の防止のほか、高齢者が社会とつながりを持って暮らせる新しい居住形態として、震災後、注目されており、神戸市が真野地区、県も市内五カ所で建設することになった。

基本計画では、真野地区内の長田区浜添通三の千二百平方㍍の市有地に、鉄筋三階建ての集合住宅を建設し、1DK―3DKの二十九戸を確保。そのうち、二十一戸を高齢世帯、八戸を一般世帯向けとし、一階には食堂、談話室のほか、地域住民が集える多目的室などの共同スペースを設ける。

公営住宅では通常、採光条件のよい南側に住戸の窓を並べ、北側に廊下をつくるが、コレクティブハウジングでは、あえて南側に廊下を設置。下町長屋の軒先で住民が集うような雰囲気を演出するほか、廊下には入居者が集える「たまり場」もつくる。また、共同スペースの維持費の節約のため、屋上に太陽光の発電整備を設置するほか、屋上菜園も用意する。

一方、今後の検討課題として、気の合った高齢者らによるグループ入居、入居者決定後の「協同生活」のためのトレーニングの実施、入居者間のルールづくりーなどを挙げており、市はさらに検討を進める方針。

市は今回示された基本計画をもとに十月には実施設計を策定、十二月着工、来年夏の完成を目指している。



真野地区に建設されるコレクティブハウジングのイメージ

神戸新聞 1996.09.18

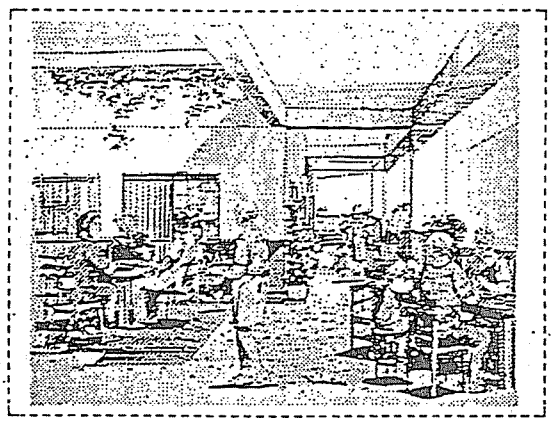
高齢被災者用の協同住宅

神戸・長田

孤独いやす憩いのテラス

阪神大震災の被災地、神戸市長田区の真野地区に同市が建設する高齢被災者用の市営「浜添住宅」（仮称）南面に共同テラス＝イラスト＝などコミュニティースペースが設けられることが、十七日までに決まった。孤独死防止などのため“下町の長屋”の趣を持たせるためで、住民のふれあいを重視し、日当たりのいい南面に部屋やベランダを設けるという公営住宅の原則をあえて曲げたという。

同住宅はコレクティブハウジングと呼ばれる協同居住型集合住宅で、神戸市が千二百平方㍍の市有地に三階建て二十九戸を建設。うち二十一戸を高齢者向けに供給する。十一月に着工、来夏の完成予定。事業費は約四億五千万円。



コミュニティースペースは高齢者の新たな居住形態として北欧諸国で普及。兵庫県と神戸市では被災者のふれあいの場を増やそうと、六棟百六十一戸を計画している。

下町情緒でふれあい

の入居者などからも意見を聞いてまとめた基本計画の中で決定。

計画によると、各戸の台所とは別に一階に食堂や厨房などの共有スペースや畳敷きの談話室を設置。南面には二、三階に廊下を設け、井戸端会議のできるテラスなどを配置する。

コレクティブハウジングは高齢者の新たな居住形態として北欧諸国で普及。兵庫県と神戸市では被災者のふれあいの場を増やそうと、六棟百六十一戸を計画している。

読売新聞 1996.09.18

長屋再現

神戸市は十七日、阪神大震災で大きな被害を受けた長田区真野地区に建設する浜添住宅（仮称）に採り入れる、食事など共同の生活の場を備えた協同居住型集合住宅（コレクティブハウジング）の基本計画を決めた。仮設住宅から移転した後の公営住宅で高齢者の孤独化を防ごうと、下町の長屋的な雰囲気を再現する。十一月に着工し、来年八月の完成を目指す。

神戸市、長田に計画

被災高齢者の孤独化防ぐ狙い

計画では、市有地千二百平方㍍に鉄筋三階建て1DKと2DKが中心。計二十九戸のうち二十一戸を高齢者向け、八戸を一般家族向けにし、多世代入居で支え合えるようにする。一階には共同で使える食堂や調理施設、食品庫、休憩コーナーを設け、来訪者が泊まれる談話室やボランティアが使える多目的ホールも備える。通常の災害公営住宅より各戸を五平方㍍ずつ小さくし、共同スペースをねん出した。

また、従来の市営住宅では西側や北側に設けていた廊下を南側に設け、机やいすを置いた「たまり場」もつくる。各戸の出入り口は引き戸にし、長屋の雰囲気を作り出すという。

今後は、住宅の管理・運営や支援態勢、仮設住宅で仲良くなった被災者同士のグループ形式による入居、入居者の決め方、実際に暮らすための訓練などについて検討する。

朝日新聞 1998.09.18

下町風「長屋」でストップ・ザ・孤独死

協同居住型の住宅建設

神戸市 談話室、食堂を共用

阪神大震災で、被災住宅で高齢者の孤独死が相次いでいることから、神戸市は十七日、向市長田区の真野地区で入居者間のコミュニケーション確保の核となる食堂や談話室などの共用スペースを設けた「コレクティブハウジング（協同居住型集合住宅）」＝完成予想図＝の建設に着手することを決めた。国内の公営住宅での導入は、今回が初めて。

食事や保育など入居者間の日常生活の多くの部分を共同化するライフスタイルを導入した住宅で、兵庫県と神戸市で合わせて、百六十一戸を市内六カ所で計画している。

真野地区は、震災で約二千戸の建物が全半壊（焼）する被害を受けたことや、同地区が昭和四十年代の公害追放運動をきっかけにまちづくり運動の先進地となっていることから、地域全体で入居者を支えていけると判断した。

市有地約千二百平方㍍に、鉄筋コンクリート造りの三階建てを計画。住宅は二十九戸で、一戸当たりの面積は被災者向けの通常の災害公営住宅より五平方㍍狭くなるが、その分を供出する形で談話室、食堂、調理場、多目的室などの共用スペースを整備。総事業費は約四億五千万円。十一月に着工し、来年夏に完成の予定。

神戸市の依頼を受けて今回の計画をまとめた「真野コレクティブハウジング研究会」の宮西悠司・座長は「下町の長屋の良さも生かした新しいライフスタイルの一つだと思う」と話している。

産経新聞 1996.09.18

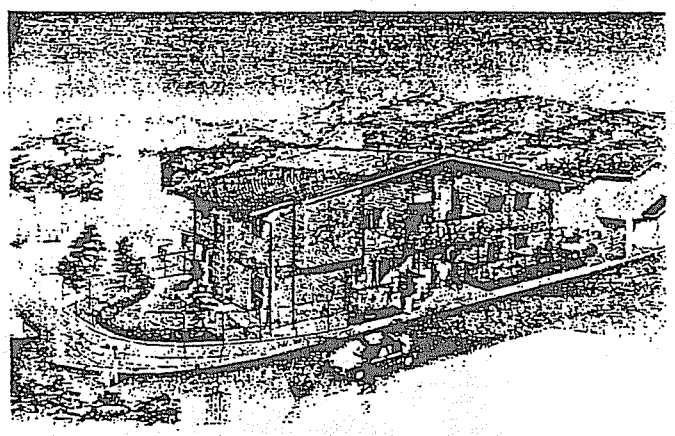
被災高齢者の協同集合住宅

神戸・長田区に第1号月内着工

都市部公営で全国初

気の合ったお年寄り同士が共同で生活を営む新しいタイプの住宅「コレクティブ・ハウジング（協同居住型集合住宅）」の第一号県営住宅で、都市部の公営住宅では全国初のケース。田区で着工されることが決まった。阪神大震災の被災者向け公的賃貸住宅となる建設、厚生省などは高齢化社会に向けたモデル事業として注目している。

兵庫県は、住宅を必要とする被災者に高齢者が多いことから、同ハウジングの本格導入を決定。供給予定の復興住宅十二・五万戸のうち、県営で五団地（百三十戸）、神戸市営で二団地（三十戸）の建設を計画している。



都市部では全国初のコレクティブ・ハウジングとして着工される「県営片山住宅」の完成予想図

来年二月に完成し、入居は三月から。家賃や募集方法は検討中。相談員が定期的に訪問するサービスや緊急通報システムの導入も予定している。

一方、食事の用意や後片付け、リビングの掃除など共用部分をどのように利用、管理するかなど課題も残されている。

県は入居後の利用動向をみながら、その後の建設計画に生かす考えで、住宅建設課は「うまく生活してもらわないと意味がないので、仲のよいグループ単位で入居してもらうなど、ソフト面の対応も工夫したい」としている。

神戸新聞 1996.09.08

復興住宅募集

グループ入居大幅導入

兵庫県 被災者要望にこたえ

今年二月下旬にも予定される震災被災者向け災害復興公的賃貸住宅の一元募集で、兵庫県は十三日までに、仮設住宅で気の合った入居者たちが同じ団地へまとめて応募できる「グループ入居」を大幅に導入する方針を固めた。仮設住宅で育ったコミュニティーを転居先の恒久住宅でも生かしたいという被災者の要望にこたえたもので、近く開催する神戸市など被災市町や公社・公団との協議会で、県の考えとして提案する。

今度で三回目となる次回一元募集は、県や各市営のほか公団・公社の計七千戸一入居は、仮設住宅の入居者を供給する予定。グループ一たちがそれぞれ記入した応募用紙を、グループの代表者が一括して申し込む方法を考えており、当選すれば希望した団地に全員がまとまって入居できる。

県はこれまで、初のコレクティブハウジング（共同型集合住宅）として供給する神戸市長田区の県営片山住宅（六戸）でグループ入居を採用することを明らかにしてきたが、今度の一元募集ではこのほかに県営の新築住宅の多くで、同じグループ入居を募る方向で検討に入った。

同時に次回一元募集では、県では仮設住宅入居者向けの抽選枠を六幅に拡大し、仮設からの転居を支援する考えだが、これまで県内一律とした仮設住宅枠を地域事情によって変動させることにし、仮設住宅の入居者数が依然多い神戸市と西宮市など阪神南部では優先枠をさらにアップさせる方法などを検討している。

神戸新聞 1997.01.14

A.

協同居住の県営住宅 尼崎・宝塚に101戸追加

兵庫県はこのほど、仮設住宅の被災者らがグループ入居できる県営住宅のコレクティブハウジング（協同居住型集合住宅）は、仮設住宅でできた被災者同士のコミュニティーを維持することを目的に建設が進められている。尼崎市金楽寺町の金楽寺団地は七十一戸、宝塚市福井町の福井団地は三十戸。買い取り方式以上のLタイプを一般世帯向けにする。

でおり、五月ごろ着工し来年度中には完成する予定だ。

二十七日から三月十九日まで実施する災害復興公営住宅などの公的賃貸住宅の一元募集で、県営住宅は神戸市長田区の片山住宅が含まれているが、対象は高齢者にしぼっており、ほかに四団地でも高齢者を対象にする方針。今回の追加分では、幅広い年齢層によって豊かなコミュニティーをつくろうと、床面積六十五平方以上のLタイプを一般世帯向けにする。

1997.02.26

災害復興公的賃貸住宅募集

親しくなった人とどうぞ 県がグループ入居採用

来年二―三月に予定されている災害復興公的賃貸住宅の第三次一元募集で、兵庫県は十三日、仮設住宅から友人や知人らで一緒に同じ団地に転居できる「グループ入居」を採用することを明らかにした。第一弾は神戸市長田区内に建設中の県営片山団地。具体的な募集方法は検討中で、県は「単身の高齢被災者の皆さんに友人同士で入居してもらえれば」としている。

同日開かれた県議会決算特別委員会で、溜水義久副知事が質問に答えた。

県によると、これまで過去二回の募集で、仮設住宅の入居者から「せっかく親しくなった人たちと離れたくない」という要望があった。アンケート調査でも「友人同士で入りたい」とする希望があり、「コミュニティーを維持する方策の一つ」（県都市住宅部）としてグループ入居を検討していた。

片山団地では六戸を予定。居間や食堂を共用する高齢者用コレクティブ・ハウジング（協同居住型集合住宅）の形式で来春完成する。

グループを何人単位とするかなどの募集方法は検討中だが、県は「他の応募者と公平性が欠けることのないよう配慮したい」としている。次回以降の募集でも、すでに事業化しているコレクティブ・ハウジングの県営四団地（百二十五戸）、神戸市営一団地（三十戸）に採用する方針。

神戸新聞 1996.12.14

仮設住宅の一部 恒久化

「地域の絆」今のまま

高齢者の願い尊重

国や兵庫県 神戸市検討

補強策など調査

阪神大震災の被災者が住む仮設住宅について、国や兵庫県、神戸市が、一部を恒久住宅として残し、数世帯が共同居住する「グループホーム」化する検討を始めた。新たなコミュニティーの生まれた仮設住宅に住む高齢者の希望に応えた。委託を受けた神戸大学は、神戸市内4カ所の仮設住宅を対象に、調査を始めた。国などは当初、1998年度末までに仮設住宅を全戸解消する予定だったが、今回の施策はこの方針の転換となり、今後の超高齢化社会の住まいやコミュニティーのあり方への提言ともなりそうだ。

調査対象は神戸市垂水区、西区にある仮設住宅4カ所。いずれも米国やカナダからの輸入仮設住宅で、基礎の補強や部屋の一部改築で恒久化が可能。デイサービスセンターや、24時間使用可能なふろを建設したところもある。

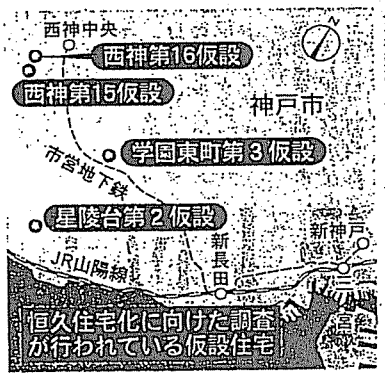
住民の多くは高齢者で、1年半以上に及ぶ生活で親密となっている人が多く、「ばらばらにされて、鉄の扉で仕切られた公営住宅に転居するのは不安」という声が上がっていた。

調査は、神戸大学発達科学部人間環境科学科住環境学研究室の学生グループが担当し、現在アンケートなどを行っている。

仮設住宅は災害対策法などに基づき、神戸市内などに計4万8300戸建設。現在、約3万8000世帯が入居。〝仮設コミュニティー〟の崩壊が不安視されている震災復興公営住宅への転居希望者は、全体の半

仮設住宅の恒久化には法改正などの障壁もあるが、首相の諮問機関「阪神・淡路復興委員会」（昨年2月解散）の委員長を務め、今回の調査を提唱した下河辺淳・元国土庁事務次官は「仮設住宅で〝家族〟になったお年寄りにとって、離れ離れに暮らす復興公営住宅は『安心して余生を過ごせる場所』ではない。仮設住宅を整備しグループホーム化することがぜひ必要」と話している。

【中尾 卓英】



毎日新聞 1997.01.01

阪神大震災　あす 2年

仮設の連帯感 いつまでも

高齢者用〝共生〟住宅 兵庫県が100戸増設

「1・17」を前に兵庫県は、災害復興公営住宅の一部に建設する独居高齢者らを対象にした共同居住型集合住宅「コレクティブハウジング」を、当初計画より100戸前後増設する方針を固めた。仮設住宅で生まれたコミュニティーを維持したいと、共同居住を望む仮設住民が多いことに応えたもので、移転先への不安を抱くお年寄りには朗報。超高齢化社会における住環境のあり方を模索する試みとしても注目される。（10、11面に関連記事）

県の仮設住民アンケート調査によると「（仮設で）気の合った仲間同士が同じ場所で暮らしたい」とする住民は2900世帯（昨年2月現在）。仮設の近所の仲間で同じ住宅に応募したが、抽選者が出たため「当選辞退」が相次いだケースなど、移転後にばらばらになることへの不安も根強い。

さらに、高齢者世帯が4割を超える仮設住宅での「孤独死」が120人を超え、将来の生活に不安を抱くお年寄りが多いことなども踏まえ、県は予定していた1600戸に約100戸を上積みする。

コレクティブハウジングは神戸市の東部新都心（中央区）に建設される「脇浜住宅（44戸）」など6カ所。

▽巣・しゅんの第1号

全国的な必要性も

高齢被災者の現状に詳しい上田耕蔵・神戸協同病院院長の話　共用スペースを活用した医療、保健、福祉の連携したケアの実施や、地域住民の福祉ボランティア活動の活用も容易な「住宅と施設の中間形態」のコレクティブハウジングの必要性は全国的にますます高まるだろう。災害復興公営住宅のシルバーハウジング（約3600戸）は、すべてコレクティブ仕様にすることが望ましい。

は、公営住宅としては全国初の「グループ巣」を実施する。県営芦屋住宅（同県芦屋市、6戸）。県は5月末の応募状況などを見たうえで、3月末までに具体的な増設戸数を決め、状況によってはさらに増設する予定。

1998年度末までに仮設解消を目指す県は、コレクティブハウジングのみでは広範な仮設住民らの要望に対応しきれないため、一般住宅でもグループ単位で応募できる制度を実施することも決めている。

コレクティブハウジングは1970年代、北欧で誕生。個室と、居間などの共用スペースを設けた集合住宅で、入居者相互の触れ合いにより孤独感やご近所の不安感が解消される――などが評価されている。【中尾　卓英】



毎日新聞 1997.01.16

高齢被災者に安心の〝城〟

「グループホーム」建設へ

阪神大震災後、不自由な一人暮らしを続けている高齢者が安心して生活出来る居住スペースを提供しようと、主婦らのグループが、ボランティアの世話を受けながら一つ屋根の下で高齢者数人が暮らす「グループホーム」を神戸市垂水区に建設することを決めた。「お年寄りが独立しながら助け合って暮らす場に」との取り組みに、震災後、4カ所を転々とした後、仮設住宅に暮らす入居予定者の一人は「もう動かなくていいと思うとホッとする」と話す。災害復興公営住宅のコレクティブハウジング増設が決まったが、被災地では長期レベルでも、高齢被災者の生活改善への模索が始まっている。



グループホーム建設予定地で、完成を心待ちにする石丸喜美子さん　＝神戸市垂水区で

〝同居〟なら助け合いも

神戸・垂水に 主婦らが計画

数年前から在宅高齢者向けの給食宅配サービスに取り組んできた団体の主婦、徳岡八重子さんと、その仲間。震災後、仮設住宅のお年寄りらを相手に相談ボランティアを続けてきた。

その体験などから、「立派な福祉施設でなくても、普通の家で自由な空間と時間を守りながら、お互いが助け合って暮らせるはず」と、グループホームの必要性を痛感。今月になって正式にグループホーム「西神ボランティアホーム」の設立を決めた。

建設予定地は神戸市垂水区星が丘の約150平方㍍。知り合いの地主が趣旨に賛同し、売却に応じてくれた。建物は2階建て延べ約140平方㍍程度で、1階に給食サービスの調理場と入居者共通の〝居間〟にあたる小部屋、2階に6畳の個室4部屋を設ける。目指すのは、仮設住宅にも多かった「自分が望む通りに生きてきた。最後まで人に助けられ、人を助けて生きていきたい」と〝安住の地〟への期待を託す石丸さん。グループホームで、他の入居者のためにミシンを踏む日を楽しみにしている。【岸　桂子】

毎日新聞 1997.01.16

阪神大震災

仮設孤独死累計119人

兵庫県警調べ 昨年72人、深刻さ増す

阪神大震災2年を前に、兵庫県警は9日、県内の仮設住宅に住む独居者の「孤独死者数」をまとめた。今月8日現在で119人にのぼり、昨年1年間の死者は72人で月平均死者数は6人。一昨年の46人、月平均4・6人を上回り、改めて孤独死対策の難しさが浮き彫りとなった。

死因は、病死109人▽自殺7人▽事故3人。年齢別では30代＝3人▽40代＝12人▽50代＝24人▽60代＝46人▽70代＝20人▽80代＝12人▽90代以上＝2人。60歳未満も約33%を占めた。また約7割が男性だった。

現在の仮設住宅の入居者数は約6万7000人で、1年前の約9万人から減っているが、孤独死は、逆に一昨年より増えており、長引く避難生活が高齢者の健康状態を悪化させているとみられる。昨年9月末には神戸・ポートアイランドの仮設住宅で、無職男性（当時38歳）が死後約10カ月後に病死体で発見された。【渡辺 暖】

神戸でまた孤独死

9日午後1時ごろ、神戸市中央区楠町7、大倉山仮設住宅の無職、塚木留次さん(71)方で、塚木さんが布団の中で死んでいるのを、生田署員が見つけた。外傷がないことなどから病死らしい。塚木さんは独り暮らしで仮設孤独死は120人になった。

調べでは、塚木さん方に8日の夕刊があったことなどから同日夕以降に死亡したらしい。塚木さんは阪神大震災で同区内の住まいが全壊、2カ月後に仮設住宅に入居した。

毎日新聞 1997.01.08

ペット許可 住宅に 復興

兵庫県

一部の県営住宅 二月下旬から試験実施

二月下旬から予定されている災害復興公的賃貸住宅一元募集で、兵庫県は十四日までに、一部の県営住宅について犬や猫などのペットの飼育を認めることを決めた。鉄筋コンクリート建ての公営住宅で、ペットの飼育を認めたのは全国でも初めてで、家族同然のペットと一緒に暮らしたいという被災者の強い要望にこたえた。

被災者要望に対応

飼育を認めるのは、県営の二団地で、四十五戸と五十五戸の計百戸。いずれも一棟を丸ごとペット飼育を希望する入居者に供給する計画で、ペットを飼わない他の入居者が入る棟と区別する。

県はこれまで「県営住宅の設置および管理に関する条例」で、入居者の共同の利益に反する行為としてペットを禁止してきた。通路やエレベーターがペットのふん尿で汚れたり、夜中に鳴いたりして他の入居者の迷惑になることがあるためだ。

今回、一部とはいえ、あえて許可に踏み切ったのは、ペットを飼っている被災者が多いうえ、動物愛護団体からの強い要望が県などに寄せられたことから。とくに、震災で家族や財産を失った被災者にとって、ペットが心のケアになる点も考慮したという。

県住宅管理課は「被災者の心情も考え、建設省とも協議して決めた。うまくいくかどうかは入居者のモラルによるところが大きい」としている。

神戸新聞 1997.01.14

第３次一元募集前後の記事

当選確率は個人と同じ

グループ募集

復興住宅Q&A

―一元募集を前に

〈上〉

災害復興公的賃貸住宅の第三次一元募集の受け付けが、今月二十七日から始まる。今回の募集戸数は約八千三百戸。仮設住宅入居者の優先枠を広げる一方、公営住宅では全国で初めてグループ募集を採用し、コレクティブハウジング（協同居住型集合住宅）、ペット飼育できる住宅を導入する。申込書は、二十七日以降に配布し、仮設住宅ふれあいセンターや公的機関に備えられる。締め切りは三月十九日。コレクティブハウジングなど新しい試みの具体的な募集方法や設備などはどうなるのか。三回にわたって、Q&A方式でまとめた。

グループ募集は、気心が知れた仮設住宅の入居者が、グループを組んで応募できる制度。震災で地域のつながりを失った被災者が、仮設住宅で築いたつながりを恒久住宅で継続できるように、と考えられた。公営住宅法に規定はなく、建設省が特例的に認めた。

仮設住宅入居者以外は利用できず、対象は県営住宅千八十八戸、神戸市営住宅百戸、西宮市営住宅七百三十八戸の計千九百二十六戸（コレクティブハウジングは除く）で、実施住宅は別表の通りだ。

Q1 グループ募集の応募方法は

県住、各市住で異なっている。

県住は一グループ十世帯までで、グループのメンバー構成に決まりはない。西宮市住も一グループ十世帯まで。ただ、同市は抽選の煩雑さを避けるため、同じ住宅の同じ間取りを希望する世帯だけでグループを組むことを条件にした。

神戸市住は、一グループ一世帯のどちらでも申し込めるようにしている。神戸五世帯まで。同市は、シルバーハイツ（シルバーハウジング）申込資格者を含むグループのみを対象としている。

Q2 グループで応募することを義務付けた。高齢者の仲間づくりや異世代の同居に配慮したという。また、あくまでもモデル的な取り組みとし、戸数を限っている

神戸市は多世代が入居

コレクティブハウジング

〈中〉

復興住宅Q&A

―元募集を前に

コレクティブハウジングは、独立した住戸と共用スペース（食堂や談話室など）を備えた集合住宅。協同居住型集合住宅ともいう。各住戸は、台所や浴室、便所などを備えている。

「共同」ではなく「協同」という言葉を使い、協力し合って暮らすという意味を込めている。

Q1 コレクティブハウジングはどんな住まい方をするのか

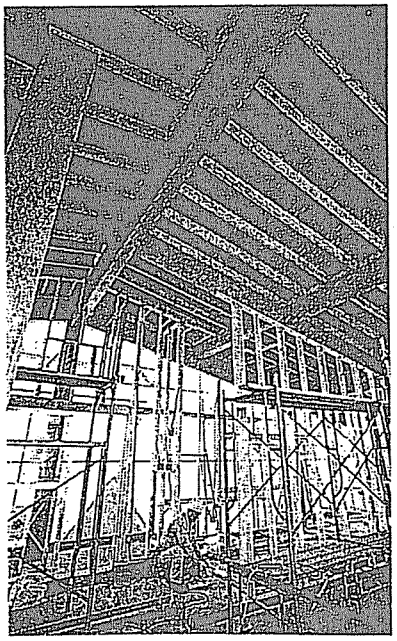
「いつでもだれかに会えるし、いつでも一人になれる」住まい方。入居者全員で、共用スペースの使い方や協同生活のあり方などのルールを決める。

食事は個別に取ってもいい

復興賃貸住宅では、県営、神戸市営を合わせ計二百六十一戸が計画され、今回の募集は、県営片山住宅六戸、神戸市営浜添住宅二十九戸の計三十五戸。県住と市住では、規模や申し込み資格などが異なる。

震災の被害が集中した下町は、銭湯や食堂があり、近隣で安否確認できた。そんな下町にいた高齢者に触れ合いや安心感がある住宅を提供するのが狙い。

先進地の北欧では、食事や保育など日常生活のかなりの部分を協同化する。国内の事例はほとんどなく、超高齢社会の新しい住まい方として注目を集めている。



建設が進む県営「ひょうご・片山ふれあい住宅」＝神戸市長田区

し、話し合いで協同でつくることもできる。共用スペースの光熱水費は入居者が負担、共益費はその分、一般の住宅より高くなる。

近隣の人と付き合い、一緒に食事をしたりするのが好きな人、共用部分のそうじなどをいとわない人が向き。

Q2 県営片山住宅の内容は

木造二階建て。1DK（二十九平方㍍）六戸と共用の台所やリビング、和室などがあり、電気調理器や湯沸かし器などを備えたオールK（五十五平方㍍）二戸と電化で、ガスは使えない。

募集は、仮設住宅に住む六十歳以上の単身者六人のグループのみ。入居前に協同生活のための説明会が行われる。

Q3 神戸市営浜添住宅は

住民参加のまちづくりで知られる真野地区に建設され、愛称は「真野ふれあい住宅」。1DK（三十五平方㍍）十五戸、2DK（四十五平方㍍）十二戸、3DK（五十五平方㍍）二戸と共用の食堂や談話室などがあり、オール電化。

1DKすべてと2DK六戸は六十歳以上のみの世帯か、どちらかが六十歳以上の夫婦世帯が対象。ほかは年齢を問わない。市は、入居者同士の触れ合いや助け合いを進めるため、幼児の事業推進応援団の森栗茂一さん（大阪外大助教授）は「個人のプライバシーを保ちつつ、触れ合いを大切にする豊かな生き方ができる。共有部分を住民以外にも開放すれば、地域とも触れ合える」と期待を寄せる。

ループでも応募できる。ただし、グループは仮設住宅の入居者に限る。

Q4 どんな良さがあるのか

学者やプランナーでつくるコレクティブハウジング研究会（事務局・神戸市）が、入居者の相談に応じるほか、生活相談を行う生活援助員の定期的な巡回がある。

コレクティブハウジングの問い合わせは、県住は県住宅供給公社☎078・232・9557☎0798・36・0533☎0794・23・0117。神戸市住は神戸市営災害復興住宅募集の係☎078・322・1300。

神戸新聞 1997.02.21

新復興住宅Q&A

一元募集を前に

〈下〉

ペット飼育

自治会で規定設け対処

ペット飼育が可能な住宅は、神戸市北区・鹿の子台南鉄筋住宅のうち二棟五十五戸と同市須磨区・白川台鉄筋住宅のうち二棟・四十四戸の計四棟・九十九戸。この四棟は、全戸がイヌやネコなどのペットOKで、一般住居との混在はない。

広さは1DK、2DK、3DK、3LDKで、一般の県・市住と同じ。防音（じん）・防臭仕上げで張り替え可能な床や壁とし、ペットのくぐり戸付きドア、ペット用トイレ設置場所などが備えられている（イラスト参照）。

ペットの範囲について、県は「どの動物はいい、悪いと厳密な線引きはできないが、イヌ、ネコなどで人に迷惑をかけない範囲の動物。自治会などで決めていただく以外にない」としている。

被災者やJAVA（動物実験の廃止を求める会）などから、「一緒に震災を乗り越えてきた動物を処分できない」と強い要望が寄せられ実現した。現在、イヌやネコなどを飼っている仮設住宅入居者を対象にしている。

Q1 ペット飼育可能住宅はどんな規則があるのか

飼育可能な棟と飼育できない棟で、一緒に自治会をつくってもらい、ペット飼育に関する規定を設けてもらう。自治会内にペット管理委員会をつくり、苦情を解決してもらう。

県は「動物飼育に関する規則」（案）を考えている。室内飼育とし、ベランダでのエサやりやプラッシング、排尿・排便の禁止、戸外でのフンの始末を義務付けている。これらの規則に違反し、警告を無視する場合は、飼育停止となる。

Q2 規定の内容は

案では、イヌ・ネコなどは一戸当たり一匹とし、誓約書や登録証などを添えた飼育申請を出し、承認を受けてはじめて飼育できる。

Q3 導入には反発の声もあるが

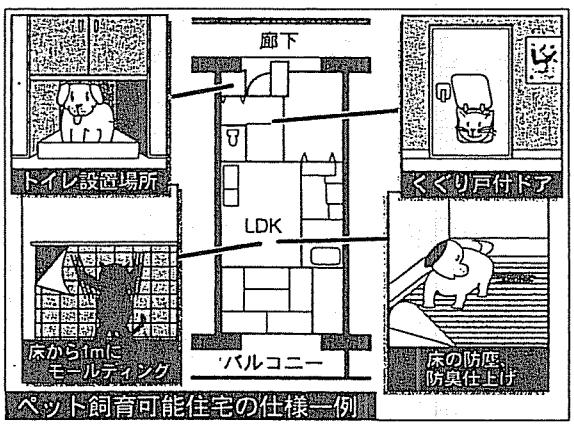
計画発表後、賛成、反対の電話が県の担当課に相次いでいる。反発の声は「公営住宅で隠れて飼われているペットの毛やフンで困っているのに」「税金で他人に迷惑をかける住宅を建てるのか」といったものだ。

県は、飼い主がルールを守るのが大前提といい、自主管理の支援をしたいとしている。また、入居後の飼育状況をチェックし、今後の施策に生かしたいという。

Q4 他の住宅ではどうなるのか

「イヌ、ネコ、鳥など動物の飼育はできない」と、注意事項として盛り込まれている。神戸市はこのほど、災害公営住宅でのペット飼育のルールづくりなどを考える「ペット問題研究会」を発足させ、検討を始めた。しかし、今回募集の市営住宅でペット飼育ができるようにはならないという。

また、同市は七月から「犬猫の里親登録制度」を導入。仮設住宅入居者らが、恒久住宅への転居などで、ペットを手放さざるを得ない場合、里親を探す。



ペット飼育可能住宅の仕様一例

ペット飼育可能住宅の問い合わせは、県住宅供給公社☎078・232・9557☎0798・36・0533☎0794・23・0117。

神戸新聞 1997.02.25

復興住宅第3次一元募集 高齢者に聞く

評価分かれるコレクティブ

「安くなる」「プライバシー」



建設が進む公営住宅。「一日も早く入居を」という被災者の願いは切実＝神戸市内

災害復興住宅の第三次一元募集が、二十七日から始まる。一部の住宅で採用したコレクティブハウジング（協同居住型集合住宅）や、気心のしれた仮設住宅の住民が集まって応募できるグループ募集は、公営住宅では全国初の試みだ。「一日も早く落ち着ける家を」という被災者の声からは、評価する意見がある半面、「共同生活はもう嫌」という声ももれる。神戸市内の仮設住宅に住む高齢者二十五人に、今回の一元募集に対する意見を聞いた。

グループ募集 人気だが数少々

■共同生活に不安

独立した住戸に居間、台所などの共用スペースを備えたコレクティブハウジングは、県営片山住宅、神戸市営浜添住宅合わせて三十五戸の募集がある。兵庫区の地域型仮設住宅に住む男性さんは「左半身まひで体が自由に動かないので、共同生活のほうが安心できる」と、入居に前向きだ。

しかし、「他人との距離が心配」など、入居を敬遠する声も強い。とくに、台所やトイレが共用の地域型仮設住宅に住む人は「共同生活はストレスがたまる」（女性、六十六歳）、「共同の台所は掃除が行き届かず、汚くなる」（男性、七十歳）などの意見が多い。

また、北区の藤原台第一仮設住宅の明神明自治会長さんは「新しい試みは評価するが、戸数があまりにも少なく、当選確率が低い」と指摘する。

■希望地になじめず

仮設住宅の住民がまとまって応募できる「グループ入居」を希望していたのは、同生活のほうが安心できる」二十五人のうち二人。藤原台第一仮設住宅に住む田路文次さんさんは「高齢なので、仮設住宅で知り合った人がそばに居てくれればありがたい」と話す。

ただ、グループ募集がある住宅はコレクティブハウジングを除くと県営、神戸・西宮市営合わせて十団地（千九百二十六戸）のみで、たくさん当たる競争率が低くなると思う」と倍率を希望する住宅でグループ応募ができるとは限らない。

中央区のポートアイランド第一仮設住宅に住む浅田ちえ子さんさんは「仮設住宅で親しくなった人と一緒に申し込みができればいい」と話すが、希望する西神南では、グループ募集は今回も住み慣れた灘に申し込む。あと二、三回応募しても当選しなければ、実家のある熊本に帰るかもしれない」と、切実な胸の内を明かした。

■こだわりに変化も

震災から二年がすぎ、「もとの街に戻りたい」というこだわりに、微妙な変化も見える。

前回、息子の住む中央区に申し込んだという西神第七仮設住宅の女性さんは、今回は西神南を希望する。「最初はえらい所に来たと思ったけど、空気がよくて住めば都」。

震災前は灘区に住んでいたが、西神南に申し込む同住宅の女性さんは「西神はたくさん建つから競争率が低くなると思う」と倍率を重視する。

しかし、全体的には半数以上が「通院」などを理由に「もとの住まいの近く」を希望する。左手が不自由で、毎週かかりつけの病院に通う東灘区の田中良一さんさんは「前回と同じく、今回も住み慣れた灘に申し込む。あと二、三回応募しても当選しなければ、実家のある熊本に帰るかもしれない」と、切実な胸の内を明かした。

第３次一元募集に対する意見

	前回申込先 今回希望地	①コレクティブハウジングへの入居希望 ②グループ応募の希望 ③今回の一元募集について
東灘区の地域型仮設住宅 女性（70）	東灘区 東灘区	①しない②しない③年齢の長女は車いす生活。コレクティブハウジングもいいが、障害者用住宅の充実を
東灘区の地域型仮設住宅 女性（62）	灘　区 兵庫区	①しない②しない③車いす生活。震災前に住んでいた兵庫区か、通院している中央市民病院の近くを希望
ポートアイランドの仮設住宅 女性（73）	灘　区 西神南	①しない②する③仮設住宅の仲間と同じ住宅に入りたい。震災前住んでいた長田区に戻るのは無理と思う
ポートアイランドの仮設住宅 男性（67）	応募せず 神戸市東部	①しない②しない③他人と食事をしたりするのは苦手。一人のほうが気楽。いつになれば当選するのか心配
兵庫区の地域型仮設住宅 男性（79）	兵庫区 兵庫区	①する②しない③体が不自由なので、共同生活のほうが安心。現在もボランティアや近所の人が親切で助かる
兵庫区の地域型仮設住宅 男性（69）	兵庫区 兵庫区	①しない②しない③コレクティブハウジングは、入居後に気が合わず、出たくなった時にどうするのか疑問
北区の仮設住宅 男性（63）	灘　区 北区か西区	①しない②しない③グループ入居もコレクティブハウジングも戸数が少なく、入居確率が低い
北区の仮設住宅 男性（70）	応募せず 中央区	①しない②しない③コレクティブハウジングは建物が完成しておらず、住みごこちを判断できない
西区の仮設住宅 男性（68）	西神南 西神南	①しない②しない③コレクティブハウジングは、入居者の一人が病気で倒れたらだれが面倒をみるのか、心配
西区の仮設住宅 女性（75）	中央区 西神南	①しない②しない③コレクティブハウジングは、共用部分の公共料金の支払いなどを考えると面倒

神戸新聞 1997.02.24

コレクティブハウジング事業推進応援団の出前説明会等の記事

仮設住宅のくらし 新しい住まい方

復興住宅 コレクティブハウス、グループ入居に理解を

仮設住宅のくらし 新しい住まい方

復興住宅 コレクティブハウス、グループ入居に理解を

全国で初めて設置される公営コレクティブハウスやグループ入居についてボランティアらの参加でつくる「神戸コレクティブ・ハウジング事業推進応援団」が十三日、神戸市西区の仮設住宅の説明会を始めた。

ボランティアの事業応援団

震災後、まだ慣れない仮設住宅で孤独死や自殺が相次ぐ中、高齢者は新しい人間関係をつくることが難しいことから、仮設住宅で芽生えたコミュニティーを維持、発展する方法として、グループ入居と併せて検討されてきた。

同応援団は学者や都市プランナーなどが中心となって結成。二十七日から始まる公営住宅の第三次募集では、コレクティブハウスと呼ばれる十五戸や高齢者向け住宅の一つ屋根の下に、それぞれの「家」ともいえる個室と大浴場や食堂などの共有スペースは一コレクティブハウスは、

第2期コレクティブ・ハウジング事業推進応援団のミーティング＝神戸市中央区（12日）

仮設住宅の説明会

高齢者や震災後の孤独死防止にも

十二日夜、神戸市中央区でミーティングが行われ、ボランティアなど約四十人が集まり説明の方法などを検討した。参加者からは「公営住宅に早く移りたいためにコレクティブに申し込むというのでは、逆にコミュニティーを壊すおそれがある」と指摘する声があり、「共同生活が嫌な人にはやめるように勧めることも大切」などの意見が出た。

同応援団では今後、メンバーらが各仮設住宅を回ってコレクティブハウスなどの説明をしていくという。

神戸新聞 1997.02.14

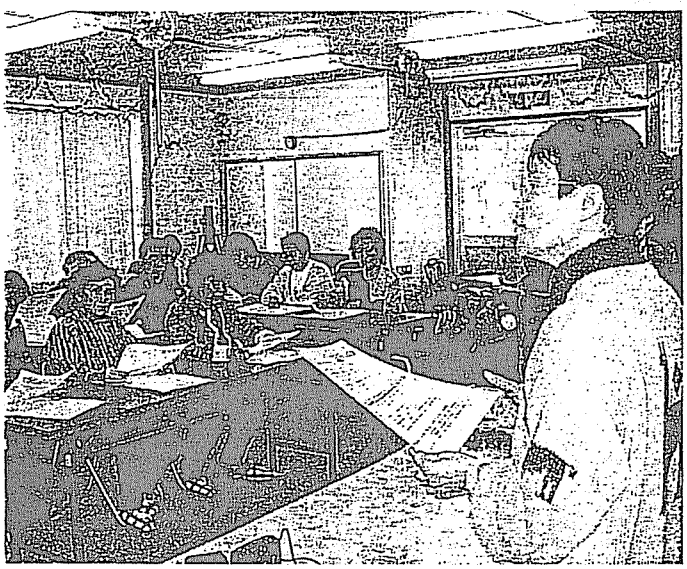
―神戸のコレクティブハウジング―

入居者募集を前に説明会

初のグループ応募

ボランティア団体 仮設住民ら聴き入る

全国にさきがけ、神戸市長田区の二カ所に建築される「公営協同居住型集合住宅」（コレクティブハウジング）の入居者募集（今月二十七日から）を前に、同住宅の実現に向けて活動してきたボランティア団体「コレクティブハウジング事業推進応援団」のメンバーらが十三日、同市西区狩場台の狩場第二仮設住宅のふれあいセンターで、住民を対象にした説明会を行った。仮設住宅で育まれた良好な近所づきあいを大切にした「グループ募集」など初めての試みが盛り込まれているだけに、応募要綱も複雑になっており、住民らは真剣に聴き入っていた。



コレクティブハウジングの入居者募集についての解説をするため、ボランティア団体が開いた説明会＝神戸市西区狩場台の狩場第２仮設住宅ふれあいセンター

コレクティブハウジングは、台所、部屋など個人の独立空間がありながら、炊事場や談話室など他の多住者とふれあうことができる共同スペースがあるのが特徴。住民同士のふれあいの中で、お年寄りの孤独死を防止し、孤立感をやわらげる効果があるとされる。

今月二十七日から始まる災害復興四百戸住宅の第三次募集に盛り込まれた神戸市長田区の「県営片山住宅」（六戸）と「神戸市営浜添住宅」（二十九戸）が、コレクティブハウジングとして設置され、入居者募集の対象となる。

今回の募集では、仮設住宅で育まれた近所づきあいを壊さないように、仲の良い住民が複数で申し込む「グループ申し込み」も実施されるため、応募要綱が複雑になっている。このため、同団体が被災地の仮設住宅を回り説明会を行っている。

この日は、説明を聞いたお年寄りらから「何世帯までグループ応募ができるのか」「高齢者などの弱者には有利なのか」などの質問が出た。

講師を務めた石東直子さんは「初めての試みなので、戸惑いがあるかもしれない。出来るだけ多くの仮設住宅を巡回してバックアップしたい」と話した。

産経新聞 1997.02.14

兵庫県災害復興住宅 第3次募集締め切る

兵庫県は19日締め切りの災害復興公営住宅の第3次募集申し込み状況（18日現在）をまとめた。募集戸数8313戸に対し、申し込みは2万997件で平均倍率は2・5倍。19日の消印で25日到着分まで有効で、最終倍率は昨年8月の前回（3・9倍）並みになる見通し。

高齢者が共同で暮らせるコレクティブハウジングは、神戸市営浜添住宅（29戸、神戸市長田区）で約1・2倍と定員を超えたが、県営片山住宅（6戸、同）は申し込みがない。一方、初のペット飼育可能な白川台鉄筋（44戸、神戸市須磨区）は70件、約1・6倍となったが、鹿の子台南鉄筋（55戸、同市北区）は29件と低調。【因幡 健悦】

災害復興公営住宅 入居申し込み始まる

兵庫・8313戸

兵庫県などの被災者向け災害復興公営住宅の入居者募集の申し込みが27日、始まった。今回で3回目で、県営、市営、公団、公社住宅計8313戸（新築5347戸、空き家2966戸）を一括募集する。仮設住宅からの優先入居枠を広げ、仮設住宅の早期解消を図る。申し込みは3月19日まで（当日消印有効）。

神戸市では全仮設住宅を対象に募集相談会をスタート。この日は同市西区の8カ所で、訪れた住民に個別の希望や事情などを聞きながら、申し込み方法などをアドバイスした。また、仮設住宅のふれあいセンター50カ所に設置されたパソコンで各住宅ごとの応募状況がわかるようにした。

県外被災者のため、横浜、大阪、岡山、広島でも説明会を開くほか、各都道府県の住宅担当課にも申込案内書を置く予定。申し込みは被災市町などの窓口にある申込案内書に必要事項を書いて郵送。5月上旬までに抽選結果が返送される。問い合わせは、県住宅管理課（078・362・3628）など。

毎日新聞 1997.02.27

「コレクティブ住宅」知って

推進応援団 無償で説明会

災害復興公営住宅 入居申し込み開始

27日始まった阪神大震災被災者向けの災害復興公営住宅の入居者募集（3次募集）に関連して、今回から実施される仮設住宅などで気の合った仲間同士が同じ住宅に複数で応募できる「グループ募集」や、公営住宅として国内で初めて導入される協同居住型集合住宅「コレクティブハウジング（ふれあい住宅）」などについて被災者に理解を深めてもらおうと、医師、都市プランナーらで作る「コレクティブハウジング事業推進応援団」がこのほど、無償で説明会を始めた。被災者の置かれた状況を理解する専門家のきめ細かな説明に注目が集まっている。

初回は長田で 参加者、熱心に質問

北欧で1980年代に導入されたコレクティブハウジングは、個人生活を前提としながら生活空間の一部を共有して、数家族が共同居住する集合住宅。県、神戸市では、災害復興公営住宅に261戸を建設する。

応援団は、コレクティブハウジングの設計、募集方法などについて県、神戸市と協議を重ねてきた石東直子・石東都市環境研究室長、障害者らが住む地域型仮設住宅、長楽住宅（71戸、50世帯）」のふれあいセンターで21日に行われた1回目の説明会には、お年寄りを中心に約40人が参加。上田院長、石東室長が、県営、市営によって応募条件が異なるグループ募集制度、高齢者向けに建設されるケア付住宅「シルバーハウジング」などについて説明。熱心に耳を傾けていた参加者は、「高齢者ばかりでグループを組まないと、優先順位枠からもれるのか」など、盛んに質問していた。

応援団では「片山住宅」（長田区、6戸）「真野ふれあい住宅」（同区、29戸）の2カ所のコレクティブハウジング入居者決定後、県、市に協力して居住のルールづくり、擬似体験トレーニングなどについてワークショップを実施する予定。問い合わせは、神戸市住宅局管理課（078・322・5584）。【中尾 卓英】



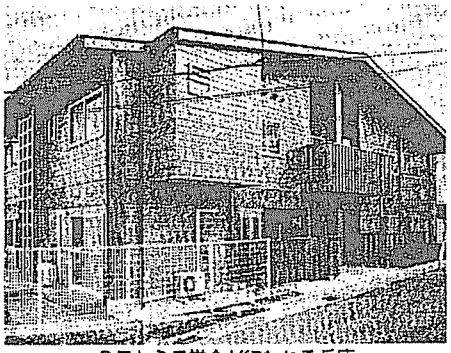
毎日新聞 1997.02.28

兵庫県の共同居住型住宅

思惑外れ…応募者ゼロ

「PR不足が原因」てこ入れへ 6日に見学会

阪神大震災で住まいを失った被災者向けに、兵庫県などが三月に行った災害復興住宅の募集で、公営住宅としては全国初の「コレクティブハウジング」（共同居住型集合住宅）や「ペット飼育可能住宅」が登場した。しかし、募集を終えてみると、県営コレクティブハウジングへの応募は「ゼロ」。県はPR不足が原因とみて、連休明けの六日から現地で体験見学会を開く。



6日から見学会が行われる兵庫県営コレクティブハウジング

三万四千六百戸余りがなお仮設住宅での暮らしを余儀なくされている兵庫県。県は災害復興住宅として、低所得者向けに三万八千六百戸の公的賃貸住宅の供給を進めるとともに、高齢化対策として、ペットを飼育できる住宅や共同厨房型の集合住宅を打ち出した。

コレクティブハウジングは北欧で生まれた数世帯から数十世帯によるコミュニティー住宅。各世帯がプライバシーを保ちつつ、食事など生活の一部を共にして、助け合いながら暮らすことを目的としている。

今回、県が建設したコレクティブハウジング「片山ふれあい住宅」（神戸市長田区）は木造二階建ての単身高齢者向け住宅。ふろ、トイレ付きの1DK六戸に加え、台所や食堂、居間など約五十三平方㍍の共用スペースを備えた。

「仮設住宅などでのコミュニティーを失いたくない」との声に対応、県などは九八年度までに、こうしたコレクティブハウジングを計二百六十一戸建設することを予定している。「高齢化社会を迎えるにあたって先進的な試みと自負している」（住まい復興推進課）。

しかし、今年三月に行われた災害復興住宅の第三次一元化募集では、全体として八千三百十三戸の募集に対し約四倍の応募があったものの、この片山住宅への応募はゼロ。同じ長田区内の神戸市営コレクティブハウジング二十九戸が、二倍余りの応募を集めたのに対して、明暗を分けた。

年齢や世帯構成を多様に設定した神戸市営に比べ、応募条件を「六十歳以上の単身高齢者に限った六人一括のグループ申し込み」と厳しくしたことや、コレクティブハウジングへの理解不足が応募ゼロの原因とみている。

このため県は次回からの募集では、グループ募集に加えて、一人でも応募できるように改めることを検討しているほか、六日から被災者を対象に見学会を行う。見学会では、実際に料理などを体験してもらうとともに、アンケートを行い入居希望者を登録する。

県は「完成したコレクティブハウジングを実際に訪れてもらうことで、理解を深めてもらえれば」（住宅管理課）と話している。問い合わせは☎078・341・7711（住宅管理課）。

読売新聞 1997.05.02

「グループ」応募ゼロ

神戸市営復興住宅 全体倍率は1.42倍に

災害復興公営住宅の第三次一元募集で、神戸市は十日、六日までに到着分の申し込み状況を発表した。市営住宅三千百五十四戸のうち、倍率は一・四二倍に上っている。その中で、仮設住宅での仲間による「グループ募集」を受け付けている垂水区北舞子第四住宅の応募者はゼロと低調だ。

募集は二月二十七日にスタート。倍率の高いのは公団借り上げ住宅が二・六五倍、次いで高齢者向けのシルバーハイツが二・三七倍となっている。一方、低調なのは、「グループ募集」のほか五人以上の家族向け（新築）の〇（オー）型住宅が〇・三三倍。また、一般住宅は一・五一倍。受け付けは十九日までの消印で、二十五日到着分まで有効。

住宅の種類別の応募状況は次の通り。種類＝新築の平均倍率、空き家の同倍率、合計倍率の順。

一般住宅＝一・八九倍、〇・九九倍、一・五一倍▽公団借り上げ＝二・四八倍、四・二〇倍、二・六五倍▽民間借り上げ（新築）＝一・七二倍▽コレクティブ・ハウジング（同、長田区真野ふれあい住宅）＝〇・五二倍▽グループ募集（同、北舞子四）＝〇倍▽〇型＝〇・三八倍、〇・一八倍、〇・三三倍▽シルバーハイツ＝二・三一倍、五・六〇倍、二・三七倍▽車いす常用車向け住宅＝〇・五二倍、〇・三三倍、〇・五〇倍▽シティハイツ＝〇・〇六倍、〇・八八倍、〇・四五倍。

神戸新聞 1997.03.11

まちづくりプランナー石東直子さん寄稿

需要ある協同居住型住宅
受け入れには時間必要

災害復興賃貸住宅の第三次一元募集は、仲間同士で応募できるグループ入居や協同居住型のコレクティブ・ハウジングが初めて導入された。そうした試みへの応募は低調だったが、「新しい住まい方の受け入れには醸造期間がいる」と、その意義をあらためて強調する、まちづくりプランナー石東直子さんに寄稿してもらった。

今回の災害公営住宅の募集には新しい試みが三つありました。協同居住型集合住宅（コレクティブ・ハウジング）、グループ入居制度、ペットと住める住宅です。この試みの応募状況は、一部を除いて不調でしたが、私は不思議なことではないと受け取っています。

まず、情報が行き届かなかった。新製品開発の情報を、欲している人に届ける知恵が十分に出されなかったようです。情報をキャッチし、それを自分の住まいの選択肢に入れるには時間が必要です。

コレクティブ・ハウジングは、日常生活の中で自然な形で住人同士が触れ合える集合住宅です。それぞれの住宅は台所、浴室、トイレが備わった独立した住戸ですが、それとは別に協同スペース（食堂、談話室、多目的室など）があります。協同スペースの使い方や維持管理は居住者が決めます。そこを核に下町の長屋的な触れ合いと助け合いの生活が期待できます。

このような新しい住まい方を自分のライフスタイルとして選択するには少し考える時間がいるでしょう。情報を自分のものにしてゆく醸造期間が必要なのです。

コレクティブ・ハウジングは、協同居住をしたいというライフスタイルの選択ですから、居住者参加型の計画づくり（計画づくり）が望まれます。神戸市営真野ふれあい住宅は、地域の関心を持つ人たちがワークショップ（検討交流会）を持ちましたが、今回のような災害復興公営住宅での居住者参加型の計画づくりはなかなか難しいものです。

それに代わる方法はいくつか考えられます。その一つとしてグループ入居制度が実施されました。同じライフスタイルを志向する仲良しが一緒に入居すると、協同生活は順調にスタートしやすい。さらに入居前には協同居住の学習や体験の期間もあります。

県営のコレクティブ・ハウジングに応募がなかったのは、入居後の住まい方のイメージが十分に知らされなかったこと、グループ入居の条件が現実離れしていたことにもよると思います。一人暮らしの高齢者の六人グループだけという条件では、積極的で適切な調整がなされないと集まることは難しいでしょう。

コレクティブ・ハウジングは、高齢者に限らず、単身世帯、男女協働世帯、単身世帯や幼児のいる世帯にとっても、共に住むことの安全性、安心感、そして触れ合う楽しさを持つ暮らし方です。コレクティブ・ハウジングの需要はすでに潜在的にあると言えます。災害公営住宅の次回以降の募集でも、普及につながるようなPRを求めたいと思います。

神戸新聞 1997.04.08

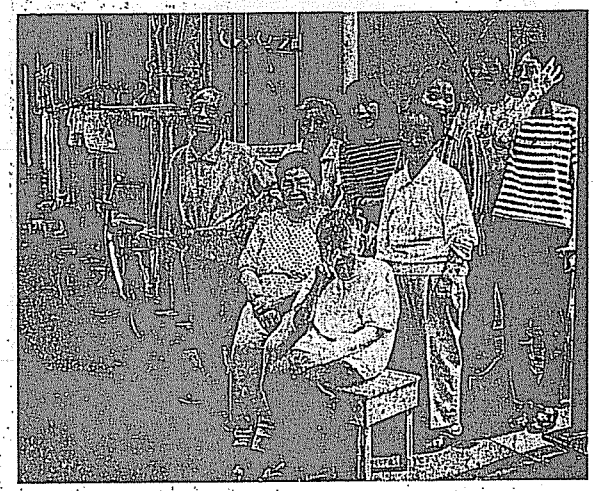
コレクティブハウジング入居予定者等の関連記事

老老の街

仮設住宅から

家族 (下)

新たな共同生活をつくる



震災が起きた一昨年の五月、十世帯はばらばらにこの仮設に入った。浴室の利用時間を守らない、台所の後片付けがちゃんとできない。自分とは違う他人の生活習慣に戸惑い、当初はトラブルが続いた。

二年余りの「共同作業」が、真野ふれあい住宅に入居を決めた人たち。新しい「家族」だ＝神戸市長田区野田町五丁目の長楽公園仮設住宅で

「ちょっと病院まで行こうと　掃除といった家事を分担し支え合う。

「どうしたん」

「かぜみたいで」

「気いつけてな」

高齢者や障害者を対象にした神戸市長田区の長楽公園仮設住宅では、こんな会話がよく交わされる。トイレ、浴室、炊事場は共同で、五十世帯が暮らす。

このうち十世帯が、年末に完成する神戸市営のコレクティブハウジング「真野ふれあい住宅」（長田区）にそろって入居することになった。六十歳以上の独り暮らしが七世帯、高齢者の母親と娘が二世帯、高齢者夫妻と子、孫の三世代が一世帯だ。

コレクティブハウジングは、北欧で生まれた新しい生活様式をいう。集合住宅で、独立した部屋とは別に、共同の台所や食堂を備える。入居者は、料理や生活スタイルの見直しにつながら暮らすことの大切さを知った。掃除当番といったルールや考え方もいつしか共有できるようになっていた。コレクティブ入居の話が持ち上がったのは、そんな時だった。

「社会とつながりを持ちながら独りになった時のことも考えた」

震災後、寝たきりになった母親（もの介護を続けている酒部和子さん（六二）は、コレクティブ入居の話が持ち上がったのに決めた理由をこう話す。九年前に亡くなった父親も三年間寝たきりで、最後まで自宅で介護した。当時と比べて体力の衰えを強く感じていた。

最高齢の燃杭（もえくい）太一さん（八九）は昨年五月、妻を亡くした。震災直後の体育館での厳しい生活が、死を早めたと思っている。「仮設で親しくなった皆さんとまた一緒なのが、何より心強い」という。

彫山たか子さん（四三）は、「あの人と一緒やったらいい」と、みんなから頼りにされている。夫、長女、両親、障害のある弟の六人で暮らす。同じ階のお年寄りたちに、日に一度は声をかけて回る。「ひとさんの世話をするなんて、これまでなかった。それが、こんなに世の中にお年寄りがいるのかと驚き、気になりだして」と笑う。

神戸市、兵庫県とも公営住宅として初めて、コレクティブ方式を取り入れた。神戸市は真野ふれあい住宅一棟二十九戸を、兵庫県も神戸市などに七棟計二百三十二戸を建てる。仮設で多くの孤独死を引き起こした高齢者の「孤立」を防ぐため、住民同士の支え合いに期待する。

問題点もある。入居者の収入は多くない。共有スペースの光熱費などが負担になる。「真野」では、七十五歳以上が多く、掃除などの作業に参加できない人が出てくる可能性がある。一方、入居資格を単身の高齢者のみに限定する住宅がある。病気になったらだれが介護するのか、仲が悪くなったらどうするのか。課題はつきない。

だが、仮設の患者を多く診察している神戸協同病院の上田耕蔵院長は、コレクティブの取り組みを評価する。震災では、倒壊した住宅の下敷きになった住民、避難所や仮設住宅、自宅で亡くなったお年寄りなど、死と向き合ってきた。

「医療だけでは人の命は救えない。福祉、住宅、コミュニティー、結局はまちづくりだと気づいた。ハコだけを造るこれまでの行政のやり方ではなく、中身をどうするかだ」

（この連載は、学芸部・藤井満、社会部・岡田和彦、橋尚雄、写真部・渡辺剛士が担当しました）

朝日新聞 1997.06.18

被災者向け復興住宅

みんなで決める新しい暮らし

神戸と芦屋で

阪神大震災の被災者向け復興住宅で、住宅が完成する前に入居予定者が定期的に集まり、コミュニティーづくりや住まい方について話し合う試みが始まっている。神戸市が公共住宅として初めて取り入れるコレクティブハウジングと兵庫県芦屋市の埋め立て地に建設される団地の二カ所でも、この方式に取り組んでいる。震災直後の避難所やその後の仮設住宅での生活で、住民同士の助け合いの大切さが見直されたことに加え、仮設住宅で多くの孤独死があったことへの反省が込められている。

一日午後、神戸市が長田区に建設しているコレクティブハウジングの市営住宅「真野ふれあい住宅」（仮称）に入居が決まっている二十六世帯二十九人が長田区役所の大会議室に集まった。初顔合わせのための懇談会だ。入居予定は年末か来年早々。これから毎月一度集まり、新しい生活に備える。



模型を見ながら新しい暮らしについて語り合う「真野ふれあい住宅」の入居予定者ら＝神戸市長田区役所で

コレクティブハウジングは北欧で普及し始めている新しい生活様式だ。独立した各世帯向け住居と、入居者全員で利用できる食堂や台所などを備える。共同スペースを核に「協同生活」が展開される。

真野ふれあい住宅は鉄筋コンクリート三階建てで、1DKから3DKまでの二十九戸があり、そのうち二十一戸は高齢者向けになっている。

懇談会は復興住宅へのコレクティブハウジング導入を推進しているまちづくりプランナーや研究者、建築家、医師といった専門家と学生ボランティアら約三十人が企画、運営する。初会合ではコレクティブハウジングについての説明があり、自己紹介の後、グループごとに分かれて「どんな暮らし方をしたいか」を語り合った。

今後は住宅の愛称を決めたり、部屋割りや、共同スペースの利用方法など最低限のルールづくりを話し合ったりする予定にしている。

住宅・都市整備公団が芦屋市の埋め立て地に建設している「南芦屋浜団地」でも同じ試みが始まっている。

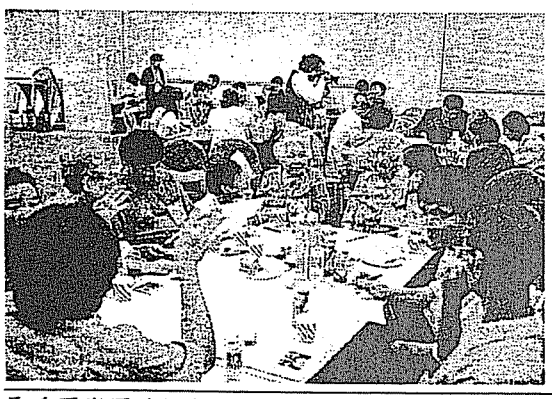
来年春に県営、市営住宅として計八百十四戸の入居が始まる。

朝日新聞 0997.07.02

コレクティブハウジング「真野ふれあい住宅」

共同生活へ和気あいあい

入居者懇談会に26世帯28人



県、神戸市が災害復興公営住宅として全国で初めて建設した共同住宅集合住宅「コレクティブハウジング」のうち、今年3月に募集した神戸市営「真野ふれあい住宅（仮称）」（長田区浜添通、29戸）に当選した人たちの顔ぶれを図り、新しい生活スタイルについて理解を深めてもらおうと1日、長田区役所で入居者懇談会が開かれた＝写真。初めて顔を合わせた参加者は、自己紹介を兼ねて自分の得意料理や趣味を披露するなど、共同生活に積極的にかかわっていこうとする意見が多く交わされた。

コレクティブハウジングは、数世帯用の居室にリビングルームなどの共用スペースを併設した集合住宅。県と市が、震災後の住宅施策の目玉として261戸（7団地）を導入。仮設住宅などで仲良くなった数世帯が一緒に応募できる「グループ募集制度」も初めて採用した。

真野ふれあい住宅は、多くの人が被災した長田の下町に立地していることや、仮設住宅の「長屋暮らし」を再現し入居者が助け合いながら心して暮らせると人気を集め、5グループ（29世帯）をふくむ67件の応募があった。当選したのは5グループ29世帯をふくめた29世帯で、この日は26世帯28人が参加した。

初めに延藤安弘・千葉大教授がスライドを使って、設計や住まい方について説明。この後、参加者はグループに分かれて懇談。大工仕事ができるので何でも手伝いたい」「入り口や室内を花でいっぱいに飾りたい」「和食の調理師をしていたので、すしをごちそうします」など積極的に自分の特技や趣味をアピールしながら、助け合い、支えあっていく住まい方についてイメージをふくらませた。

延藤教授は「入居者は後期高齢者が多いが、体も芸も口も達者な人がそろっている。懇談で話し合われた『何でもさせてもらいます』『何でも分け合っていこう』というキーワードを大切に、暮らしのイメージをはぐくんでいきたい」と話していた。来年初めに入居予定。今後も月一回のペースで懇談会を重ね、ルールづくりや日常づくりを進めることにしている。

毎日新聞 1997.07.02

阪神・淡路大震災から1000日

支

真野ふれあい

コレクティブ住宅

全国モデル私たちが

新しい家族のきずな深まる

県営片山

狭い路地に民家がひしめく。軒先を鉢植えの花が彩り、シャツやシーツの洗濯物がゆっくりと風になびく。路地を抜けると、車道沿いには鉄工所やケミカル関連の町工場が軒を連ねる。

神戸市長田区浜添通。震災後も下町風情を残すその町で、コレクティブハウジング「真野ふれあい住宅」の建設が進む。

完成は来年一月。鉄筋三階建て二十九戸のうち、高齢者用が二十一戸。一般世帯用も八戸設けられる。

コレクティブハウジングは、協同居住型住宅の意味。居室、台所、ふろ、トイレを備えたそれぞれの住居とは別に、共用の食堂、談話室がある。真野ではその広さは約二百平方㍍。プライバシーを尊重しながら、共用スペースで自由に触れ合うことができるようにという配慮である。

各部屋のバルコニーは、廊下のように一続きにし、建物内に「路地」を作り出す工夫もされている。

□ ■

九月中旬、入居予定者らが、長田区役所に集まった。市の呼びかけで、七月から月に一度、開いている懇談会だ。

テーマは、部屋割りや生活ルール作り、共用スペースの使い方など。建物のあり方、設計まで踏み込んだ要望も出る。

長田区の地域型仮設住宅に住む李道善さん(六三)は、不安を口にした。

「触れ合いのための共用スペースが、逆にけんかのもとになりかねない」

懸念の根っこには、共益費の問題だった。

「共用の部屋をあまり使わない人が、毎日使う人の電気代まで負担するのはおかしい。使うごとに使用料を集めたらどう



設計図を広げ、部屋割りや生活ルールを話し合う入居予定者ら＝神戸市長田区、長田区役所

か」と提案。さらに、玄関にドアがないことに触れ、「扉とかで区切ってほしい」と要望した。

神戸市は「共用スペースは地域の人にも活用してもらいたい」と、あえてドアをつけなかったのだが、李さんは、現在住む二階建て地域型仮設住宅の経験から、やはりドアが必要ではと考えた。

見知らぬ人が廊下を歩き、勝手にトイレや洗濯機を使うトラブルが相次ぎ、李さんの棟は、夜七時を過ぎると出入り口のかぎを締めるようになったからだ。

□ ■

「全国でも先駆けとなる住宅。そのため、建設場所や設計も、お年寄りが快適に過ごせるようにと考え抜いた」と神戸市。行政が描くそんな「理想」に、仮設住宅で生活を続けた人たちが、修正を加えていく。

李さんは言う。「立派な家に住めることには感謝している。でも、私たちが全国のモデルになるのだと思うと、入居までに主張しなければならないことはまだいくつもある」

□ ■

今月一日の早朝。神戸市長田区片山町の県営片山住宅に住む六十―八十歳代の男女四人が、連れだって近くの高取山に登った。

「あーしんどい。手すりないんか」

「山に手すりがあってどないすんの」

途中の茶屋で一休み。コーヒーを飲み、トーストを食べて、朝の新鮮な空気を胸いっぱい吸い込んだ。

お互い、知り合ってわずか二カ月。でも、すっかり打ち解けた。この日の登山には、だれ言うともなしに、新しい「家族のきずな」を再確認する意味が込められていた。

全国初の公営コレクティブハウジングとして、八月に入居者へのかぎ渡しが行われた片山住宅。単身者用六部屋を備え、当初は高齢者六人グループを入居対象とした。だが、希望者が集まらなかった。一人でも応募可能に切り替え、見学会を何度も行い、やっと部屋が埋まった。

入居者の一人、近江弘子さん(六四)は「コレクティブでの生活は、プライバシーがないと誤解している人が多いんです。最も大切なのは個人の生活。それはここでも変わりません」と話す。

月に一度、共用スペースで食事会を開く以外、個人の暮らしに干渉し合わない。掃除当番も決めていない。

「年寄りは、自分のペースで暮らせるのが一番幸せ。寂しくなったときに集まり、気づいたときに掃除すればいい」と近江さん。だが、顔を合わせたときの声かけだけは欠かさないと、入居者全員で決めている。

「お父さん、おはよう」「お姉さん、行ってきます」

近江さんは最近、年上の入居者らを身内のように呼ぶようになった。

人生の後半に、思いもかけずできた新しい家族。そのぎずなはゆっくりと、しかし着実に深まっている。

神戸新聞 1997.10.12

家族より家族らしく

培った助け合い 「仮設」から「コレクティブハウジング」へ

震災2年8カ月

震災から2年8カ月が過ぎ、阪神大震災の仮設住宅は軒並み65歳以上のお年寄りが8割を超える超高齢社会になった。そこでは、お年寄りが主役となって、モーニング喫茶などの行事や安否確認などが行われ、元気なお年寄りが介護を必要とするお年寄りと共生する「老老介護」が実践されている。兵庫県と神戸市は、災害復興公営住宅に全国で初めて共同居住型集合住宅「コレクティブハウジング」を導入した。新たな住まいで、お年寄りが支え合う暮らしは実現できるのか。コレクティブへの入居予定者を中心に、被災地でのお年寄りの日常を追った。【中尾卓英、勝野俊一郎】

"老老介護"実践

今年4月に抽選が行われた、神戸市長田区のコレクティブハウジング「真野ふれあい住宅」は、鉄筋コンクリート3階建て計29戸で、年末に完成する。ここに、下町の長屋暮らしを再現してきた「同区内の「長楽地域型仮設住宅」の10世帯などが入居する。

「ちょっとしょうゆのふたを開けてくれへん」。夕食の始まるころ、李道哲さん(62)の開けっぱなしのドアから、同じ仮設に住むおばあちゃんが入ってきた。「いろいろ手伝ってはいるけれど、年を取った人から教えてもらう事も多いんよ」。世話焼きを自認する李さんがうれしそうに話しながら、おばあちゃんが持ってきた煮物を口にほおばった。

最初から"下町"ができたわけではない。あいさつを無視したり、共同の台所を汚す人もいた。お年寄りの様子を見るために部屋をあけっぱなしにしたり。

隣人が「なんかあったの」と訪ねる。出かける人には「はよ帰っておいでや」。お年寄りの一人は「小姑が多くてね」と言いながらも顔をほころばせた。

震災で足を骨折するなどして入院生活を送った人。避難所で知らない土地でさみしさを痛感した人。身寄りがなく、孤独感から死を考えた人もいる。そんな中で仮設住宅での隣人同士の触れ合いは、大きな支えだった。

そんな暮らしをコレクティブハウジングで続けたいとの期待は大きい。

震災のショックは大きい。

震災でお年寄りが心身に負ったショックは大きい。

「生きててよかった」



真野ふれあい住宅に入居するお年寄りたちの懇談会。新しい家族のルール作りなどが話し合われている

「真野ふれあい住宅」に仮設住宅から4～5人のグループで応募、当選した19世帯に毎日新聞が行ったアンケート調査によると、全員が地域型仮設住宅に住んでおり、世帯主は38～89歳、平均年齢は66・3歳。12世帯が独り暮らしでうち9世帯が女性だった。高血圧、腰痛などの持病で、18世帯が定期的に通院している人を抱えていた。

現在の地域型仮設での暮らしについての質問では、「互いに声を掛け合う▽おすそわけをする▽病気になった時に看病し合う▽お茶会に参加し交流を深める――など住民同士の助け合いが進み、新たなコミュニティーを形成していることが浮き彫りになった。全世帯が「このまま仲間と一緒に暮らしたい」と希望し、派遣された生活相談員や医師らに相談したうえで、応募を決めていた。

「仲間」と一緒に暮らしたい

ルールづくりこれから

不安と期待が同居

コレクティブハウジングについては「共同生活のルール作りを最初からしなければいけない」「共同スペースの光熱費、管理費などの経済的負担」など、8世帯が何らかの不安を抱いていた。しかし、他の世帯には「食事会を開きたい」「カラオケをしたい」「部屋に招って一緒にお茶を飲む」など、積極的に隣人とかかわっていこうとする声が多かった。

真野ふれあい住宅の入居予定者は、7月から毎月1回のペースで懇談会を開催。顔合わせに始まって、共同生活のルール作りや、共同スペースの使い方などについて話し合いを進めている。そこでの暮らしは、日本の高齢者福祉や住まいに対する考え方を大きく変えることになるかもしれない。

コレクティブハウジング

北欧で1970年代に生まれたコレクティブハウジングは、個室にリビングルームなどの共用スペースを併設した集合住宅で、老人ホームなどの施設整備に比べ、コスト性減が図れることなども評価されている。

仮設住宅での孤独死が170人に達するなど深刻な事態を受け、震災後の住宅政策の目玉の一つとして、神戸、尼崎、宝塚各市に261戸（7団地）が導入された。全国初のグループ募集制度も採用した。

毎日新聞 1997.08.17

真野ふれあい住宅完成

ユニークな長屋造り、被災者が協力して暮らす

神戸 長田

入居者が協力して暮らす協同居住型集合住宅（コレクティブハウジング）の神戸市営真野ふれあい住宅（三鷹通）が、神戸市長田区浜添通三に完成、震災まる三年の来年一月中旬に入居が始まる。仮設住宅などで生活している阪神大震災の被災者二十世帯四十人が、震災後に築いたコミュニティーをそのまま保って生活する。井戸端会議のしやすい設計で、被災者たちは仲間とともにかなえる生活再建の日を心待ちにしている。

27世帯40人、1月から入居

被災者が新しい暮らしをスタートさせる「真野ふれあい住宅」

入居するのは現在、長田区の長楽、南京池公園、須磨区の東須磨公園仮設住宅などで暮らす七歳から九十歳までの住民。公的賃貸住宅の第三次一元募集で当選し、七月から月一回懇談会を開き、新居での生活を話し合っている。

新住宅は敷地千二百十平方㍍、延べ床面積二千五百十平方㍍。一階に共用の食堂、台所、談話室があり、各戸はバルコニーでつながり、下町のようさを生かしたユニークな長屋造り。

太陽光発電の設備も採り入れ、電力は共有部分の床暖房などに利用。また、ガスを使用せず、台所のこんろや浴室は電化された。総事業費は十億三千五百万円。

入居者の中で最高齢となる無職松本市さん（八）は長田区内の自宅が全壊し、長楽公園仮設住宅で一人で暮らす。「気心の知れた人と入居でき、孤独にならずに済みそう。規則はほかの市営住宅より多いが、みんなが楽しく集まれる機会を作って、親しくお付き合いしたい」と話している。

こうした形の住宅は県内で八か所計百六十二戸あり、市住宅局は「入居者同士がふれあい、助け合える多世代住宅のモデルになれば」としている。

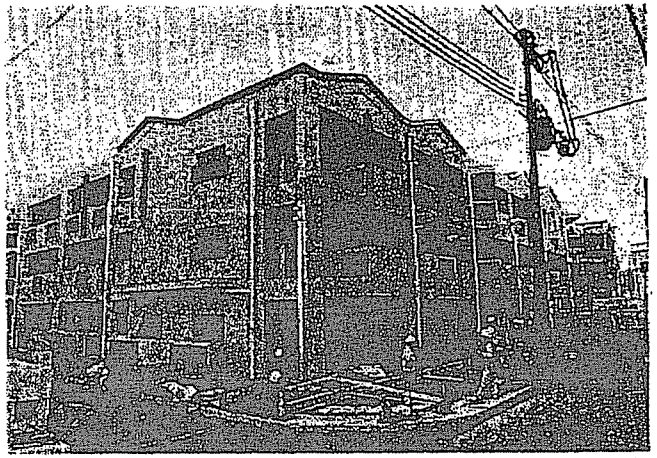
読売新聞 1997.12.07

いつでもだれかと

コレクティブ・ハウジング

下町風情たっぷり

国内2番目 長田・真野地区に完成



黄、オレンジの壁に木目をあしらった外観＝いずれも神戸市長田区浜添通3

うたい文句は「いつでもだれかに会えるし、いつでもひとりになれる」。

神戸市長田区真野地区に、神戸市営のコレクティブ・ハウジング「真野ふれあい住宅」が完成した。

コレクティブとは「共同」「集団」。個々の部屋とは別に、キッチンや談話室など、大勢で食事や団らんを楽しむ共用スペースがあるのが特徴だ。

コミュニティーづくりの一助にと注目を集め、国内では、兵庫県営片山住宅（神戸市長田区）に次ぐ二番目。

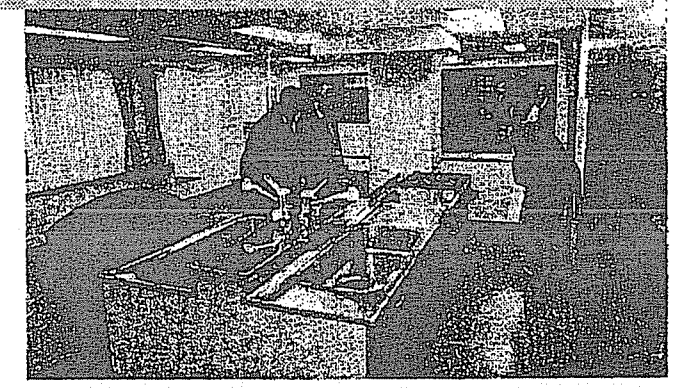
エントランスを入ると、目を引くのが、右手に広がる百二十平方㍍の共同食堂と台所。ガラス張りの明るい部屋に、あったかい床暖房。奥には、八畳間の談話室に掘りごたつがある。

だんらん楽しむ 共用スペース特徴

下町の路地をイメージして設計したのが「つづきバルコニー」だ。部屋ごとの仕切りがない、開けっぴろげな造り。「洗濯物を干しながら井戸端会議ができ、互いの安否確認にも役立ちます」と市の担当者。

敷地面積約千二百平方㍍。約五億千三百万円で三階建てを建設。屋上には共同菜園をこしらえた。

二十九戸のうち、二十一戸が六十歳以上の高齢者用で、入居者は七歳から八十歳代までと幅広い。四件、十九世帯が仮設住宅からのグループ入居。二十二日にかぎ渡しを行う。



大きな流しが向かい合わせにある共同台所

神戸新聞 1998.01.14

それぞれの道
震災そして今　第5部

シルバー家族

寄せ合う笑顔六つ

阪神大震災で大きな被害を受けた神戸市長田区。日本書紀にも登場する長田神社を望む丘の上に、真新しい二階建て住宅がたたずむ。被災した独り暮らしの高齢者向けに建てられた兵庫県営「片山ふれあい住宅」。全国の自治体で初めてのコレクティブハウジング（共同居住型集合住宅）だ。

昨年八月から、ひとつ屋根の下で生活を始めたのは、六十三歳から八十三歳までの女性四人、男性二人。「みんな見も知らぬ間柄だったけど、今では〝家族〟です」。自治会長の近江弘子さん（64）は話す。

△　△

コレクティブハウジングは、独立した住戸と、全員で利用できる食堂など交流施設を併設。仮設住宅での「孤独死」の反省から、高齢者が互いに助け合いながら生活できる環境を目指し、兵庫県内では約二百五十戸が計画されている。

片山住宅では、それぞれの1DKに台所とトイレ、浴室が付いて約三十平方㍍。一階の共用スペースは四畳半の和室を含め約五十平方㍍。電動マッサージ機やソファ、席が決まったテーブルが並ぶ。

床暖房もポカポカと暖かい共用リビングでは、集まった住民たちの会話が弾む。話題は身の回りのことから、震災、戦災と及ぶ。

「空襲の時は長男を背負ってけど、今では〝家族〟です」。

□5□



共用スペースで談笑する（左から）近江さん、田川さん、岩熊さん（神戸市長田区）

火の海を逃げ回った。空がオレンジ色に染まって……」。岩熊君子さん（79）は一九四五年の神戸大空襲でも焼け残った兵庫区の借家を震災で失った。その直後、避難所生活のストレスからか、夫が亡くなった。

「地震がなければ、あのボロ家から出られんかった」。岩熊さんは笑い飛ばす。「コレクティブ」と言われても意味が分からなかったが、「一刻も早く仮設住宅を出たい」と抽選に申し込んだ。「寂しいのが嫌いやから、これでええんちゃうかな」

「お母さん」と呼ばれる岩熊さんに対して、「お父さん」と呼ばれるのが最高齢の田川清次さん（83）。震災では長田区の自宅が全壊した。田川さんは四八年、約三千八百人の死者を出した福井地震でも乗っていた列車が転覆、九死に一生を得た体験を持つ。

震災前、相次いで妻と長女を亡くし、つらい境涯で震災後も生き抜いてきた田川さんだが、この正月は格別だった。「ようやく生き返りました」。近江さん手作りのお節料理をつつきながら涙を流した。「ここに入ってほんま、最高です」

長田区で被災した近江さんは自宅を失った。直後は親族を頼って愛知県まで避難したが、やはりこの街に戻ってきた。娘夫婦からは「一緒に住もう」と言われもしたが、「負担になりたくない」と二年余りの仮設での生活を経て、この住宅への入居を決めた。

△　△

孫からは「引っ越してから顔色が良くなった」と言われた。「ここには規則がないんです。『ボツボツしいや』でやっとります」。年輪を重ねた者同士、それぞれを尊重し合う。「家族であれば規則なんて必要ないでしょう」

（第5部　おわり）

神戸新聞 1998.01.16

その他の関連記事

長命社会を生きる <4>

やすらぎの家

お年寄りの共生

震災を転じて福となす

24万戸以上の家を破壊した阪神大震災。家を失った多くのお年寄りが今なお仮設住宅に住む。介助を必要とする人たちを対象にした兵庫県尼崎市の「小田南ケア付仮設住宅」を訪ねた。

□　□

ちょうど節分の日。台所兼食堂の「コミュニティー室」に三々五々集まった。

24時間常駐し、買い物や食事などの世話をしている援助員、清水秀昭さん(22)は鬼の面と豆を用意した。みなぎこちなく豆まきを始めた。次第に互いにぶつけ合い、首をすくめて逃げ、追い回す。次々に鬼の面をかぶりはしゃぐ。笑いが広がる。「福」が入って来たようだ。

高カヨシ江さん(78)が息を切らしながら「つかの間の幸せでいいねん。先のこと考えたら嫌になるからなあ」とつぶやいた。

トイレ付き6畳の個室と共有の台所とふろがある。このケア付き仮設住宅は行政から委託を受けた福祉法人が運営し、計2棟に男女16人が暮らす。平均年齢80歳。このような施設が県内には計15棟ある。

震災が生み出した「グループホーム」といえる。やすらぎの場を失い、寄り添った人たちが支え合う中で、ささやかだが、どこか新しいお年寄りの共同体が芽生えつつあるようだ。だが、入居期限は来年5月。その先のあてのある人はだれもいない。

隣の第2棟から手助けを求める声がかかった。松本こと江さん(86)は窓と入り口に毛布をつるし、寒さを防ぎたいという。エアコンがあるが、電気料金は自己負担だ。手がかじかみ、安全ピンでとめようとするがうまくいかない。

第1棟の松下ヒサコさん(84)はパーキンソン病に老人性白内障、糖尿病を患う。夫を亡くし、子供のいない松下さんは、同じ身の上の妹と同じアパートで生きてきた。震災後、違う仮設に離ればなれになり、肺と肝臓が悪い妹はその後特養ホームに入った。「妹はかわいそう。ここはたくさんの人と話ができて楽しい」。しかし、傍らに空の段ボール箱がある。退去の日に備え用意した。不安がそこに詰まっている。

「おいしいんだ」。辞去しようとする私の手に干しガキを2個置いた。

□　□

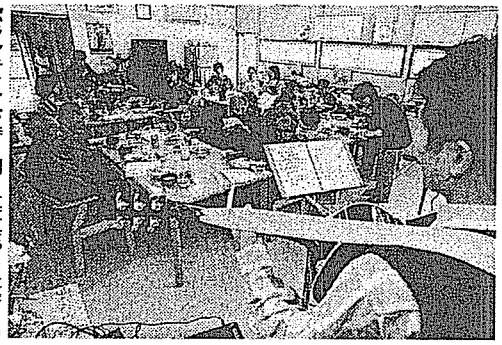
その夜、私は空き部屋に寝た。寒い。2度、目がさめた。翌朝、ケア付き住宅を後にした。隣に約400世帯の一般仮設住宅が並ぶ。各戸口に三角旗がぶらさがる。「元気です」の印。孤独死防止の知恵だ。

近くの高架を電車が走り抜けた。私はヒサコさんの言葉を思い出した。調査に来た人が『電車、やかましいでしょう』とおっしゃった。ちょうどええわ、と答えましたんや。今の電車は人多いな、少ないな、と気が紛れて寂しない」

駅路に雪が舞った。ポケットの干しガキを握るとほんのり温かかった。

【岡崎　康次】

＝つづく



ボランティアが時々開く食事会。お年寄りの大きな楽しみだ　＝小田南ケア付仮設住宅で

ご意見お寄せ下さい

ご意見やご感想をお寄せ下さい。あて先は〒530―51（住所地不要）毎日新聞社会部「長命社会」取材班。ファクスは06・346・8187▽メールアドレス shakaibu@mainichi.co.jp です。掲載時、匿名を希望される方はその旨を明記して下さい。掲載分はデータベースに収録されます。

毎日新聞 1997.02.27

長命社会を生きる <5>

やすらぎの家

被災の長田

街のぬくもり探し続け

1995年1月17日早朝。激しい炎が50㍍ほど先に迫った。5階ベランダから八木弘さん(70)は、炎の渦に消え行く神戸市長田区の街をなすすべもなく見詰めた。脳裏に9年前の悪夢がよみがえった。「あの子は、どんな気持ちで火の中におったんやろう」

「あの子」とは、生まれつき目と耳が不自由だった一人息子の昭弘さん。神戸市北区の障害者施設の火災で86年夏、焼死した。27歳だった一息子も、震災で犠牲になった人も、どんだけ熱く、苦しかったか。体験してない者にはわからんけど……」

だが、長田を焼き尽くした火炎の中に八木さん自身が巻き込まれていたかもしれなかった。

□　□

阪神大震災で焼け野原になった長田が八木さんの古里。約40年間、戦前に建ったという木造3階建ての古いアパートに住んでいた。

震災の2年前。その2㍍北の市営住宅「シルバーハイツ長田北」(長田区北町3)に移った。倍率21・4倍のハイツの申込書を妻昭子さんが渡した時は「どうせ当たらん」と、ごみ箱に捨てた。昭子さんが拾い、申し込み、当選した。家賃はもとのアパートと同じ月3万5000円。

「住み続けてたら、死んでたかもな」。妻に感謝した。ハイツはほとんど被害もなく、家庭菜園で野菜を育てる日々。年金もなく、わずかな蓄えでのつましい暮らしだが、恵まれた老後に映る。しかし、八木さんは「この暮らしは味気ない」と言う。

「以前の長田には、釣った魚をおすそわけしたり、食事によばれたり。言葉は荒いが、人情があった」。震災が街のぬくもりを奪った。ハイツの隣人にはなぜかなじめず、テレビをぼんやりながめる時間が増えた。「安全」と引き換えに、八木さんは何かを失った。

私も、あの震災を兵庫県宝塚市で体験した。自宅を、家族を、職を失い途方に暮れる人々と、心の痛みを分かち合おうとしても、同じ被災者でありながら、越えられない壁が立ちふさがり、無力感が私を襲った。

八木さんは、懐かしい空気を探すかのように、更地が広がる街に毎日のように出かける。2月の中旬、私は八木さんと肩を並べて歩いた。堅ろうなハイツと、震災から2年が過ぎても荒れたままの被災地域。道一つ隔てて広がる二つの違う世界がある。あの時、炎に包まれた街を見詰めながら、八木さんも、私と同じような無力感を抱いたのではと、ふと思った。

「ハイツは壁が分厚く、プライバシーが保てる。緊急用の呼び出しベルもあって便利や」。八木さんはハイツの設備を自慢した後、「前のアパートは、隣がしとることが、すぐわかったから、ベルもいらんかったけど……」と漏らした。

八木さん夫婦は「安住の家」を探し続けているのだと気付いた。そこに、私たちの明日の姿が重なった。【濱　弘明】＝つづく



八木さんは眼前の「長田」に何を見ているのか＝神戸市長田区で

ご意見お寄せ下さい

ご意見やご感想をお寄せ下さい。あて先は〒530―51（住所地不要）毎日新聞社会部「長命社会」取材班。ファクスは06・346・8187▽メールアドレス shakaibu@mainichi.co.jp です。掲載時、匿名を希望される方はその旨を明記して下さい。掲載分はデータベースに収録されます。

毎日新聞 1997.02.28

長命社会を生きる <6>

やすらぎの家

仮設の"兄弟"

残りの人生 旧友と笑顔で

約1000戸のプレハブがニュータウンに隣接する神戸市西区の西神第7仮設住宅。午後1時。紳士服の仕立て一筋に約60年になる立石文一さん(78)は、妻ツヤさん(77)と昼食をすませると、針とハサミを手にした。

「おーい、食事終わったかい。喫茶店へ行こうや」

近くの仮設に住む斉藤好弘さん(70)が入ってきた。私と3人は、仮設集会場でボランティアが運営する「ふれあい喫茶」に向かった。肩を並べる兄弟のような2人の背に、早春の日差しが暖かい。

□　□

神戸市兵庫区東山町で生まれ育った2人は幼なじみだった。立石さんは、親方に弟子入りし仕立て職人を目指すまじめな少年。斉藤さんは和菓子屋の長男で悪たれ坊主。なんとなく気が合い、2人で遊び回っていた。が、2人の音信は途絶え50年弱が過ぎた。

この間、斉藤さんは妻を失い、子供はなく、造船会社で働きながら、同市兵庫区のアパートで30年以上も独り暮らし。そのアパートが震災で倒壊した。妻の写真も位はいも失い1995年5月、この仮設に入った。「自分の身の回りぐらい、自分でずっとしてきたんや」と近所の人と親しくすることはなかった。

一方、立石さんは約30年前に同区湊川町の借地に家を建て、仕立て職人として独立。娘2人は結婚し、2人暮らしになった家が全壊した。幸いにも無事だった愛用のミシンと仕事台とともに、斉藤さんと同じころに、この仮設に入居した。

「ふれあい喫茶」がオープンしたのは震災1周年の96年1月。約500世帯にのぼる65歳以上の独居世帯の住人に、ボランティアは呼びかけた。「旧友に会えるかもしれませんよ」

□　□

「気付いたのは、おれの方が先やったんやで」。斉藤さんの声に、なぜか熱がこもり始めた。

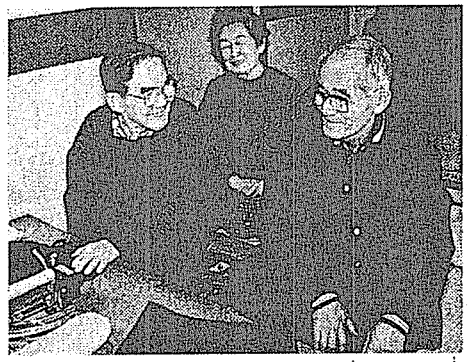
「太いまゆ。優しいまなざし。子供の時のまんまや。立石や」。数日後、立石さんの後をこっそり追った。そして、窓越しにミシンや仕事台を見た時、2人は半世紀ぶりに再会した。

翌日から毎日のように雑談に花を咲かせた。人付き合いが少なかった斉藤さんが、別人のようにボランティアの力仕事を引き受けるようになり、仮設になくてはならない存在になった。立石さんも今一つ気乗りしなかった女性服の仕立て直しを喜んで引き受けるようになった。

2人は顔を見合わせながら言う。「明るい気持ちになれたのも、ここで出会えたからや」

2月27日から始まった災害復興公営住宅の入居募集で、2人は同じ団地に申し込む。「いつもお互いの顔が見られる暮らしがいい。残りの人生は、笑顔で過ごしたい」

戦争、死別、震災……人生を体に刻み込んだ「兄弟」ほど、今、何ものにも代え難い「絆」という住まいを見つけたのだろう。「抽選のよい知らせを聞かせて下さい」。そう言って別れた。【三枝 泰一】＝つづく



半世紀ぶりに再会し、生きる力を取り戻した立石さん（左）と斉藤さん（右）＝神戸市西区の仮設住宅で

ご意見お寄せ下さい

ご意見やご感想をお寄せ下さい。あて先は〒530―51（住所地不要）毎日新聞社会部「長命社会」取材班。ファクスは06・346・8187▽メールアドレス shakaibu@mainichi.co.jp です。掲載時、匿名を希望される方さはその旨を明記して下さい。掲載分はデータベースに収録されます。

毎日新聞

長命社会を生きる <7>

やすらぎの家

自宅を開放

人とのきずなこそ支え

その木造の家は被災を免れて以前のまま兵庫県西宮市・香櫨園地区の閑静な住宅街に建っている。主婦、芝川恵子さん(52)と会社員の夫、新之助さん(56)が、4年前に建てた個人経営のケアハウス「小さな木の家」。

□ □

元気なのに家族や地域から切り離され、次々に入院するお年寄り。ぼけの症状が出るなど衰弱が進む。老人病院の薬剤師を退職した恵子さんが、ホームヘルパーとして高齢者の在宅ケアを始め、自宅を開放したのは1985年だった。92年。姑(しゅうとめ)の民子さん(昨年10月に84歳で死亡)が胃がんに侵され介助が必要になった時、夫妻は「家」の建設を決意した。「地域から隔離された病院や施設は、生きる場所ではない。住み慣れた地域で安心して過ごせる『家』が必要だ」

独り暮らしのお年寄りや高齢者世帯を対象にした「木の家」は翌93年に完成した。1階は、暖炉のある居間兼食堂、台所、和室と共有スペース。約30平方㍍の個室5部屋にはふろ、トイレ、炊事場と、夫婦につながるインターホンが備えられている。

入居者の負担は月12万~10万円と、入居金300万円。ほかに敷金が10カ月分。状況に応じてホームヘルパーなど公的サービスも積極的に利用する。地域のお年寄り15人が参加してミニデイサービス事業も月2回開かれる。だが、個人経営ゆえに行政の補助金は受けられず「もっと手厚いケアを」との願いは果たせない。

現在の入居者は3人。夫と死別し3年前に入居した田中滑子さん(76)は、老人会にも入り、月1回の旅行や食事会を楽しみにしている。洋服仕立屋の経験もあり、机の上には知人から寸法直しを依頼された背広などが積まれている。

□ □

「一人で居たい時は一人で居られる。だれかに会いたくなったらいつでも会える。何より、困った時に気軽に相談できる人が身近にいることが安心やから」。満開の梅の香りが漂う部屋で、ミシン仕事に没頭する田中さんの横顔は幸せそうだった。

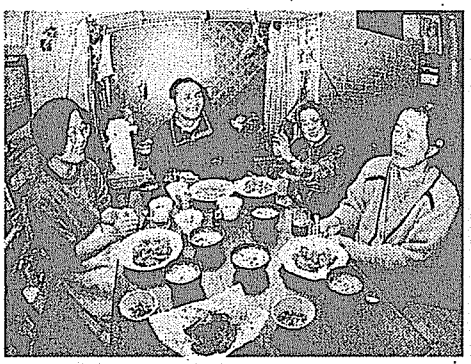
□ □

「小さな木の家」で恵子さんや田中さんとテーブルを囲みながら、私は「マローンおばさん」(こぐま社、エリナー・ファージョン作)のことを思い浮かべていた。

年老いて貧しい独り暮らし。家には、おなかをすかせ、傷ついた動物が訪れる。スズメ、ネコ、ロバ、クマ……。「あんたの居場所くらい ここにはあるよ」とマローンおばさんは動物たちを招き入れ、食べ物を平等に分け与え、動物たちにみとられながら天国に召される——。

田中さんらと夕食を共にする恵子さんの笑顔が、マローンおばさんと重なった。人はだれも他者と何らかのつながりを持ち、ささやかでも自分の役割を見つけ、生き続ける。マローンおばさんのように。

【中尾 卓英】=つづく



食卓を囲む田中滑子さん(右から2人目)ら「小さな木の家」の住人たち。一人一人の笑顔が何よりのごちそうだ =兵庫県西宮市で

ご意見お寄せ下さい

ご意見やご感想をお寄せ下さい。あて先は〒530—51(住所地不要)毎日新聞社会部「長命社会」取材班。ファクスは06・346・8187▽メールアドレス shakaibu@mainichi.co.jp です。掲載時、匿名を希望される方さはその旨を明記して下さい。掲載分はデータベースに収録されます。

毎日新聞 1997.03.02

阪神大震災被災地

シルバーの願い ②

「仮設で終わるか「ケア付き」」

「いつまでもいれたらいいのに」

先月27日夜、兵庫県芦屋市の「呉川町地域型（ケア付き）仮設住宅」の広場で、「夕涼み会」が開かれた。フィナーレの盆踊りでは、脳こうそくでつえが手放せない常田正子さん(73)も、生活援助員の助けで、お年寄りや身体障害者らと一つの輪になった。「盆踊りなんて何年ぶりかなぁ」と笑顔を浮かべた。

震災で20年住んだ同市親王塚町の分譲マンションが全壊。近くの小学校に避難した後、市内の特別養護老人ホームを経て、昨年5月、ここに移ってきた。

ケア付き仮設住宅は、社会福祉法人「尼崎老人福祉会」副理事長、市川禮子さん(58)が、県や芦屋市に訴えて実現した。呉川町仮設住宅にはプレハブ3棟に36人の介護が必要な高齢者、各種障害者が居住。個室生活で、共用のキッチン兼リビングルームがあり、24時間常駐の生活援助員が入浴や買い物まで日常生活をサポートしてくれる。リビングでは世間話に花が咲き、身体障害者が精神障害者にテレビの内容を説明してあげるなど、交流が盛んだ。

外資系銀行に勤め、病弱な母の看護で婚期を逸した常田さんは自負心が強く、最初は他の入居者との接触を避けがちだった。生活援助員のケアを受けるうちに段々打ち解けた。震災のショックで病状が悪化、平衡感覚がなくなることもある常田さんには、今の共同生活はありがたい。「至れり尽くせりで極楽のよう。いつまでもいれたらいいのにねぇ」とつぶやく。

震災で図らずも実現した入居者同士が足りない部分を補いあう「各種障害者混在型」のグループホーム。だが、神戸市で1500戸も建設された地域型仮設住宅は、生活支援員の配置が平日午前9時から午後5時の間1人だけで、約50人を相手に生活補助から安否確認まで仕事に追われ、入居者とのトラブルも起きやすい。生活支援員側からも、ケア付き仮設住宅との格差を憂う声が多い。

兵庫県などは災害復興住宅の中に高齢者が共同居住するグループホーム型の「コレクティブ・ハウジング」の建設を決めた。だが、グループ入居を認めるのかなど課題は山積だ。市川さんは「呉川町では何らかの障害を持つ人同士だからこそ、互いに尊重し支えあっているのでは」と一般化できない要素を指摘する。

呉川町仮設住宅もやがて解体され、入居者も個々の状況に応じて特別養護老人ホームやケアハウスに移ったり、自宅に帰ることになるという。

入居者の4割以上は65歳以上という仮設住宅の現状は、超高齢社会化が進む「10年後の日本」を暗示している。その中で、「将来の福祉のモデルケース」と言われたケア付き地域型仮設住宅は一瞬の「ユートピア」に終わるのだろうか。

【中尾 卓英】



リビングルームでだんらんする入居者と生活援助員ら。ケア付き仮設は〝ユートピア〟に終わるのか ＝芦屋市呉川町で

毎日新聞 1996.09.11

復興へ 16
第9部「仮設後」の条件

「老いの行く末」欲しい安心

課題多い「理想の住居」

尼崎市三反田のケア付き仮設住宅で一人暮らす吉田朝子さんも、新聞記事に目をとめた。

兵庫県が復興住宅の中で、コレクティブハウジング（共同居住型集合住宅）を手掛けるという記事だった。「あと一年で行き場がない。こんな住宅が本当にできればいいのに」と思った。

ケア付き住宅は、個人スペースとして一間とトイレ、簡単な炊事場がある。建物の真ん中に共同の炊事場と食堂。ヘルパーが食事や入浴などの手助けをする。

「好きなときに食事もできる。ヘルパーさんがいて安心できる。今ほど安らかに気兼ねなくできることはなかった」と吉田さん。が、仮設後のことが頭から去らない。「老人ホームに行くしかない。だけど施設はいろんなルールがあって束縛されるでしょう」

今の生活の延長線上に、コレクティブハウジングを思い描いている。

□　□

県によると、コレクティブハウジングは、東部新都心の県営住宅内で約百戸を計画している。

個室があって、食堂、リビングルームなど共用スペースがある点は、ケア付き仮設と同じだが、福祉サービスや家賃などは検討課題として残っている。

担当者は話す。「基本的には自立して生活できる人が対象で、生活のルールも居住者で決めるのが原則。そのために仲の良いグループごとに応募してもらうなど、新しい募集を考える必要があるかもしれない」

福祉サービスには「相談に乗る生活援助員は考えられるが、それ以上のサービスになると、福祉施設と同じになってしまう」とも言う。

神戸市もモデル的に取り組む方向だが、住宅局担当者は「福祉サービスの中身は、施設にも、福祉サービスにも、コレクティブハウジングに国の補助制度はない。

厚生省は九六年度予算のほか、国の建設補助などクリアしなければならない。障害者や痴ほう性老人らが集団生活するグループホーム制度を、高齢者に拡大する発想だが、現行でモデル事業を打ち出している。

課題は多い」とする。

震災後の厳しい財政状況の中で、自治体にはサービス充実に及び腰のものぞく。

□　□

大阪に事務所を持つ都市プランナーの石東直子さんは、被災地でコレクティブハウジングの建築を進める事業推進応援団を、建築士らと結成。神戸などで勉強会を重ねている。

「北欧などではポピュラーな住居形態だ。日本でも高齢者が都市に住む上で、必要な住宅のひとつではないか」とシンポジウムなどで訴える。

「入居者は年をとる。身体も弱る。最初は元気でも、介護が必要になる時期も来る。そうなったからといって、次に移る福祉施設を心配しなくても、コレクティブハウジングに、二十四時間体制の生活援助員をつけ、ヘルパー派遣などと組み合わせればいい」

中村宛長自身、ケア付き仮設の住民と接し、目が開いたという。

「ここが『ついのすみか』になればいい。震災で高齢化社会に向けた新しい住居の形が見えてきた」



親しくなった隣人とのひととき。「一人じゃない」と安心にもつながる＝神戸市内の仮設住宅ふれあいセンター

神戸新聞 1996.03.30

入居者が助け合う〝現代版長屋〟

触れ合い重視のマンション登場

東京に11月完成予定

地下にコミュニケーションスペース

共同の食堂やサウナ 託児所、図書室など

食事を交代で作ったり、ふろ場で共に汗を流したり、お年寄りが子供の面倒を見たり…。人と人との触れ合いを重視した賃貸マンション「ハートフルハウス」が十一月末、東京都内に完成する。便利さやプライバシーの確保を最優先する都市型住宅への反省から生まれた、新しいタイプのマンション。入居者が助け合いながら暮らす、〝現代版長屋〟が目標という。

このマンションを企画したのは、積水ハウス東京特建事業部（東京都渋谷区）。北区内の敷地約千七百三十平方㍍に、鉄筋コンクリート造り、地上五階、地下一階建てを建設する。部屋は、ワンルームから2LDKまでの五タイプで、計七十二戸。各室には台所、ふろ・トイレが完備されており、最低限のプライバシーは保たれる。

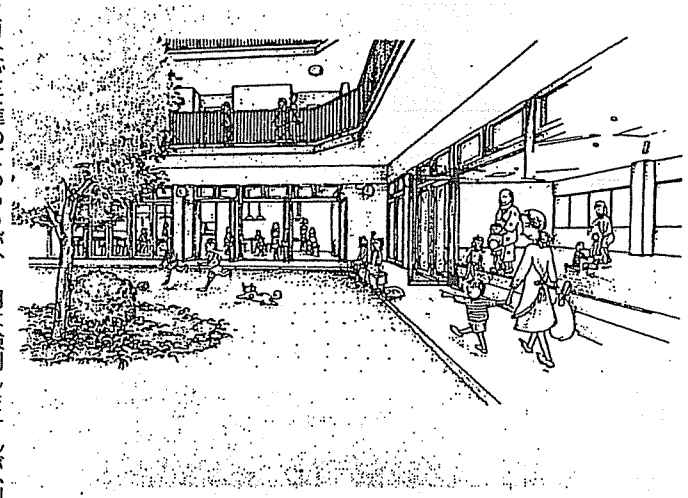
ユニークなのは、地下（一部地上）のコミュニケーションスペース（約五百五十七平方㍍）。食堂や調理場、浴室・サウナ、託児所、キッズルーム、図書室、学習室などを整備し、触れ合いの場とする。具体的な利用法の決定から管理・運営まで、すべて入居者が担うのが特徴だ。入居者が決まる今秋以降に、ルールづくりなどを進めてもらうが、事業部が考えている利用法はこうだ。

食堂・調理場では、入居者のうち希望者が報酬をもらい、毎日、朝と夕交代で調理し、事前に申し込んだ人が料金を払って食べる。休日などには、料理教室やパーティーを開く。浴室・サウナは、隣人らと〝裸の付き合い〟をする場に。キッズルームでは、お年寄りが仕事で忙しい夫婦の子供の遊び相手になったりする。

このほかに、ちょっとした困り事を相談したり、趣味を一緒に楽しむ仲間を募ったりする掲示板を設置するなど、アイデアはいろいろ。「コミュニケーションスペースの利用は強制しませんが、例えば、食事の場合には、週に最低一、二回は食堂で食べてほしいですね」と、同部企画課長の麻生誉さんは話す。

共有部分が多いため、家賃・管理費は普通のマンションよりやや高め。入居者は、自活できるお年寄り、単身者、子供連れの夫婦を一定の割合になるようにする。昨秋、マンションの意図を理解してもらうセミナーを開催したところ、七十八人が出席。アンケートに対して四分の三が「住みたい」と回答したという。説明会も随時開いており、三月と秋には再びセミナーを予定している。

滝沢弘一郎事業部長は「管理・運営などをめぐり、さまざまな問題が予想されるが、入居者同士の話し合いで解決し、高齢社会に対応できる住まいとして定着させたい」と話している。問い合わせは、積水ハウス東京特建事業部☎03・5352・3625へ。



家庭的な雰囲気が売り物の「ハートフルハウス」（完成予想図）

神戸新聞 1997.03.04

（2）県への提言

1997年8月5日

兵庫県

様

コレクティブハウジング事業推進応援団
応援団長　石東　直子

コレクティブハウジングの順調な展開等に向けての提言

災害復興公営住宅でコレクティブハウジングが事業化され、一部の住宅では入居予定者が決まり、入居前の協同居住の学習懇談会がもたれています。さらに秋には県営コレクティブハウジング２２０戸の募集が予定されています。「コレクティブハウジング事業推進応援団」は多分野の専門家や被災地での生活支援ボランティアグループと連携して、震災直後からコレクテイブハウジングの推進を応援してきました。この度、「応援団」の定例会合や運営委員会をもち、第三次一元募集時のコレクティブハウジングの応募状況と応募者像の分析、募集前から始め現在も引き続き行っている仮設住宅等への出前説明会でのコレクティブハウジングの受けとめ方等について、討論を重ねました。

その結果、今後のコレクティブハウジングの順調な展開に向けて、別紙のような５つの点について提言いたします。

この提言趣旨を十分にご理解いただき、ご尽力いただきますようお願いいたします。

1．コレクティブハウジングの協同生活運営費の助成について

コレクティブハウジングは協同スペースを核に協同生活が展開され、日常生活の中で自然な形で住人がふれ合うことによって、一人ひとりが生き生きした生活を取り戻し、、相互扶助の生活が育まれる住まい方です。この協同スペースの維持管理は居住者の自治によって営まれるものであり、光熱水費等も本来なら居住者が分担のルールを決めて負担すべきものです。しかし、コレクティブハウジングを望む被災地の人たちの中には、この分担に大きな負担（心配）を感じている人も多いです。とくに、わずかな年金で生活している高齢者等にとっては、応能家賃制度による最低額の家賃に対してコレクティブハウジングの共益費（主として光熱水費等の4000～6000円・予想月額）の負担は大きすぎます。

新しい住まい方のコレクティブハウジングの協同居住を育んでいくためには、当初の共益費の一部補助が必要であると考えます。従って、「被災者向けコレクティブハウジング等建設事業補助制度」の補助対象経費に「コレクティブハウジング協同生活運営費」の追加を提言いたします。

2．　高齢者世帯のみのコレクティブハウジングから多世代共生のコレクティブハウジングへの変更について

秋に募集が予定されている神戸市内の県営コレクティブハウジングはすべて高齢者向け（シルバーハウジングプロジェクト）ですが、コレクテイブハウジングの協同居住を運営していくためには、活力のある人たちの参画が不可欠です。数多くある仮設住宅団地において、ふれあいが芽生えコミュニティが育まれている団地は比較的若い世代や元気な高齢者夫婦世帯が核になっており、高齢者世帯だけではコミュニティがめばえるのは難しい状況にあるといえます。従って、高齢者向けのみの県営コレクティブハウジングは少なくとも１／３程度の戸数は一般世帯向けに変更されることを提言いたします。

3．　シルバーハウジングプロジェクトのＳ型住戸への家族世帯の入居を可能とすることについて

Ｓ型住戸は単身世帯向け住戸として供給されていますが、ひとり世帯のみの大きな集団は居住者どうしのふれあいと支え合いが困難なだけでなく、早晩、外部からのヘルパー等の福祉サービスが必要になり、老人ホームの状況を呈することは目に見えて明らかです。狭くても二人で共に住むことによって、生き生きとした生活ができ、隣人とのふれ合いも活性化され、自立した居住者の相互扶助の幅も広がります。

Ｓ型住戸への二人入居は住水準の低下をもたらすという見方もあります

が、被災地の復興住宅という視点に立って、特例として認められることを提言いたします。

とくに既に建設され、秋に募集が予定されている県営大倉山住宅（シルバーハウジングプロジェクトのコレクティブハウジング）ついては、S型のみの32戸で、多世代が住み合うコレクティブハウジングへの転換は難しいので、S型への二人入居だけでも可能とすることを提言いたします。

4．　入居前の集住居住のサポート体制の確立について

災害復興住宅へ移り住む多くの被災者は、新しい地の新しい暮らしに大きな不安を抱いています。特に、高齢期になって初めて鉄筋コンクリートの集合住宅へ住むことになる人たちにとっては、鉄筋アパートの住まい方の学習も必要です。住み慣れた地域を離れて、鉄の扉で閉ざされた閉鎖性の強い住宅へ、バラバラに入居すると、仮設住宅で続出しているような孤独死がもっと多くなるという危険性をはらんでいます。

入居前に居住者どうしが知り合い、隣人の顔が見えるかたちで安心して移り住むことができるようなサポートがぜひ必要であり、その ようなサポート体制の確立を提言いたします。入居前の集住居住の学習会（懇談会）等の開催によって、住民の共同生活への積極的な取り組みも芽生え、新しい地でのコミュニティを育むことができるでしょう。また、入居後に必要とされるであろうサポート体制も明らかになるでしょう。なお、神戸市営真野ふれあい住宅や南芦屋浜団地では、入居前の暮らしの学習・懇談会の開催がもたれており、居住者どうしの積極的な共同生活への意欲や具体的な相互扶助の提案がなされています。

5．シルバーハウジングプロジェクトのコレクティブハウジング化について

従来のシルバーハウジングプロジェクトは生活援助員の派遣と生活相談・だんらん室は確立されているものの、生活援助員と入居者の個別的な対応というサポート体制が重視されており、居住者どうしのふれあいや自治の活性化へのサポートはなされていません。今、被災地では、震災後の避難所や仮設住宅での生活を経験して、ふれ合って共に住まうという気運が高まっており、その重要性が認識されています。従来の見守りに重点をおいたシルバーハウジングのサポート体制を見直し、生活援助員業務に協同居住の育成のために必要なコーディネイト業務を加えた新たな生活援助員業務の確立を提言いたします。なお、地域型仮設住宅の生活支援員業務の多くは、この協同居住の育成に多くの時間と力がそそかれているという報告がなされています。

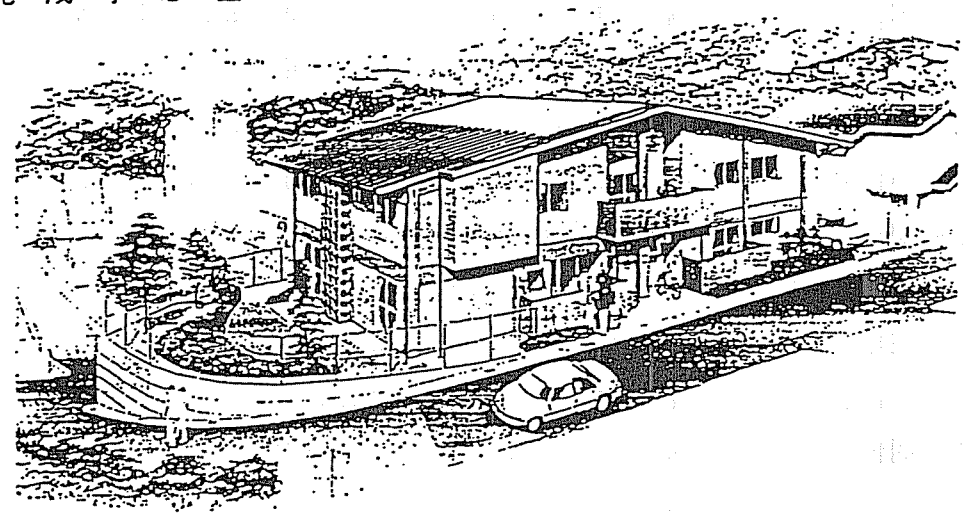
（3）その他　　第３次一元募集要綱から抜粋等

ひょうご復興コレクティブハウジング

（愛称：ひょうご・片山ふれあい住宅）

兵庫県では、高齢被災者向けの公営住宅として神戸市長田区片山町に建設した「ひょうご復興コレクティブハウジング／愛称：片山ふれあい住宅（６戸）」の入居者をグループ募集します。

完成予想図



1　ひょうご復興コレクティブハウジングの趣旨

Q：コレクティブハウジングとはどんな住宅ですか？

A：それぞれの住宅は台所、浴室、便所を備えた独立した住宅と、その延長としての協同空間（協同台所、食堂、だんわ室など）がある集合住宅です。協同空間を核にして居住者のふれあいのある協同生活が展開されます。また、片山ふれあい住宅では安否確認やいざという時の緊急通報システムなど、高齢者向きのサービス機能も設置しています。

Q：なぜ「ひょうご復興コレクティブハウジング」のような住宅を建設するのですか？

A：この度の震災の被災者の中には高齢者が多く、特に応急仮設住宅には多くの高齢者が入居されています。このような方々が復興公営住宅に移り住まれた時、孤独に陥ることなく、日常生活の中で自然なかたちで人とふれあうことができ、安心して、いきいきと暮らせるような住宅が必要とされるからです。

Q：なぜグループ募集をするのですか？

A：多くの高齢者は新しく移り住む地域の、新しい出会いに大きな負担を感じており、応急仮設住宅で芽生えたコミュニティをそのまま恒久住宅に継続することが望まれています。従って、応急仮設住宅で仲よくなったグループが一緒に移り住めるようにグループ募集をします。

2　片山ふれあい住宅の概要

申込住宅記号番号	住宅名	所在地	交通機関	風呂設備	エレベーター	構造 間取り 面積	家賃（予定月額）(円)		募集戸数	入居予定
県営神 101	片山住宅	神戸市長田区片山町1丁目1番2　外	神戸市営地下鉄「長田駅」から徒歩約8分	設備付き	有り	木造 2階建 1DK 37㎡ （期間付き） 洋室	① 6,600	⑤ 22,200	4	H9. 4
							② 11,100	⑥ 27,000		
							③ 15,500	⑦ 31,900		
							④ 19,900	⑧ 36,800		
県営神 102	片山住宅	神戸市長田区片山町1丁目1番2　外	神戸市営地下鉄「長田駅」から徒歩約8分	設備付き	有り	木造 2階建 1DK 37㎡ （期間付き） 和室	① 6,600	⑤ 22,200	2	H9. 4
							② 11,100	⑥ 27,000		
							③ 15,500	⑦ 31,900		
							④ 19,900	⑧ 36,800		

3　片山ふれあい住宅の特徴

(1)　単身用住宅内での生活

①　それぞれの独立した個人の住宅には台所、浴室、便所を備えており、個人のプライバシーが確保できる構造となっています。

②　緊急の場合に備えて緊急通報システムが設置されています。

(2)　協同で使用する協同空間での生活

①　入居者全員で協同生活運営組織をつくり、協同空間の使い方や協同生活のあり方、必要な協同生活ルールなどを決めます。

②　協同空間は1階の南側にあり、協同台所、食堂、だんわ室、便所などを備えています。ここは入居者全員が利用するためのものですので、ここで必要な光熱水費やエレベーターなどの電気料金は入居者全員で負担していただきます。

③　協同空間で利用するテーブル、椅子、電化製品などの備品類は入居者が相談して準備していただきます。

④　清掃や簡単な修繕などは、入居者が協同でしていただきます。

⑤　協同空間には生活援助員等の執務室が設けてあります。生活援助員が巡回訪問して、安否確認や生活相談、助言、関係期間との連絡などを行います。

(3)　費用負担区分

①　各自の住戸内で使用される光熱水費などは個人で負担していただきます。

②　協同空間で使用される光熱水費及びその他の運営費は入居者全員で負担していただきます。

③　生活援助員の派遣に要する経費及び緊急通報システム（電話回線の利用契約をＮＴＴとの間で契約していただきます）に要する経費は、個人で負担していただきます。

(4)　入居前の協同居住の説明会

入居予定者は、協同居住に親しみをもって住むことが大切ですので、そのための入居前協同居住についての説明会に参加していただきます。

◎ 片山ふれあい住宅はオール電化（電気調理器・電気湯沸器）ですので、ガスは使用できません。

4 申込資格

(1) 応急仮設住宅の入居者で構成する6世帯グループであること（6世帯グループ以外のグループ応募や個人応募は受け付けません）。

(2) グループの6世帯すべてが下記の①～④の要件に該当していることが必要です。

① 兵庫県営災害復興住宅の申込資格（被災者向）を有すること（詳しくは9頁をご覧ください）。

② 60歳以上の単身者世帯で、自炊可能な程度の健康状態であること。
（健康状態確認のため、健康診断書等の提示を求めることがあります）。

③ コレクティブハウジングの住まい方の趣旨を理解し、円滑に協同生活を営めるものであること。

④ 協同居住するための運営規則や協同生活ルールを遵守できること。

5 申込方法

(1) グループで応募される方は、別に個人で申し込みをすることはできません。

(2) 1つのグループで申し込みできる団地は1団地に限ります。

(3) 6世帯グループの中で、県営神101 4戸（洋室）、県営神102 2戸（和室）を振り分けて申し込んでください。

(4) 申し込み者は個人ごとに、それぞれの申込書に希望する住宅記号番号を記入のうえ、「グループ応募者欄」と必要事項を記入してください。

申込用封筒には、グループ代表者の申込住宅記号番号、住所、氏名、申込書の送付枚数を記入し、グループ全員の入居申込書を同一封筒で送付してください。

グループ代表者の申込書の裏面には全員の住宅記号番号ごとに氏名を記入してください。

(5) 申込用封筒の切手代については封筒の裏面を参照してください。
切手代が不足している場合は受け付けできませんので、ご注意ください。

6 抽選方法

(1) グループの代表者の方の申込書で抽選を行います。

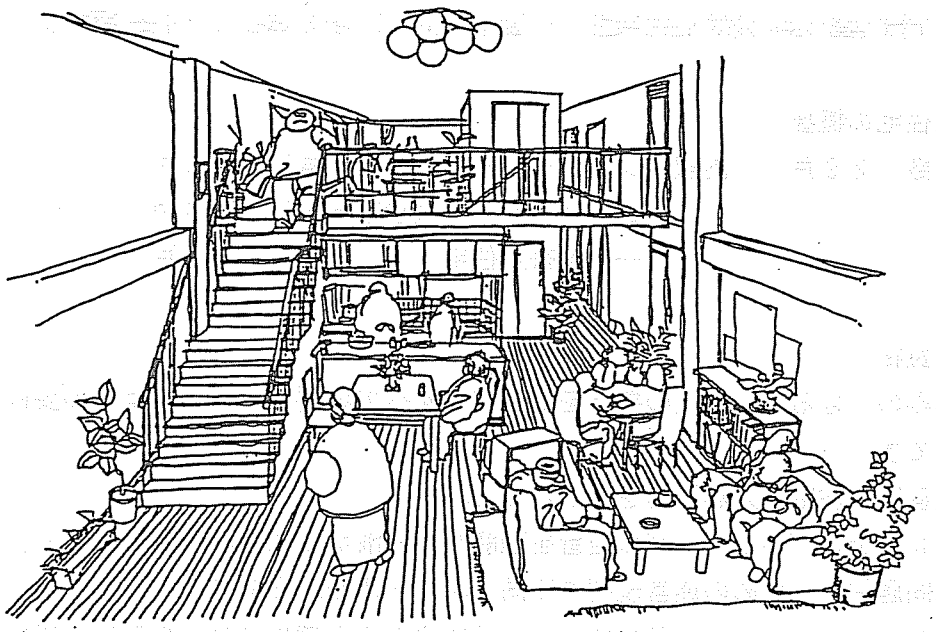
(2) 申し込まれた方全員が収入基準の範囲内にあるグループを優先して抽選を行うこととし、収入基準外の方のいるグループについては、募集戸数に余裕があった場合に限り抽選を行います。

(3) 補欠者の決定は、グループで申し込まれた場合でも個人ごととなります。

7 書類審査

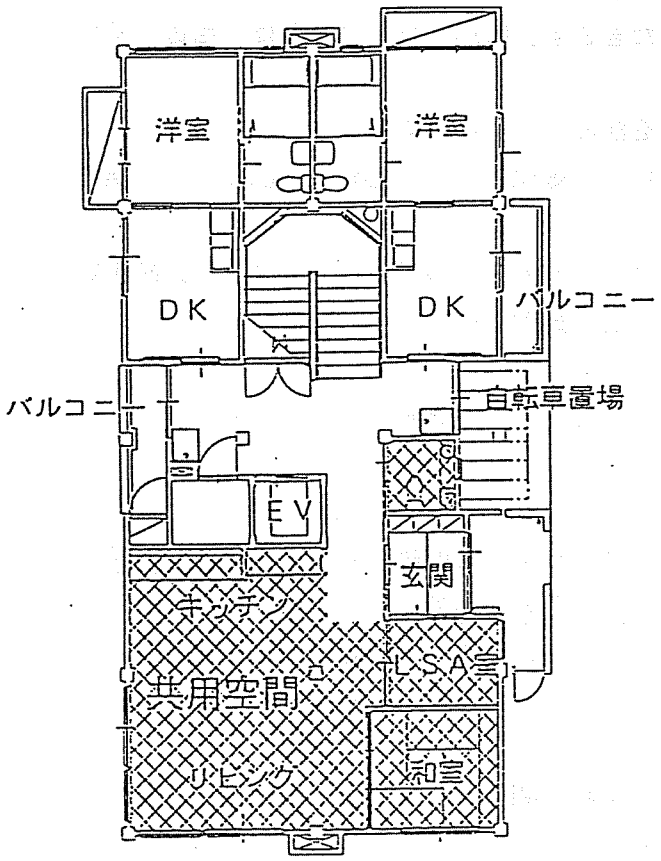
書類審査の際にグループのうち申込資格を満たしてない方がいれば、その方のみ失格となり、他の方は入居していただきます。

◎　協同ふれあい空間のイメージ

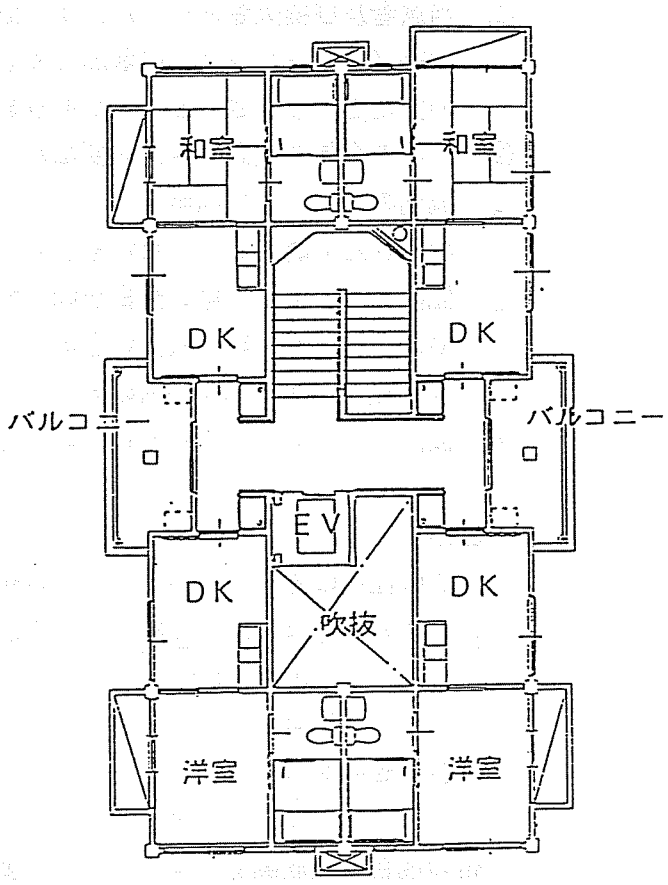


いつでも誰かと会えるし　いつでもひとりになれる！
ひとりで食事をするよりも　時には大家族のように　みんなで集まって食べよう！

◎　１階、２階平面図



１階平面図



２階平面図

（コレクティブハウジング）

市営浜添住宅（真野ふれあい住宅）

１．浜添住宅の概要

全戸数　２９戸　　内訳：シルバーハイツ（単身向き）　１５戸
シルバーハイツ（世帯向き）　６戸
一般世帯用住宅　８戸

２．入居資格

申込みのできる人は、次の要件を①～③のすべての要件と④または⑤の要件に当てはまる方です。

① 災害復興住宅の入居資格を有すること。
② コレクティブハウジングの趣旨を理解し、円滑な協同生活が営めること。
③ 協同居住するための運営規則や協同生活ルールを遵守できること。
④ シルバーハイツの単身向き住宅は、60歳以上の方で現にひとりで住んでおり、今後も同居しようとする親族がいないこと。世帯向き住宅は、いずれか一方が60歳以上の夫婦のみの世帯か60歳以上の者のみからなる民法上の親族関係にある世帯であること。
⑤ 一般世帯用住宅は、面積による申込制限以上の世帯であること。

３．申込に際し了解いただく事項

① 当選者及び補欠者となった方は、協同居住の仕組みについて、一定の学習・擬似体験等（トレーニング）に参加していただきます。参加されない場合は、当選・補欠の資格を取り消されることがあります。
② 入居者全員で協同生活に必要なルールを決めていただきます。
③ 協同のスペースで利用するテーブル、椅子、電化製品、什器等の備品類は、入居者の皆さんで購入していただきます。
④ 協同スペースは入居者全員が利用するためのものですので、ここで必要な光熱水費やエレベーター等の電気料金等は、入居者全員で負担していただきます。
（月額 4,000～ 6,000円の見込み）
⑤ 協同スペースの清掃や簡単な修繕等は、入居者の方で実施していただきます。

４．募集

① この住宅の募集については、１世帯でもグループでも応募できますが、グループで応募できる方は、応急仮設住宅に入居されている方のみです。
② グループで応募される場合は、次の組み合わせのグループとします。
シルバー世帯とシルバー世帯、シルバー世帯と一般世帯、一般世帯と一般世帯の組み合わせのグループ。
ただし、シルバー世帯と一般世帯の場合は親子関係にないこと、一般世帯と一般世帯の場合は親族関係にないことが必要です。

北舞子第四住宅（グループ募集）

・所　在　地　垂水区北舞子２丁目２番＆６番

（市バス　東舞子小学校前バス停より徒歩８分）

・規　　模　鉄筋コンクリート造　４～１０階建　３棟　　２２６戸

内訳　２ＤＫ　　１９９戸

３ＤＫ　　１４戸

４ＤＫ　　１２戸

車椅子(3DK)　１戸）

・募　　集　２ＤＫタイプ１９９戸のうち１００戸についてグループ募集を行う。

・入居時期　　平成１０年１月中旬から１か月

・位　置　図　別添のとおり

浜添住宅（コレクティブハウジング）

・所　在　地　長田区浜添通３丁目１番

（市バス　東尻池５丁目バス停より徒歩５分）

・規　　模　鉄筋コンクリート造　３階建　１棟　　２９戸

内訳　シルバー（単身）　　１５戸

シルバー（世帯）　　６戸

一般世帯（単身可）　　６戸

一般世帯（３人以上）　２戸

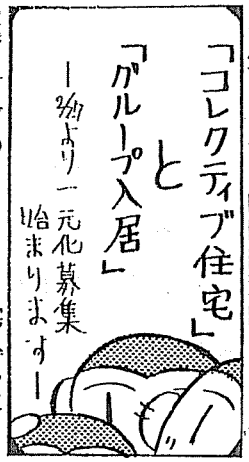
・募　　集　１世帯単位でもグループ（２～５世帯）でも応募可

・入居時期　　平成９年１２月下旬から１か月

・位　置　図　別添のとおり

すたあと長田の
ウィークリーニーズ
～まちから仮設へ仮設からまちへ～

発行　：すたあと長田
住所　：〒653
神戸市長田区御蔵通5－5
TEL：078-521-7170
FAX：078-577-0157
NIFTY：VZB02412
Vol.3 No.24
'97.2.20



2月27日より、3回目の公営住宅の一元化募集が始まります。今回の募集の大きなとくちょうとして「グループで応募できる」ことと「コレクティブ住宅」とよばれる新しいタイプの公営住宅の募集が行われることなどがあげられます（その他ペットの飼育が可能な住宅の募集もあります）。ここではそれらについて簡単にご説明さしあげたく思います。

《「グループ募集」について》

県営住宅では8団地・約1100戸、（神戸）市営住宅では1団地・100戸についてグループによる申し込みを受けつけます。条件や内容が、県と市では少しちがうのでご注意ください。共に対象は仮設住宅におられる方のみです。

▼県…10世帯まで
市…シルバーハイツへの申込資格を有する世帯が必ずふくまれる5世帯まで。（ただし、住宅はシルバーハイツではありません）
▼グループで応募された方は個人では申し込みできません。
▼申込書は1世帯ごとに書いて、まとめて1つの封筒でお送りください。封筒には代表者の名前と申し込み枚数を記入してください。郵便料金には気をつけてください。
▼抽選はグループの代表者の申込書で抽選します。
▼のこった部屋の数がグループの人数より少ない場合は、グループの内1世帯でも希望があれば、グループ内で抽選します。
▼審査（しんさ）のとき、グループ内で失格者がいればその方のみ失格となります。
▼全員が収入基準の範囲内にあるグループを優先して抽選を行います。
▼当選し入居される住宅は、号棟・階数が異なることがあります。

《「コレクティブ住宅」について》

「コレクティブ住宅」とは、それぞれが独立した住宅と協同の部屋（台所・食堂・だん話室など）がある集合住宅です。住まわれる方々が、この部屋を使いながらおたがいに協力しあって孤独に陥ることのない、安心して生き生きとした生活を送られるようにくふうされています。今回募集されるのは以下の2団地です。

★片山ふれあい住宅（県営・長田区片山町・全6戸）
■シルバー（高齢者用）住宅です。
■洋室（4戸）と和室（2戸）で1DKのみ。
■仮設住宅入居者で6世帯グループであること（個人応募はできません）。
■60歳以上の単身者世帯で、自炊可能なていどの健康状態であること。
※あとは「グループ募集」の内容と同じです。

★浜添住宅（市営・長田区浜添町・29戸）
■シルバー（単身・世帯向きあわせて21戸）と一般（世帯用8戸）に分かれます。
■シルバー型は、60歳以上の方が対象です。
■一般型は面積による申込み制限以上の世帯が対象です。
■1世帯でもグループでも応募できます。ただしグループは仮設にお住まいの方のみです。
■グループは一般世帯の方同士でも可（親族関係は不可）。
■グループの規模は2～5世帯です。
■当選者および補欠者となった方は入居の時まで協同居住についてのトレーニングに参加していただきます。参加されない場合は資格を取り消されることがあります。
■抽選はコレクティブの特性上最初にグループの中から3グループ抽選します。
※グループについてはあとは「グループ募集」の内容と同じです。何よりも大切なことは「コレクティブ住宅」の主旨（しゅし）を理解（りかい）してくださる方が応募されることでしょう。また、同じ「コレクティブ」でも2つの住宅は内容が大きくちがいます。戸数も、きわめて限られてもいますので、充分にぎんみして頂ければと思います。

もっとくわしくお知りになりたい方は“まち・コミュニケーション事務局（078-578-1100）”へご連絡下さい。

一元募集全体（計8313戸）については、広報などを参考にされるか、ボランティアで作成中の（本誌記事参照）応募の手引きを参考にしてください。　（小野幸一郎）

Information

◆離職者生活安定資金の貸付◆
震災で仕事をなくした人に生活資金を貸しつけます。5年以内に返す必要があります。
【対象】次の条件すべてにあてはまる人
・世帯の生計を支えている人で、震災で仕事を失った人
・はたらく意思、能力があり、職安に求職申し込みをしている人で、いま失業給付を受けていない人
・1年以上続けて県内にすんでいる人（県外の仮設に住んでいる人は、県内に帰る意思があり、県内外で求職活動をしている人）
・（財）県勤労者信用基金協会の信用保証が受けられる人
【限度額】100万円　【利率】3パーセント
【申し込み】兵庫労働金庫の本店、支店
【問】県労働福祉課　☎（078）341－7711

◆須磨離宮公園　梅見会◆
もう春ですね。梅の季節です。甘酒のふるまいもあります。入場料は、いります。木曜はお休みです。
【日時】2月21日（金）～3月5日（水）午前10時～午後3時
【問】須磨離宮公園　☎（078）732－6688

・結びに代えて

「被災地のコレクティブハウジングのイメージ」

上田　耕蔵　（神戸協同病院院長）

コレクティブについて堅くイメージしすぎていると思ったので、少しコメントします。モデルは確かに北欧のコレクティブですが、もう一方のモデルは長田の長屋下町ぐらしなのです。料理のお裾分けをしたり、お茶飲みの輪があったり、買い物の手伝いなどの下町日本のゆるい助け合いふれあいの生活なのです。実際、コレクティブ住宅への入居者には協同部分の管理方法（掃除、水光熱費など）について互いの合意と協力は最低求められる義務的部分となりますが、それ以外の住まい方、ことに食事を一緒に作ることなどは入居者でよく相談して行ったらよいものです。いやいやで一緒に食事を作ることなどはありえません。もしあったとしても長続きしないでしょう。とにかくこれまでの下町暮らしと全く別の北欧のコレクティブ暮らしがはじめられるということはないでしょう。あくまで日本の下町暮らしの延長線上でしか展開しないでしょう。しかし一般公営住宅や、ひょっとしたら区画整理できれいになった街並みでは失われてしまうかもしれない下町ふれあい暮らしがこの日本的コレクティブ住宅では保存される可能性は高いと思います。

さらにこのコレクティブ住宅のもう一つの重要な特徴は超高齢化社会対応となる点です。協同部分をデイサービス的に使ったり、周辺の住民との交流の場にも使えることです。またシルバーハウジングの生活援助員室を在宅福祉（ヘルパーさん）の詰め所、ボランティアの控え室ともできることです。運用の仕方では入居者同士だけでなく地域の老若住民との交流の場となり、さらに在宅福祉のミニ拠点ともなる可能性を持っています。僕は北欧コレクティブのイメージよりも２１世紀超高齢化社会対応という点に重視しています。その意味ではシルバーハウジングはできるだけコレクティブ対応にした方がいいと考えています。

コレクティブ＝毎日料理を作り合う、一緒に掃除をする、このイメージの強調は払拭された方がいいのではないかと思いますが、コレクティブのあり方としては興味深い点ですね。

コレクティブハウジング事業推進応援団定期ミーティング出席者

明石　照久／こうべまちづくりセンター　荒巻　正宣／㈱ＯＵＲ都市開発機構　石井　敬三／㈱ジーユー計画研究所　石川　路子／神戸大学大学大学院重村研究室　石塚　祐子／八千代エンジニアリング㈱　上田　耕蔵／神戸協同病院院長　浦上　忠文／神戸市議　延藤　安弘、斎藤　由佳／名城大学理工学部建築学科延藤研究室　太田　尊靖／㈱都市・計画・設計研究所　大津　俊雄、森田　博一／㈱シティーコード研究所　大西　一嘉／神戸大学工学部建設学科　大海　一雄　奥井　正造、奥井　容子／環境意匠計画・奥井研究室　小野　幸一郎、浅野　幸子／まち・コミュニケーション事務局　金丸　まや／京都府立大上野研　河村　晶平、岡庭　淳／㈱長大　岸本　隆司／㈱国土建設　北島　道生／北島道生アトリエ　木本　和子　児玉　善郎／産業技術短大構造工学科　小森　星児／復興塾　小谷部育子／日本女子大学　坂井　豊、依藤　康正、斎藤　昌之、小田垣博文、小川　啓二、柏木　貢／兵庫県庁都市政策課　阪上　香／京都府立大学住居学科上野研　坂本　由紀子　志賀　咲穂／県立姫路短大　実吉　威／震災活動記録室　柴尾　亨　杉野　美佐子／兵庫教育大学　杉原淳子／消費デザイン研究所　鈴木　三郎／神戸市住宅局　高尾　眞／あしや喜楽苑　高木　左京、木田　隆男／神戸市住宅局住宅部管理課　田中　麻子／神戸芸工大学生　田中　裕美／大阪外大　森栗研究室　田中さとみ／豊中市政策推進部まちづくり支援室　田中　正人、竹内　千絵／㈱都市調査計画事務所　谷本　裕美、熊田典彦、金沢　祐一、松下　公也、根岸、牧野、垂水局長／神戸市住宅局住環境整備課　谷守　正康／㈱谷守建築設計事務所　玉置　なつ子／住宅・都市整備公団　築谷綾子／神戸協同病院　地域支援センター事務局長　千葉桂司／住宅・都市整備公団関西支社、住宅市街地部事業開発課　辻　信一／㈱環境緑地設計　中井　豊／中井都市研究室　中川　倶子／㈱アルプラン　中塚　則男／兵庫県庁福祉企画室　中辻　直行／高齢者ケアセンターながた　中林　泰男、鈴木　洋子／コープこうべ　開発本部　中道　美穂子／千山荘（前寿公園仮設住宅ＬＳＡ）　西躰　伸子／㈱市浦都市開発建築ｺﾝｻﾙﾀﾝﾂ　西野　孝仁、西野　喜美子／鹿の子台ボランティア連絡会　西村　陸男／㈱東畑建築事務所　西脇　創一／在宅介護ネットワーク　野崎　隆一、野崎　瑠美、山本　和代／遊空間工房　蓮本　浩介／兵庫県社会福祉協議会長谷川　京子／海岸通法律事務所　服部　敬子／垂水福祉事務所　原田　陽子／神戸芸術工科大学環境デザイン学科　平山　洋介／神戸大学発達科学部　弘本　由香理／大阪ガス　ＣＥＬ　福岡　敏成、高田　剛司／㈱地域計画建築研究所　藤田　文子　藤田　みどり／大阪市立大学生活科学部　藤原　三恵子／㈱都市問題経営研究所　堀内　正美／がんばろう神戸　政井　孝道／朝日新聞　真嶋　克成／大阪ＮＰＯセンター　松下　哲雄／災害支援活動ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱﾈｯﾄﾜｰｸ　松藤　聖一／宝塚市健康福祉部　福祉推進課長　松本　滋／姫路短大　水谷　長清／神戸建築設計事務所　宮西　悠司／神戸・地域問題研究所　茗荷　修／神戸市都市計画局長田南部再開発事務所　三好　庸隆／㈱ＰＰＩ計画設計研究所　三輪　康一／神戸大学工学部建設学科助教授　もりくすを／寿公園地域型仮設住宅の世話役　森崎　輝行／森崎建築設計事務所　安原　秀／ヘキサ　柳原　ゆき子／兵庫県保険医協会　山口　雅子／パルパローレ設計事務所　山口　一史、松本　誠／神戸新聞情報科学研究所　山崎　恵子／SHIMANTO PROJECT　山本　俊貞／㈱地域問題研究所　岡田　和彦／毎日新聞社　岡村　恵子／毎日新聞神戸支局　加國　徹／神戸新聞記者　佐々木　正明／産経新聞大阪本社編集局神戸総局　中尾　英卓／毎日新聞　馬渕　俊之／神戸新聞神戸支局　前田　裕資／㈱学芸出版社　門前　善康／サンテレビジョン　報道制作局報道部　記者　山本　美希／ＮＨＫ京都放送局　吉沢　大介／ＮＨＫ神戸放送局放送センター記者　亘　佐和子／毎日放送　石東　直子／石東・都市環境研究室　森栗　茂一／大阪外大　小林　郁雄、天川　佳美／まちづくり㈱コー・プラン　中水流　ゆき／すまいまちづくり人材センター

（順不同）

コレクティブハウジングの実現に向けて　NO.2

発行日　１９９７年３月
発行者　コレクティブハウジング事業推進応援団
神戸市灘区楠丘町２－５－２０
㈱コー・プラン内
TEL 078-842-2311　FAX 078-842-2203